

千葉県文化財センター

研 究 紀 要

13

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター



1. 外小代遺跡の石製品類



2. 石塚遺跡出土石製模造品類

発 刊 の 辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査・研究・普及活動を実施してまいりました。その成果は、多くの発掘調査報告書等の刊行物に発表しているとおりでありますが、特に、研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめとして独自の調査・研究事業を行ってまいりました。

研究事業の中心である研究紀要は昭和62年度からは、第Ⅲ期計画として「房総における生産遺跡の研究」という主題を選定し“瓦・玉・須恵器・埴輪”の4回に分けて調査研究することとしました。これは、県内から出土した資料を収集し、調査・分析してまとめ、その結果を基にして各生産遺跡との関係をとらえ、生産地・製作者と消費地との問題を解明することを目的とするもので、その第1冊目として平成2年度に瓦編を刊行しました。

今回はその2冊目として「玉」について、当センターが調査した遺跡からの出土資料を中心に県内の出土例を含めて分析検討を行いました。

生産遺跡、玉作工房跡等の調査例が増加している今日「生産遺跡の研究一玉一」をとりあげたことは、時宜を得たものと考えております。

本書が、考古学の研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として広く活用されることを期待してやみません。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩 瀬 良 三

目 次

生産遺跡の研究 2

— 玉 —

発刊の辞	理事長 岩瀬良三
はじめに	3
I 序論	7
1. 玉作研究の沿革と課題	7
2. 研究の目的と方法	12
II 基礎資料	17
1. 参考文献目録	17
2. 千葉県内玉類出土遺跡の集成	32
(1) 旧石器～縄文時代	33
(2) 弥生時代	42
(3) 古墳時代以降	44
3. 千葉県内玉作遺跡概要	88
(1) 縄文時代	88
(2) 古墳時代	91
III 各論	107
1. 旧石器～縄文時代の玉	107
2. 弥生時代の玉	123
3. 古墳時代の玉作	125
(1) 千葉県内の玉作遺跡について	125
(2) 成田市八代遺跡について	131
(3) 成田市外小代遺跡について	139
(4) まとめ	164

4. 石製模造品の製作	182
(1) 千葉県内の石製模造品製作遺跡について	182
(2) 成田市石塚遺跡について	192
(3) 八千代市北海道遺跡について	199
(4) まとめ	207
IV まとめ	221
V 特論	225
千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察	225

挿 図 目 次

第1図	旧石器時代・縄文時代玉類出土遺跡分布	109
第2図	最古の装身具	111
第3図	前期から中期初頭の玉類	112
第4図	勝浦市長ヶ台遺跡の玉類	113
第5図	穿孔前の玦状耳飾未成品	114
第6図	中期から後期初頭の玉類	115
第7図	中期のコハク製玉類	117
第8図	コハクを原材とした玉の製作	117
第9図	後期から晩期の玉類	118
第10図	晩期の玉の出土状況	118
第11図	白玉の製作	120
第12図	弥生時代・古墳時代以降玉類出土遺跡分布	124
第13図	印旛沼東岸地域の玉作関係遺跡分布	128
第14図	下総町周辺地域の玉作関係遺跡分布	130
第15図	八代遺跡・外小代遺跡の玉作工房配置図	132
第16図	外小代遺跡016A・031号址出土遺物	140
第17図	外小代遺跡018号址出土遺物(1)	147
第18図	外小代遺跡018号址出土遺物(2)	149
第19図	外小代遺跡018号址出土遺物(3)	150
第20図	外小代遺跡018号址出土遺物(4)	151
第21図	外小代遺跡018号址接合資料出土状況	152
第22図	外小代遺跡019B号址出土遺物(1)	155
第23図	外小代遺跡019B号址出土遺物(2)	156
第24図	外小代遺跡019B号址出土遺物(3)	158
第25図	外小代遺跡019B号址出土遺物(4)	159
第26図	外小代遺跡出土遺物	161
第27図	外小代遺跡出土の玉作関係工具類	163
第28図	周辺地域玉作遺跡の管玉製作工程	168
第29図	市原市草刈六之台遺跡の玉作関係資料	173
第30図	外小代遺跡の管玉製作工程	175
第31図	石製模造品工房	187

第32図	石塚遺跡の石製模造品工房配置	193
第33図	石製模造品出土状態(1)	197
第34図	石製模造品出土状態(2)	198
第35図	権現後遺跡・北海道遺跡の石製模造品関係遺構配置図	200
第36図	石製模造品出土状態(3)	203
第37図	石製模造品出土状態(4)	205
第38図	石製模造品の製作工程(1)	209
第39図	石製模造品の製作工程(2)	215
第40図	白玉製作技法模式図	216
第41図	関東地方の地質図	229
第42図	緑色(細粒)凝灰岩を含む新第三系の分布	231
第43図	蛇紋岩及び蛇紋岩を含む地質体の分布	234
第44図	緑色片岩を含む地質体の分布	238
第45図	琥珀及びひすい輝石岩を含む地質体の分布	240

表 目 次

第1表	市町村別の縄文時代玉類出土状況	110
第2表	縄文時代の主要玉類	120
第3表	市町村別玉作関係遺跡検出状況	127
第4表	八代遺跡玉作工房出土の緑色凝灰岩製品	134
第5表	八代遺跡玉作工房出土の滑石製品	134
第6表	八代遺跡出土の緑色凝灰岩製品	135
第7表	八代遺跡出土の滑石製品	135
第8表	外小代遺跡玉作工房出土の緑色凝灰岩製品	143
第9表	外小代遺跡玉作工房出土の滑石製品	143
第10表	外小代遺跡出土の緑色凝灰岩製品	144
第11表	外小代遺跡出土の滑石製品	145
第12表	石製模造品製作遺跡	184
第13表	県内石製模造品類出土の主要古墳	190
第14表	石塚遺跡石製模造品工房出土の滑石製品	195
第15表	石塚遺跡出土の滑石製品	195
第16表	関東地方の各地質区に産出する主な岩石	230

図 版 目 次

- 卷首 図版 1. 外小代遺跡の石製品類
2. 石塚遺跡出土石製模造品類
- カラー図版 滑石製模造品と各地の蛇紋岩・滑石の例
- 図版 1 1. 外小代遺跡018号址出土遺物(1)
2. 外小代遺跡018号址出土遺物(2)
- 図版 2 1. 外小代遺跡018号址出土遺物(3)
2. 外小代遺跡018号址出土遺物(4)
- 図版 3 1. 外小代遺跡018号址出土荒割品(形割品接合資料)
2. 外小代遺跡018号址出土形割品(荒割品分割資料)
- 図版 4 1. 外小代遺跡019 B号址出土遺物(1)
2. 外小代遺跡019 B号址出土遺物(2)
- 図版 5 1. 外小代遺跡019 B号址出土遺物(3)
2. 外小代遺跡019 B号址出土遺物(4)
- 図版 6 1. 外小代遺跡016 A号址出土遺物
2. 外小代遺跡034 B号址出土遺物
- 図版 7 1. 外小代遺跡040号址出土遺物
2. 外小代遺跡041 A号址出土遺物
- 図版 8 1. 外小代遺跡055号址出土遺物
2. 外小代遺跡071号址出土遺物
- 図版 9 1. 外小代遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程(1:母岩)
2. 外小代遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程(2:荒割から穿孔)
- 図版10 1. 外小代遺跡出土工具類
2. 石塚遺跡出土石製模造品類

生産遺跡の研究 2

— 玉 —

はじめに

研究部長 天野 努

当千葉県文化財センターにおける研究部の活動成果の一部である『千葉県文化財センター研究紀要』（以下紀要と略す）は、昭和51年度に第1号を刊行して以来、本書で第13号目をかぞえる。このうち、第1号～5号では「考古学からみた房総文化の解明」をテーマに、また第6号～11号では「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」というテーマのもとに学際的研究の課題を模索し、その研究成果を各々発表してきた。なお、この間、10号については当センター設立10周年を記念した記念論文集として刊行した。

昭和62年度からは、発掘調査によって得られた資料の活用を目的として「生産遺跡の研究」という統一テーマのもとに、房総における生産遺跡について研究を進めることとした。

房総における生産遺跡については、すでに紀要7号で製鉄遺跡を、8号で土器の胎土分析等を取り上げているため、12号から15号までの4冊で瓦・玉・須恵器・埴輪の製作技術とその生産遺跡について調査研究を進めることとし、その1冊目として瓦の研究成果を、平成2年度に紀要12号として刊行してきたところである。

今回の紀要13号では、それに引き続いて、生産遺跡のうち玉を取り上げた。

房総における玉作遺跡については、かつては製品としての玉類の出土遺跡としてのみ知られるばかりであり、それが玉類の生産遺跡として認識されるようになったのは比較的最近のことであった。また、玉作(玉類についての生産)遺跡といった用語の概念も未確定で、現在でも広義の玉作と狭義の玉作の二者の把握の仕方がある。前者の場合の玉作は、装飾品としての玉類はもとより類似の石製品や石製模造品までも包括した広範な遺物の生産に関する用語として、また、後者の場合は、弥生時代から古墳時代にかけての管玉を主とした玉類の製作遺跡・遺構をさす用語として各々用いられているようである。この両者に対して、千葉県教育委員会が昭和58年～60年度に実施した「生産遺跡」の調査では、玉作について、広義の意味での玉類の生産としてとらえて調査を行っているが、当センターにおける今回の研究報告でも、玉作については同様に広義の意味で把握している。昭和61年にその調査成果として刊行された「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」の報告書では玉作関係の遺跡は、原材料の石材産出地2か所を含めて54か所があげられ、そのうち縄文時代の玉作遺跡が4か所、古墳時代の玉作遺跡が48か所あげられている。

今回の調査研究では、県教育委員会の行った「千葉県生産遺跡基礎資料作成調査」の成果をもとに玉作関係の遺跡から玉作の諸問題を抽出し、そこから房総の玉作について解明に努める

こととした。そのため、玉類の多数の出土例が見られる、古墳をはじめとする墳墓関係の遺跡からの出土については、今回は取り扱わず、生産遺跡としての可能性がうかがわれる遺跡・遺構からみた玉作という面に絞って研究を進めた。特に、古墳時代の墳墓出土を中心とした玉類については、生産遺跡と合わせて、早くからその時代背景に及んだ研究が進められてきているが、この点については今回はそれらの研究成果に委ねることとし、あえてふれなかった。

研究対象としては、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代の玉類出土遺跡を対象とした。そして、各々基礎文献等の把握・収集に始まり、縄文時代については、玉類出土遺跡の遺構・遺物の検討を主体とし、弥生時代については、玉類出土遺跡の検討を行った。古墳時代については、管玉等の玉作と石製模造品製作の二つに分け、玉作遺跡については、近年の調査例として成田市八代玉作遺跡（県指定史跡）、同市外小代遺跡を取り上げ、遺物を主とした玉作技術・技法の再検討を行い、いままで言われてきた八代技法・大和田技法との対比を行った。石製模造品製作については、成田市石塚遺跡、八千代市北海道遺跡を取り上げ、模造品製作技術・技法の再検討を行った。八代玉作遺跡は、玉作遺跡として県の史跡に指定されている唯一の遺跡である。指定のきっかけとなった調査地（指定地区）に隣接する地区の調査もその後行われており、すでに考究もされている八代玉作集落についての全容を解明できる可能性が窺われたこと、また外小代遺跡については八代玉作遺跡に近く、玉作工房が調査されており八代玉作遺跡との関連がつかめるものと見られることから分析・検討の対象として取り上げた。石塚遺跡、北海道遺跡は、石製模造品製作工房が検出されている。近年の調査であること、調査方法等も明瞭で出土資料の検討に好資料となるものであり、玉作工房との関係や製作技術・技法について時代的差異が認識でき得るものとして検討の対象とした。

紀要13号の成立をめざして、当初は2か年計画による活動を予定したが、平成元年度は基礎資料の収集と課題の設定・検討、文献調査、検討資料の決定等に費やされた。このうち、資料の収集と課題の設定・検討については、関係者からの事情聴取・検討作業の実施等によって資料数・検討作業が予想以上に複雑かつ多岐にわたったため、平成2年度に持ち越すこととなった。このため、当初計画を変更し、2年計画を3年に延長し、平成3年度の前半には資料のとりまとめ・原稿執筆の作業を行い、後半に印刷・刊行作業を行った。このような過程を経て出来上がった本書であるが、基礎的なデータとともにその研究成果は、房総地域はもとより今後の玉作遺跡研究の基本的資料の一つとなるものと考えられる。本書が、本県のみならず各地の玉作遺跡の研究に際し、いくらかでも参考になれば幸いである。

今回の研究に当たっては、課題の設定・検討対象の決定等調査研究の端緒から分析作業の実務とそのとりまとめにいたるまで、玉作遺跡研究の第一人者である和洋女子大学教授寺村光晴氏に貴重なご教示・ご指導をいただいた。また、千葉県立中央博物館の高橋直樹氏には、資料検討の際の石質の同定にあたってご指導・ご教示をいただき、なおかつ玉類の原材料の入手に

関係してくる原材料鉱物類の産地や分布についての原稿をお願いした。この他、千葉県立房総風土記の丘からは特別に八代玉作遺跡、外小代遺跡、石塚遺跡の資料を借用させていただいたことをはじめ、本書の作成にあたっては、多くの協力者・諸機関のお力添えを得ている。ここに、関係各位のご理解とご協力を厚くお礼を申し上げるとともに、各々記して深く感謝するものである。

国立科学博物館　千葉県立中央博物館　千葉県立房総風土記の丘　銚子市教育委員会
下総町教育委員会　勝浦市教育委員会　夷隅郡教育委員会　（財）香取郡市文化財センター
（財）市原市文化財センター　（財）君津郡市文化財センター　國學院大學
考古学資料館

青木　豊、新井和之、上野圭司、大原正義、岡川宏道、加藤　昭、吉清佳明、木對和紀、倉内郁子、近藤　敏、庄司雄一郎、杉山晋作、梶山林継、高橋直樹、寺村光晴、内藤武義、中司照世、橋口定志、原田享二、真山義雄、矢戸三男、山口直樹、山本哲也（あいうえお順）

なお、本書の担当者・執筆分担は以下のとおりである。

（担当者）

平成元年度　　渡辺智信（研究部長補佐）、関口達彦、加藤正信、小林清隆
平成2・3年度　渡辺智信（研究部長補佐）、加藤正信、小林清隆、山口典子

（執筆分担）

加藤正信　Ⅰ・Ⅲ－2・Ⅲ－3(1)(3)(4)・Ⅳ
小林清隆　Ⅲ－1・Ⅲ－3(3)・Ⅲ－4(3)(4)
山口典子　Ⅲ－3(2)(3)(4)・Ⅲ－4(1)(2)(4)

事業が3年間にわたったため、年度により担当者の異動があるが、調査・研究・原稿執筆にあたっては統一が図られている。Ⅱ　基礎資料は上記の3名の共同作業によるものである。

本書の全体の構成は、研究部長補佐　渡辺智信が行った。

I 序 論

1. 玉作研究の沿革と課題

「玉」という語は、主に装身具としての用途で用いられることが多い。これは美しいもの、きれいなもの、また希少価値のあるものといった観点から装身具として用いられてきたことへの位置づけからとみられる。また一方、単なる装身具としてだけでなく、靈魂を指す「魂」といった語と同義語ともみなされ、極端にいうと「玉」＝「魂」とみなされることもあったとされている。この後者の意味に関して、玉の持っていると考えられた靈力・呪術的な力により、装身具としてだけでなく宝器・祭器としての機能が認められた語として「玉」という語が用いられ、また逆に「玉」という語から「魂」に通ずる力があると考えられたのであろう。このことにより今日「玉」に関連して「玉」、「玉作」といった場合に、装身具類とその製作だけを指すのではなく、儀器・宝器的な石製品（例えば古墳時代の鍬形石・石釧・玉杖等があげられる）や祭祀に用いる石製の模造品（白玉・有孔円板・剣形品等）等までが、広い意味での玉作とみなされている所以であろう。また言葉から発生する意味だけでなく、装飾品としての玉作技術と模造品、石製品製作の技術とは石材類の加工の点で同一の作業であり、加工技術に関してはなんら変わりはない。そのことも含めて本書でも広義の玉類にはそれらすべてを含めているし、玉作についても広義のものは模造品類の製作まで含めている。また広義の場合は玉ではなく玉類とし、玉作ではなく玉作等と、なるべく区別するつもりであるが、著者の多様性・論の進め方により明確に区別していないことも多々ある。

出土した玉に人々が関心を集めるようになったのは、江戸時代中期頃から玉の中でもその形態上特異といえる勾玉に主に目が向けられていたようで、そのほとんどが好古趣味によるものであったようである。それらの中で、1774（安永3）年に刊行された『勾玉考』の中では、奈良県三輪山出土の碧玉製勾玉について、『神代紀』にあらわれる三種の神器の八坂瓊曲玉に比定し、古事記などの文献資料に記載されている勾玉をあげ、また壺中検出の勾玉等から出土品と文献資料との比較検討を加え、文献面から遺物をとおして見た古代史という考古学、文献史学との学際的な関係の端緒として注目されるような著述もあったようである。また、『雲根誌』で知られる木内石亭は、『曲玉問答』の著作の中で同様な研究を行っている。しかし、これらの先人の着目もあまり学問的に進歩することなく、近代史学研究の手法の導入される明治時代に至ってその進展がみられるようになる。次に各時代ごとの玉・玉作関連の研究・調査史を概観してみたい。

明治時代に至って、縄文時代の玦状耳飾にその用途・時代についての関心がはらわれ、中国

I 序論

で知られる「玦」との類似により、その関連が論考されたりした。これらは装飾性のある“飾り玉”の研究がほとんどで、その時代や、分類、形態などに主眼がおかれていた。しかし、昭和初期に藤森栄一氏によって玦状耳飾の製作遺跡が長野県で明らかになり、攻玉（縄文時代の玉作は“攻玉”と慣用的に呼ばれてきているのでここでもそのように呼ぶ）遺跡が知られるようになった。これ以降玉そのものの研究と、攻玉についての研究とが同じように重要視され、さらにその流通についても注目されるきっかけとなった。

縄文時代の玉といっても玉類の名称について統一されていないようである。報告書等の記載を見ても、大珠、勾玉、垂飾、白玉、平玉といった形態的な名称もやや不統一なところがみられるのに始まり、牙玉、琥珀玉といった材質による名称も同質にあげられている。このことは、縄文時代に限ったことではなく、弥生時代以降、古墳時代の玉類についても同様で、名称の統一的使用が求められよう。加工という面から攻玉をみると、基本的な技術は研磨と穿孔である。研磨することによって表面を平滑にし、光沢をもたせ材質の視覚効果の向上をもたらす。また穿孔によって、糸をとおし懸垂するという装飾、顯示の機能が果たせるようになる。

国内で攻玉遺跡が盛んに行われるのは、縄文時代前期の富山・新潟・長野3県の県境に位置する白馬岳を中心とした周辺の山麓地帯である。この地区には、富山県極楽寺遺跡、新潟県大角地遺跡、川倉遺跡、長野県舟山遺跡、女犬原遺跡、大門遺跡等があげられている。これらの遺跡は、原材料の滑石類の産出地が白馬岳山麓に存在するということからその周辺に発達したという見方のほかに、中期以降に盛んになる硬玉（この節ではヒスイと同義語として使う）の攻玉遺跡に比較的近く、そこに何らかの関連を求める考え方もある。フォッサマグナ周辺の鉱物の変成地域のために、多くの種類の原材料の入手が可能となったことばかりでなく東西の文化の交流としてその周辺地域に攻玉という形で展開したという指摘もされている。この硬玉は糸魚川市姫川が主な産地として知られており、攻玉遺跡は新潟県長者ヶ原遺跡、寺地遺跡等があげられ発掘調査も実施されている。最近では富山県宮崎海岸産の硬玉も材料として注目されている。滑石から硬玉への材料の変化は、攻玉技術の飛躍的發展をもたらした。硬度の格段の上昇により研磨・穿孔技術ともに向上せざるを得なかったという方が妥当であろう。この硬玉製の玉類は、全国へ交易によって広められていった。千葉県出土の硬玉製品も本地域産のものが伝播したものと見て良いだろう。

攻玉遺跡の研究では寺村光晴氏の「縄文時代前期飾玉生産の一考察」が玦状耳飾について体系的に、姫川流域の遺跡で製作過程や技術について述べている。藤田富士夫氏は「攻玉遺跡からみた玦状耳飾の編年」で攻玉遺跡からみた分類によって3区分し、さらにそれを発展して細分する方法を提示している。原産地の研究には藤沢宗平氏によって、滑石産地と玦状耳飾の詳細な分析により産地と出土地との関連を論考している。以上、ごく一部の研究をあげただけであるが、攻玉の研究よりも、玉そのものの研究の方が、古くから注目され先行している様だが、

最近では発掘調査例の増加により攻玉遺跡にも目が向けられてきたといえよう。

県内の縄文時代の攻玉遺跡は、1986年の『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』には、4か所の遺跡の所在があげられている。そして今回の資料集成作業でさらに4か所があげられ、計8か所が数えられるに至った。勝浦市長者ヶ台遺跡は前期の滑石の攻玉遺跡とみられ県内では最も古い攻玉遺跡と考えられている。後期から晩期に至る攻玉遺跡は6か所で、印旛郡印西町天神台貝塚（竹袋遺跡）、八千代市神野貝塚、佐倉市神楽場遺跡、銚子市余山貝塚、市原市武士遺跡、夷隅郡大多喜町堀之内上の台遺跡があげられ、拠点的な集落と見られている。そのほとんどは発掘調査によって資料が得られており、報告書から、滑石や硬玉（ヒスイ）によって、白玉・丸玉・管玉・勾玉等が製作されるという、その攻玉技術の一端が知られている。

中期の銚子市粟島台遺跡は古くからコハクの玉の出土が知られ、岩手県久慈地方と並んで犬吠埼に産するコハクとの関連が考えられていたが、大場磐雄氏や寺村光晴氏等の調査によって、原材料・剝片・砥石類の検出が見られ、県内だけでなく全国でも珍しいコハクの攻玉遺跡として知られるようになった。これからは、攻玉技術の解明もさることながら、コハクの製品の流通を考える際に交易ルートの解明が求められよう。また攻玉遺跡としては認識されているが、未だに確認されていない攻玉遺構についても解明を求められよう。

弥生時代の玉類は、その系統からは大きく縄文系の垂飾、外来系の垂飾、弥生系の独自に生まれた垂飾の3つに分けられる。また特徴としてガラス製の玉が見られるようになり、碧玉（緑色凝灰岩）製の玉の製作が始まる。鉄石英の管玉の出現もこの時期の特徴であろう。碧玉製の管玉に代表される玉類は、朝鮮半島からの外来系の垂飾の類であるが、製品そのものの渡来ではなく製作技術の渡来とみられる。

弥生時代の玉作については、1938年に新潟県佐渡島で玉作遺跡が発見され、計良由松氏によって製作技法の検討が行われた。その後、調査が行われ桂株遺跡の資料を中心に玉作技法が考察された。これらの研究を端緒として、各地域での玉作研究が進展していくが、鳥取県の長瀬高浜遺跡からは、前期中葉の工房が検出されており、弥生時代最古のものとされている。山陰・北陸そして、佐渡地区に玉作遺跡が多く検出される背景には、原材料の緑色凝灰岩の産出する地区と重複することが指摘されている。管玉の製作技法としては、施溝+押圧剝離による「新穂技法」と、施溝+打撃による「大中の湖南技法」、荒割+研磨+輪切り切断による「長瀬高浜技法」、直方体+押圧剝離の「布施技法」等が今までに指摘されている。

県内に目を向けると、該期の玉作遺跡は確認されていない。現段階では、弥生時代の玉作遺跡は県内には存在しないという認識が一般的である。そのため玉の入手に関しては、そのすべてが流通によるものとみなされている。玉類の出土遺跡も、墳墓出土のものがそのほとんどを占め、竈穴住居からは勾玉・管玉が出土している例があるのみである。山陰・北陸・佐渡などでは、古墳時代へ続く玉作技術が弥生時代から展開されるのに対し、県内では玉作は開始され

I 序論

ていない状況である。玉製作に関しては縄文時代と弥生時代は、現状ではまったくの隔絶の様相を呈している。今後の課題としては、玉作遺跡・工房の存在の確認、縄文時代からの攻玉技術の継承の有無について注目する必要がある。特にコハクに関して、産出地域として玉作が検出されないことは非常に不思議である。特に全国的にも極めて珍しいコハク製の勾玉が銚子市佐野原遺跡と市原市椎津茶ノ木遺跡の堅穴住居から出土していることから何らかの玉作関係遺跡が確認されてもよいのではなかろうか。

古墳時代の玉作という場合広義の意味としては2つあげられる。装飾品としての玉の製作を指す狭義の玉作と、祭祀等に用いる石製模造品の製作を指す模造品製作についての2つであるが、ここでは両者を含めて玉作としてとりあげる。古くは江戸時代から勾玉等に一部の好事家の興味が向けられてきてはいたが、本格的な研究の進展は明治時代以降である。高橋健自氏が1911年に『鏡と劔と玉』で、多角的な玉の研究を行い、その後の古墳時代玉類研究の先駆けとなった。その後、日本考古学会では、玉類研究の特集を行いそれを拡充する形で、『鏡劔及玉の研究』として刊行されている。浜田耕作氏が『出雲上代玉作遺物の研究』を1927年に刊行し、出雲玉作についての総合的な研究を朝鮮半島にまで視点を広げて行った。これ以降、玉作研究は寺村光晴氏が精力的に遺跡の調査・研究を進めており、その成果が体系的にまとめられている。これは、1963年の石川県加賀片山津玉作遺跡の調査によって玉作工房の形態を明らかにし、富山県浜山玉作遺跡のヒスイの玉作工房の検出等に代表される、北陸東部の玉作遺跡の発掘調査が多く実施され、それらの成果によるものであった。同時に寺村光晴氏は千葉県を中心とする地区での玉作遺跡にも注目し調査研究を行っている。成田市八代玉作遺跡、下総町大和田治部台遺跡等の調査による東国の玉作遺跡の検出をもとに、『下総国の玉作遺跡』を刊行し、さらに玉作研究の集大成として『古代玉作の研究』、『古代玉作形成史の研究』の2冊を著し玉作研究の第一人者としての評価を確かなものにした。

最近の開発にともなう発掘調査が数多く実施されるにつれて、玉作遺跡の調査例も増加してきており、かなり良好な遺跡が知られてきている。奈良県曾我遺跡は、非常に大規模な玉作遺跡で分業による多種・多様な玉類の生産が行われており、原材料も国内の各地から集まってきた状態が確認されている。畿内政権が、従来の原産地等での生産から（官営）工房での直接管理による生産を行ったものと理解されている。関東地方の最近の調査例は千葉県外小代遺跡、八代遺跡をはじめとして神奈川県本郷遺跡、茨城県烏山遺跡等があげられる。石川県片山津玉作遺跡で提唱された「加賀技法」、前述の『下総国の玉作遺跡』に提唱された「八代・大和田技法」、そして神奈川県本郷遺跡で提唱された「本郷技法」、茨城県烏山遺跡で提唱の「烏山技法」等の玉作技法がモデル化され提唱されているが、これらは管玉の製作技術に伴う工程上分析によって抽出されている。そのほとんどすべてが寺村光晴氏の調査研究の成果によるものである。以上のような流れの中で、千葉県の玉作は玉作研究の第一人者の寺村光晴氏に

早くから注目され、かつ研究・調査が行われていることや、その成果からみて全国的に重要な役割を担っていたものと見られる。それと同時に、玉作研究に関しても重要な役割をはたしてきたといえよう。これから千葉県内の玉作に関してさらにみてみよう。

千葉県の北総地区は、平安時代の『和名抄』に下総国玉作郷の所在が記され、玉作との関連をうかがえる地区といえる。『和名抄』の玉作郷に関する問題は、先述の寺村光晴氏の『古代玉作形成史の研究』等に考察されているのでそれに譲るが、玉作郷に相当するか、それに近接する地区の成田市八代において緑色凝灰岩（碧玉）の管玉の製作遺跡が検出されたのは、1962年のことであった。同年と翌年にわたって学術調査が実施され、工房が検出された。その後1967年に千葉県指定史跡となり、八代玉作遺跡として知られるようになった。それらに啓発された在野の研究者が、香取郡下総町大和田地区で1968年に玉作遺跡を発見し、1969年、1970年の調査により工房の検出にいたり、それ以降大和田地区の広い範囲にわたって玉作遺跡が分布していることが知られるようになった。

高度成長に伴う大規模開発の波が千葉県にも押し寄せてきて、それに伴う発掘調査が増加し、八代玉作遺跡隣接地、近隣の外小代遺跡の調査により工房の検出がなされた。また分布調査の成果として、それらに近い成田市大竹、栄町龍角寺遺跡でも玉作遺跡が確認されている。1982年の市原市草刈六之台遺跡の発掘調査により集落内から1軒の玉作工房の検出があった。これらの玉作工房の時期については、古墳時代前期のものがほとんどで、利根川に面した下総町大和田地区玉作遺跡群と、印旛沼東岸に面した成田市八代遺跡周辺遺跡群とに大別されよう。

装飾品としての玉作に比べて、石製模造品製作の遺跡数や製作工房軒数は、はるかに多数の検出例が知られている。前述の玉作遺跡中（成田市八代遺跡・外小代遺跡・下総町大和田遺跡群等）からも模造品の製作工房の存在が確認されているのをはじめとして、さらに多くの地区から製作遺跡が検出されている。『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』では大きく8つの地域を設定して分布について説明している。1：海老川流域及び神崎川流域から手賀沼にいたる地域、2：花見川流域及び都川流域、3：鹿島川流域及び手操川流域、4：印旛沼北東岸から根木名川流域、長沼を経て利根川南岸に至る地域、5：利根川下流南岸の地域、6：栗山川流域、7：九十九里浜南部の地域、8：小櫃川流域及び小糸川流域の8地区に分類して遺跡名をあげている。これらのうち旧国名の下総地区に遺跡が多くみられ、上総地区には少なく安房地区ではほとんど確認されていない。非常に大雑把な言い方をすると、玉作遺跡の分布地区から玉作遺跡を含めた周辺の地域へ、模造品製作遺跡が拡散していくという指摘がされているのも何となくうなずける様な分布状態である。そのことは、模造品製作遺跡と玉作遺跡との時期差にも現れていると考えられ、玉作の盛行期を古墳時代前期とするのに対し、模造品製作を古墳時代中期とする見方から玉作と模造品製作の間に関係を認めて、製作集団の拡散化という見方もされている。

I 序 論

古墳時代の玉作と模造品製作は、原材料が異なるもののその技術的な面、構成集団等に関しては共通したものとみられている。そのため玉作遺跡と模造品製作遺跡との分布上の関連性、時間的経過とその関連に何らかの要因が考えられる。また千葉県という石の直接の入手が困難な地域での玉作関連遺跡数の多さという点も、何らかの社会的・政治的な要因によるものとみられる。社会的・政治的要因による原材料の流通、製品の流通という点も有機的に関連してくるだろうし、その後の玉作等の衰退に至る過程も誘導的に理解されてくる問題だろう。

玉作に関連して、その製作技術の復元的考察等もいくらか行われ、また出土資料の科学的分析による原材料の原産地同定等の研究も最近行われてきている。特に原産地同定についてはコハク・ヒスイ・碧玉等に一部で成果をあげてきているが、まだ十分に研究されたとはいえず、また研究者間の認識も評価が定まったものとなっていない。今後も資料の収集・蓄積によってより体系的な研究となれば製作技術、生産地と消費地との関係を考える上で非常に重要な指摘がなされるようになると思われる。

2. 研究の目的と方法

今までに千葉県内の玉についての総合的な集成・研究を行ったのは、千葉県立房総風土記の丘の「房総出土の古代の玉」である。しかしそれは集成が主体であり、研究・考察についてはあまりふれられていない。また玉の生産遺跡については、『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告』で集成・調査され、その傾向・状況が簡略に記されている。本研究紀要のテーマもこの『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告』の調査対象となった生産遺跡について、さらに調査・研究等を進めていくことが構想の発端である。そのため、調査・研究の原点を同報告書におき研究紀要の編集作業を開始した。そのためまず第一に、玉作に関する基礎文献の収集を行い、報告書・論考・論文等の資料収集を行った。本書でも基礎文献の紹介に多くのページを費やしている。同様に玉類の出土遺跡の集成を行い、それを一覧表形式にしてまとめた。これにも多くのページを費やしている。この両者の収集作業に大半の時間が費やされた。

今回のテーマは、玉に関する生産遺跡の研究である。生産といっても原材料の入手に始まり、加工、流通、使用、廃棄（納置）といった段階すべてが玉の生産に係る要素と考えられる。ただし、その中でも原材料の加工により原材料としての価値から、玉としての価値が付与される加工の段階が、生産そのものを指している用語である。もちろん入手についても、玉の材料として原材料が求められ加工の場へと移されるといった工程を考えれば、原材料の段階においても潜在的な玉としての価値を包括していることは指摘できる。しかしその価値は潜在的なものであり、加工という物理的な変容が加えられて初めて、玉の玉たる要素を備えるということから、本来の価値が備わっているとは言い難い。また、古墳等の墳墓出土の玉に関連した流通・消費という観点では、古墳時代の研究者の方々が今までにも研究され、数多くの論考等が提

示されている。これらのことについても考慮して生産遺跡について検討を加えるべきであるが、あまりにも問題が多岐に及ぶことであるので、今回はその中で、原材料の物理的変質により玉としての価値の付加される「加工」の段階を主として取り上げて、そこから導き出されるいくつかの問題点についての検討を行うこととした。

ただ、当初は原材料の入手から加工、さらには出土資料からも玉類生産の検討を行うといった構想を担当者間で話し合っていた。その検討というなかには、原材料の入手先、すなわち原材料の産出地から加工の場までの流通（前流通と呼ばせて頂く）の解明も含めていた。特に玉類の原材料の産出地が特定できれば、流通を巡る研究に供するところは大きいと考えた。しかしそれには考古学的アプローチからだけでは限界があるので、原材料の産出地同定の有効性について、岩石・鉱物の研究者、科学的分析を専門とした研究者の方々に意見を求めることにした。その結果、原材料となる岩石（鉱物）の性質から、同定・分析等に費用・時間を要しそれから得られるデータの解析から、厳密な産出地の同定を行うことは大変難しいという意見が返ってきた。そのような経緯から、今回は当初目的としていた入手・前流通の検討を対象から除外せざるを得なくなった。ただ遺跡から出土した玉類の原材料の推定産出地については岩石（鉱物）の専門家のご指導・ご助言を頂き、その問題に関する原稿を掲載することとした。この分野については、千葉県立中央博物館主任技師高橋直樹氏にお願いすることとし、専門的視点から、推定される産出地についての理解の助けとなるように「千葉県内から出土する玉類の原材料の原産地についての予察」という題で論考を頂戴し、「V 特論」として掲載した。また、古墳時代玉作等の分析・検討に際して玉作研究の第一人者である、和洋女子大学教授の寺村光晴先生のご指導・ご教示を受けた。

玉は、旧石器時代から認められ、現代にまでその流れが連綿と続いている装飾品類であるが、今回の紀要のテーマとしてはあまりにも長時間にわたりすぎる。そのため玉類の生産という観点から、考古学的に確認される旧石器時代から古墳時代、その後一部奈良・平安時代に及ぶ玉作（模造品製作）について今回の調査対象としてとりあげることにした。この調査対象についての選択は、担当者のお話し合いによって決められたものであり、その過程には調査対象資料の所蔵の状況や、担当者の見識・興味・作業時間等の兼ね合いによって絞られたため、学問的にやや片寄っている嫌いがあることは否めない。しかし、担当者の技量の範囲でなるべく統一をとってまとめたものとしたということから、独善的ではあるが本書のような対象、内容となったことをご理解いただきたい。

材質の問題についても一言ふれると、玉類は石製のものを主体としておりほかに、金属・骨角歯牙・コハク・ガラス等があげられる。今回はそれらの内で県内で工房等の検出が確認され、材質的に普遍性の高い、石製のものに限って取り扱うこととした。特例として、千葉県銚子市犬吠埼周辺と、岩手県久慈地方で産出することで知られるコハクについては調査対象とした。

I 序 論

次に各時代ごとに、今回の調査対象について少し述べてみたい。

まず、旧石器時代の玉の製作については玉の出土さえ非常に希である。装身具らしいと見られる遺物の出土は四街道市出口・鐘塚遺跡の1か所しかない。そのため玉の製作としては確認できないが、縄文時代と一緒にして旧石器～縄文時代という区分の中で取り上げる。

次に縄文時代の玉の製作は、まず用語として、「玉作」とは区別して「攻玉」の用語が比較的広く用いられておりここでもその用語を用い、玉類の出土遺跡・遺構を集成し、さらに攻玉に関する遺跡の抽出・分析作業を行った。

弥生時代の玉作に関しては千葉県では確実な生産遺跡は検出されていない。玉生産という観点からは非常に衰退した状態である。方形周溝墓等の墳墓からは勾玉・管玉等を主とした出土品がみられるものの、現段階ではすべて流通品といった認識がなされている。弥生時代の玉の形態・使用法・製作等については、後の古墳時代に続いていくという見方が一般的と考えられるので、今回は古墳時代に続く前段階といった程度の認識に止めておいて、出土遺跡の集成を中心に行った。

古墳時代は、千葉県では広義の玉作に関して、最も盛んな時期といえる。古墳時代前期を主とする狭義の玉作遺跡の分布が、北総から茨城県に至る常総台地に比較的多くみられることから、古代政権と鹿島・香取の神社との関連にまで及んだ論考がなされているほどである。今回も玉類出土遺跡の集成を行い、その中でも北総台地上の下総町大和田地区の玉作遺跡と、成田市八代地区の玉作遺跡を主として調査・研究を行うことにしたが、その中でも特に、成田市八代遺跡と外小代遺跡の玉作遺跡・遺構を中心として分析・検討を行った。

実際の作業は、千葉県立房総風土記の丘に所蔵されている両遺跡の玉作関係遺物をすべて抽出、借用し、遺構（玉作工房）ごとに製作方法・工程等の検討を行った。すべての遺物に目をとおし、特に管玉については、工程別に分類・計数、重量の計測を行った。また製作方法・工程の検討にあたっては、従来から言われている荒割・形割・側面打裂・研磨・穿孔といった工程と、そこで発揮される技法の再検討のために、遺物の接合等を一部の資料に対して行った。そして管玉の形製品の獲得が、剥片の剥離と分割によって行われ、そこに両極打法といった技法が介在することが観察され、いままで言われていた「八代・大和田技法」だけでなく、他の技法上の特徴も検出されるということが理解できたことは大きな成果であった。またすべての玉作関係遺物に目を通したため、報告書作成時に見落とされていた刳貫円板・紡錘車形石製品の未成品等も検出することができた。残念なことは、分類・計数、重量測定、接合等の作業は大変に困難で、多くの時間を費やすため、接合作業をすべての遺物に対して行うことができなかった点である。これら玉資料の接合や製作技法の分析、および実測に関しては、石器のそれと共通する要素が多分にあるため、旧石器時代の石器研究を行っており、市原市草刈六之台遺跡の玉作を分析中である、当センター職員島立 桂の協力と助言を受けた。この島立の協力の

過程で我々の玉類製作技法への理解が深まっていったことを明記しておきたい。

一方、石製模造品製作に関する遺跡の集成も同様に行い、その中で県立房総風土記の丘所蔵の成田市石塚遺跡、当文化財センター保管の八千代市北海道遺跡の製作遺構を取り上げ分析・検討を行った。

各々の分析・検討の結果は各論の記述に譲るが、今回の作業では玉類製作の技法的な側面からの検討にのみ終わったことは残念である。この結果を基にさらに社会構造・政治体制にまで及んだ考察・論考の材料となれば、今回の作業も「玉作」に関する広大な課題に対して技術面からの基礎資料としての位置づけが与えられるものと思う。

引用・参考文献

- 高橋健自 『鏡と劔と玉』 富山房 1911
 浜田耕作 『出雲上代玉作遺物の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究报告第10冊 刀江書院 1927
 日本考古学会編 『鏡劔及玉の研究』 吉川弘文館 1940
 計良由松 「佐渡の玉作遺跡に於ける管玉の製作技術について」 『佐渡史学会会報』 1954
 中川成夫ほか 『佐渡』 九学会連合佐渡調査委員会 1964
 寺村光晴 『古代玉作の研究』 吉川弘文館 1966
 寺村光晴 「縄文時代前期飾玉生産の一考察」 『和洋女子大学紀要12』 和洋女子大学 1967
 藤田富士夫 「攻玉遺跡からみた玦状耳飾の編年」 『玉』 日本玉研究会会誌1 日本玉研究会 1970
 藤沢宗平ほか 『有明山社』（玦状耳飾・滑石産地） 長野県考古学会研究報告書9 1970
 寺村光晴ほか 『下総国の玉作遺跡』 雄山閣 1974
 寺村光晴 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館 1980
 藤田富士夫 「玦状耳飾の編年に関する一試論」 『北陸の考古学』 石川県考古学研究会々誌26 石川考古学研究会 1983
 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作」 『海老名本郷（Ⅰ）』 本郷遺跡調査団 1985
 寺村光晴 「烏山遺跡の玉作—その様相と意義—」 『茨城県土浦市・烏山遺跡』 考古学研究室報告甲種第5冊 国土館大学文学部考古学研究室 1988

Ⅱ 基礎資料

1. 参考文献目録

今回の編集作業にあたって、基礎文献の一覧をここにまとめてみた。県内の生産遺跡・集落遺跡・祭祀遺跡等、古墳をはじめとする墳墓以外の遺構・遺跡からの、玉の出土を報じている報告書・論文・資料紹介・年報・抄報・単行本等を主とし、その他玉に関する基本的な論文等の文献を、発行年代順に列記した。発行年は西暦表示とし（ ）内に元号表示をした。報告書については、書名、発行者（機関）とし、論文、単行本等については著者、論文名、書名、発行所の順に記した。参考文献には掲載順に文献番号を付け、玉出土遺跡の集成表には文献番号をあげることとし、いちいち文献名を表示しないことにした。また、各論の参考文献・引用文献は別にあげることとしたため、ここにあげる目録と重複する部分もある。

最近の発掘調査の急激な増加により、玉類出土の遺跡・遺構も急激に増加してきているのは事実であるが、整理作業がそれに追いつかず報告書刊行の遅れや、内容の検討等に費やす時間が少なくなっていることは否めない。そのため発掘調査時の概要や抄報・年報等でしか確認できないものも数多くあった。また調査報告書の刊行数が多いため、手を尽くして資料の収集に努めたつもりであるが、まだまだ数多くの遺漏や誤解があるものと思われる。その点については、今後の研究に待つか、また機会を見て訂正・追加等を行えば幸いである。

1894（明治27）年

- 1 下村三四吉、八木奨三郎 「下総香取郡阿玉台貝塚探究報告」 『東京人類学会雑誌』 第9巻97号 東京人類学会

1911（明治44）年

- 2 高橋健自 『鏡と劔と玉』 富山房

1919（大正8）年

- 3 高橋健自 「古墳発見石製模造具の研究」 『帝室博物館学報第1冊』 帝室博物館

1927（昭和2）年

- 4 浜田耕作 『出雲上代玉作遺物の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第10冊 刀江書院

1930（昭和5）年

- 5 高橋健自 『考古図聚』 万葉閣

1940（昭和15）年

- 6 八幡一郎 「硬玉製大珠の問題」 『考古学雑誌』 第30巻5号 日本考古学会
- 7 『鏡劔及玉の研究』 日本考古学会編 吉川弘文館

1942（昭和17）年

- 8 八幡一郎 「関東地方先史硬玉製品目録」 『人類学雑誌』 第57巻11号 日本人類学会

Ⅱ 基礎資料

1943（昭和18）年

9 大場磐雄 『神道考古学論攷』 葦牙書房

1951（昭和26）年

10 大場磐雄・亀井正道 「上総姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」 『考古学雑誌』第37巻 日本考古学会

11 西村正衛 「千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘概報」 『古代』第3号 早稲田大学考古学会

1952（昭和27）年

12 西村正衛 「千葉県香取郡八都村向油田貝塚発掘概報」 『古代』第7・8合併号 早稲田大学考古学会

13 『戸張遺蹟調査概要』 千葉県柏町公民館

14 『姥山貝塚』 日本考古学研究所

15 「千葉県銚子市粟島台石器時代遺蹟調査報告」 『上代文化』第22輯 國學院大學考古学会

16 『加茂遺跡』 三田史学会

1954（昭和29）年

17 計良由松 「佐渡の玉作遺跡に於ける管玉の製作技術について」 『佐渡史学会報』

18 永峯光一 「千葉県堀之内貝塚発見の硬玉製大珠」 『石器時代』No. 2 石器時代研究会

19 『田子台遺跡』 早稲田大学考古学研究室

1955（昭和30）年

20 西村正衛 「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（第2・3次調査）」 『学術研究』第3号 早稲田大学教育学部

1957（昭和32）年

21 江坂輝彌 「所謂硬玉製大珠について」 『銅鐸』13 立正大学考古学会

1958（昭和33）年

22 萩原弘道 「末期弥生式土器と古式土師器の関係」 『上代文化』第28輯

23 坂詰秀一 「千葉県君津郡莊台出土の祭祀遺跡」 『銅鐸』14 立正大学考古学会

24 『館山鈍切洞窟』 千葉県教育委員会

1959（昭和34）年

25 坂詰秀一 「千葉県富里村高野台出土の垂玉」 『古代』第31号 早稲田大学考古学会

26 武田宗久 「船橋市内縄文式時代及び彌生式時代の社会と文化」 『船橋市史 前篇』 船橋市役所

27 山田 巖 「浅間台古墳」 『成田史談』第5号 成田市文化財保護協会

28 『松戸市河原塚』 松戸市教育委員会

1960（昭和35）年

29 坂詰秀一 「千葉県塚原古墳群の調査」 『古代文化』第4巻第3号

1961（昭和36）年

30 金子浩昌 「天神台貝塚」 『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』 千葉県教育委員会

31 玉口時雄 「印旛郡白井村古名内中西山遺跡」 同上

32 川戸 彰 「野呂山田貝塚」 同上

1963（昭和38）年

33 『加賀片山津玉造遺跡の研究』 加賀市教育委員会

1964 (昭和39)年

- 34 寺村光晴 「古代の攻玉技術とその復原的考察」 『國學院雑誌』65巻6号 國學院大學
 35 梅沢重昭 「笹遺跡—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究—」遺跡編 『群馬県立博物館研究報告第1集』 群馬県立博物館
 36 『佐渡』 九学会連合佐渡調査委員会

1965 (昭和40)年

- 37 寺村光晴 「硬玉製大珠論—源流と攻玉技術と文化—」 『上代文化』35 國學院大學考古学会
 38 久保常晴 『川崎市久地不動台遺跡調査概要』 川崎市教育委員会
 39 西村正衛 「千葉県香取郡神崎町西ノ城遺跡第二次発掘調査概報」 『古代』第45・46合併号 早稲田大学考古学会
 40 『中沢貝塚』 鎌ヶ谷町

1966 (昭和41)年

- 41 寺村光晴 『古代玉作の研究』 吉川弘文館
 42 寺村光晴 「玉生産」 『日本の考古学V』 河出書房新社
 43 小出義治「祭祀」 同上
 44 梅沢重昭 「笹遺跡—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究—」遺物編 『群馬県立博物館研究報告第3集』 群馬県立博物館
 45 亀井正道 『建鉢山』 吉川弘文館
 46 清水潤三 「千葉県八日市場市大浦貝塚」 『日本考古学年報14』 日本考古学協会

1967 (昭和42)年

- 47 梶山林継 「千葉県岩井宮の台祭祀遺跡と国勝神社」 『研修』20
 48 寺村光晴 「縄文時代前期飾玉生産の一考察」 『和洋女子大学紀要12』 和洋女子大学
 49 『夏見台』 ニュー・サイエンス社
 50 丸子 亘 「千葉県東庄町前山土師遺跡の調査」 『立正大学博物館学講座研究報告第3』 立正大学文学部
 51 『加曾利貝塚Ⅰ』 貝塚博物館調査資料第1集 千葉市加曾利貝塚博物館

1968 (昭和43)年

- 52 大塚初重 「千葉県佐原市荒久遺跡の調査」 『考古学集刊』第4巻第2号 東京考古学会
 53 『下総国大和田玉作治部台玉作遺跡第1次調査』 下総郷土史研究会
 54 『加曾利貝塚Ⅱ』 貝塚博物館調査資料第2集 千葉市加曾利貝塚博物館
 55 『清見台古墳群発掘調査報告』 千葉県教育委員会
 56 『神坂峠』 阿智村教育委員会

1969 (昭和44)年

- 57 西村正衛 「千葉県小見川町木之内明神貝塚(第1次調査)—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その一」 『学術研究』第19号 早稲田大学教育学部
 58 『我孫子古墳群』 東京大学文学部考古学研究室

1970 (昭和45)年

- 59 大場磐雄 『祭祀遺蹟』 角川書店
 60 藤田富士夫 「攻玉遺跡からみた塊状耳飾の編年」 『玉』日本玉研究会会誌1 日本玉研究会

II 基礎資料

- 61 『有明山社』 長野県考古学会研究報告書 9
- 62 『大谷口』 松戸市教育委員会
- 63 『東関東自動車道（千葉－成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会
- 64 『佐原市岩ヶ崎』 岩ヶ崎地区遺跡調査団・佐原市教育委員会
- 65 『大和田玉作遺跡発掘調査概報』 千葉県教育委員会
- 66 西村正衛 「千葉県小見川町阿玉台貝塚－東部関東における縄文中・後期文化の研究－その二」
『学術研究』第19号 早稲田大学教育学部
- 67 『加曾利貝塚Ⅲ』 貝塚博物館調査資料第3集 千葉市加曾利貝塚博物館
- 68 『千葉県東寺山遺跡群発掘調査報告』 東寺山遺跡群発掘調査会
- 69 『東金市平蔵台遺跡』 千葉県教育委員会
- 70 『姉崎台遺跡－発掘調査概要－立正大学博物館学講座研究小報3－』 立正大学文学部
- 71 『祇園貝塚』千葉県文化財調査抄報第4集 千葉県教育委員会
- 1971（昭和46）年
- 72 大場磐雄 「上代祭祀遺跡地名表」 『祭祀遺跡』 角川書店
- 73 寺村光晴 「石工」 『新版考古学講座』第9巻 雄山閣
- 74 高橋一夫 「石製模造品出土の住居址とその性格」 『考古学研究』第18巻第3号 考古学会
- 75 『横浜市緑区上谷本遺跡群調査報告』 横浜市教育委員会
- 76 『高根木戸』 船橋市教育委員会・高根木戸遺跡調査団
- 77 『大和田玉作稲荷峰遺跡発掘調査概報』 千葉県教育委員会
- 78 『加曾利貝塚Ⅳ』 貝塚博物館調査資料第4集 千葉市加曾利貝塚博物館
- 1972（昭和47）年
- 79 寺村光晴 「祭祀遺物製作遺跡－特に滑石製模造品製作の遺跡について－」 『祭祀遺跡特説・神道考古学講座第5巻』 雄山閣
- 80 椛山林継 「祭と葬の分化－石製模造遺物を中心として－」 『國學院大學日本文化研究所紀要』第29輯 國學院大學日本文化研究所
- 81 金刺伸吾、松浦宥一郎 「船橋市内八木ヶ谷町発見の石製模造品と土師器」 『船橋考古』第2号 船橋市遺跡資料刊行会
- 82 『外原』 船橋市教育委員会
- 83 『千代田遺跡』 四街道千代田遺跡調査会
- 84 「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」 『貝塚博物館紀要』第5号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 1973（昭和48）年
- 85 亀井正道 「琴柱形石製品考」 『東京国立博物館紀要』第8号 東京国立博物館
- 86 『北柏遺跡』 北柏遺跡発掘調査団
- 87 『貝の花貝塚』 松戸市教育委員会
- 88 佐藤武雄 「高根木戸遺跡発見の石製勾玉」 『船橋考古』第3号 船橋市遺跡資料刊行会 船橋市遺跡資料館
- 89 『下総鶴塚古墳の発掘調査概報』 千葉県教育委員会
- 90 『千葉県上ノ台遺跡』 （財）千葉県都市公社
- 91 『宮脇』 宮脇遺跡調査団

- 92 『京葉』（財）千葉県都市公社
- 93 『袖ヶ浦町山野貝塚』（財）千葉県都市公社
1974（昭和49）年
- 94 寺村光晴 『下総国の玉作遺跡』 雄山閣
- 95 『千葉市史』原始古代中世編 千葉市
- 96 『柏市鴻ノ巣遺跡』（財）千葉県都市公社
- 97 「木苺峠遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（財）千葉県都市公社
- 98 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 小室』（財）千葉県都市公社
- 99 『八栄北』 船橋市教育委員会
- 100 「一本桜遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（財）千葉県都市公社
- 101 寺村光晴 「成田市大竹玉作遺跡の調査」 『考古学ジャーナル』No.101 ニュー・サイエンス社
- 102 『井野長割遺跡概報』 佐倉市教育委員会
- 103 柿沼修平、内田儀久 「佐倉市畔田川崎遺跡出土の土師式土器と石製模造品」 『史館』 第3号 市川ジャーナル
- 104 『粟島台遺跡-1973年度発掘調査概要-』 銚子市教育委員会
- 105 『宮門』 山武考古学研究所
- 106 『市原市菊間遺跡』（財）千葉県都市公社
- 107 『市原市大厩遺跡』（財）千葉県都市公社
- 108 加藤晋平、橋口定志 「千葉県勝浦市における発掘調査（1）長者ヶ台高梨遺跡」 『考古学ジャーナル』No.98 ニュー・サイエンス社
- 109 『馬門古墳群発掘調査報告』 君津市教育委員会
1975（昭和50）年
- 110 寺村光晴 「三宅島大里遺跡出土の管玉-東関東・東海地方弥生時代管玉の様相から-」 『三宅島の埋蔵文化財』 伊豆諸島考古学研究会
- 111 「曾谷貝塚A・B地点の発掘調査」 『昭和49年度 市立市川博物館年報』 市立市川博物館
- 112 「金堀台貝塚の再検討」 『船橋考古』第4・5合併号 船橋市遺跡資料刊行会
- 113 『飯山満東遺跡』（財）千葉県都市公社
- 114 『海老ヶ作貝塚-第2次発掘調査概報-』 千葉県教育委員会・船橋市教育委員会
- 115 『阿玉台北遺跡』（財）千葉県都市公社
- 116 矢戸三男・大村 裕 「千葉県奈土五区より採集した滑石製遺物」 『玉』日本玉研究会会誌 第4号 日本玉研究会
- 117 『有吉遺跡（第1次）』千葉東南部ニュータウン3（財）千葉県文化財センター
- 118 『木戸作遺跡（第一次）』千葉東南部ニュータウン2（財）千葉県文化財センター
- 119 『下総小川台古墳群』 芝山はにわ博物館
- 120 『千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報』 千葉県教育委員会・銚子市教育委員会
- 121 『横芝町史』 横芝町
- 122 山田友治他 『千葉県長生郡睦沢村浅間山1号墳発掘調査報告書』
- 123 溝口勝美他 「千葉県君津郡袖ヶ浦町フィールド調査（野田遺跡）」 『東洋大学考古学研究会会報』5 東洋大学考古学研究会
- 124 『新田野貝塚』 大原町文化財審議委員会

II 基礎資料

- 125 『勝浦市長者ケ台遺跡を中心とする遺跡群について』 立教大学考古学研究会
1976（昭和51）年
- 126 寺村光晴 「房総の玉ーその製作者たちー」 『上総博物館報』第25号 千葉県立上総博物館
- 127 外山和夫 「石製模造品類を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって」 『考古学雑誌』 第62巻2号 日本考古学会
- 128 『中馬場遺跡ー第三次発掘調査報告書ー』 柏市教育委員会
- 129 「一ノ作遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 （財）千葉県都市公社
- 130 『公津原』 千葉県企業庁
- 131 藤下昌信 「成田市大竹台畑玉作遺跡発掘調査の概要」 『房総の郷土史』第4号 千葉県郷土史研究連絡協議会
- 132 『夏見台（第2次）』 船橋市教育委員会
- 133 『夏見台（第3次）』 夏見台遺跡第3次発掘調査団
- 134 『柏上遺跡』 船橋市教育委員会
- 135 『千葉市誉田コロニー内遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 136 『小池麻生遺跡』 芝山町教育委員会
- 137 『多古台遺跡群調査概報』 日本文化財研究所
- 138 『武士遺跡』 武士遺跡発掘調査団
- 139 『南向原』 早稲田大学出版部
1977（昭和52）年
- 140 『東寺山石神遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 141 沼沢 豊 「東国の石枕」 『古代探叢』 早稲田大学出版部
- 142 『幸田貝塚ー第6次調査概報ー』 松戸市教育委員会
- 143 『間野台・古屋敷』 間野台・古屋敷遺跡調査団
- 144 『江原台第1遺跡発掘調査報告書』2 佐倉市教育委員会
- 145 『高岡遺跡』 高岡遺跡発掘調査団
- 146 『千葉市中野僧御堂遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 147 『千葉市東寺山戸張作遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 148 『西広貝塚』 上総国分寺台遺跡調査団
- 149 『上総国分寺台発掘調査概報』 上総国分寺台遺跡調査団
- 150 『請西ー千葉県木更津市請西遺跡調査報告書ー』 木更津市請西遺跡調査団
1978（昭和53）年
- 151 『加村台遺跡ー1976年度発掘調査報告書ー』 流山市教育委員会
- 152 寺村光晴・千家和比古・安藤文一 「大竹玉作遺跡調査概報」 『成田史談』第23号 成田市文化財保護協会
- 153 『佐倉市飯合作遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 154 『佐原市神田台遺跡』 （財）千葉県文化財センター
- 155 『千葉市荒屋敷貝塚ー貝塚中央部発掘調査報告』 （財）千葉県文化財センター
- 156 『千葉市築地台貝塚・平山古墳』 （財）千葉県文化財センター
- 157 『千葉市作草部町駒形遺跡発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会
- 158 『銚子市野尻遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会
- 159 『大多喜町横山遺跡発掘調査報告書』 横山遺跡緊急発掘調査会

- 160 『研究紀要4』（財）千葉県文化財センター
- 161 『日本の石枕』 千葉県立房総風土記の丘
1979（昭和54）年
- 162 『野田市北前貝塚』 野田市郷土博物館
- 163 『我孫子市埋蔵文化財小報第3集－鹿島前遺跡第2次発掘調査概報－』 我孫子市教育委員会
- 164 『幸田貝塚－第8次調査概報－』 松戸市教育委員会
- 165 『市川市の貝塚』 市川市教育委員会
- 166 『江原台－土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡Ⅱ区発掘調査報告書－』 佐倉市教育委員会
- 167 『千葉市城の腰遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 168 『千葉市西屋敷遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 169 『椎名崎遺跡』千葉東南部ニュータウン6（財）千葉県文化財センター
- 170 『ムコアラク遺跡・小金沢古墳群』千葉東南部ニュータウン8（財）千葉県文化財センター
- 171 『成田用水』 水資源開発公社
- 172 『千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告』 日本文化財研究所
- 173 『上総菅生遺跡』 木更津市教育委員会・木更津市菅生遺跡調査団
- 174 『大多喜町堀之内上の台遺跡』 夷隅郡教育委員会
1980（昭和55）年
- 175 寺村光晴 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館
- 176 寺村光晴 「古代房総の祭祀集団」 『大野政治先生古希記念房総史論集』 大野政治先生古希記念論集刊行会
- 177 石岡憲雄 「北武蔵の玉作遺跡」 『研究紀要第2号』 埼玉県立歴史資料館
- 178 『尾井戸遺跡』 尾井戸遺跡調査団
- 179 『加村台遺跡群』 流山市教育委員会
- 180 『我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 181 『昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 182 『中島辨智コレクション－市川出土の考古資料－』 市立市川博物館
- 183 寺村光晴 「成田の玉作遺跡」 『成田市史－原始古代編－』 成田市史編纂委員会
- 184 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』（財）千葉県文化財センター
- 185 岡崎文喜他 「柏上遺跡の調査」 『船橋考古』第10号 船橋市遺跡資料刊行会
- 186 『萱田町川崎山遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 187 千田利明 「千葉県佐倉市用替遺跡出土の縄文式土器と大珠」 『奈和』第18号 奈和同人会
- 188 『馬橋鷺尾余遺跡』 馬橋鷺尾余遺跡調査会
- 189 『馬加城遺跡発掘調査報告書』 馬加城遺跡調査会
190
- 191 『千原台ニュータウンⅠ－野馬堀遺跡・ばあ山遺跡ほか－』（財）千葉県文化財センター
1981（昭和56）年
- 192 『房総出土の古代の玉』 千葉県立房総風土記の丘
- 193 『殿内遺跡調査報告書』（財）柏市都市開発公社
- 194 『江戸川台第Ⅰ遺跡』 江戸川台第Ⅰ遺跡調査会
- 195 『龍角寺古墳群確認調査報告書』 千葉県教育委員会

II 基礎資料

- 196 『公津原Ⅱ』 千葉県教育委員会・(財)千葉県文化財センター
- 197 「硬玉製勾玉」 『成田市の文化財』第12集 成田市教育委員会
- 198 『磯花遺跡』 磯花遺跡調査会
- 199 『千葉市矢作貝塚』 (財)千葉県文化財センター
- 200 『大明神原遺跡発掘調査報告書』 富津市教育委員会
- 201 『健田遺跡群—千倉町埋蔵文化財調査報告書健田遺跡関連第5次調査』 朝夷地区教育委員会
1982(昭和57)年
- 202 青木 豊、小川和博、安藤鴻基、岡川宏道 「房総出土の古代の玉」 『房総風土記の丘 年報5』 千葉県立房総風土記の丘
- 203 小野真一 『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー11 ニュー・サイエンス社
- 204 土田孝雄 『翠の古代史—ヒスイの源流をさぐる—』 奴奈川郷土文化研究会
- 205 「社軍神遺跡」 『長野県史考古資料編全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』 長野県
- 206 『関宿町埋蔵文化財調査報告第2集—下根遺跡』 下根遺跡調査会・関宿町教育委員会
- 207 『我孫子市埋蔵文化財報告第2集—日秀遺跡遺構確認調査 別当地遺跡発掘調査—』 我孫子市教育委員会
- 208 『龍角寺ニュータウン遺跡群』 龍角寺ニュータウン遺跡調査会
- 209 『夏見台(第3次—Ⅱ)』 船橋市遺跡調査会
- 210 「復山谷遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』 (財)千葉県文化財センター
- 211 『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会
- 212 『堀之内』 堀之内遺跡調査団
- 213 『東小学校遺跡』 小見川町教育委員会
- 214 『千葉市上ノ台遺跡』 千葉市教育委員会
- 215 『上赤塚1号墳・狐塚古墳群』千葉東南部ニュータウン13 (財)千葉県文化センター
- 216 伊藤睦憲 「千葉県粟島台遺跡発見の琥珀製大珠」 『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会
- 217 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 218 『写真集・山武町の歴史』 山武町史編纂委員会
1983(昭和58)年
- 219 阿部朝衛 「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」 『考古学論叢Ⅰ』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 220 加藤 昭 「X線粉末回析法による書陵部所蔵の石製品の検討」 『書陵部紀要第34号』 宮内庁書陵部
- 221 藤田富士夫 「塊状耳飾」 『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 222 藤田富士夫 「塊状耳飾の編年に関する一試論」 『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌26 石川考古学研究会
- 223 安藤文一 「翡翠大珠」 『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 224 石倉亮治 「千葉市矢作貝塚出土の紡錘車形石製品について」 『研究連絡誌』第3号 (財)千葉県文化センター
- 225 「橿原市曾我遺跡発掘調査概報Ⅰ」 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)1982年度』 奈良県立橿原考古学研究所
- 226 『松ヶ崎(Ⅱ)遺跡』 山武考古学研究所
- 227 『経塚遺跡』 沼南町経塚遺跡調査会

- 228 『寒風台』 寒風台遺跡発掘調査団
- 229 『昭和57年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 230 『下郷後』 船橋市教育委員会
- 231 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 (財)千葉県文化財センター
- 232 『岩富漆谷津・太田宿』 佐倉市教育委員会
- 233 『千葉市南二重堀遺跡』千葉東南部ニュータウン12 (財)千葉県文化財センター
- 234 『バクチ穴・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡』千葉東南部ニュータウン14 (財)千葉県文化財センター
- 235 『千葉市大道遺跡・生実城発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 236 『千葉県多古町大原遺跡調査報告書』 多古町教育委員会
- 237 『千葉県多古町八田遺跡調査報告書』 多古町八田遺跡調査会
- 238 『上総国分寺台発掘調査概要XI 祇園原貝塚Ⅲ』 上総国分寺台遺跡調査団
- 239 『千原台ニュータウンⅡ-草刈遺跡A区(第1次調査)-』 (財)千葉県文化財センター
- 240 『毛尻遺跡調査報告書』 山武考古学研究所
- 1984(昭和59)年
- 241 西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』 早稲田大学出版部
- 242 石倉亮治 「房総の石製模造品」『研究紀要』8 (財)千葉県文化財センター
- 243 「橿原市曾我遺跡発掘調査概報Ⅱ」『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)1983年度』 奈良県立橿原考古学研究所
- 244 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 (財)千葉県文化財センター
- 245 「船尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 (財)千葉県文化財センター
- 246 『成田市郷部北遺跡群調査概要』 成田市郷部北遺跡調査会
- 247 『昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告書』 市川市教育委員会
- 248 「谷田木曾地遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 (財)千葉県文化財センター
- 249 『八千代市権現後遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 250 高橋健一 「千葉県佐倉市坂戸草刈堀込遺跡出土の遺物」『奈和』第22号
- 251 『国立歴史民俗博物館研究員宿泊施設予定地発掘調査概報』 国立歴史民俗博物館
- 252 『佐倉市鎗木諏訪尾余遺跡』 鎗木諏訪尾余遺跡調査会
- 253 『千葉県小見川町増田長峰遺跡発掘調査報告書』 小見川町遺跡調査会
- 254 『東総用水』 (財)千葉県文化財センター
- 255 『磯花遺跡Ⅲ』 磯花遺跡調査団
- 256 『広ヶ作遺跡』 千葉市遺跡調査会
- 257 「田向南遺跡発掘調査報告書」『千葉市文化財調査報告書第8集』 千葉市教育委員会
- 258 『谷津遺跡』 千葉市文化財調査報告書第10集 千葉市教育委員会
- 259 『馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡』千葉東南部ニュータウン15 (財)千葉県文化財センター
- 260 『千葉県銚子市西町遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会
- 261 『小田部新地遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 262 『原遺跡-市原市姉崎・原1号墳周塹址及び集落跡の調査-』 原遺跡調査会
- 263 『祝崎古墳群・戸崎城山遺跡発掘調査報告書』 (財)君津郡市文化財センター

II 基礎資料

- 264 『千葉県市原市皿郷田茂遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 265 『北屋敷尻遺跡発掘調査報告書』 睦沢町教育委員会
- 1985(昭和60)年
- 266 寺村光晴 「日本先史時代の琥珀—出現と様相—」 『学部創設三十五周年記念論文集』 和洋女子大学
- 267 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作」 『海老名本郷(Ⅰ)』 本郷遺跡調査団
- 268 白石太一郎 「神祭と古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇』 国立歴史民俗博物館
- 269 杉山晋作 「石製刀子とその使途」 同上
- 270 杉山晋作 「特異な彫刻文のある石製腕飾」 『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部
- 271 「祭祀関係遺物出土地名表」 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」付篇』 国立歴史民俗博物館
- 272 『十年の歩み—創立10周年記念誌—』 (財)千葉県文化財センター
- 273 『千葉県野田市二ツ塚古墳群』 野田市遺跡調査会
- 274 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 (財)千葉県文化財センター
- 275 『我孫子市埋蔵文化財報告第5集—大久保遺跡—』 我孫子市教育委員会
- 276 『我孫子市埋蔵文化財報告第6集—別当地・南久保作・北久保作遺跡—』 我孫子市教育委員会
- 277 『我孫子市埋蔵文化財報告第7集—我孫子中学校校庭遺跡—』 我孫子市教育委員会
- 278 『子和清水貝塚—遺物図版編2—』 松戸市教育委員会
- 279 『神崎町史 史料編』 神崎町
- 280 『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 281 『栄町大畑Ⅰ—2遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 282 『桐ヶ崎遺跡』 桐ヶ崎遺跡調査会
- 283 『成田市芦田台1・2号塚』 (財)千葉県文化財センター
- 284 『石の文化—市立市川考古博物館図録12—』 市川市立考古博物館
- 285 『八千代市北海道遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 286 『棒作遺跡発掘調査報告書』 佐倉市棒作遺跡調査会
- 287 『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 288 『佐倉市タルカ作遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』 (財)千葉県文化財センター
- 289 『新堀遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会
- 290 『千葉市村田服部遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 291 『千葉市箕輪遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 292 『主要地方道成田松尾線Ⅱ』 (財)千葉県文化財センター
- 293 『林遺跡発掘調査報告書』 多古町林遺跡発掘調査会
- 294 『草刈遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 295 『境遺跡』 (財)君津郡市文化財センター
- 1986(昭和61)年
- 296 『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 千葉県文化財保護協会
- 297 椋山林継 「祭と葬の分化」 『日本考古学論集3 呪法と祭祀・信仰』 吉川弘文館

1. 参考文献目録

- 298 河村好光 「玉生産の展開と流通」 『岩波講座 日本考古学3 生産と流通』 岩波書店
- 299 『翡翠と日本文化を考えるシンポジウムー第1回ヒスイの謎その輝き今ー』 翡翠と日本文化を考えるシンポジウム実行委員会
- 300 『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東Ⅲ)』 東京国立博物館
- 301 『一野田市文化財抄報6ー埋蔵文化財調査概報Ⅲ』 野田市郷土博物館
- 302 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 (財)千葉県文化財センター
- 303 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 (財)千葉県文化財センター
- 304 『我孫子市埋蔵文化財報告第8集ー西原遺跡 根戸城跡ー』 我孫子市教育委員会
- 305 中野修秀 「北総台地における縄文時代大珠の一例」 『竹篋』創刊号 北総たけべらの会
- 306 『酒直遺跡発掘調査報告書』 酒直遺跡発掘調査会
- 307 『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書』 (財)印旛郡市文化財センター
- 308 『平賀』 平賀遺跡群発掘調査会
- 309 『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 310 『酒々井町伊篠白幡遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 311 『四街道市吉岡遺跡群』 四街道市吉岡遺跡群調査会
- 312 『下総国四街道地域の遺跡調査報告』 中野遺跡調査団
- 313 『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 314 『千葉市辺田山谷遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 315 『駒木台・坊田遺跡発掘調査報告書』 多古町教育委員会
- 316 『新城遺跡・土橋城跡』 多古町教育委員会
- 317 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 318 『飯塚遺跡群発掘調査報告書』第I分冊 八日市場市教育委員会
- 319 『余山貝塚資料図譜』 國學院大學考古学資料館
- 320 『潤井戸西山遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 321 『千原台ニュータウンⅢー草刈遺跡(B区)ー』 (財)千葉県文化財センター
- 322 『下佐野遺跡Ⅱ地区』 群馬県埋蔵文化財事業団
- 1987(昭和62)年
- 323 置田雅昭 「石製玉作り」 『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 324 白石太一郎 「大鷲神社古墳発見の石枕とその提起する問題」 『千葉史学』第10号 千葉歴史学会
- 325 杉山晋作・大久保奈奈・荻悦久 「佐原市禅昌寺山古墳の遺物」 『古代』第83号 早稲田大学考古学会
- 326 『研究紀要11』 (財)千葉県文化財センター
- 327 『房総考古学ライブラリー3 縄文時代(2)』 (財)千葉県文化財センター
- 328 『三輪野山八重塚遺跡C地点』 流山市教育委員会
- 329 中野修秀 「沼南町城山遺跡採集の遺物について」 『竹篋』第3号 北総たけべらの会
- 330 『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 331 『殿平賀向山遺跡』 松戸遺跡調査会
- 332 『栄町殖生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』 (財)千葉県文化財センター
- 333 『昭和61年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 334 『堀之内』 市川市堀之内土地区画整理組合設立準備委員会・市川市教育委員会

II 基礎資料

- 335 『佐倉市腰巻遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—』（財）千葉県文化財センター
- 336 『高崎新山遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 337 『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 338 『千葉県香取郡神崎町太平遺跡発掘調査報告書』 太平遺跡調査会・山武考古学研究所
- 339 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（財）千葉県文化財センター
- 340 『下吹入遺跡群』 下吹入遺跡調査会
- 341 『沓掛貝塚』（財）千葉県文化財センター
- 342 『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター
- 343 『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター
- 344 『念仏塚遺跡—（財）君津郡市文化財センター23集—』（財）君津郡市文化財センター
- 345 『深名瀬島遺跡調査報告書』 富浦町教育委員会
- 1988（昭和63）年
- 346 小林達雄編 『古代史復元3 縄文人の道具』 講談社
- 347 森 浩一編 『シンポジウム 古代翡翠文化の謎』 新人物往来社
- 348 『第2回翡翠と日本文化を考えるシンポジウム—ヒスイは語る越の大地に—』 翡翠と日本文化を考えるシンポジウム実行委員会
- 349 熊野正也 「和泉期の社会と石製模造品について」 『考古学論叢中巻』 齊藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
- 350 河村好光 「漆町遺跡出土碧玉製石製品未成品の検討」 『漆町遺跡Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 351 寺村光晴 「鳥山遺跡の玉作—その様相と意義—」 『茨城県土浦市・鳥山遺跡』 考古学研究室報告甲種第5冊 国士館大学文学部考古学研究室
- 352 女屋和志雄 「群馬県における古墳時代の玉作」 『群馬県の考古学』 群馬県埋蔵文化財事業団
- 353 『東葛上代文化の研究』 古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会編
- 354 『柏市埋蔵文化財調査報告書—日本橋学園遺跡—』 柏市教育委員会
- 355 「香取神社遺跡」 『昭和62年度 市内遺跡群発掘調査報告書』 柏市教育委員会
- 356 『片山古墳群内D地点遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 357 「千葉県松戸市中峠遺跡第10次調査概報」 『下総考古学』10 下総考古学研究会
- 358 『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 359 『昭和62年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 360 『神々廻遺跡群』（株）船橋カントリー倶楽部・（財）印旛郡市文化財センター
- 361 『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 362 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター
- 363 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 佐原市教育委員会
- 364 『大和田坂ノ上遺跡』 大和田坂ノ上遺跡調査会
- 365 『下総町菊水城址主郭部調査報告書』 下総町教育委員会
- 366 『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 367 『花山遺跡—千葉県木更津市—』（財）君津郡市文化財センター
- 368 『宮脇遺跡—（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告第32集—千葉県木更津市』（財）君津郡市文化財センター

- 369 『丹過遺跡確認調査報告書—千葉県木更津市—』 (財)君津郡市文化財センター
- 370 『蓮華寺遺跡—千葉県木更津市—』 (財)君津郡市文化財センター
- 371 『俵ヶ谷古墳群—小浜遺跡群Ⅰ—』 (財)君津郡市文化財センター発掘調査報告第37集、千葉県木更津市 (財)君津郡市文化財センター
- 1989(平成元)年
- 372 藤田富士夫 『玉』考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社
- 373 河村好光 「碧玉製腕飾の成立」 『北陸の考古学Ⅱ—石川考古学研究会々誌第32号』 石川考古学研究会
- 374 大淵淳志 「祭祀遺跡小滝涼源寺を中心とする祭祀遺跡の一考察」 『日本考古学研究所集報』 XI
- 375 西田正規 『縄文の生態史観』UP考古学選書13 (財)東京大学出版会
- 376 『房総考古学ライブラリー4 弥生時代』 (財)千葉県文化財センター
- 377 『柏市埋蔵文化財調査報告書14—林台遺跡—』 柏市教育委員会
- 378 『加地区遺跡群』 流山市教育委員会
- 379 『印旛郡栄町五丹歩遺跡』 千葉県教育委員会
- 380 『長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』 (財)印旛郡市文化財センター
- 381 『長田和田遺跡』 (財)印旛郡市文化財センター
- 382 『昭和63年度 成田市内遺跡群発掘調査報告書』 成田市教育委員会
- 383 「落山遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』 (財)千葉県文化財センター
- 384 『佐倉市向原遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—』 (財)千葉県文化財センター
- 385 渡辺政治 「物井地区出口・鐘塚遺跡出土の垂飾様石製品について」 『研究連絡誌』第24号 (財)千葉県文化財センター
- 386 『千葉県大栄町馬洗城址発掘調査報告書』 大栄町教育委員会
- 387 『千葉市小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 388 『千葉市荒久遺跡(1)』 (財)千葉県文化財センター
- 389 『千葉市荒久遺跡(2)』 (財)千葉県文化財センター
- 390 『千葉市種ヶ谷津遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 391 『三田遺跡発掘調査報告書』 芝山町教育委員会
- 392 喜多圭介 「多古橋川上流河川敷採集の石製塊状耳飾」 『竹筥』第6号 北総たけべらの会
- 393 『銚子市余山貝塚確認調査報告書』 千葉県教育委員会
- 394 『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 395 『市原市文作遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 396 『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡—千葉県木更津市—』 (財)君津郡市文化財センター
- 397 『星谷上古墳・畑沢遺跡(第2次調査)—千葉県君津市—』 (財)君津郡市文化財センター
- 398 『君津市外箕輪遺跡、八幡神社古墳発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 399 『君津市内遺跡群発掘調査報告書—千葉県—大井戸八木古墳群、狐山古墳、狐山砦跡』 君津市教育委員会
- 400 『小滝涼源寺—千葉県安房郡白浜町祭祀遺跡の調査—』 朝夷地区教育委員会
- 1990(平成2)年
- 401 篠原祐一 「石製模造品観察の一視点」 『古代』第89号 早稲田大学考古学会

II 基礎資料

- 402 寺沢知子 「石製模造品の出現」 『古代』第90号 早稲田大学考古学会
- 403 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作」 『海老名本郷遺跡』 本郷遺跡調査団
- 404 原田昌幸 「縄文時代の玉」 『月刊文化財』11月号 第一法規出版株式会社
- 405 土肥 孝 「美・芸術そして独占のはじまり」 同上
- 406 『國學院大學考古学資料館要覧1989-小野良弘氏旧蔵資料-』 國學院大學考古学資料館
- 407 『房総考古学ライブラリー 5 古墳時代(1)』 (財)千葉県文化財センター
- 408 『山崎貝塚周辺遺跡発掘調査報告書1-南新田遺跡-』 野田市教育委員会
- 409 『我孫子市埋蔵文化財報告書第14集-西野場遺跡-』 我孫子市教育委員会
- 410 『成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 成田市教育委員会
- 411 『平成元年度 佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』 佐倉市教育委員会
- 412 『佐倉考古展』 佐倉市教育委員会
- 413 『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』 四街道市教育委員会
- 414 『下総町史 原始古代・中世編 資料集』 下総町
- 415 『小野女台遺跡』 (財)香取郡市文化財センター
- 416 『大栗栗源干潟線埋蔵文化財調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 417 『千葉市浜野川神門遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 418 『銚子市栗島台遺跡発掘調査報告書』 栗島台遺跡発掘調査会
- 419 『東・北長山野遺跡』 北長山野遺跡調査会
- 420 『市原市北旭台遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 421 『市原市草刈貝塚』 (財)千葉県文化財センター
- 422 福田依子 「草刈貝塚出土の小玉について」 『研究連絡誌』第28号 (財)千葉県文化財センター
- 423 『岩川・今泉遺跡』 (財)長生郡市文化財センター
- 424 『浜清水遺跡Ⅱ』 木更津市教育委員会
- 425 『君津市内遺跡群確認調査報告書-千葉県-寺の台遺跡、豊田遺跡、丹後塚古墳、和田古墳』 君津市教育委員会
- 1991(平成3)年
- 426 『古代の装身具・玉-烏山玉作り遺跡とその周辺-土浦市市政施行50周年記念第6回特別展図録』 土浦市立博物館
- 427 山本哲也 「西上総における古墳時代中期の玉作-文脇遺跡の例を中心として-」 『研究紀要V』 (財)君津郡市文化財センター
- 428 飯塚博和 「古代の神まつり~古墳時代中期の野田地方~」 『野田市史研究』第2号 野田市
- 429 原田享二 「伝香取郡神崎町大貫古墳出土の石枕について」 『千葉県立大利根博物館調査研究報告』第4号 千葉県立大利根博物館
- 430 白井久美子 「石製立花と石枕の出現」 『古代探叢Ⅲ』 早稲田大学出版部
- 431 杉山晋作 「石枕・立花と死者の送り」 同上
- 432 『古墳時代の研究』第3巻 雄山閣
- 433 関川尚功 「玉とガラス」 『古墳時代の研究』第5巻 雄山閣
- 434 『八千代市白幡前遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 435 『臼井田小笹台遺跡』 (財)印旛郡市文化財センター

- 436 『四街道市内黒田遺跡群』 (財)千葉県文化財センター
- 437 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』 (財)千葉県文化財センター
- 438 『埋蔵文化財調査(園生貝塚)報告書』 千葉市教育委員会
- 439 『主要地方道成田松尾線Ⅵ』 (財)千葉県文化財センター
- 440 『千葉県銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会
- 441 『銚子市余山貝塚』 (財)千葉県文化財センター
- 442 『第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 (財)市原市文化財センター
- 443 『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 444 『千原台ニュータウンⅣ-中永谷遺跡-』 (財)千葉県文化財センター
- 445 『大多喜町史』 大多喜町
1992(平成4)年
- 446 『桜台遺跡-現地説明会資料-』 野田市教育委員会

II 基礎資料

2. 千葉県内玉類出土遺跡の集成

千葉県内の生産遺跡、集落遺跡、祭祀遺跡など墳墓関係以外の遺構で出土している玉類（石製品）の集成である。表の構成は（1）旧石器時代～縄文時代、（2）弥生時代、（3）古墳時代以降の順で、市町村ごとにまとめた。集成にあたっては各遺跡の発掘調査報告書のほか、「玉作」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』〔文献296〕、『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）～（4）』千葉県教育委員会 1985～1988、『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』千葉県教育庁文化課、県・市町村の各文化財センターの年報等をもとにし、『国立歴史民族博物館研究報告第7集』〔文献271〕を参考にした。また、攻玉遺跡、玉作遺跡、石製模造品製作遺跡等の生産遺跡は「玉作」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』の番号を文献欄に記載した。また整理中の遺跡であっても内容がある程度明らかな遺跡は担当者のご協力により記載したが本報告の際に細部の修正があり得る。

番号は時代ごと、市町村ごとの通し番号である。遺跡名、遺構名、時代、玉類の名称・数、石材の名称は原則として報告書の記載にしたがった。時代は縄文時代を早・前・中・後・晩、弥生時代と古墳時代をそれぞれ前・中・後に分けた。文献番号は「II基礎資料 1. 参考文献目録」の番号と一致する。また、紙面の都合上、各項目の次の用語は省略して記載した。

遺構の種類	工房	石製模造品工房
	製作遺跡	石製模造品製作遺跡
出土玉類	勾玉管（模）	石製模造品勾玉
	大型管玉	大型管玉状石製品
文献	生産□	「玉作」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 1986
	抄○	千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報
	分（1）～（4）	千葉県埋蔵文化財分布地図（1）～（4） 1985～1988
	県年○	（財）千葉県文化財センター年報
	市年○	（財）市原市文化財センター年報
	印年○	（財）印旛郡市文化財センター年報
	君年○	（財）君津郡市文化財センター年報
	山年○	（財）山武郡市文化財センター年報
	長年○	（財）長生郡市文化財センター年報
	香年○	（財）香取郡市文化財センター事業報告

□には遺跡番号、○の中にはそれぞれ調査年度がはいる（西暦の下2桁）

情報量が多いため、遺漏はまぬがれないと思う。あくまで成果の一つの段階であるということをご理解の上、活用して頂きたい。

(1) 旧石器時代～縄文時代 玉類出土遺跡一覧

1. 関宿町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	下根遺跡	木間ヶ瀬字志部前		グリッド	後	垂飾 1	砂岩	206
2	新宿貝塚	木間ヶ瀬			前～中	块状耳飾 1		抄84

2. 野田市

1	北前貝塚	堤台	第1号住居址	竪穴住居	前	垂飾 1	緑泥片岩	162
---	------	----	--------	------	---	------	------	-----

3. 柏市

1	聖人塚遺跡	大青田字聖人塚		グリッド	前?	块状耳飾 3		302
2	矢船遺跡	船戸字矢船		グリッド	前	块状耳飾 1	片岩片	274
3	中山新田Ⅱ遺跡	大青田字八両野		グリッド	前?	块状耳飾 1	蛇紋岩	244

4. 流山市

1	上貝塚遺跡	大字桐ヶ谷字東割		グリッド		块状耳飾未成品		303
				グリッド		丸玉未成品 1		
2	若葉台遺跡	大字桐ヶ谷字南割		グリッド		块状耳飾未成品	粘板岩	303
				竪穴住居	前	白玉 1		
				グリッド		丸玉 1	ヒスイ	
3	江戸川台第Ⅰ遺跡	江戸川台西		グリッド	後	管玉 1	滑石	194
4	若宮第Ⅱ遺跡	加台字若宮				块状耳飾 1	滑石	378
5	町畑遺跡	加台字町畑		グリッド	前	块状耳飾 1	滑石	179
6	鱒ヶ崎貝塚	鱒ヶ崎東福寺境内			後	大珠 1	ヒスイ	21・347
7		八木字小屋		表採	後	大珠 1	ヒスイ	21

5. 我孫子市

1	日秀西遺跡	日秀西		グリッド	後?	勾玉 1	ヒスイ	180
2	下ヶ戸貝塚	下ヶ戸宮前			中～晩	大珠 玉斧 玉		抄82
3	鹿島前遺跡	中峠鹿島前		グリッド	中・後	垂飾 1	滑石	163
4	根戸城遺跡	根戸字荒追	02号住居跡	竪穴住居	前?	块状耳飾 1	滑石	304
5	西野場遺跡	市我孫子	03号住居	竪穴住居	前	管玉 1	ヒスイ?	409

6. 東葛飾郡沼南町

1	前田遺跡	箕輪		表採	中	大珠 1	滑石	305
2	東山遺跡	大井		グリッド	前?	块状耳飾? 1	滑石	330
3	岩井貝塚	岩井字於中山			後～晩	勾玉 1	ヒスイ	8・347

7. 松戸市

1	殿平賀向山遺跡	殿平賀字向山		グリッド	前	块状耳飾 2	蛇紋岩	331
2	登戸Ⅱ遺跡	千駄堀字新堀			前?	块状耳飾 1		抄85
3	中峠遺跡	紙敷中峠	10次住居址	竪穴住居	中	管玉状 1	滑石	357
4	子和清水遺跡	日暮八清水他		貝塚	中	大珠 4 玉斧 2 垂飾 1		278
5	貝の花貝塚	小金原		グリッド	後～晩	垂飾 1	滑石	87
					後～晩	勾玉 1	ヒスイ	
					後	小玉 1	泥岩	

7. 松戸市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
6	紙敷遺跡	紙敷花輪		貝塚	中?	垂飾		分(1)
7	上本郷遺跡	上本郷北台他			中?	大珠 2	ヒスイ	21・抄82
8	寒風台遺跡	寒風台	2号住居址	竪穴住居	前	珧状耳飾 1		228
9	矢深作遺跡	田中新田矢深作			前	珧状耳飾		分(1)
10	ニツ木向台	ニツ木向台			前	珧状耳飾		分(1)
11	通源寺遺跡	和名ヶ谷通源寺				垂飾 管玉		分(1)
12	幸田遺跡	幸田寺台他		グリッド	前	珧状耳飾 3		142・164

8. 印旛郡印西町

1	木苧峠遺跡	浦幡新田木苧峠		グリッド	前	珧状耳飾 1	メノウ	97
2	一ノ作遺跡	草深		グリッド	前?	丸玉 1	滑石	129
3	船尾町田遺跡	船尾町田		グリッド	中?	珧状耳飾 1		245
4	竹袋遺跡(天神台貝塚)	大森字呑内		表採 攻玉遺跡	後~晩	垂飾15 勾玉 3 勾玉未成品 丸玉20 丸玉未成品 白玉47 白玉未成品 刷片	ヒスイほか	生産26 30・406
5	小林遺跡	小林		表採	後~晩	白玉 1 白玉未成品 刷片		406
6		宗浦		表採	中?	玉斧 1		406
7		別所		表採	中?	大珠 1		202

9. 印旛郡栄町

1	龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点	大字竜角寺	第8号住居址	竪穴住居	中	垂飾 1	ヒスイ	208
2	麻生広ノ台遺跡	麻生字広ノ台			中	垂飾	コハク	印年88

10. 印旛郡本埜村

1	五斗蒔遺跡	竜腹寺小字五斗蒔		グリッド		垂飾 1		抄87
---	-------	----------	--	------	--	------	--	-----

11. 成田市

1	殿台遺跡	土屋字殿台		グリッド	晩?	垂飾	ヒスイ	246
2	荒海貝塚	荒海字江地山		グリッド	晩	白玉 1	チャート	241
				表採	晩?	白玉 1	チャート	
					晩	白玉(複数)		346
3	長田雉子ヶ原遺跡	字雉子ヶ原	400土壌	落し穴		珧状耳飾 1 未成品? 1	輝緑凝灰岩	380

12. 鎌ヶ谷市

1	落山遺跡	軽井沢落山		グリッド		珧状耳飾 1	滑石	383
2	中沢貝塚	中沢貝柄山		貝塚	中~後	玉		40

13. 市川市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献		
1	権現原遺跡	北国分町	19号住居跡	竪穴住居	後	垂飾 1	軽石	333		
						垂飾 1	ヒスイ?	165		
2	姥山貝塚	柏井町			中?	玉斧 垂飾 管玉		14		
3	曾谷貝塚 第7地点 第19地点 第20地点 B地点	曾谷	2号住居跡	竪穴住居	中	垂飾? 1	軽石	247		
						グリッド	垂飾? 1	透輝石	333	
			1号住居跡	竪穴住居	後	垂飾? 1	軽石	359		
						グリッド	後	垂飾 1	蛇紋岩	111
								垂飾未成品 1	ヒスイ	284
4	堀之内貝塚	北国分町		表採	中～後	大珠 1	ヒスイ	18		
5	宮久保遺跡	宮久保			前	塊状耳飾 1		284		
6	一ノ谷貝塚	大野町				垂飾? 1	軽石	182		

14. 船橋市

1	金堀台貝塚	豊富町		竪穴住居	後	勾玉 3	ヒスイ	26・112
				表採	後	勾玉 1	ヒスイ	
2	高根木戸貝塚	西習志野字高郷	第67号住居址	竪穴住居	中	大珠 1	ヒスイ	76
					第31号址	小竪穴	中	
				表採	中?	垂飾 1	ヒスイ	88
					中?	垂飾 1	滑石	
	表採	中?	垂飾 1					
3	飯山満東遺跡	飯山満	P-151	土坑	前	管玉状 1		113
			P-165	土坑	前	管玉状 1	砂岩	
			P-170	土坑	前	垂飾 1	滑石	
			P-171	土坑	前	管玉状 1	蛇紋岩	
			P-188	土坑	前	管状 1	蛇紋岩	
				グリッド	前	小玉 1	滑石	
4	下郷後遺跡	藤原町		グリッド	前	塊状耳飾? 1	蛇紋岩	230
				グリッド	前	管玉 1	ヒスイ	
5	海老ヶ作貝塚	大穴町		グリッド	中?	垂飾品未成品 1		114
				グリッド	中?	塊状耳飾 1	ヒスイ	

15. 印旛郡白井町

1	一本桜遺跡	十余一字一本桜		表採	中?	玉斧 1	緑色片岩	100
				グリッド	中?	玉斧 1	蛇紋岩	
2	谷田木曾地遺跡	谷田字木曾地		グリッド	前?	塊状耳飾 1	滑石	248
3	復山谷遺跡	復山谷		グリッド	前?	塊状耳飾? 2		210

16. 八千代市

1	佐山貝塚	佐山字大山台		表採		塊状耳飾 1		406
2	神野貝塚	神野字築地		表採 攻玉遺跡?	後～晩	垂飾 3 垂飾未成品 勾玉 2 丸玉 11 白玉 17 原石		406

17. 印旛郡印旛村

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	船作第一遺跡	船作		貝塚		玉斧 1	ヒスイ	抄80
2	戸ノ内遺跡	戸ノ内		貝塚	後～晩	装身具		抄80

18. 佐倉市

1	向原遺跡	神門字向原		グリッド	前～中	垂飾 1	コハク	384
2	井野長割遺跡	井野字長割		グリッド	晩	白玉 2		102
3	曲輪ノ内遺跡	江原新田				勾玉		分(1)
4	太田用替遺跡	太田用替			中?	大珠 1	ヒスイ	187
5	馬渡山王遺跡	馬渡山王		表採	中?	勾玉 1		分(1)
6	岩富上ノ袖東遺跡	岩富上ノ袖		表採		勾玉 1		分(1)
7	草刈堀込遺跡	坂戸字草刈堀込		表採	後～晩	垂飾 3 勾玉 2 勾玉 1 丸玉 1	蛇紋岩 蛇紋岩 ヒスイ 蛇紋岩	250
8	松山遺跡	生谷字松山		表採	中? 中?	大珠 1 垂飾 4	ヒスイ	406
9	神楽場遺跡	下志津字志津橋他		表採 攻玉遺跡	中～晩	垂飾16 垂飾未成品 勾玉 2 丸玉21 白玉 5 剝片 原石	ヒスイ他	406
10	吉見台遺跡	吉見字秋下他			後～晩	勾玉		412
11	江原台遺跡	江原台		表採		垂飾 2 丸玉		412

19. 印旛郡酒々井町

1	堀込台遺跡	堀込		表採		垂飾 1	ヒスイ	406
---	-------	----	--	----	--	------	-----	-----

20. 印旛郡富里町

1	中沢高野台遺跡	中沢		表採	後	垂飾 1 垂飾 1 垂飾 1 勾玉 1 勾玉 1 丸玉 2 丸玉 4	ヒスイ 蛇紋岩 緑泥片岩 ヒスイ 滑石 ヒスイ 滑石	25
---	---------	----	--	----	---	--	--	----

23. 四街道市

1	軽沢遺跡	吉岡字軽沢	20号住居址	竪穴住居	前	帛状耳飾 1	滑石	311
2	中ノ尾余遺跡	吉岡字中ノ尾余		グリッド	前～中	垂飾 1	滑石	311
3	八木原貝塚	千代田	8号住居址	竪穴住居	後	勾玉 1	ヒスイ	83
4	御山ー1遺跡	物井字御山		土壌	晩	白玉372	滑石	327
				グリッド	晩	垂飾 1 管玉 1	滑石 滑石	
5	池花南遺跡	内黒田字池花		グリッド	晩	勾玉 2	軟玉	436
					晩	白玉 1	軟玉	

23. 四街道市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
6	出口・鐘塚遺跡	物井字出口・鐘塚			旧石器 旧石器	垂飾1 垂飾1	玄武岩 砂岩	385

25. 佐原市

1	綱原屋敷跡遺跡	多田字綱原		グリッド		垂飾1(転用)	滑石	437
2	磯花(上谷津)遺跡	大根字磯花			中〜後	大珠1 玉1	ヒスイ コハク	198
3	片野遺跡	片野			中?	大珠1	ヒスイ	実見
4		大戸白幡			中?	大珠1	ヒスイ	8

26. 香取郡下総町

1				表採		大珠1		414
---	--	--	--	----	--	-----	--	-----

28. 香取郡小見川町

1	清水堆遺跡	虫幡字清水堆				勾玉1 小玉1		抄85
2	木内明神貝塚	木内字宮前				块状耳飾1		57・241
3	白井通路貝塚	白井字通路			中?	大珠1		241
4	白井雷貝塚	白井字雷			中	块状耳飾1		11・20
5	阿玉台貝塚	阿玉台字千堂			中	大珠1	大理石	1・66
6	天神後遺跡	竜谷字桐ヶ谷		包含層	前〜中	块状耳飾1		県年90

30. 香取郡大栄町

1	不明	久井崎		散布地		玉1	コハク	192
2	南敷城跡	南敷字高野		散布地		垂飾1(転用)	メノウ	339

32. 香取郡山田町

1	向井油田貝塚	向井たらの木			中	大珠1	ヒスイ	12
---	--------	--------	--	--	---	-----	-----	----

35. 千葉市

1	子和清水遺跡	三角町				块状耳飾1		抄85
2	園生貝塚	長者山				白玉1	滑石	438
3	すすき山遺跡	源町すすき山			中〜後	勾玉1		84
4	渡戸台北遺跡	源町渡戸台		散布地		管玉1		84
5	加曾利貝塚	加曾利町			中〜後	勾玉1 有孔垂飾1 垂飾3 垂飾1	ヒスイ ヒスイ	51・54・67 ・78
6	広ヶ作遺跡	小倉町広ヶ作			中?	垂飾未成品		256
7	荒屋敷貝塚	貝塚町畑中			中	大珠1	ヒスイ	155
8	蔵立貝塚	千城台西	10号住居跡	竅穴住居	中	垂飾1	コハク	266
9	城の腰遺跡	大宮町		グリッド	中	大珠1		167
10	野呂山田貝塚	野呂町山田		地点貝塚	中〜晩	垂玉1	ヒスイ	32
11	築地台貝塚	平山町向塚		馬蹄形貝塚	中〜晩	大珠1 玉1	ヒスイ	156
12	中野僧御堂遺跡	中野町		表採	中〜後	垂飾1	ヒスイ	146
13	有吉北貝塚	有吉町	SB-173 SB-190 SB-195	竅穴住居 竅穴住居 竅穴住居	中 中 中	棒状石製品1 大珠1 不明1	ヒスイ	実見

35. 千葉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
13	有吉北貝塚	有吉町	SK-166	小竪穴	中	玉1	コハク	実見
			SK-289B	小竪穴	中	玉1	コハク	
			SK-289B	小竪穴	中	玉1	コハク	
			SK-519	小竪穴	中	玉1	コハク	
			II-28	斜面具塚	中	玉1	コハク	
			II-30	斜面具塚	中	玉1	コハク	
			II-35	斜面具塚		垂飾1		
			II-50	斜面具塚	中	玉1	コハク	
			ト-24	斜面具塚		珠状耳飾		
			ニ-21	斜面具塚		管玉		
			ニ-28	斜面具塚		垂飾1		
			ニ-29	斜面具塚		珠状耳飾1		
			ワ-38	斜面具塚		珠状耳飾1		
			ワ-54	斜面具塚	中	大珠1		
			ワ-69	斜面具塚	中	不明1	コハク	
			D3	グリッド	中	大珠1	ヒスイ	
			不明	管玉1				
			不明	珠状耳飾1				
14	五味ノ木遺跡	萩台町		表採		垂飾1(転用)	緑色片岩	313
15	小金沢古墳群	小金沢町堂面			前	珠状耳飾		抄87
16	バクチ穴遺跡	大金沢町	15号址	土坑	前	珠状耳飾2	滑石	234
			33-B号址		前	石製品1(転用)		
17	南河原坂第5遺跡	小食土町			早~中	珠状耳飾1		抄82
18	東大野第3遺跡	大木戸町		包含層	早	垂飾1 管玉状石製品1		県年90
19	浜野川神門遺跡	南生実町		包含層		白玉1 玉1	安山岩 コハク	417
20	木戸先遺跡	下田町北先				珠状耳飾1		分(2)
21	辺田山谷遺跡	辺田町				珠状耳飾1		314
22	山ノ台(宮ノ台)遺跡	野呂町		包含層		珠状耳飾1		分(2)
23	多部田貝塚	多部田			後~晩	原石	コハク	266

36. 山武郡芝山町

1	小池麻生遺跡	小池字麻生	J-1号住居址	竪穴住居	中	大珠1		136
2	殿部田遺跡	殿部田厚朴台		表採	中~後	小玉1	コハク	266

37. 香取郡多古町

1	空港予定地内No11	鎌田字兵衛山				珠状耳飾1		抄88
2		飯笹		表採		珠状耳飾1	玉髓	392

38. 八日市場市

1	大浦貝塚	大浦字両家				珠状耳飾 垂飾小玉		46
---	------	-------	--	--	--	--------------	--	----

40. 海上郡飯岡町

1	上永井遺跡	上永井		表採	中	原石1	コハク	266
---	-------	-----	--	----	---	-----	-----	-----

41. 銚子市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	粟島台遺跡	南小川町		表採(攻玉遺跡)	前~後	大珠 1 丸玉 2 小玉 1 玉未成品 9	コハク ヒスイ質 コハク コハク	生産43 15・216 ・404
			第7グリッド		中?	玉未成品 3	コハク	418
			第11グリッド		中?	玉未成品10 原石・剝片 6 砕片37	コハク コハク コハク	
			90C-2号住居址	攻玉工房?	中	剝片 8	コハク	440
2	荒野台遺跡	台町		散布地	中?	玉 剝片	コハク コハク	266
3	余山貝塚	余山町		表採(攻玉遺跡)	後~晩	玉 2 勾玉 白玉 管玉 丸玉 小玉 1	コハク	266・319
			008・028遺構	包含層	後~晩	玉 7 玉 9 未成品 2 未成品 3 原石 2	ヒスイ 蛇紋岩 ヒスイ 蛇紋岩 蛇紋岩	441
4	藤木遺跡	台町、西小川町		包含地		玉	コハク	分②

43. 山武郡横芝町

1	山武姥山貝塚	姥山字台	Z地点	包蔵地	後~晩	異形勾玉 1 白玉 1 管玉 1		121・394
			1T-B	竪穴住居	晩	玉未成品 1 白玉 1	滑石 ヒスイ	
2	東・北長山谷遺跡	長倉字東長山谷・北長山谷	171号土壌	土壌	中	垂飾品 1	滑石	419
			50号土壌	土壌	中	垂飾品 1	コハク	
			D-19-16		中	垂飾品 1	滑石	
			E-20-11		中	垂飾品 1	滑石	
			D-20-15		中	垂飾品 1	滑石	
		D-18-3		中	大珠 1	ヒスイ		

49. 東金市

1	妙経遺跡	松之郷		グリッド	後	垂飾 1	ヒスイ	実見
---	------	-----	--	------	---	------	-----	----

50. 山武郡大網白里町

1	沓掛貝塚	金谷郷	4C-48	グリッド	後~晩	勾玉 1	ヒスイ	341
			4C-72	グリッド	後~晩	垂飾 1	滑石	
			29-41	グリッド	後~晩	白玉 1	ヒスイ	

52. 市原市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	椎津塚谷遺跡	椎津字塚谷				玦状耳飾		抄74・75
2	潤井戸西山遺跡	潤井戸字西山	X-5号路	路跡		玦状耳飾1 白玉2	蛇紋岩 輝岩	320
3	草刈遺跡B区	草刈字下切付他	L56トレンチ	トレンチ	中	大珠1	ヒスイ (蛇紋岩?)	321
			C88-12グリッド	包含層	中	大珠1	ヒスイ (蛇紋岩?)	
			178A号住居址	竪穴住居	中	垂飾品1	蛇紋岩	
			139号住居址	竪穴住居	中	垂飾品1	滑石	
			177J号住居址	竪穴住居	中	垂飾品1	凝灰岩	
4	草刈遺跡H区	草刈	188号址	竪穴住居		大玉1 玉2	コハク コハク	422・実見
5	武士遺跡	福増字向台	グリッド	攻玉遺跡	晩	白玉25 白玉未成品10 原石16 勾玉1 垂飾1	滑石 滑石 滑石 滑石	県年89 実見
			SB-415	土坑	後～晩	垂飾1	ヒスイ	
			SA-439		後～晩	垂飾1		
			表採		中～晩	垂飾3 大珠1 大珠1 大珠1	滑石 ヒスイ 滑石 黒色頁岩	
6	西広貝塚	西広字上ノ原	D4区	包含層	後	勾玉2 管玉状垂飾1 垂飾1 白玉3 管玉2		148
7	祇園原貝塚	根田	T1-14G	包含層	後	小玉1	ヒスイ	238
8	北旭台遺跡	磯ヶ谷字北旭台				玦状耳飾2	滑石?	420
9	萩之原遺跡	高根			中	玉	コハク	266
10	土字遺跡No.100	土字	G12グリッド	包含層		玦状耳飾	碧玉	172
11	山田橋猪の海道貝塚	山田橋字表通		包含層	後	垂飾3	蛇紋岩?	実見

59. 長生郡一宮町

1	一宮貝塚				後	垂飾		分(3)
---	------	--	--	--	---	----	--	------

60. 袖ヶ浦市

1	山野貝塚	飯富字山野	C85グリッド	貝塚	後～晩	垂飾1	緑泥片岩	93
2	山王台遺跡	神納字山王台				垂飾		君年91

61. 木更津市

1	祇園貝塚	祇園字上深作		貝塚	中～後	垂飾	片岩	71
---	------	--------	--	----	-----	----	----	----

62. 君津市

1	豊田遺跡	豊田田菅間田字上ノ台	南4T	包含層	後～晩	白玉1	蛇紋岩?	425
2	関尾天神台遺跡			包含層		丸玉 平玉		分(3)
3	城山遺跡					小玉		分(3)

63. 富津市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	富士見台貝塚	湊字富士見台		貝塚	前～後	丸玉 平玉		君年90
2	川島遺跡	西大和田字川島				垂飾		君年91

66. 夷隅郡大多喜町

1	堀之内上の台遺跡	堀之内字上の台	D-IIグリッド	包含層	晩	甕玉未成品 1	滑石	174
			F-IIグリッド	包含層	晩	甕玉未成品 1	滑石	
				表採	晩	甕玉 1 白玉未成品 3 原石	滑石	
			C-IIIグリッド	包含層	晩	白玉未成品 1	滑石	
			D-IIIグリッド	包含層	晩	白玉 1	滑石	
			D-IIグリッド	包含層	晩	白玉 1	滑石	
			第1号住居址	攻玉工房?	晩	白玉 1 白玉未成品 1	滑石	
			H-IIグリッド	包含層	晩	白玉未成品 1	滑石	
2	会所第1遺跡	会所字部名沢		包含層		块状耳飾		分(3)
3	老川遺跡			包含層	中～後	勾玉		分(3)

67. 夷隅郡大原町

1	新田野貝塚	新田野字根畑		貝塚	中 前	块状耳飾 4 玉 2	滑石	124
---	-------	--------	--	----	--------	---------------	----	-----

69. 勝浦市

1	長者ヶ台遺跡	松部字長者ヶ台		攻玉遺跡	前	块状耳飾 块状耳飾未成品 不定形玉 小玉 丸玉未成品 剥片	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	108・125 実見
---	--------	---------	--	------	---	--	----------------------------	---------------

74. 安房郡富浦町

1	深名瀬島遺跡	深名字瀬畑	8号住居址	竪穴住居	中	大珠 1		345
			26号住居址	竪穴住居	中	大珠 1		
			27号住居址	竪穴住居	中	大珠 1		
			B6Cグリッド	包含層	中	大珠 1		

76. 安房郡丸山町

1	加茂遺跡	加茂字神門	C区	包含層	中～後	块状耳飾 1	滑石	16
				包含層	中～後	佩玉(垂飾) 1	滑石	
				表採	中～後	块状耳飾 1	滑石	

78. 館山市

1	鉾切洞窟遺跡	浜田字上珊瑚	Aトレンチ	包含層	中～後	垂飾 1	蠟石	24
2	西黒土遺跡	犬石字西黒土			早～前	耳環片 玉	蛇紋岩 蛇紋岩	

79. 安房郡千倉町

1	大溝遺跡	南朝夷字池ノ谷	Aトレンチ	包含層		块状耳飾 1		201
			Cトレンチ	包含層		勾玉 1		

(2) 弥生時代

玉類出土遺跡一覧

4. 流山市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	加村台遺跡	加	Y-2号址	竪穴住居	中	垂飾1		179

11. 成田市

1	関戸遺跡	関戸		グリッド	中～後	勾玉1		231
---	------	----	--	------	-----	-----	--	-----

16. 八千代市

1	権現後遺跡	萱田町字権現後	D137号遺構	竪穴住居	後	勾玉1	滑石	249
2	白幡前遺跡	萱田町字白幡前他	D099	竪穴住居	後	勾玉1	砂岩	434

18. 佐倉市

1	大崎台遺跡	六崎字大崎台	第227号住居址	竪穴住居	後	勾玉1		287
			第431号住居址	竪穴住居	中	勾玉3 管玉1	滑石 碧玉	309
2	飯合作遺跡	下志津字飯合作	Y10	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	153

35. 千葉市

1	房地遺跡	宮野木			後	勾玉5		抄85
2	星久喜遺跡	星久喜		木材集積 遺構		管玉1 管玉未成品	碧玉 コハク	92
3	田向南遺跡	加曾利町田向	10号住居跡	竪穴住居	後	管玉6 勾玉3	ヒスイ	257
4	城の腰遺跡	大宮町	153号跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	167
5	中野台遺跡	千葉寺町中野台		竪穴住居	後	管玉1	緑色凝灰岩	実見

37. 多古町

1	新城遺跡	西古内字新城	26号住居跡	竪穴住居	中	管玉未成品1	緑色凝灰岩	316
---	------	--------	--------	------	---	--------	-------	-----

41. 銚子市

1	佐野原遺跡	春日町	6号住	竪穴住居		管玉1	碧玉	120
			8号住	竪穴住居		勾玉2	コハク	

52. 市原市

1	御林跡遺跡	加茂字御林跡				管玉 玉類		抄78
2	椎津茶ノ木遺跡	椎津字茶ノ木	63号住居跡	竪穴住居	後	勾玉2 玉4 破片4	コハク コハク コハク	442
3	原遺跡	姉崎字原	第4号住居址	竪穴住居	後	平玉(白玉)1	ヒスイ	262
4	菊間遺跡	菊間字北野	第12号住居址	竪穴住居	後	管玉1		106
			第36号住居址	竪穴住居	中	管玉1	碧玉質	
			第51号住居址	竪穴住居	中	管玉1	頁岩質	
5	大厩遺跡	大厩	Y-19号址	竪穴住居	後	勾玉1	滑石片岩	107
			Y-41号址	竪穴住居	中	勾玉(残欠)1	碧玉質	
6	草刈遺跡F区	草刈	209-C号址			管玉8	緑色凝灰岩	実見
7	草刈遺跡H区	草刈	268号址			管玉2	コハク	実見

51. 茂原市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	宮ノ台遺跡	綱島字宮ノ台		表採	中	垂飾 1 勾玉 1 白玉 2		376

61. 木更津市

1	マミヤク遺跡	小浜字マミヤク	81号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1	ヒスイ	396
			101号住居跡	竪穴住居	後	管玉片 1	碧玉	

63. 富津市

1	大明神原遺跡	岩瀬字大明神原	1号住居址			管玉 1	碧玉	200
---	--------	---------	-------	--	--	------	----	-----

(3) 古墳時代

玉類出土遺跡一覧

2. 野田市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	ニッ塚古墳群	ニッ塚	18号住居址	竪穴住居	前	勾玉(模)1	蛇紋岩	273
			25号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模)1	蛇紋岩	
2	南新田遺跡	山崎	第3号住居址	竪穴住居	前	管玉1		408
			第4号住居址	竪穴住居	前	管玉1		
3	尾崎梨ノ木遺跡	尾崎字梨ノ木	第1号住居址	工房?	中	剣形未成品? 1 紡錘車未成品1		301
			第2号住居址	工房?	中	未成品(複数) 剥片(複数) 紡錘車2		
			第3号住居址	工房?	中	未成品(複数) 剥片(複数)		
				グリッド	古墳	紡錘車未成品1		
4	上灰毛遺跡	上灰毛	2号住居址	竪穴住居	中	剣形品2	蛇紋岩	428
				祭祀跡	中	白玉5,740 白玉未成品1 勾玉5 管玉3 剣形品16 剣形品5 有孔円板6 有孔円板1 有孔円板1	貴蛇紋岩 滑石 蛇紋岩 かんらん岩 蛇紋岩 蛇灰岩 滑石	
5	桜台遺跡	桜台		製作遺跡	前	勾玉 管玉 台形様石製品		446

3. 柏市

1	尾井戸遺跡(Ⅰ)	花野井尾井戸			古墳	勾玉		分1)
2	尾井戸遺跡	大室他	第1号住居址	竪穴住居	中	剣形品1		178
			第6号住居址	竪穴住居	後	勾玉2	滑石	
3	鴻ノ巣遺跡	鴻ノ巣他	第4号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	96
			第6号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
4	日本橋学園遺跡	天神前	第7号住居址	竪穴住居	中	剣形品1	頁岩	354
			第8号住居址	竪穴住居	中	管玉1	凝灰岩	
5	林台遺跡	逆井字屋茂以田	第83号住居址	竪穴住居	中	剣形品1		377
6	香取神社遺跡	花野井字西高野	第1号住居址	竪穴住居	中	勾玉1	蛇灰岩	355
						管玉1	蛇灰岩	
						有孔円板1	蛇灰岩	
7	北柏遺跡	鴻ノ巣他	4号址	竪穴住居	中	有孔円板1		86
			6号址	竪穴住居	中	有孔円板1		
8	戸張城山遺跡(Ⅱ)	柏		グリッド	古墳	勾玉1	硅岩	13
9	殿内遺跡	高田字西下の台	第4号住居址	竪穴住居	中	勾玉1	蛇紋岩	193
10	松ヶ崎(Ⅱ)遺跡	松ヶ崎字後田		表探		有孔円板1	滑石	226
11	中馬場遺跡3次	根戸中馬場	19号住居址	竪穴住居	8C	甕玉1		128
			58号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
12	船戸遺跡	船戸小船				剣形品1		分1)

4. 流山市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	町畑遺跡	加台字町畑	第13号住居址	竪穴住居	9C	白玉1		179
2	三輪野山八重塚遺跡	三輪野山八重塚	2号住居跡	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	328

5. 我孫子市

1	日秀西遺跡	日秀西	002A住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1		180
			003A住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			010住居跡	竪穴住居	後	切子玉1		
			011住居跡	竪穴住居	後	白玉2		
						管玉1	碧玉	
			012住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			015A住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			015B住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			017住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			019住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1		
			029B住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	滑石	
			031D住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			031F住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
						勾玉1		
			039住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	メノウ	
			041D住居跡	竪穴住居	後	白玉2		
			045F住居跡	竪穴住居	後	切子玉1	水晶	
051住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	滑石				
061住居跡	竪穴住居	後	白玉1					
064住居跡	竪穴住居	後	白玉1					
080C住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	粘板岩				
080D住居跡	竪穴住居	後	管玉1	水晶				
			管玉1	碧玉				
082D住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	滑石				
089A住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉				
			グリッド	古墳	有孔円板1			
2	別当地遺跡	中里字別当地	第2号跡	竪穴住居	後	玉2	珪質岩	276
			第3号跡	竪穴住居	後	勾玉1		207
3	大久保遺跡	中峠字大久保		グリッド	古墳	管玉1 有孔円板1	滑石	275
4	我孫子中学校校庭遺跡	高野山	01号住居跡	竪穴住居	前	勾玉1	滑石	277
5	根切遺跡	根戸根切	第1号住居跡	竪穴住居	中	白玉1 勾玉1	滑石 滑石	353
6	北久保作遺跡	中里字北久保作	05号跡	竪穴住居	8C	丸玉1		276

6. 東葛飾郡沼南町

1	城山遺跡	岩井字於中山		製作遺跡?	古墳	白玉未成品 有孔円板2	滑石 滑石	329
2	片山古墳群B	片山			古墳	模造品		分(1)
3	片山古墳群D	片山	003号跡	竪穴住居	前	有孔円板1		356
			017号跡	竪穴住居	前	管玉1	碧玉	
4	経塚遺跡	片山字経塚	1号住居址	竪穴住居	前	原石	碧玉	227
5	東山遺跡	大井	002	竪穴住居	後	白玉1	細粒凝灰岩	330
			007	竪穴住居	後	白玉1	細粒凝灰岩	
白玉1 丸玉1	滑石 滑石							

6. 東葛飾郡沼南町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	東山遺跡	大井	010	竪穴住居	後	丸玉 1	滑石	330
			019	竪穴住居	後	白玉 1 勾玉 1	滑石 細粒凝灰岩	
			032	竪穴住居	中	白玉 1	滑石	
			036	竪穴住居	後	丸玉 2	滑石	
			040	竪穴住居	後	白玉 1 丸玉 2	緑色凝灰岩 滑石	
			043	竪穴住居	後	白玉 1 丸玉 1	滑石 滑石	
			044	竪穴住居	後	丸玉 1	滑石	
			049	竪穴住居	後	丸玉 1	滑石	
			054	竪穴住居	後	勾玉未成品? 1	滑石	
				グリッド	後?	白玉 1	滑石	
6	沼南台遺跡 No.7 地点 No.6 地点 No.8 地点	大津ヶ丘	第 1 号住居跡	竪穴住居	中	白玉 剣形品	滑石 滑石	353
			第 2 号住居跡	竪穴住居	中	剣形品	滑石	
			第 6 号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 有孔円板	滑石	

7. 松戸市

1	殿平賀向山遺跡	殿平賀字向山	7号住居址	工房?	中	勾玉未成品 1 有孔円板 1	滑石 蛇紋岩	331
			8号住居址	竪穴住居	後	白玉 1 勾玉(模) 1 紡錘車 1	滑石 滑石	
2	新田前遺跡	紙敷新田前			中	剣形品	滑石	分(1)
3	大谷口遺跡	大谷口本城	4号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	62
				グリッド		白玉 1	滑石	
4	幸田遺跡	幸田寺台他		グリッド	古墳	有孔円板 4	滑石	142

8. 印旛郡印西町

1	船尾町田遺跡	船尾字町田	30A号住居跡	竪穴住居	中	有孔円板 2		245
2	天神台遺跡	大森字呑内		表採(製作遺跡?)	古墳	白玉 勾玉(模) 剣形品 有孔円板	滑石 滑石 滑石 滑石	406
3	天神台遺跡B	大森字下宿				有孔円板		抄85
4	大竹遺跡	大竹坪台		表採(製作遺跡?)		勾玉(模) 勾玉(模)未成品 管玉	滑石 滑石 滑石	406
5	向井新田遺跡	向井新田		竪穴住居	前	垂飾 1		272

9. 印旛郡栄町

1	酒直遺跡第 2 地点	酒直	015号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	306
			029号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			032号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			036号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			039号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			050号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			054号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			067号住居址	竪穴住居	後	管玉 2		
			070号住居址	竪穴住居	後	チキリ 1	滑石	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	酒直遺跡第3地点	酒直	005号住居址	竪穴住居	後	白玉1 白玉未成品1	滑石 滑石	306
			007号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			008号住居址	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			011号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			017号住居址	竪穴住居	後	剣形品? 1	滑石	
			021号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			035号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			043号住居址	工房	中	白玉未成品 剥片	滑石 滑石	
			045号住居址	竪穴住居	後	管玉	碧玉	
			046号住居址	竪穴住居	後	白玉2 有孔円板1	滑石 滑石	
			067号住居址	竪穴住居	後	白玉2 丸玉1 勾玉1	滑石 滑石 滑石	
			071号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			080号住居址	竪穴住居	後	有孔円板	滑石	
084号住居址	竪穴住居	後	白玉1 有孔円板1	滑石 滑石				
3	前原Ⅰ遺跡	大字竜角寺字前原	第3号住居跡	工房	中	白玉未成品 剣形品1 有孔円板1 板状研磨品 剥片 原石	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産25 280
			第4号住居跡	工房	中	白玉未成品 剥片 原石	滑石 滑石 滑石	
4	前原Ⅱ遺跡	大字竜角寺字前原		表採	中	剣形品1		280
5	向台遺跡	大字酒直字向台	SI16	竪穴住居	後	白玉1	滑石	280
6	大畑Ⅰ遺跡	大字竜角寺字大畑	SI7	竪穴住居	後	白玉1	滑石	280
			SI41	竪穴住居	後	チキリ1	滑石	
			SI45	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			SI46	竪穴住居	後	チキリ1 篋1	滑石	
			SI51	竪穴住居	後	白玉5 勾玉(模)1	滑石 滑石	
			SI54	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	
			SI56	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			SI60	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
7	大畑Ⅰ-2遺跡	大字竜角寺字大畑	506号跡	竪穴住居	後	丸玉1 有孔円板1	凝灰岩 滑石	281
			507号跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
8	龍角寺ニュータウン 遺跡群No.4地点	大字竜角寺	第21号住居址	工房	中	白玉 石屑 紡錘車2	滑石 滑石	生産24 208
				グリッド		剣形品1	滑石	

9. 印旛郡栄町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
9	龍角寺遺跡	大字竜角寺		玉作遺跡?	古墳	原石	緑色凝灰岩	生産23
10	麻生天福遺跡	大字麻生字天福			古墳	勾玉		分1)
11	五丹歩遺跡	大字竜角寺字五丹歩		竪穴住居	後?	有孔円板未成品 銅片	滑石	195
			003号跡	竪穴住居	中	勾玉		379
12	殖生郡衙跡	大字竜角寺字台内			古墳	鏡形模造品1 鏡形未成品1	滑石	332

11. 成田市

1	野毛平浅間台遺跡	野毛平字浅間台	002号跡	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板1	滑石 滑石	184
2	野毛平高台遺跡	野毛平字高台	007号跡	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	184
			011号跡	竪穴住居	中	剣形品2	滑石	
			015号跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			030号跡	竪穴住居	9C	勾玉1		
			032号跡	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	
			036号跡	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
			037号跡	竪穴住居	中	板状品1	粘板岩質	
			039号跡	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	
			042号跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			043号跡	竪穴住居	後	白玉1 勾玉(模)1	滑石 滑石	
			051号跡	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
101号跡	土坑	後	勾玉1 有孔円板1	滑石 滑石				
3	長田雉子ヶ原遺跡	字雉子ヶ原		グリッド		剣形品1	滑石	380
4	桐ヶ崎遺跡	芦田桐ヶ崎	第1号住居址	竪穴住居	後	石剣模造品1	滑石	282
			第7号住居址	竪穴住居	後	白玉1 有孔円板1	滑石 滑石	
5	畑ヶ田花山遺跡	畑ヶ田字花山	D007号	竪穴住居	後	白玉3	滑石	358
6	宗吾2丁目遺跡	宗吾	第1号住居	竪穴住居	後	管玉1 切子玉2		382
7	芦田台遺跡	芦田字台		溝		有孔円板1		283
8	長田和田遺跡	字長田和田	55号住居址	竪穴住居	中	白玉3 勾玉(模)2 剣形品1	緑色岩 滑石 滑石	381
9	磯部遺跡	磯部		工房	後	模造品		生産19
10	水掛遺跡	水掛		表採(製作遺跡)	古墳	剣形品1 剣形品未成品		生産20
11	南向野遺跡	飯田町字南向野			後?	模造品		抄84
12	井森戸遺跡	東三里塚字岩之台				管玉		分1)
13	東方低地遺跡	東金山字東方				有孔円板		分1)
14	城ノ越遺跡	台方字城ノ越			古墳	模造品		分1)
15	郷部遺跡	郷部石橋台		表採	古墳	勾玉1	ヒスイ	197
16	西向野I遺跡	飯田町字西向野		祭祀遺跡	中	剣形品 有孔円板		印年89
17	朋護台遺跡	朋護台	070号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1		410
			081号住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	滑石	
			150号住居跡	竪穴住居		勾玉1	滑石	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
17	踰蔵台遺跡	踰蔵台	227号住居跡	竪穴住居		有孔円板 1		410
			240号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1		
			258号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1	滑石	
			259号住居跡	竪穴住居	8 C	丸玉 1	滑石	
			482号住居跡	竪穴住居		丸玉 1	滑石	
			621号住居跡	竪穴住居	8 C	丸玉 1	滑石	
18	石塚遺跡 公津原Loc.20	山口字船塚台他	041A号址	工房	中	白玉未成品 8 剣形品 1 板状品 8 剥片等127	滑石 滑石 滑石 滑石	生産18 196
			042号址	工房	中	白玉17 白玉未成品164 有孔円板 6 有孔円板未成品 2 勾玉 1 板状品49 剥片等779	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			045号址	工房	中	白玉19 白玉未成品187 有孔円板 7 有孔円板未成品 3 剣形品 3 剣形品未成品 2 勾玉 2 板状品 9 剥片等291 母岩 9 不明 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			049A号址	工房	中	管玉 2 白玉16 白玉未成品37 有孔円板 1 有孔円板未成品 2 剣形品 2 剣形品未成品 3 紡錘車未成品 1 板状品10 剥片等390 母岩 2	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			050号址	工房	中	白玉46 白玉未成品735 有孔円板 5 有孔円板未成品 7 剣形品 1 剣形品未成品18 小型円板 4 勾玉未成品 3 板状品110 剥片等7944 母岩35 不明 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	

11. 成田市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
18	石塚遺跡 公津原Loc.20	山口字船塚台他	051号址	工房	中	白玉 6 白玉未成品21 有孔円板未成品 3 剣形品 3 剣形品未成品 3 小型円板未成品 4 板状品17 剥片等352	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産18 196
			067号址	工房	中	白玉66 白玉未成品248 有孔円板 2 有孔円板未成品 1 剣形品未成品 1 小型円板 2 板状品75 剥片等1536 母岩 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			070号址	工房	中	管玉 3 白玉44 白玉未成品936 有孔円板 7 有孔円板未成品16 剣形品未成品14 小型円板未成品 3 勾玉未成品 8 板状品101 剥片等9170 母岩29 不明 2	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			079号址	工房	中	管玉 1 剥片21	滑石 滑石	
19	八代玉作遺跡	八代字花内	八代第 1 号址	玉作	中?	管玉未成品 2 剥片29 管玉未成品 5 平玉未成品 2 板状品 2 剥片 6 剥片 1 剥片 2	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石 滑石 メノウ 石英	生産17 94
			八代第 2 号址	竪穴住居	中?	管玉未成品 2 紡錘車 1	緑色凝灰岩 滑石	
			八代第 3 号址	玉作	中?	管玉未成品66 勾玉未成品 1 剥片等581 管玉未成品 1 白玉 2 板状品 4 剥片等36	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石 滑石	
			八代第 5 号址	竪穴住居	中?	管玉未成品 1	緑色凝灰岩	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献			
19	八代玉作遺跡	八代字花内	八代第6号址	玉作	中?	管玉未成品 勾玉未成品 管玉未成品 白玉未成品 板状品	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石	生産17 94			
	八代遺跡 公津原Loc.39	八代字花内他	003号址	玉作	前	管玉未成品23 剥片等128 残核12 管玉未成品3 剥片等56	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石	生産17 196			
			005号址	玉作	前	管玉未成品9 剥片等7 管玉4 管玉未成品3 剥片等18	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石				
			007号址	玉作	前	管玉未成品10 剥片2 管玉未成品1	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石				
			009号址	玉作	前	管玉未成品5 剥片64	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩				
			010号址	玉作	前	管玉未成品18 大型管玉未成品1 剥片5 残核1 母岩2 板状品1 剥片1	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石				
			014号址	玉作	前	管玉未成品4 大型管玉未成品1 剥片5 剥片2	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石				
			020B号址	玉作	前	剥片18 剥片1 管玉未成品3 板状品1 剥片5	緑色凝灰岩 メノウ 滑石 滑石 滑石				
			20	外小代遺跡 公津原Loc.40	八代字外小代	016A号址	玉作	前	管玉未成品63 剥片848 残核5 母岩3 管玉未成品17 勾玉1 板状品6 剥片72	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 メノウ 滑石 滑石	生産16 196
						018号址	玉作・工房	前	管玉未成品80 剥片64 管玉未成品4 板状品1 勾玉1	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石	

11. 成田市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
20	外小代遺跡 公津原Loc.40	八代字外小代	018号址	玉作	前	平玉 1 平玉未成品 7 板状品 1 剥片 26	滑石 滑石 滑石 滑石	生産16 196
			019B号址	玉作	前	管玉未成品60 大型管玉未成品 1 刳貫円板 1 剥片 789 残核 5 管玉 5 管玉未成品14 板状品 8 平玉 2 平玉未成品 3 剥片 206	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			034B号址	玉作	前	管玉未成品147 大型管玉未成品 2 刳貫円板 1 剥片 546 残核 9 母岩 2 管玉 2 管玉未成品12 板状品 5 平玉 2 剥片 96	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			040号址	玉作	前	管玉未成品60 剥片 366 管玉未成品 9 勾玉 1 剥片 145	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石	
			041号址	玉作	前	管玉 1 管玉未成品20 剥片 152 管玉未成品 6 剥片 63 板状品 6 有孔円板 1 平玉 1	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			055号址	玉作	前	管玉未成品14 紡錘車形石製品未成品2 剥片 568 残核 2 管玉未成品 1 剥片 24	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石 滑石	
			071号址	玉作	前	管玉未成品130 剥片 6 残核 4	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 緑色凝灰岩	

11. 成田市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
21	大竹遺跡	大竹字台畑	第1号址	玉作	前	管玉未成品51 原石2 管玉未成品25 白玉2 平玉4 甕玉6 板状品1 剥片数千	緑色凝灰岩 緑色凝灰岩 滑石	生産15 101・131 152・183

13. 市川市

1	前原遺跡	大野町	1号住居跡	竪穴住居	中	管玉1 有孔円板4	滑石 滑石	247
2	杉ノ木台遺跡	柏井町	H-1号住居跡	工房?	中	白玉1 有孔円板1 剥片(若干)	滑石 滑石 滑石	181

14. 船橋市

1	夏見台遺跡	夏見町	4号址	工房	後	白玉54 白玉未成品42 板状品 石屑 原石	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産6 49
			13号址	竪穴住居	後	白玉2	頁岩質	
			14号址	竪穴住居	後	有孔円板	滑石	
			15号址	竪穴住居	後	白玉14 管玉		
			19号址	竪穴住居	後	白玉7		
	夏見台遺跡2次	夏見町	第3号住居址	竪穴住居	後	有孔円板	滑石	生産6 132
			第7号住居址	工房	後	白玉28 白玉未成品316 小剥片9,012 剥片32 原石18	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
	夏見台遺跡3次-II	夏見町	第6号住居址	竪穴住居	古墳	紡錘車未成品2 原石2	滑石	生産6 133
			第15号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模) 剣形品未成品 剥片	滑石 滑石 滑石	
			第2号住居址	工房	後	白玉 白玉未成品 剣形品 剥片 原石	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			第4号住居址	竪穴住居	後	有孔円板未成品	滑石	
			第5号住居址	工房	後	白玉未成品 有孔円板 有孔円板未成品 有孔円板破損品 剥片	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	

14. 船橋市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	夏見台遺跡 3次	夏見町	第6号住居址	工房?	後	白玉未成品 有孔円板 有孔円板未成品 有孔円板破損品 剥片	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産6 133
			第7号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 有孔円板破損品	滑石 滑石	
			第9号住居址	竪穴住居	後	剥片	滑石	
			第10号住居址	竪穴住居	後	剥片	滑石	
				グリッド	後	有孔円板 有孔円板破損品	滑石 滑石	
2	八栄北遺跡	夏見町	第3号住居址	工房	後	白玉未成品 原石	滑石 滑石	生産7 99
3	柏上遺跡	八木ヶ谷町字柏上	第1号住居址	竪穴住居	中	剣形品 有孔円板	滑石 滑石	生産10 81・185
			第4号住居址	竪穴住居	中	剣形品4	滑石	
				表採	中?	剣形品4 有孔円板3	滑石 滑石	
4	白井先遺跡	小室町	D201B号住居址	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板2 石屑1		生産9 98
			D202号住居址	竪穴住居	中	白玉1		
			D202号住居址	竪穴住居	中	剣形品未成品1 有孔円板5 石屑1		
			D203A・B住居址	工房?	中	白玉11 小玉1 勾玉(模)1 剣形品3 有孔円板3 未成品1 石屑6 紡錘車	コハク	
			D205号住居址	竪穴住居	中	剣形品1		
			D207号住居址	工房?	中	有孔円板2 石屑2 原石1		
			D208号住居址	工房?	中	白玉29 有孔円板1 石屑13		
			D212号住居址	竪穴住居	中	白玉8 有孔円板3 石屑4		
			D215号住居址	竪穴住居	中	剣形品3		
			D216号住居址	竪穴住居	中	石屑1		
			D217号住居址	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板3 石屑1 チキリ1		

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
4	白井先遺跡	小室町	D219号住居址	竪穴住居	中	白玉14		生産 9 98
			D303号住居址	竪穴住居	中	有孔円板 2 鐸形 1		
			D204号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1 石屑 1		
			D206号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 4 石屑 2		
			D209号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1 有孔円板 1		
			D211号住居址	竪穴住居	後	剣形品 2 有孔円板 1 紡錘車 1		
			D301号住居址	竪穴住居	後	剣形品 2		
			D302A住居址	竪穴住居	後	剣形品 1 石屑 1		
			D306号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1		
			D307号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 3		
			D308号住居址	竪穴住居	後	未成品 1		
			D310号住居址	工房?	後	白玉 3 有孔円板 1 石屑 3 紡錘車 1		
			Pit17	土坑	中	白玉10 原石 1		
			Pit19	土坑	中	白玉14		
Pit24	土坑	中	有孔円板 1					
	表採	古墳	剣形品 2 有孔円板 2					
5	外原遺跡	田喜野井町外原	第1号址	竪穴住居	中	剣形品 3 有孔円板 1 円板 1	滑石 滑石 滑石	生産 8 82
			第2号址	竪穴住居	中	剥片 原石	滑石 滑石	
			第3号址	工房	中	白玉 多数 白玉未成品多数 勾玉 管玉 有孔円板 3 円板 7 紡錘車未成品 原石	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			第4号址	竪穴住居	中	剥片	滑石	
			第8号址	竪穴住居	中	白玉 数点 剣形品 剥片 原石	滑石 滑石 滑石 滑石	
			第10号址	竪穴住居	中	勾玉 2 剣形品 4 円板	滑石 滑石 滑石	

15. 印旛郡白井町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	谷田木曾地遺跡	谷田字木曾地	023号住居跡	竪穴住居	後	管玉 1	凝灰質頁岩	248
2	中西山遺跡	古名内中西山	第Ⅰ号住居址	竪穴住居	中	白玉	滑石	生産27 31
			第Ⅱ号住居址	工房	中	白玉 2 剣形品 剣形品 有孔円板破片 紡錘車 1	滑石 滑石 緑泥片岩 緑泥片岩	
3	神々廻宮前遺跡B	神々廻字宮前	001号住居跡	竪穴住居	前	管玉		360
			007号住居跡	竪穴住居	前	勾玉 管玉		
			012号住居跡	竪穴住居	中	有孔円板 有段紡錘車 1		
			013A号住居跡	工房	中	剣形品 有孔円板 2 剥片 原石	滑石 滑石 滑石 滑石	
			013B号住居跡	工房	中	有孔円板 2 剥片 3	滑石 滑石	
4	復山谷遺跡	復字山谷	120号住居跡	工房	後	白玉140 勾玉(模) 2 有孔円板14 破片300 原石	滑石 雲母片岩 雲母片岩 滑石 滑石	210
						グリッド	有孔円板	

16. 八千代市

1	権現後遺跡	萱田町字権現後	D035号遺構	工房	中	白玉12 白玉未成品27 剣形品 1 石片2136 原石 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産11 249
			D131号遺構	工房	中	白玉33 白玉未成品275 勾玉 1 剣形品 1 円板 1 未成品 1 石片11225 原石 4	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D132号遺構	工房	中	白玉28 白玉未成品98 勾玉 1 剣形品 1 石片5905 原石 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	権現後遺跡	萱田町字権現後	D133号遺構	工房	中	白玉46 白玉未成品446 勾玉1 円板1 石片14881 原石4	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産11 249
			D099号遺構	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
2	北海道遺跡	萱田町字北海道	D010号遺構	工房	中	白玉6 白玉未成品291 円板状品 石片703 原石5	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	285
			D011号遺構	工房	中	白玉4 白玉未成品111 有孔円板2 円板状3 他6 石片1338 原石4	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D012号遺構	工房	中	白玉48 白玉未成品1862 勾玉3 剣形品1 有孔円板4 有孔円板未成品2 チキリ2 石片48472 原石12	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D013号遺構	工房	中	白玉6 白玉未成品143 石片2498 原石2	滑石 滑石 滑石 滑石	
			D014号遺構	工房	中	白玉39 白玉未成品927 勾玉6 剣形品2 有孔円板10 他53 石片11622 原石6	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D016号遺構	工房	中	白玉64 白玉未成品532 勾玉2 勾玉未成1品 有孔円板2 有孔円板未成品3 有孔円板欠損品 他7 石片7615 原石6	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	

16. 八千代市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	北海道遺跡	萱田町字北海道	D022号遺構	工房	中	白玉22 白玉未成品413 剣形品 3 有孔円板 3 円板状品 9 他 9 石片8600 原石 5	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	285
			D055号遺構	竪穴住居	中	白玉 5	滑石	
			D057号遺構	竪穴住居	中	白玉 2	滑石	
			D058号遺構	工房	中	白玉 5 白玉未成品40 勾玉 1 石片423 原石 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D059号遺構	工房	中	白玉55 白玉未成品294 勾玉 1 剣形品 1 有孔円板13 有孔円板未成品12 円板状品 4 他 1 石片4139 原石 8	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D080号遺構	工房	中	白玉18 白玉未成品328 石片4718	滑石 滑石 滑石	
			D036号遺構	竪穴住居	中	白玉 白玉未成品 2	滑石 滑石	
			D039号遺構	工房?	中	白玉 3 白玉未成品 2 有孔円板 1 石片35 原石 3	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			D021号遺構	工房?	中	白玉 2 石片29 原石 1	滑石 滑石 滑石	
			D001号遺構	竪穴住居	後	板状品 2	滑石	
			D037号遺構	工房	後	白玉12 白玉未成品331 剣形品 1 有孔円板 1 他 2 石片3723 原石 1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			3	川崎山遺跡	萱田町字川崎山	第 5 号住居址	工房?	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
3	川崎山遺跡	萱田町字川崎山	第5号住居址	工房?	中	勾玉2 剣形品未成品 有孔円板欠損品 有孔円板未成品 甕玉6 石片449	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	生産12 186
			第6号住居址	工房?	中	有孔円板未成品 板状品 石片49	滑石 滑石 滑石	
4	小板橋遺跡	大和田字中畑		工房	古墳			抄80
5	高津新山遺跡	高津字堀込				勾玉		分(1)

17. 印旛郡印旛村

1	岩戸広台遺跡A	岩戸広台	015	竪穴住居	8C	勾玉1	メノウ	361
2	古山遺跡	大字鎌苅字古山	002住居址	工房	中	白玉 勾玉 剝片 原石	滑石 ヒスイ 滑石 滑石	307
3	一ノ台遺跡	平賀字一ノ台	第13号住居址	竪穴住居	中	勾玉1	滑石	308
			第15号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
			第16号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
			第20号住居址	工房	中	白玉未成品78 剣形品未成品9 剝片等300 羨核1	滑石 滑石 滑石 滑石	
			第24号住居址	竪穴住居	中	剣形品未成品1	滑石	
			第25号住居址	竪穴住居	中	剣形品未成品2 有孔円板未成品1 剝片等7	滑石 滑石 滑石	
			第32号住居址	工房	中	白玉未成品5 勾玉1 甕玉1 剝片2	滑石 滑石 滑石 滑石	
第34号住居址	竪穴住居	中	剣形品未成品1 有孔円板1	滑石 滑石				
4	仲ノ台遺跡	平賀字仲台	第11号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	308
5	駒込遺跡	平賀字駒込	第21号住居址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	308
			第28号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			第29号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			第31号住居址	竪穴住居	後	白玉1 剣形品未成品1	滑石 滑石	
			第46号住居址	竪穴住居	後	甕玉1	滑石	
第53号住居址	竪穴住居	後	白玉3	滑石				
6	油作第2遺跡	平賀字油作	第30号住居址	竪穴住居	後	子持勾玉1	緑泥岩	308
			第41号住居址	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			第43号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	

18. 佐倉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	佐倉城跡	城内町字後家曲輪	8号住	竪穴住居	古墳	勾玉1 管玉1	メノウ 碧玉	251
2	棒作遺跡	六崎棒作	第13号住	竪穴住居	古墳	剣形品1		286
3	白井小笹台遺跡	白井田字小笹台	第4号住居址	工房	中	剣形品 有孔円板 剥片		411
			S1007	竪穴住居	中	剥片1	滑石	435
			S1008	工房?	中	白玉1 剥片6	滑石 滑石	
			S1009	工房?	中	剣形品1 有孔円板1 紡錘車1 剥片1	滑石 滑石 滑石 滑石	
4	大崎台遺跡	六崎字大崎台	第26号住居址	竪穴住居	後?	小玉1	碧玉	287
			第175号住居址	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	
			第185号住居址	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			第251号住居址	竪穴住居	前	管玉1	滑石	309
			第297号住居址	竪穴住居	9C	剣形品1	緑泥片岩	
5	岩富漆谷津遺跡	岩富町字漆谷津	001号住居址	竪穴住居	後	有孔円板1	緑色片岩	生産13
			006号住居址	竪穴住居	後	白玉1	千枚岩	232
			010号住居址	竪穴住居	後	原石1	千枚岩	
			019号住居址	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板2 有孔円板1 板状未成品3	緑色片岩 緑色片岩 雲母片岩 緑色片岩	
			021号住居址	竪穴住居	平安	有孔円板1	緑色片岩	
			023号住居址	竪穴住居	後	原石	緑色片岩	
			026号住居址	竪穴住居	前	模造品破片1	千枚岩	
			032号住居址	竪穴住居	後	白玉5 剣形品1	千枚岩 緑色片岩	
			033号住居址	工房?	後	勾玉(模)1 管玉1 未成品1	緑色片岩 雲母片岩 千枚岩	
			037号住居址	竪穴住居	後	剣形品1	緑色片岩	
			043号住居址	工房	中	白玉5 白玉1 白玉未成品83 剣形品1 有孔円板3 石屑33	滑石 凝灰岩 緑色岩 緑色岩 緑色片岩 緑色岩	
			045号住居址	竪穴住居	平安	有孔円板1	緑色片岩	
			048号住居址	竪穴住居	後	有孔円板1	緑色片岩	
			051号住居址	竪穴住居	後	管玉1	凝灰岩	
			062号住居址	竪穴住居	後	勾玉1	蛇紋岩	
			072号住居址	竪穴住居	中	白玉2 白玉1	滑石 雲母片岩	
			073号住居址	工房?	中	白玉2 勾玉1	滑石 蛇紋岩	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	岩富漆谷津遺跡	岩富町字漆谷津	073号住居址	工房?	中	勾玉(模)1 劍形品1 有孔円板1 有孔円板1 板状未成品1 模造品破片1 未成品1 石屑1	緑色片岩 雲母片岩 雲母片岩 千枚岩 緑色片岩 千枚岩 凝灰岩 緑色岩	生産13 232
			074号住居址	竪穴住居	前	管玉1	蛇紋岩	
			076号住居址	竪穴住居	後	白玉1 勾玉未成品1 有孔円板1	滑石 緑色片岩 緑色片岩	
			077号住居址	竪穴住居	中	白玉1 白玉1	凝灰岩 滑石	
			078号住居址	竪穴住居	中	白玉1	雲母片岩	
			082号住居址	竪穴住居	後	有孔円板1	緑色岩	
			083号住居址	竪穴住居	後	白玉2	千枚岩	
			085号住居址	工房?	後	白玉2 白玉2 管玉1 石屑2	滑石 凝灰岩 滑石 緑色岩	
			086号住居址	竪穴住居	前	管玉1	蛇紋岩	
			087号住居址	竪穴住居	前	管玉1	蛇紋岩	
			089号住居址	工房?	後	白玉1 勾玉1 劍形品1 石屑2 石屑1 原石1	凝灰岩 滑石 千枚岩 千枚岩 雲母片岩 緑色岩	
			090号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			091号住居址	工房?	後	白玉2 勾玉(模)1 石屑1 荒割未成品1	滑石 雲母片岩 雲母片岩 雲母片岩	
			093号住居址	工房?	中	白玉114 白玉40 白玉5 白玉2 勾玉(模)1 管玉1 管玉1 劍形品2 劍形品2 有孔円板7 有孔円板2 有孔円板1 有孔円板1 石屑7	滑石 凝灰岩 雲母片岩 蛇紋岩 緑色岩 蛇紋岩 凝灰岩 緑色片岩 千枚岩 緑色片岩 千枚岩 雲母片岩 緑色岩 緑色岩	
			095号住居址	工房?	中	白玉7	滑石	

18. 佐倉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	岩富漆谷津遺跡	岩富町字漆谷津	095号住居址	工房?	中	白玉 1 白玉 1 剣形品 1 剣形品 1 有孔円板 1 有孔円板 1 石屑 1 石屑 1 石屑 1 荒割未成品 1 荒割未成品 1	蛇紋岩 雲母片岩 緑色片岩 千枚岩 緑色片岩 雲母片岩 緑色岩 千枚岩 雲母片岩 緑色岩 雲母片岩	生産13 232
			100号住居址	工房?	中	白玉30 白玉 8 勾玉 1 管玉 1 剣形品 3 有孔円板 3 有孔円板 2 板状未成品 石屑 1 石屑 1	滑石 凝灰岩 蛇紋岩 滑石 緑色片岩 緑色片岩 雲母片岩 緑色片岩 緑色岩 雲母片岩	
			106号住居址	竪穴住居	後	白玉 2 模造品破片 1	滑石 緑色岩	
			108号住居址	竪穴住居	後	白玉 2 白玉 1 剣形品? 1	滑石 雲母片岩 千枚岩	
			111号住居址	竪穴住居	平安	白玉 1 白玉 1 石屑 1	滑石 雲母片岩 千枚岩	
			114号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			115号住居址	竪穴住居	後	白玉 4 白玉 1	千枚岩 滑石	
			118号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	緑色片岩	
			119号住居址	竪穴住居	後	模造品破片 1	雲母片岩	
			120号住居址	竪穴住居	後	白玉 5 剣形品 1 有孔円板 3 有孔円板 1	滑石 雲母片岩 雲母片岩 緑色片岩	
			126号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1 有孔円板 1	緑色片岩 緑色片岩	
			131号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			132号住居址	竪穴住居	後	白玉 4	滑石	
			133号住居址	竪穴住居	前	有孔円板 1	雲母片岩	
			134号住居址	工房?	後	白玉 4 白玉 1 白玉 1 管玉 1 剣形品 1 有孔円板 1	滑石 千枚岩 凝灰岩 滑石 雲母片岩 雲母片岩	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	岩富漆谷津遺跡	岩富町字漆谷津	134号住居址	工房?	後	石屑 1 形割未成品 1 荒割未成品 1	石英片岩 蛇紋岩 緑色片岩	生産13 232
			136号住居址	竪穴住居	後	白玉 1 有孔円板 2	滑石 緑色片岩	
			137号住居址	竪穴住居	平安	有孔円板 1	雲母片岩	
			139号住居址	竪穴住居	平安	白玉 1	滑石	
			140号住居址	竪穴住居	中	白玉 4 白玉 1 有孔円板 1	滑石 凝灰岩 雲母片岩	
			141号住居址	竪穴住居	後	白玉 2 白玉 1	滑石 凝灰岩	
			142号住居址	竪穴住居	中	白玉21	凝灰岩	
			145号住居址	工房?	中	白玉未成品 1 石屑 1 荒割未成品 1 荒割未成品 1	緑色片岩 蛇紋岩 雲母片岩 蛇紋岩	
			150号住居址	竪穴住居	中	有孔円板 1	緑色片岩	
			156号住居址	竪穴住居	後	有孔石製品 1	凝灰岩	
			159号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1 有孔円板 1 模造品破片 1	緑色片岩 千枚岩 千枚岩	
			160号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			163号住居址	竪穴住居	中	有孔円板 2	千枚岩	
			167号住居址	竪穴住居	後	管玉 1 剣形品 1	凝灰岩 緑灰片岩	
			171号住居址	竪穴住居	中	有孔円板 1	緑色片岩	
			1号槽鉢状遺構	土坑		白玉 2	滑石	
			16号土坑	土坑		剣形品 1	緑色片岩	
			28号土坑	土坑		剣形品 1	緑色片岩	
			10号溝状遺構	溝状遺構		白玉 1 剣形品 1 石屑 1	滑石 緑色片岩 雲母片岩	
			6	タルカ作遺跡	神門字タルカ作	第 2 号住居跡	竪穴住居	
第13号住居跡	竪穴住居	後				白玉 1	滑石	
第19号住居跡	竪穴住居	後				白玉 1	滑石	
第37号住居跡	竪穴住居	後				管玉 1	滑石	
7	腰巻遺跡		2号住居跡	竪穴住居	後	白玉 1 丸玉		335
			11号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1	滑石	
8	江原台遺跡		023号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1	滑石	166
			113号住居址	竪穴住居	前	有孔円板 1	滑石	
			069号住居址	竪穴住居	後	丸玉 1	滑石	
9	問野台遺跡	白井字問野台	第 3 号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	143
			第16号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
10	古屋敷遺跡	白井字問野台	第20号住居址	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	143
11	大篠塚遺跡	大篠塚郷ノ台	第 5 号住居址	竪穴住居	後	勾玉(模) 1 剣形品 1	緑泥片岩 緑泥片岩	63
			第23号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	雲母片岩	

18. 佐倉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
11	大篠塚遺跡	大篠塚郷ノ台	第44号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模)1	滑石	63
			第45号住居址	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板1	雲母片岩	
			第48号住居址	竪穴住居	古墳?	勾玉1 剣形品1	碧玉 緑泥片岩	
12	鑄木諏訪尾余遺跡	鑄木町	Km-3	竪穴住居	中	剣形品1	滑石	252
			K1-3	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
13	高崎新山遺跡	高崎新山	005A住居跡	竪穴住居	8C	白玉1	碧玉	336
			021住居跡	竪穴住居	8C	白玉1	滑石	
			082	竪穴状遺構	中世	白玉1	滑石	
14	畔田川崎遺跡	畔田		表採(製作遺跡)	中	勾玉未成品(模) 剣形品1 剣形品未成品1 有孔円板1		生産12 103
15	飯郷作遺跡	下志津字飯郷作	001	竪穴住居	後	勾玉(模)1		153
16	若宮台遺跡	六崎若宮台		表採	古墳	模造品1		分(1)
17	江原台第1遺跡	臼井田字遠部台			古墳	勾玉 剣形品		144
18	遠部台遺跡	臼井田字遠部台				管玉		分(1)
19	坂戸広遺跡	坂戸広				白玉 丸玉		分(1)
20	木野子大山遺跡	木野子字大山			古墳	模造品 勾玉		印年89

19. 印旛郡酒々井町

1	伊篠白幡遺跡	伊篠新田字野田	第22A号住居跡	竪穴住居	9C	丸玉1	滑石	310
			第46A号住居跡	竪穴住居	9C	管玉1	碧玉	
			第123号住居跡	竪穴住居	8C	白玉1 勾玉1	滑石 蛇紋岩	

22. 習志野市

1	花咲台遺跡	花咲			古墳	模造品		分(1)
---	-------	----	--	--	----	-----	--	------

23. 四街道市

1	中山遺跡	和良比字中山	031号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模)1	滑石	337
			033号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
2	西向井遺跡	西向井286他	第2号住居址	工房	中	白玉未成品8	滑石	生産21 211
						勾玉(模)1	滑石	
						剣形品1	滑石	
			円板1	滑石				
						円板未成品3	滑石	
						原石6	滑石	
			第4住居址	工房		模造品碎片 原石	滑石 滑石	
				表採		有孔円板2	滑石	
3	軽沢遺跡	吉岡字軽沢	14号住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	311
4	入ノ台第2遺跡	長岡入ノ谷	第10号住居址	竪穴住居	後	加工破片1	滑石	413
			第13号住居址	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	

23. 四街道市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
4	入ノ台第2遺跡	長岡入ノ谷	第15号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1	滑石	413
			第18号住居址住	竪穴住居	後	白玉 1 管玉 1	滑石 滑石	
			第56号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1		
			第62号住居址	竪穴住居	後	白玉 1		
			第68号住居址	竪穴住居	後	有孔門板 1		
			第69号住居址	竪穴住居	後	有孔門板 1		
			第73号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1		
			第77号住居址	竪穴住居	後	勾玉(模) 1		
			第77号住居址	竪穴住居	後	有孔門板 1		
			第85号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1		
			第88号住居址	竪穴住居	中	紡錘車形石製品 1		
			第101号住居址	竪穴住居	後	白玉 2 白玉 1 銅片 2	滑石 メノウ 滑石	
第104号住居址	竪穴住居	後	白玉 3 勾玉(模) 1 有孔門板 4	滑石				
第273号住居址	竪穴住居	後	白玉 1 有孔門板 1					
5	前広遺跡	大字山梨字前広	1号住居址	竪穴住居	後	有孔門板 1	滑石	312
6	千代田遺跡V区	千代田	6号住居址	竪穴住居	後	小玉 1 勾玉 1	メノウ	83
			9号住居址	竪穴住居	後	小玉 1	硬玉	
			32号住居址	竪穴住居	中?	勾玉 1		
7	和良比小名木遺跡	和良比字中山			古墳?	勾玉 1		抄84

24. 印旛郡八街町

1	滝台遺跡	滝台松入		工房	古墳	白玉 銅片	滑石質 滑石質	生産22
---	------	------	--	----	----	----------	------------	------

25. 佐原市

1	堀之内遺跡	堀之内字平台	第1号竪穴住居址	工房	後	白玉 1 原石 1	滑石 滑石	212
			第2号竪穴住居址	竪穴住居	後	管玉 1	硬玉	
			第12号竪穴住居址	竪穴住居	後	有孔門板 1	滑石	
			第17号竪穴住居址	工房	後	原石 2	滑石	
			第21号竪穴住居址	工房	後	白玉未成品 3 勾玉(模)未成品 1	滑石 滑石	
2	玉造上の合(ムチナカ)遺跡	玉造字ムチナカ		工房	後	白玉 立花		生産29 363
3	古屋敷遺跡	玉造字古屋敷		工房	後			抄81
4	神田台遺跡	神田台	001住居跡	竪穴住居	後	鎌形石製品	頁岩	154
			006住居跡	竪穴住居	後	紡錘車	滑石	
5	綱原遺跡	多田字綱原	002号墳旧表土上面	祭祀跡	中	剣形品 9 有孔門板 2	石 滑石	437
			005号墳旧表土上面	祭祀跡	中	剣形品11 剣形品未成品 6	滑石 滑石	

25. 佐原市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	綱原遺跡	多田字綱原	005号埴旧表土上面	祭祀跡	中	有孔円板 6 有孔円板未成品 7 刀子形 1 白玉318	滑石 滑石 滑石 滑石	437
6	上小川遺跡	上小川		散布地		石製模造品		分(2)
7	荒久遺跡	下小野荒久		グリッド		勾玉	滑石	52
8	岩ヶ崎遺跡	岩ヶ崎字野中台		工房	後	有孔円板 白玉 石製模造品未成品 原石 剝片		生産28 64
9	小六谷台遺跡		012号住居跡	竪穴住居	後	紡錘車	滑石	362
10	香取神宮境内	香取				有孔円板		5
11		津宮				白玉 剣形品 有孔円板		59
12		丁字山				白玉 勾玉(模) 剣形品 有孔円板 有孔短冊形		9

26. 香取郡下総町

1	木挽崎遺跡	名木字木挽崎	1号住居址	工房	中	剝片	滑石	生産40・414
2	大台遺跡	名木字大台				白玉	滑石	抄88
3	不光寺遺跡	名木字不光寺				白玉		抄88
4	鎌部遺跡	名木字鎌部		祭祀遺跡		剣形品 6 有孔円板 4		414
5	若庄司遺跡	高字高台		表採(玉作 ・製作遺跡)		管玉未成品 1 白玉未成品10 剣形品未成品 2 有孔円板未成品 1		生産39 94・414
6	高宮作遺跡	高宮作		表採		石製模造品		分(2)
7	治部台遺跡	治部台		表採(玉作 ・製作遺跡)		管玉 4 管玉未成品587 勾玉 1 勾玉未成品82 管玉46 管玉未成品751 勾玉 1 勾玉未成品 5 白玉400 白玉未成品2330 剣形品未成品38 有孔円板未成品11 勾玉(模)未成品47 人形未成品 3 斧形未成品 1	碧玉質 碧玉質 碧玉質 碧玉質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	生産35 53・65・94・ 414

26. 香取郡下総町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
7	治部台遺跡	治部台		表採(玉作・製作遺跡)		タガネ形未成品 1 刀子形未成品 1 剥・屑片 20,000 剥・屑片 40,000	滑石質 滑石質 碧玉質 滑石質	生産35 53・65・94・414
			第1号址	玉作・工房	中?	管玉未成品 8 管玉未成品 8 白玉未成品 2 有孔円板 4 板状品 5 剥片 14 剥片 8	碧玉質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 碧玉質 滑石質	
8	大和田坂ノ上遺跡	大和田坂ノ上	住居址No.1	工房	中	白玉17 白玉未成品112 剣形品 2 剣形未成品 2 有孔円板 3 有孔円板未成品 6 その他加工品266 原石60 細片		364・414
9	稲荷峰遺跡	大和田字浅間・稲荷峰		表採(玉作・製作遺跡)		管玉 3 管玉未成品255 勾玉未成品16 管玉 2 管玉未成品116 勾玉 5 勾玉未成品 1 白玉 5 白玉未成品16 勾玉(模)未成品 1 剣形品未成品 1 有孔円板未成品 4 切子玉 2 剥片 剥片	碧玉質 碧玉質 碧玉質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 水晶 碧玉質 滑石質	生産34 65・77・94・414
			1号址	玉作・工房	前	管玉未成品18 管玉未成品13 勾玉 1 白玉未成品 3 有孔円板1 板状未成品 3 剥片・屑片 234 剥片・屑片 84 剥片 4 剥片 4	碧玉 滑石 蛇紋岩 滑石質 滑石質 滑石質 碧玉質 滑石質 メノウ・石英 蛇紋岩	
			2号址	竪穴住居	後	剥片・屑片 5 屑片 1	碧玉質 滑石質	
			3号址	竪穴住居	後	管玉未成品 1	滑石質	

26. 香取郡下総町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
9	稲荷峰遺跡	大和田字浅間・稲荷峰	3号址	竪穴住居	後	剝片・屑片6 屑片1 剝片1	碧玉質 滑石質 メノウ	生産34 65・77・94・ 414
			4号址	玉作・工房	中?	管玉未成品8 管玉未成品8 白玉1 白玉未成品22 有孔円板未成品5 板状未成品10 剝片・屑片37 剝片・屑片96	碧玉質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 碧玉質 滑石質	
10	房台(八幡神社)遺跡	小野字房台		表採(玉作・ 製作遺跡)	中	管玉 管玉未成品	碧玉・滑石 碧玉・滑石	414
11	仲道(八幡神社裏)遺跡	小野字中道		表採(玉作・ 製作遺跡)	古墳	管玉未成品 剣形品 剣形品未成品 有孔円板 刀子形 剝片	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 碧玉・滑石	生産37 414
12	小山(宮作・小山岱) 遺跡	大和田小山台		表採(製作 遺跡)	古墳	管玉未成品11 勾玉(模)未成品5 白玉3 白玉未成品10 剣形品未成品10 有孔円板未成品20 剝片	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	生産38 414
13	高岡遺跡	高岡		製作遺跡 または祭 祀遺跡	中	白玉3 剣形品4 剣形未成品8 有孔円板14		生産33 145・414
14	名古屋浅間台遺跡	名古屋浅間台		表採	古墳	剣形未成品		分2)
15	天神台遺跡	高倉天神台	2号住居址	工房	後	白玉 剝片		生産30 414
16	東明神山遺跡	西大須賀宮下	1号址	工房	中	白玉38以上 勾玉(模)8 剣形品12 有孔円板・未成 品61 石製模造鏡2 斧形板状未成品2 原石・剝片・屑 片多数	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	生産32 94・414
17	八幡神社遺跡	西大須賀		表採(製作 遺跡)		管玉1 管玉未成品13 勾玉(模)未成品3 白玉20 白玉未成品10 剣形品未成品3	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	生産31 414

26. 香取郡下総町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
17	八幡神社遺跡	西大須賀				有孔円板未成品10 タガネ形未成品2 銅片6,000	滑石質 滑石質 滑石質	生産31 414
18	大日台遺跡	大和田大日台		表探(玉作・ 製作遺跡)		管玉 管玉未成品 管玉 管玉未成品 白玉 白玉未成品 有孔円板 立花状製品 銅片 銅片	碧玉 碧玉 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 碧玉 滑石	生産36 414
19	長稲葉遺跡	名木字木挽崎				石製模造品		抄88
20	清水川台遺跡	滑川	019号住居址	竪穴住居	後	剣形品1 有孔円板1 円板1 紡錘車1	滑石 滑石 滑石 滑石	365
21	小野女台遺跡	小野	SI-15	工房	後	未成品	滑石	414・415
			SI-33	工房	後	未成品	滑石	
22	猫作・栗山古墳群	滑川栗山		工房				香年88・89
23	松葉遺跡	大和田松葉		玉作?		管玉未成品 銅片	碧玉質 碧玉・滑石	414
24	平台遺跡	大和田平台		玉作?		銅片	滑石質	414
25	山崎遺跡	小野山崎		玉作?		大型管玉未成品 銅片	碧玉質 滑石質	414

27. 香取郡神崎町

1	西の城遺跡	並木字西ノ城				有孔円板 剣形品 紡錘車		241
2	太平遺跡	新字太平	109号住居	竪穴住居	後	紡錘車1	蛇紋岩	338

28. 香取郡小見川町

1	増田長峰遺跡	増田字長峰	住居址No.2	工房	後	白玉1 有孔円板1 紡錘車1 原石2	滑石	253
2	上原(東小学校)遺跡	阿玉川字上原		トレンチ		異形石製品1		213
3	阿玉台北B遺跡	五郷内字立山	007	竪穴住居	前	剣形品1		115
			016	竪穴住居	前	管玉2	凝灰岩	
4	阿玉台北A遺跡	五郷内字立山	029A	竪穴住居	前	管玉1 管玉1 勾玉1	凝灰岩 滑石 滑石	115

29. 香取郡東庄町

1	高部宮ノ前遺跡	高部字宮ノ前	019号跡	竪穴住居	前	勾玉1	滑石系	254
			028号跡	溝		勾玉1	硬砂岩系	

29. 香取郡東庄町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	前山遺跡	窪谷前山	B-1 a 号址	工房		有孔円板 5 原石	滑石	生産41 50
			B-1 b 号址	竪穴住居		剣形品 1 有孔円板 1		
				表採		剣形品 有孔円板 勾玉(模) 白玉		
3	小座向地遺跡	小座字和田ノ上		表採		石製模造品		254

30. 香取郡大栄町

1	馬洗城址	中台	第7号住居址	竪穴住居	中	剣形品	滑石	386
			第10号住居址	工房	中	白玉 3 白玉未成品35 剣形品 3 剣形品未成品 3 有孔円板 3 有孔円板未成品 3 原石 6	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			第22号住居址	竪穴住居	中	原石 2	滑石	
				表採		勾玉	滑石	
2		奈戸五区		表採(製作遺跡)	古墳	白玉未成品・板状品・剥片30数点	滑石	116

33. 香取郡干潟町

1	清和乙遺跡(軍野遺跡)	清和乙字軍野		祭祀遺跡	中	剣形品73 有孔円板82 白玉139 棒状品 2	滑石 滑石 滑石 滑石	416
---	-------------	--------	--	------	---	-----------------------------------	----------------------	-----

35. 千葉市

1	城の腰遺跡	大宮町	138号跡	竪穴住居	中	勾玉(模) 1	滑石	167
				グリッド		有孔円板	滑石	
2	五味ノ木遺跡	萩台町	001号住居跡	竪穴住居	中	剣形品 1 紡錘車 1		313
3	星久喜遺跡	星久喜	第1号住居址	竪穴住居	中	紡錘車 1		92
			第2号住居址	竪穴住居	中	勾玉 1 紡錘車 2		
4	上ノ台遺跡	幕張町	第1号址	工房	中	白玉13 白玉未成品153 勾玉(模)未成品6 剣形品 3 有孔円板16 有孔円板未成品24 板状品 1 原石 3 剥片15		生産 1 90

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
4	上ノ台遺跡	幕張町	第2号址	工房	中	白玉・白玉未成品114 勾玉(模)未成品8 有孔円板2 有孔円板未成品5 板状品1 紡錘車2 剝片50以上 原石18		生産1 90
			第3号址	工房	中	白玉未成品68 勾玉(模)未成品1 剣形品2 有孔円板未成品2 剝片18 原石6 不明未成品1		
			第9号址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	
			第11号址	竪穴住居	後	管玉1	ろう石	
			O-53b住居址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	生産1 214
			P-57 I・II号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			Q-56号住居跡	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
			S-55号住居跡	竪穴住居	後	勾玉(模)1 有孔円板1	緑色片麻岩	
			S-56住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			T-53 I・II号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			X-48 I・II号住居跡	竪穴住居	後	剣形品1	緑色片麻岩	
			2 A-50 II号住居跡	竪穴住居		白玉1	滑石	
			2 A-53号住居跡	竪穴住居	後	剣形品2	滑石	
			2 A-58号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			2 A-62号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			2 D-37号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			2 D-57abc号住居跡	竪穴住居	後	白玉2	滑石	
			2 D-65号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			2 F-44 I・II号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			2 G-28号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			2 I-65号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			2 J-62号住居跡	工房?	後	白玉14 未成品1	滑石 滑石	
			2 Q-63号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			2 R-68b号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			2 S-64号住居跡	竪穴住居	後	未成品3 原石1 勾玉(模)1 白玉1	滑石 滑石	
			3 C-60号住居跡	竪穴住居	後	勾玉(模)1 白玉38	滑石 滑石	
			3 D-56号住居跡	竪穴住居	後	勾玉1		
5	馬加城遺跡	幕張町3丁目	第6号住居址	竪穴住居	後	剣形品2 有孔円板1		生産2 189
			第7号住居址	竪穴住居	後	勾玉(模)1		
			第8号住居址	工房	後	剣形品1		

35. 千葉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
5	馬加城遺跡	幕張町	第8号住居址	工房	後	剣形未成品4 有孔円板2 剥片2 原石1	滑石 滑石	189
6	宮脇遺跡	畑町宮ノ後	6号住居跡	竪穴住居		白玉5		91
7	西妻遺跡	積橋町西妻				管玉		抄84
8	新堀遺跡	積橋町	1号住居址	竪穴住居		有孔円板		289
			7号住居址	竪穴住居		紡錘車	滑石	
			8号住居址	竪穴住居		剣形品		
9	新堀込遺跡	小中台町	S14	竪穴住居	後	剣形品1 白玉1		387
10	弥生遺跡	弥生町		表採		管玉	ヒスイ	分②
11	稲毛台東遺跡(東寺山I地区)	東寺山稲毛台	14号住居址	竪穴住居	後	紡錘車未成品1		68
			38号住居址	竪穴住居	奈良	白玉1		
12	駒形遺跡	作草町駒形	C-9号住居址	竪穴住居	後	勾玉1		157
			C-16号住居址	竪穴住居	後	有孔円板2		
			C-21号住居址	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石	
			C-25号住居址	竪穴住居		剣形品		
			C-27号住居址	竪穴住居	平安	有孔円板?		
			C-52号住居址	竪穴住居	後	紡錘車		
13	根崎遺跡	千種台		散布地		石製模造品		分②
14	東寺山戸張作遺跡	東寺山戸張作	第3号住居址	工房	後	白玉19 白玉未成品6 有孔円板1	緑泥片岩系	生産5 147
			第4号住居址	工房	後	白玉22 白玉未成品273 勾玉5 勾玉未成品14 剣形品7 剣形品未成品3 有孔円板10 有孔円板未成品4 剥片 原石		
			第5号住居址	工房	後	白玉未成品6 勾玉(模)未成品1		
			第8号住居址	工房		勾玉(模)未成品1	粘板岩	
15	矢作貝塚	矢作町	003住居跡	竪穴住居	古墳	白玉3 紡錘車形石製品1	緑色凝灰岩	199
			005住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			008住居跡	竪穴住居		白玉		
16	西屋敷遺跡	大宮町	001号跡	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	168
			009号跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			015号跡	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
			018号跡	竪穴住居	後	有孔円板2	滑石	
			042号跡	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
16	西屋敷遺跡	大宮町	043号跡	竪穴住居	後	剣形品 1	滑石	168
			046号跡	竪穴住居	平安	有孔円板 1	滑石	
			047号跡	竪穴住居	後	剣形品 1	滑石	
			060号跡	竪穴住居	後	勾玉 1	滑石	
			062号跡	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			063号跡	竪穴住居	後	剣形品 1 有孔円板 1	滑石 滑石	
			064号跡	竪穴住居	平安	勾玉 1	滑石	
				グリッド		有孔円板 1 勾玉 1 白玉 1	滑石 滑石 滑石	
17	鷺谷津遺跡	千葉寺町				白玉		抄87
18	荒久遺跡	青葉町	溝018	溝		鎌形品 2	滑石	388
			住居跡104	竪穴住居	後	剣形品 1	滑石	389
19	観音塚遺跡	千葉寺町				有孔円板		抄85
20	大森第一遺跡	大森町	第3号住居址	竪穴住居	後	剣形品 1 有孔円板 2		生産 3 92
			第4号住居址	竪穴住居		剣形品 1		
			第6号住居址	竪穴住居		有孔円板 2 チキリ 1		
			第10号住居址	竪穴住居	中	有孔円板		
			第18A号住居址	竪穴住居		有孔円板 1		
			第25号住居址	工房	中	管玉 2 白玉72 剣形品 2 有孔円板 5 銅片 2	凝灰岩 粘板岩質 粘板岩質 粘板岩質 粘板岩質	
			第26号住居址	竪穴住居	古墳	白玉 4 剣形品 1 有孔円板 2 未成品 1		
			第27号住居址	竪穴住居		剣形品 2 有孔円板 1 円板 1 紡錘車 1	滑石 滑石 滑石 蛇紋岩	
			第30A号住居址	竪穴住居		有孔円板 1		
				溝状遺構		勾玉(模) 1		
				表採		白玉 1 剣形品 1 有孔円板 4		
21	木戸遺跡	大宮町木戸坊		散布地		石製模造品		分(2)
22	川井遺跡	川井町				有孔円板		抄79
23	西花(大森第二)遺跡	大森町西ノ花西ケ作 貝路	第12号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模) 1 白玉111 白玉未成品 1 有孔円板 1 円板 1	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	生産 4 92
			第17号(B)住居址	竪穴住居	中	管玉 白玉 4	緑色凝灰岩 滑石質	

35. 千葉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
23	西花(大森第二)遺跡	大森町西ノ花西ヶ作 貝路	第21号(E)住居址	竪穴住居	中	白玉7	滑石質	生産4 92
			第31号(A)住居址	竪穴住居	中	白玉1 紡錘車1	滑石質 滑石質	
			第32号(B)住居址	竪穴住居	中	白玉3 円板1 紡錘車1	滑石質 滑石質 滑石質	
			第34号住居址	竪穴住居	中	白玉7 有孔円板1 紡錘車1	滑石質 滑石質 滑石質	
			第35号(B)住居址	工房	中	管玉2 白玉45 白玉未成品3 勾玉(模)1 有孔円板1 紡錘車1	滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質 滑石質	
			第36号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模)1	絹雲母片岩	
			第38号(A)住居址	竪穴住居	中	勾玉(模)1 有孔円板1	滑石質 滑石質	
			第40号(A)住居址	竪穴住居		管玉1 白玉10		
			第40号(B)住居址	竪穴住居	中	白玉6		
			第41号遺構	土坑		白玉4		
			第42号(A)住居址	竪穴住居	中	霽玉2 有孔円板1	凝灰岩質 滑石質	
			第42号(B)住居址	竪穴住居	中	白玉1 有孔円板1	滑石質 滑石質	
			第43号(A)住居址	竪穴住居	中	管玉1 白玉6 有孔円板1	凝灰岩質 滑石質 滑石質	
			第43号(B)住居址	竪穴住居		白玉5		
			第46号遺構			白玉3		
			第47号住居址	竪穴住居		勾玉(模)1	滑石質	
			第50号住居址	竪穴住居	中	子持勾玉1 白玉8 玉未成品1	滑石質 滑石質 滑石質	
			第53号住居址	竪穴住居	中	白玉21	滑石質	
			第54号(A)住居址	竪穴住居	中	管玉1 白玉6	滑石質	
			第68号住居址	竪穴住居	中	白玉1 円板1	滑石質 滑石質	
24	榎作遺跡	赤井町榎作	037A	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石	実見
			040B	竪穴住居	後	有孔円板1	粘板岩	
			043B	竪穴住居		剣形品1	滑石	
			044A	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石	
			044C	竪穴住居	後	白玉1 紡錘車1	滑石 滑石	
			044D	竪穴住居	後	白玉9	滑石・安山岩	
			044E	竪穴住居		勾玉(模)1	メノウ	
			044H	竪穴住居	後	斧形品1	滑石	

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
24	榎作遺跡	赤井町榎作	047A	竪穴住居	後	勾玉(模) 1	滑石	実見
			052	竪穴住居	後	白玉 3	滑石	
			061B	竪穴住居		有孔円板 1	滑石	
			075	竪穴住居	後	紡錘車 1	滑石	
			086B	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			086D	竪穴住居		紡錘車 1	緑色片岩	
			088H	竪穴住居	後	有孔円板 1 紡錘車 1	粘板岩 結晶片岩	
			103	竪穴住居	後	紡錘車 1	滑石	
			105A	竪穴住居	後	有孔円板 1	結晶片岩	
			114	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			117A	竪穴住居	後	紡錘車 2	蛇紋岩・滑石	
			118	竪穴住居	後	管玉 1	珪質凝灰岩	
			126	竪穴住居	後	管玉 1	滑石	
			133	竪穴住居	後	丸玉 1	滑石	
			137C	竪穴住居		紡錘車 1	滑石	
			147	竪穴住居	後	管玉 1	滑石	
			153	竪穴住居		有孔円板 1	滑石	
			158	竪穴住居	後	紡錘車 1	滑石	
			159	竪穴住居		剣形品 1	滑石	
			166	竪穴住居	後	紡錘車 2	滑石	
			179	竪穴住居	後	未成品 1	滑石	
			187	竪穴住居	後	紡錘車 1	滑石	
			190	竪穴住居	後	管玉 1 白玉 1	珪質緑色凝灰岩 滑石	
			200	竪穴住居	後	管玉 1	珪質凝灰岩	
201	竪穴住居	後	白玉 1	滑石				
218	竪穴住居	後	紡錘車 2	滑石				
			グリッド		管玉 1 白玉 2 未成品 1	チャート 滑石 凝灰岩		
25	谷津遺跡	花輪町谷津	1号住居址	竪穴住居	平安	管玉 1	ヒスイ	258
			7号住居址	竪穴住居	後	紡錘車	緑色片岩	
			21号住居址	竪穴住居	平安	有孔円板 1	滑石	
			42号住居址	竪穴住居	後	白玉 2	滑石	
			43号住居址	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			67号住居址	竪穴住居	後	紡錘車	凝灰岩	
			69号住居址	竪穴住居	後	勾玉	メノウ	
			84号住居址	竪穴住居	後	勾玉	ヒスイ	
			151号住居址	竪穴住居	後	白玉 2	滑石	
26	有吉遺跡	有吉町上赤塚	001号址	竪穴住居	後	有孔円板 1		117
			005号址	竪穴住居	中	白玉 1		
			105号址	竪穴住居	後	白玉 1 紡錘車 1		
27	種ヶ谷津遺跡	生実町種ヶ谷津	014竪穴住居	竪穴住居		紡錘車 1	滑石	390
			301溝状遺構	溝状遺構		有孔円板 1	滑石	
28	南二重堀遺跡	生実町南二重堀	28号住居址	竪穴住居	前	勾玉(模) 1	滑石	233
			46号住居址	竪穴住居	前	紡錘車 1	滑石	
			63号住居址	竪穴住居	前	有孔円板 1	滑石	

35. 千葉市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
29	馬ノ口遺跡	有吉町馬ノ口	63号住居址	竪穴住居	中	白玉1 白玉未成品1 剣形品4 有孔円板4	滑石 滑石 滑石 滑石	259
			100号住居址	竪穴住居		白玉1	滑石	
30	誉田コロニー内遺跡	誉田町		Kグリッド		剣形品1 有孔円板1		135
31	木戸作遺跡	椎名崎町道作	2号址	竪穴住居	後	白玉1		118
32	ムコアラク遺跡	大金沢町六通台	DW27	竪穴住居	後	紡錘車1		170
			DW37	竪穴住居	後	紡錘車1		
33	椎名崎遺跡	椎名崎町道作	133号址	竪穴住居	後	紡錘車1		169
34	文六第五遺跡	小食土町				勾玉 紡錘車		抄85
35	鎌取遺跡	鎌取町鎌取	032	竪穴住居		刀子形1		抄85 実見
			035	竪穴住居		勾玉1		
			044	竪穴住居		勾玉1 紡錘車1		
			045	竪穴住居		白玉 紡錘車2		
			047	竪穴住居		有孔円板1 鎌形品1		
			050	竪穴住居		白玉1 勾玉(模)1		
36	村田服部遺跡	村田町		包含層	古墳	白玉		290
37	箕輪遺跡	畑町	001号住居址	工房?	中	原石1 剥片2	滑石 滑石	291
			002号住居址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	
			005号住居址	工房?	中	破片	滑石	
			007号住居址	竪穴住居	中	剣形品1	滑石	
			008号住居址	工房?		破片4 原石1	滑石	
			015号住居址	竪穴住居	中	石製品1	珪質頁岩	
38	大道遺跡	生実町尼田大道	007号住居址	竪穴住居	奈良	勾玉1	滑石	235
			010号住居址	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石	
			012号住居址	竪穴住居	奈良	勾玉1	粘板岩	
			035号住居址	竪穴住居	後	管玉1	頁岩	

36. 山武郡芝山町

1	殿部田遺跡	殿部田	6号住居址	竪穴住居		剥片		生産48
			7号住居址	工房		有孔円板 剥片		105
2	上吹入遺跡	上吹入	第1号住居址	工房	中	管玉 白玉 白玉未成品 剣形品 有孔円板 円板 剥片		生産47 171
			第2号住居址	工房	中	白玉未成品 剣形品		

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	上吹入遺跡	上吹入	第2号住居址	工房	中	剥片 原石		生産47 171
			第4号住居址	工房	中	白玉 白玉未成品 剣形品 有孔円板		
			第5号住居址	工房	中	白玉未成品 剥片		
3	宮門遺跡	大台宮門	1号住居跡	竪穴住居	古墳	剥片		生産46 105
			3号住居跡	竪穴住居	古墳	有孔円板 1		
			4号住居跡	工房	中	剣形品21 有孔円板 5 剥片 原石		
			016号住居跡	竪穴住居	中	剣形品	雲母片岩	439
4	小池新林遺跡	小池	005号住居跡	竪穴住居	後	管玉 1 紡錘車	碧玉	292
				グリッド		有孔円板 紡錘車		
5	三田遺跡	小池	009号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1		391
			013号住居跡	竪穴住居	後	紡錘車		
			015号住居跡	竪穴住居	後	管玉 1 紡錘車 1		
			016号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1		
			037号住居跡	竪穴住居	後	剣形品 1		
			044号住居跡	竪穴住居	後	白玉 8		
			046号住居跡	竪穴住居	後	不明 1	滑石	
			049号住居跡	竪穴住居	後	紡錘車 1		
			055号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 2		
			056号住居跡	竪穴住居	後	紡錘車 2 勾玉(模) 1		
			060号住居跡	竪穴住居	後	管玉 1		
			061号住居跡	竪穴住居	後	勾玉(模) 1		
			070号住居跡	竪穴住居	後	剣形品 1		
			088号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1		
092号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1					
097号住居跡	竪穴住居	後	勾玉(模) 1					
105号住居跡	竪穴住居	中	勾玉(模) 1					
6	小池地蔵遺跡	小池地蔵		グリッド		紡錘車 1		292
7	下吹入東台遺跡	下吹入	1号住居址	工房	中	白玉 3 紡錘車 1 紡錘車未成品 1	滑石 滑石 滑石	340
			3号住居址	工房	中	管玉 1 棗玉 1 白玉41 白玉未成品 3 勾玉(模) 1 勾玉(模)未成品1 有孔円板10	滑石 コハク 滑石 滑石 滑石 滑石	

36. 山武郡芝山町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
7	下吹入東台遺跡	下吹入	3号住居址	工房	中	紡錘車1 未成品 剥片	滑石 コハク コハク	340

37. 香取郡多古町

1	新城遺跡	西古内字新城	3号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	滑石	316
			13号住居跡	竪穴住居		有孔円板1 紡錘車1	滑石 滑石	
			22号住居跡	竪穴住居		丸玉1	滑石	
2	林遺跡	林字長井戸	27号住居跡	竪穴住居	後	紡錘車	滑石	生産42 293
			93号住居跡	竪穴住居	後	石製品未成品		
			94号住居跡	竪穴住居	中	紡錘車 有孔円板4	滑石	
			97号住居跡	竪穴住居	後	剣形品未成品 有孔円板2	滑石	
			100号住居跡	竪穴住居	中	勾玉(模) 有孔円板2 紡錘車	滑石 滑石 滑石	
			104号住居跡	工房	中	白玉 白玉未成品 有孔円板	滑石 滑石 滑石	
			105号住居跡	工房	中	白玉 白玉未成品	滑石 滑石	
106号住居跡	工房	中	剣形品 有孔円板	滑石 滑石				
108号住居跡	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板1	滑石 滑石				
3	馬場ノ台遺跡	南玉造字馬場台		散布地		勾玉 有孔円板 紡錘車	滑石	105
4	大原遺跡	大原字台畑						236
5	駒木台(岩坂)遺跡	岩坂	1号住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	315
6	八田遺跡	小櫃	第2号住居跡	竪穴住居	奈良	小玉 円板		237
7	大谷遺跡	東松崎字大谷		散布地		小玉 石製模造品		分(2)
8	土持台遺跡	水戸字土持台	1号跡	竪穴住居	後	白玉未成品1 剣形品1 有孔円板5		317
			4号跡	竪穴住居	後	白玉2		
			19号跡	竪穴住居	後	紡錘車1	蛇紋岩	
9	坊田遺跡	南和田字坊田	1号跡	竪穴状遺構	古墳	勾玉	蛇紋岩	315
10	椿湖神社付近	久賀				剣形品		72

38. 八日市場市

1	大堀遺跡	大堀字水喰台		散布地		白玉		分(2)
2	小山遺跡	飯塚字小山	41号址	竪穴住居	中	有孔円板1 勾玉1		318
3	広之台遺跡	飯塚字広之台	18号址	竪穴住居	中	管玉1	滑石	318

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
3	広之台遺跡	飯塚字広之台	22号址	竪穴住居	前	管玉1	滑石	318
4	柳台遺跡	飯塚字柳台	108号址	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	318
			139号址	竪穴住居		紡錘車1		
			217号址	竪穴住居	中	有孔円板1	滑石	

41. 銚子市

1	西町遺跡	長塚町	1号土壌	土壌		勾玉1	メノウ	260
			3号住	竪穴住居	後	剣形品1		
2	野尻遺跡	外川町	14号遺構			勾玉	緑泥片岩	158
			第16号住居址	竪穴住居	後	棗玉	コハク	
			第17号住居址	竪穴住居	後	管玉	碧玉	
			第26号住居址	竪穴住居	後	勾玉	ヒスイ	
			第28号住居址	竪穴住居	後	勾玉	チャート	
			第51号住居址	竪穴住居	後	管玉	滑石	
3	下之口遺跡	小浜下之口		散布地		石製模造品		分(2)
						石製模造品(未成品)		
4	篠竹遺跡	正明寺町		散布地				分(2)
5		三崎町				剣形品		22
						有孔円板		

42. 山武郡山武町

1		下布田				子持勾玉		218
---	--	-----	--	--	--	------	--	-----

44. 山武郡松尾町

1	古和大塚遺跡	古和		表採		刀子形品		105
---	--------	----	--	----	--	------	--	-----

45. 匝瑳郡光町

1	小田部遺跡	小田部		表採		剣形品		105
---	-------	-----	--	----	--	-----	--	-----

49. 東金市

1	道庭遺跡	道庭		工房	古墳	剣片	滑石	生産45
2	久我台遺跡	松之郷久我台	SI23	竪穴住居	後	勾玉	メノウ	366
			SI18	竪穴住居	平安	紡錘車		
			SI24	竪穴住居	平安	紡錘車		
			SI38	竪穴住居	平安	紡錘車		
			SI39	竪穴住居	平安	紡錘車		
			SI70	竪穴住居	奈良	紡錘車		
			SI95	竪穴住居	平安	紡錘車		
			SI103	竪穴住居	後	紡錘車		
			SI108	竪穴住居	後	紡錘車		
			SI133	竪穴住居	後	紡錘車		
			SI199	竪穴住居		勾玉	メノウ	
			SI242	竪穴住居	後	紡錘車		
			SI243	竪穴住居		紡錘車		
3	平蔵台遺跡	松之郷字金谷	B区			勾玉		69
			A区			有孔円板		

49. 東金市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
3	平蔵台遺跡	松之郷字金谷	A区			紡錘車		69
4	妙経遺跡	松之郷	SI003	竪穴住居	後	丸玉1		実見
			SI010	竪穴住居	後	罫玉1	コハク	
			SI017	竪穴住居	後	丸玉1		
			SI027	竪穴住居	後	丸玉1		
			SI113	竪穴住居	後	丸玉1		

50. 山武郡大網白里町

1	南前野遺跡	金谷郷字前野				勾玉		抄84
2	中林跡	砂田		包含層		有孔円板		抄85

52. 市原市

1	土字大城台遺跡	土字大城台			古墳?	石製模造品		抄75・76	
2	山倉洋服遺跡	山倉洋服			古墳	勾玉		分(3)	
3	南中台遺跡	惣社				石製模造品		抄72・73	
4	加茂遺跡A・B	加茂字内山				石製模造品		抄74・75	
5	川焼台遺跡	草刈字川焼台	299号址		古墳	管玉1 有孔円板1	緑色凝灰岩 滑石	実見	
			G5-8グリッド			大型子持勾玉1	粘板岩		
6	鶴牧遺跡	草刈字鶴牧				石製品 玉類		抄85	
7	押沼第1遺跡	押沼字新田谷		包蔵地		管玉		県年89	
8	五所四反田遺跡	五所字四反田	39号溝	溝	中	子持勾玉 石製模造品		442	
9	市原条里制遺跡実信地区	菊間字実信		包含層	前	大型管玉1 勾玉1	碧玉 メノウ	実見	
10	市原条里制遺跡市原地区	市原		包含層		勾玉1	メノウ	実見	
11	ばあ山遺跡	草刈字大坪		表採		勾玉(丁字頭)1	滑石	191	
12	草刈遺跡A区	草刈字下切付他	2号跡	竪穴住居	前	勾玉1	碧玉貫	239	
			30号跡	竪穴住居	中	勾玉(粗製)1 白玉(欠損)1	滑石 滑石		
			74号跡	竪穴住居	古墳	管玉1	緑色凝灰岩		
13	草刈遺跡B区 (貝塚)	草刈	230-A号址			有孔円板1	滑石	321	
			387-A号址	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石		実見
			427号址	竪穴住居	後	紡錘車1	滑石		
14	草刈遺跡C区	草刈	123-B号址			紡錘車形石製品1	緑色凝灰岩	実見	
15	草刈遺跡G区	草刈	170号址			紡錘車1	滑石	実見	
16	草刈遺跡H区	草刈	317号址			管玉1	蛇紋岩	実見	
17	草刈遺跡I区	草刈	057号址			有段紡錘車1	緑色凝灰岩	実見	
			385号址			管玉3	緑色凝灰岩		
18	草刈遺跡	草刈	29号址	祭壇関連?	古墳	有孔円板2	輝緑片岩	294	
19	草刈貝塚	草刈字扇谷津		グリッド		勾玉未成品1		421	
20	原遺跡	姉崎字原	第23号住居址	竪穴住居	中	白玉13 勾玉(模)1 有孔円板3	滑石 滑石 滑石	262	
						表採	勾玉1		蛇紋岩

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
21	大厩遺跡	大厩	K-6号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	107
			K-9号址	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
22	姉崎台遺跡	姉崎字台	2-2-拡トレンチ	包含層	古墳	剣形品1	滑石	70
23	番後台遺跡	養老字番後台北方	019号住居跡	竪穴住居	中	剣形品2 有孔円板1 紡錘車	滑石 滑石 滑石	217
			025号住居跡	竪穴住居	中	剣形品2	滑石	
			039E号住居跡	竪穴住居	中	管玉1	滑石	
			044号住居跡	竪穴住居	中	剣形品1 有孔円板1	滑石 滑石	
			072C号住居跡	竪穴住居	中	管玉1	滑石	
				表採		有孔円板2 剣形品1	滑石 滑石	
24	潤井戸西山遺跡	潤井戸字西山	K-5号住居跡	竪穴住居	後	管玉1	蛇紋岩	320
			K-14号住居跡	竪穴住居	後	勾玉1	蛇紋岩	
			K-16号住居跡	竪穴住居	後	白玉1	蛇紋岩	
			K-21号住居跡	竪穴住居	前	垂飾品1	蛇灰岩	
25	下鈴野遺跡	潤井戸字上清水谷	02号住居跡	竪穴住居	前	勾玉	滑石	342
			19号住居跡	竪穴住居	前	管玉3	蛇紋岩	
						管玉2 勾玉1 勾玉1 白玉(小玉)1	滑石 ヒスイ メノウ 蛇紋岩	
			20号住居跡	竪穴住居	前	紡錘車形石製品1	緑色凝灰岩	
			21号住居跡	竪穴住居	前	勾玉1	滑石	
26	皿郷田茂遺跡	平野	1号遺構	竪穴住居	前	管玉1	滑石	264
27	山見塚遺跡	立野字山見塚	36トレンチ	包含層		勾玉	滑石	343
28	文作遺跡	葉木字文作	竪穴住居73	竪穴住居	後	管玉1	緑色凝灰岩	395
			竪穴住居74	竪穴住居	後	双孔円板1	蛇紋岩	
			竪穴住居76	竪穴住居	平安	勾玉1	蛇紋岩	
			土坑13	土坑	古墳	歯玉未成品1	コハク	
29	神崎祭野遺跡(仮)	神崎祭野		表採	古墳	勾玉(模)1 有孔円板2	滑石? 滑石?	
30	姉崎宮山遺跡	姉崎字宮山	05遺構	竪穴住居	後	管玉1 白玉(小玉)8	滑石 滑石	443
31	小田部向原遺跡	小田部字向原	01遺構	周溝		磨製石剣(剣形品)1 有孔円板2	蛇紋岩 滑石	443
32	草刈六之台遺跡	草刈字六之台	929号址	玉作工房	前	勾玉 管玉 管玉未成品 刷片		実見 県年13 270・407
			23号址	溝		剣形品2 管玉2 管玉未成品2	滑石 滑石 緑色凝灰岩	
			57号址	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
			63号址	竪穴住居	後	有孔円板1 切子玉1	滑石 水晶	
			71号址	竪穴住居	後	有孔円板1	滑石	
			92号址	竪穴住居	前	管玉1	滑石	

52. 市原市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
32	草刈六之台遺跡	草刈字六之台	112号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	実見 県年13 270~407
			120号址	竪穴住居	後	勾玉(模)1 有孔円板1 白玉27	滑石 滑石 滑石	
			121号址	竪穴住居	後	有孔円板2 白玉3	滑石 滑石	
			123号址	竪穴住居	前	白玉1	滑石	
			137号址	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	
			138号址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	
			140号址	竪穴住居	後	有孔円板1 白玉24	滑石 滑石	
			147号址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	
			150号址	竪穴住居	後	有孔円板1 白玉1	滑石 滑石	
			156号址	竪穴住居	後	白玉3	滑石	
			158号址	竪穴住居		白玉3	滑石	
			159号址	竪穴住居	後	白玉22	滑石	
			212号址	竪穴住居	後	有孔円板3	滑石	
			227号址	竪穴住居		管玉1	緑色凝灰岩	
			251号址			有孔円板1	滑石	
			310号址	竪穴住居	後	白玉2 有孔円板1	滑石 滑石	
			311号址	竪穴住居	前	白玉2 管玉1	滑石 緑色凝灰岩	
			313号址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	
			316号址	竪穴住居	後	白玉3	滑石	
			343号址			管玉1	緑色凝灰岩	
			373号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			389号址	竪穴住居	前	有孔円板1	滑石	
			742号址	竪穴住居	後	剣形品1	滑石	
			745号址	竪穴住居	後	丸玉1	蛇紋岩	
			748号址	竪穴住居	平	勾玉(模)1	滑石	
			770号址	竪穴住居	後	有孔円板2	滑石	
			776号址	竪穴住居	平	白玉1	滑石	
			778号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			803号址	竪穴住居	前	白玉1	滑石	
			806号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			818号址	竪穴住居	後	白玉3	滑石	
			821号址	竪穴住居	後	有孔円板2	滑石	
			825号址	竪穴住居	後	勾玉(模)1	滑石	
			849号址	竪穴住居	後	白玉1	滑石	
			850号址	竪穴住居	平	勾玉1 白玉1	滑石 滑石	
			852号址			白玉1	滑石	
			853号址	土壙		白玉1	滑石	
			854号址	竪穴住居	前	白玉1	滑石	
			864号址	竪穴住居	後	白玉8	滑石	
			865号址	竪穴住居	後	白玉2	滑石	

52. 市原市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
32	草刈六之台遺跡	草刈字六之台	870号址			白玉5 勾玉(模)1	滑石 滑石	実見 県年13 270~407
			902号址	ビット		白玉1	滑石	
			903号址	ビット		白玉2	滑石	
			932号址	溝		白玉1	滑石	
			935号址	ビット		勾玉未成品1	滑石	
			940号址	ビット		白玉1	滑石	
			961号址			勾玉(模)1 有孔円板未成品1	滑石 滑石	
			963号址			勾玉1 剣1 刀子1		
			1004A号址			管玉1	緑色凝灰岩	
		グリッド		白玉63 剣形品2 有孔円板2 勾玉(模)1 管玉2 管玉未成品1 紡錘車1 鏡形1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 緑色凝灰岩 砂岩 滑石			
33	中永谷遺跡	草刈字中永谷	1号住居跡	竪穴住居	後	管玉1		444
			4号住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			21号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板3	滑石	
			32号住居跡	竪穴住居	後	白玉1		
			70号住居跡	竪穴住居	後	管玉1	碧玉	

53. 長生郡長柄町

1	落井遺跡	長柄山・落井		包含層	古墳	石製模造品		分(3)
---	------	--------	--	-----	----	-------	--	------

54. 茂原市

1	中鹿子第2遺跡	桂字内野				玉類 紡錘車		分(3)
---	---------	------	--	--	--	-----------	--	------

57. 長生郡長南町

1	今泉遺跡	今泉字堀之内外	C地点F5-83グリッド	包含層		管玉1	ヒスイ	423
			C地点F5-94グリッド	包含層		丸玉1	滑石	
2	根台遺跡	芝原字根台		包含層	前	子持勾玉1	滑石	実見

58. 長生郡睦沢町

1	熊野神社裏遺跡	寺崎		包含層	古墳	子持勾玉1 紡錘車		分(3)
---	---------	----	--	-----	----	--------------	--	------

60. 袖ヶ浦市

1	金井崎遺跡	神納・金井崎			古墳	石製模造品		分(3)
2	宮ノ台遺跡	岩井字宮ノ台		製作遺跡 祭祀遺跡	古墳	白玉6 剣形品24 有孔円板12 破片7	滑石? 滑石 滑石 滑石	生産53 47

60. 袖ヶ浦市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	宮ノ台遺跡	岩井字宮ノ台		製作遺跡 祭祀遺跡		石屑 7 石 紡錘車 1	滑石 滑石 滑石	生産53 47
3	野田遺跡	野田		工房	古墳	白玉 白玉未成品 管玉 管玉未成品 原石	滑石 滑石 碧玉 滑石 滑石	生産54 123
4	念仏塚遺跡	岩井字念仏塚	B-02-10グリッド	包含層		剣形品 1	滑石	344
			A-08-04グリッド	包含層		双孔円板 1	滑石	
5	大竹遺跡群 二又堀遺跡	大竹			古墳	勾玉 管玉		君年90
6	大竹遺跡群 尾畑台遺跡	下根岸字尾畑台			古墳	勾玉 石製模造品		君年90
7	大竹遺跡群 向神納里遺跡	下根岸字鞍ノ台			古墳	管玉		君年90
8	大竹遺跡群 向神納里遺跡	大竹字神納里台			古墳	有孔円板	石製	君年90
9	文脇遺跡	野里	192号住居址	工房	古墳	白玉 白玉未成品 勾玉(模)未成品 1 剣形品 原石	滑石 滑石 滑石 滑石	427
10	美生遺跡群第1地点	久保田字小台台				勾玉		君年90
11	美生遺跡群第7地点	久保田字須多連	第9号住居址	竪穴住居	前	管玉 1	滑石	君年91
12	滝ノ口向台遺跡	滝ノ口向台		祭祀跡	古墳	子持勾玉 1 白玉 3 有孔円板 4 紡錘車 3		分3) 47
13	境遺跡	下新田	第23号住居址	竪穴住居	前	勾玉 1	蛇紋岩	295

61. 木更津市

1	菅生遺跡	菅生・睦喜		包含層		璽玉 1 丸玉 2 白玉 3 剣形品 1		173
2	大山台遺跡	請西字大山台	第4号住居址	竪穴住居	中	勾玉(模) 1 有孔円板 1	滑石 滑石	150
			第253号住居址	竪穴住居	中	有孔円板 1	滑石	
			第281号住居址	竪穴住居	中	勾玉 1		
			第121号住居址	竪穴住居	古墳	剣形品 1 有孔円板 1	滑石 滑石	
			第247号住居址	竪穴住居		勾玉 剣形品		
			第240号住居址	竪穴住居		白玉15 有孔円板 1		
			第148号住居址	竪穴住居		有孔円板 1		
		第176号住居址	竪穴住居		勾玉 1 剣形品 1 有孔円板 1			

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
2	大山台遺跡	請西字大山台	第245号住居址	竪穴住居		有孔円板 1		150
			第246号住居址	竪穴住居		有孔円板 1		
			第1号住居址	竪穴住居	古墳	勾玉(模) 1		
			第251号住居址	竪穴住居	古墳	有孔円板 1		
			第258号住居址	竪穴住居	古墳	有孔円板 1		
			第259号住居址	竪穴住居	古墳	勾玉(模) 1		
3	山伏作遺跡	請西	第5号住居址	竪穴住居	中	剣形品 1		150
4	花山遺跡	矢那字花山	4号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1 丸玉 1		367
			7号住居跡	竪穴住居	古墳	有孔円板		
			27号住居跡	竪穴住居	後	剣形品片 1		
			35号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1 丸玉 1		
			78号住居跡	竪穴住居	後	丸玉 1		
			156号住居跡	竪穴住居	後	丸玉 1 小玉 1 白玉10 有孔円板 1		
			158号住居跡	竪穴住居	後	勾玉 1 円板 1		
5	マミヤク遺跡	小浜字マミヤク	171号住居跡	竪穴住居		有孔板 1		396
			49号住居跡	竪穴住居	前	勾玉 1	ヒスイ	
			53号住居跡	竪穴住居	中	白玉 1	滑石	
			64号住居跡	竪穴住居	中	白玉 1	滑石	
			66号住居跡	工房	中	白玉未成品15 剥片約60	滑石 滑石	
			149号住居跡	竪穴住居	中	剣形品 2	滑石	
			152号住居跡	竪穴住居	中	白玉 1	滑石	
			1号祭祀遺構	祭祀跡	中	管玉 1 白玉2247 白玉未成品12 勾玉(模) 4 剣形品 6 有孔円板12 鏡形品 1 鏡形品未成品 2 荒割剥片 9	碧玉 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	
			2号祭祀遺構	祭祀跡	中	勾玉(模) 1 有孔円板 2 白玉13	滑石 滑石 滑石	
			52号住居跡	竪穴住居	後	有孔円板 1	滑石	
			141号住居跡	竪穴住居	後	白玉 1	滑石	
			142号住居跡	竪穴住居	後	原石 1	メノウ	
			6	宮脇遺跡	田川字星谷			
7	浜清水遺跡	畑沢字浜清水	1号住居跡	竪穴住居	中	白玉 9	滑石	424
			2号住居跡	竪穴住居	中	白玉 3 有孔円板 1	滑石 滑石	
8	丹邊遺跡	茅野字祈禰町		竪穴住居	古墳	白玉 剣形品 有孔円板	滑石 滑石 滑石	369

61. 木更津市

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
9	蓮華寺遺跡	矢那字蓮華寺	017号住居跡	竪穴住居	前	勾玉 1	ヒスイ?	370
10	依ヶ谷遺跡	小浜字房谷		竪穴住居	古墳	管玉 白玉 有孔円板	滑石 滑石 滑石	371
11	芝野遺跡	上望陀	SE-002	井戸	古墳	管玉 1	緑色凝灰岩	実見
12	請西遺跡群鹿島塚B遺跡	請西字鹿島塚		竪穴住居	古墳	紡錘車 有孔円板 管玉	滑石?	君年91
13	請西遺跡群中郷谷遺跡	請西字中郷谷			古墳	勾玉 紡錘車		君年91
14	川崎長六台遺跡(仮)	根岸字川崎			古墳	剣形品 1	滑石?	47

62. 君津市

1	外箕輪遺跡					石製品		398
2	新御堂荘台遺跡	新御堂・中荘台		包含層 (製作遺跡)		白玉 剣形品 有孔円板		生産52 23・297・ 427
3	富崎神社裏遺跡(仮)	戸崎			古墳	白玉 白玉(模) 剣形品 有孔円板		分(3) 47
4	郡条里遺跡	郡字切田				勾玉(模) 剣形品	滑石?	分(3)
5	常代遺跡	常代字上槍添				管玉 紡錘車		君年91
6	上野台遺跡	貞元・四筋				勾玉(模)		分(3)
7	天神台遺跡	上字天神台				勾玉		君年91

63. 富津市

1	大明神原遺跡	岩瀬字大明神原		表採 玉作工房?		管玉未成品 1 勾玉?	碧玉	200
2	打越遺跡	飯野字打越				勾玉 管玉		抄89
3	加藤遺跡	加藤字入道下		竪穴住居	後?	勾玉	滑石	君年91

64. 夷隅郡夷隅町

1	台遺跡	行川字台				勾玉 管玉		分(3)
---	-----	------	--	--	--	----------	--	------

66. 夷隅郡大多喜町

1	舟子遺跡	森宮		包含層		玉類		分(3)
---	------	----	--	-----	--	----	--	------

72. 安房郡鋸南町

1	田子台遺跡	下佐久間字田子台		表採		有孔石製品 1	滑石	19
---	-------	----------	--	----	--	---------	----	----

73. 安房郡富山町

1	寿楽台遺跡	高崎字若宮				有孔石製品 1	滑石	19
---	-------	-------	--	--	--	---------	----	----

76. 安房郡丸山町

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の種類	時代	出土玉類	石材	文献
1	莫越山神社遺跡	宮下字石神畑・東畑		祭祀跡		喪玉	コハク?	分(3)

78. 館山市

1	沼大戸入遺跡	沼字大戸入			古墳	白玉		
---	--------	-------	--	--	----	----	--	--

80. 安房郡白浜町

1	見上遺跡	滝口字見上			古墳	白玉	滑石	抄88
2	小滝涼源寺遺跡	白浜字小滝涼源寺	SX-01	祭祀跡	前・中	白玉223 白玉未成品1 有孔円板5 剣形品6 管玉2 勾玉1	滑石 滑石 滑石 滑石 滑石 滑石	400
			SX-02	祭祀跡	前・中	白玉1 有孔円板5 剣形品4	滑石 滑石 滑石	
			SX-09	祭祀跡	中	勾玉1	滑石	
			SX-12	祭祀跡	前・中	管玉1 勾玉1 有孔円板1	滑石 滑石 滑石	
			SX-13	祭祀跡	前	有孔円板1 剣形品1	滑石 滑石	
			SX-16	祭祀跡	前・中	剣形品1	滑石	

3. 千葉県内玉作遺跡の概要

ここでは千葉県内玉出土遺跡の集成に基づき、縄文時代の攻玉、古墳時代の玉作、および石製模造品の生産が行われていたと考えられる遺跡について、その概要をまとめた。玉類の記載は集成表との重複をなるべく避けるようにし、遺跡の立地、周辺環境、調査歴、検出遺構、出土遺物等について簡単に記述した。以下に紹介する遺跡のなかには、発掘による検証を経ていなかったり、正式な報告書が未刊行である例も含まれ、今後追加されることは無論、訂正される部分もあると予想される。あくまでも現段階での遺跡認識の一端ということである。

(1) 縄文時代

印旛郡印西町

竹袋遺跡(天神台貝塚)

[文献30・406]

利根川に北面し、竹袋支谷と呼ばれる小谷の奥部左岸、標高約20mの台地上に所在し、谷との比高は10mを計る。1960年に「印旛・手賀沼干拓に伴う埋蔵文化財調査」の一環として調査され、縄文時代中期～晩期の土器を伴う7か所の地点貝塚が確認された。この折にヒスイ製の丸玉1点が表採された。その後小野良弘氏による踏査資料によって多量の丸玉半成品、未成品、原石、砥石が明らかになり、遺跡内において玉類の製作が行われていたことが確認された。さらに成品、未成品の石材にヒスイが認められることにより、硬玉の攻玉遺跡である可能性を高めている。発掘による検証は行われていないが、後～晩期に属すると考えられる。

また、小野氏表採資料には、古墳時代の石製模造品である、白玉、勾玉、剣形品、有孔円板も多数含まれており、石製模造品工房か祭祀跡の存在も予想される。

八千代市

神野貝塚

[文献406]

印旛沼の西端で新川に面した標高15m前後を計る台地上に位置する。縄文時代中期中葉から後期にかけての集落遺跡で、点在貝塚が存在する。発掘による調査は実施されていないが、小野良弘氏によって、垂飾、垂飾未成品、勾玉、丸玉、原石が表採されている。成品のほか未成品や原石も多く、本遺跡において玉類の製作が行われていた可能性は十分ある。採集されている土器から、縄文後期後半の攻玉遺跡と考えられる。

佐倉市

神楽場遺跡

[文献406]

印旛沼に注ぐ手繰川に開析された標高25m～28mの舌状台地上に立地する。同台地の南東部には、弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする集落跡と、前方後方墳、方形周溝墓群が調査された飯合作遺跡が位置する。遺跡の範囲は台地全域に広がり、その時代も先土器時代から中・近世にわたる。

縄文時代は前・中・後・晩期の遺物を認め、一部遺構の調査が行われている。玉関係については、発掘による成果は得られていないものの、小野良弘氏によって、垂飾、垂飾未成品、丸玉、原石が表採されている。なかでも硬玉、滑石(蛇紋岩)を主にした原石、剥片の数多さには目を見張るものがある。ヒスイも多く認められるところから、硬玉製玉類の生産も行われていたと推測される。時期の限定は困難であるが、採集土器から縄文時代後期から晩期の所産と考えられ、その時期の攻玉遺跡として位置づけることが可能である。

銚子市

粟島台遺跡

[文献15・216・404・418・440]

県の北東端、太平洋に突き出す銚子に所在する。犬吠埼からやや西側の広大な範囲に、縄文時代前期から後期初頭におよぶ遺跡が展開し、台地上、低湿地など地点を異にして存在する。1973年道路拡幅工事に伴い、寺村光晴氏を団長とする発掘調査が実施された。調査地点における標高は、8m～10mの低地で、68グリッド242㎡の発掘が行われている。この調査での特筆事項は、1959年・1960年の大場磐雄氏の発掘で注目されたコハクの存在が、再び確認されたことである。完成品や未成品の検出はなかったが、阿玉台式土器から加曽利E式土器と供伴して、原石や剥片が出土した。また、同じように平砥石や筋砥石等の攻玉工具が検出され、遺跡内でのコハクの玉類の生産がほぼ確実となった。

次いで1989年には1973年の調査地点の北西部の調査が、粟島台遺跡発掘調査会によって行われ、56点ものコハクおよびコハク玉未成品が出土した。このような調査に裏付けられるように、本遺跡は銚子に産するコハクの加工の中心的な遺跡である可能性が大きく、中期の攻玉遺跡としての性格も益々補強されてきている。しかし、これまでの調査では、明確な形で工房が検出されていないので、この点今後の調査に期待がかかっているといえよう。

余山貝塚

[文献266・319・441]

利根川流域に発達する沖積低地に立地し、標高は4m～7mを計る。周辺に所在する縄文時代の遺跡としては、芦崎橋遺跡、柴崎遺跡などを挙げるができる。本遺跡が学会に知られるようになったのは明治30年代にまでさかのぼる。以後戦前までは、いわゆる珍品や人骨の発見を目的とした発掘が繰り返され、貝層部は大きな破壊を被ってしまった。戦後になると計画的な発掘が数度実施され今日に至り、多くの情報が蓄積された。そのなかで1988年に行われた調査は新たな重要な知見を加えた。この調査は貝層部から50m離れた高田川に沿った傾斜地であったにもかかわらず、後期中葉から弥生時代初頭までの土器の発見があり、さらに多量の石器とともに玉類等も出土し注目された。

玉類は包含層中から21点出土している。数量的にはわずかであるものの、原石、未成品、成品が認められ、成品の形態には丸さがあり厚いつくりを呈するもの、周辺が角張っているもの、管玉状が存在する。これらの穿孔方向には両側と片側の二種があり、石材にヒスイをもつ。また使用対象が特定できない砥石類が多量に出土している。包含層からの検出であるため明確な時期比定は無理としても、状況から判断して、後期後半以降に生産されたものと考えられる。より具体的な遺構と遺物類による検証を待つが、ヒスイを含む攻玉遺跡の一つになるであろう。

市原市

武士遺跡

[県年89]

遺跡は養老川東岸の標高75m～78mの南北にのびるほぼ平坦な台地上に位置し、その東側と西側は村田川によって開析された谷が入り込んでいる。南側は急斜面が形成され、養老川に開析された低地へと続いている。周辺には、縄文時代後期の集落遺跡である勝間遺跡や、縄文時代後期と弥生時代後期の住居跡を検出した武士遺跡、埴輪が墳丘に二段に巡る全長約60mの人見塚古墳や、国分寺に先行し建立されたと考えられている武士廃寺の推定地などが知られている。調査は、千葉県水道局による浄水場建設に先行して1987年4月から1990年3月まで実施され、48,000㎡の面積について調査が行われた。調査対象地全面にわたって縄文時代早期から晩期に至るまでの遺物が検出されている。また弥生時代中期の再葬墓・堅穴住居・方形周溝墓が検出されている。歴史時代以降では方形周溝状遺構・火葬墓が検出されている。中でも縄文時代の遺構・遺物は、中期末から後期にかけてのものが主体を占め、堅穴住居・土坑・埋甕等が検出されている。

II 基礎資料

縄文時代晩期後葉の包含層は約15mの範囲に集中して出土し、氷I式併行の時期と考えられ、これらの土器群に伴って滑石製白玉類の成品・未成品が出土している。遺構に伴うような集中の仕方はみられないが、滑石製玉類の工場の存在がうかがわれるとしている。原材にヒスイは認められず、使用石材の産地が県内に求められる可能性もある。

夷隅郡大多喜町

堀之内上の台遺跡

[文献174]

清澄山系の植野あたりから流れ出し、蛇行を繰り返しながら太平洋へそそぐ夷隅川の中流域、三方をその川に囲まれる標高51m～54mの舌状台地上に所在する。遺跡は縄文時代を中心に、中世の城館址とも考えられているが、現在後者の名残りはほとんど見当たらない。周辺には夷隅川と密着した遺跡が数多く立地している。1978年、遺跡の中央部に豚舎が建設されることになり、夷隅郡教育委員会によって1,056㎡の発掘調査が行われた。発見された遺構は、縄文時代後期末から晩期に属する竪穴住居2軒、土壇墓5基、水場遺構3か所、溝状遺構1条、それに遺物包含層である。遺物は、土器では安行1・2・3a・3b・3c式、姥山Ⅱ・Ⅲ式、前浦式、大洞C1・C2、A式などがあり、石鏃、スクレイパー、磨製・打製石斧、礫器等の石器類、石剣、石棒の石製品と玉類が検出された。

玉類は、棗玉様の完成品1点、同未成品2点、白玉の完成品1点、欠損品4点、半成品5点と剥片、原石が認められる。完成品の作りは精巧で、棗玉様、白玉の両成品は両側からの穿孔であることが観察される。白玉2点が竪穴住居の覆土中から出土した以外は包含層、あるいは表面採集によるが、時期的には安行3b式から前浦式に伴っていたものと考えられている。これら玉類の石材には滑石が用いられており、蛇紋岩を産する嶺岡山系を控えている立地条件から、原材を入手し遺跡内で成品に加工していたことも考えられている。使用されている石材が油脂光沢をもち、硬さが爪の先でも傷をつけられる程度であることから滑石と考えられ、嶺岡山系に産する蛇紋岩の性質と必ずしも一致しないので、石材の産地についてはなお慎重を要する段階である。いずれにせよ縄文時代後晩期の攻玉遺跡の一つとみなすことのできる遺跡であり、工場の検出の可能性も高く、石材の産地同定とともにそれも待たれるところであろう。

勝浦市

長者ヶ台遺跡

[文献108・125]

房総半島の南東部、太平洋に面する標高110mの丘陵頂部に、約300m×300mの範囲をもって所在する。1969年以来立教大学考古学研究会によって実施されている、夷隅川上流の遺跡分布調査の報告により明らかになった。また、周辺の丘陵斜面や舌状台地上には、縄文時代前・中期の遺跡が確認されている。

遺跡の調査は1973年・1974年と1990年に実施されている。玉類は花積下層期、黒浜期の竪穴住居からの出土がある。そのなかには完成品1点のほか未成品、砥石が含まれているものの、数量的には僅かであり、いずれも工場に比定する材料には乏しい。資料的に充実しているのは、遺跡の発見者である吉野忠衛氏の集められた塊状耳飾と数種の不定形の玉類である。特に塊状耳飾については、剥片をはじめ、平らな円盤状に加工した段階、それに穴をあけたもの、完成品がそろっており、製作工程を復元し得る資料として注目される。他の玉類も含め、その石材の多くが油脂光沢をもった滑石で、蛇紋岩が近くの嶺岡山系で産することから、石材の搬入と加工が考えられている。石材の産地を明かにすることは今後の課題であるが、この地において有孔飾玉類が生産されていたことは疑いないだろう。時期的には前期に比定できるので、県内の数少ない攻玉遺跡のなかでは最も古く位置づけられる。

(2) 古墳時代

野田市

尾崎梨ノ木遺跡

[文献301]

県の北西部で、五駄沼と江戸川とはさまれた、標高13m～15mの細長い台地上に立地する。1983年に小学校の建設に伴い、野田市教育委員会が27,000㎡の発掘調査を行った。

検出した遺構は、古墳時代中期から後期の竪穴住居5軒、平安時代の竪穴住居2軒などである。古墳時代に属する5軒の竪穴住居のうち3軒から、石製模造品の未成品、剥片が出土し、石製模造品工房の可能性もたれる。特に第2号住居址からは、白玉の未成品を主に、有孔円板、勾玉とみられる未成品が伴い、また砥石も出土している。遺構の平面形はいずれも正方形に近く、対角線上の4か所に柱穴を配し、コーナー部に貯蔵穴を設けている。

松戸市

殿平賀向山遺跡

[文献331]

県の北西部で、古利根川に開口する中金支谷と横須賀支谷によって形成された、先端のふくらむ舌状の台地に立地し、標高は16m～20mを計る。同一台地の西端には古墳時代後期の竪穴住居が検出された、馬屋敷遺跡、大谷口遺跡が位置する。

1986年に住宅の建設に伴い、1,300㎡の発掘調査が行われ、縄文時代の竪穴住居5軒、古墳時代の竪穴住居3軒などを検出した。古墳時代の竪穴住居のうちの2軒に石製模造品が伴い、中期に比定される7号住居址からは、滑石製勾玉の未成品が出土した。他に剥片や工具が認められないため、この竪穴住居が石製模造品の工房であったとは断定できないものの、付近に工房が存在する可能性は指摘できよう。

印旛郡栄町

酒直遺跡第3地点

[文献306]

利根川と印旛沼の間に半島状に突き出た、標高30mの台地上に所在する。この台地は、利根川から浸入するいくつもの谷によって複雑に刻まれており、竜角寺はじめ殖生郡衙推定地である大畑遺跡、竜角寺古墳群などの重要な遺跡をのせている。また本遺跡の北側には唐三彩の陶枕を出土した向台遺跡が接し、浅い谷をはさんで大畑I遺跡があり、南東へ約1.2kmの地点には前原I遺跡が立地する。

調査は宅地造成に伴い、1980年から1982年にかけて同遺跡調査会によって実施された。発掘地点は3地点に分かれ、第1地点は古墳を主とし、同一遺跡と考えられる第2・3地点からは、古墳時代中期から奈良時代にかけての176軒の竪穴住居の検出をみた。中心となる時期は古墳時代後期である。

第3地点のほぼ中央に位置する043号住居址の1軒が石製模造品工房に比定される。住居の平面形は6.20m×6.45mの正方形に近く、中央部から北側に寄せて炉を設置している。柱穴は対角線上に4か所配され、北東の柱穴の周辺と、それと対向する南西の柱穴の周辺から、滑石製の白玉の未成品と滑石の剥片・細片が多量に出土した。しかし工具類の出土は認められず、土器の量も少ない。また本工房の特徴として、完成品が1点も含まれていないことが挙げられる。

前原I遺跡

[文献280]

印旛沼北東端で沼に面し、標高約32mの樹枝状に複雑に開析された台地上に位置する。南側隣接地にはみそ岩屋古墳が存在する。県道成田安食線建設に伴い、1980年に調査が実施され、古墳時代の住居6軒と土坑2基、方墳1基が検出された。竪穴住居のうち2軒が石製模造品工房である。まず1軒は、一部が未調査であったが、一辺6.2mの隅丸方形を呈する。遺物は有孔円板、剣形品、白玉未成品、

II 基礎資料

研磨した石片、チップが多数検出され、土器は埴1点だけが出土した。もう一軒は全掘され、一辺5.9mの隅丸方形を呈する。柱穴は5か所に検出されたところがあるが、南東隅のものは、形態と位置から考えて工作用のピットの可能性もたれる。炉はない。遺物は滑石製の白玉未成品、研磨した石片、多数の石片、原石が検出されている。土器は、埴、鉢、甕が出土している。2軒の工房共に、出土土器から、古墳時代中期に比定される。

龍角寺ニュータウン遺跡群No. 4 地点 [文献208]

北は利根川、南は印旛沼に挟まれ、根木名川流域の奥部に存在し樹枝状に開析された、標高約25mの台地上に立地する。龍角寺ニュータウンの造成事業に先立って1979年から1980年にわたって6地点の調査が実施され、縄文時代から奈良・平安時代にかけての集落・墳墓跡などが検出された。

6地点のうち最大の面積を有するNo. 4地点から、石製模造品工房が1軒検出されている。遺構は、4.8m×5.0mの隅丸方形を呈し、炉が1基、工作用とみられるピットが東側コーナーに位置している。南東側の東コーナー寄りの床面は、約1.0m×1.1mの方形の範囲のわずかな高まりが認められた。出土遺物は、滑石製模造品として白玉、多数の石屑のほかに紡錘車2の出土が認められる。土器類では埴、小型鉢、高杯が出土しており、それらからこの工房の時期が古墳時代中期に位置づけられる。本遺跡中ほかに同時期とみられる堅穴住居はなく、孤立した観の強い立地を示している。

龍角寺遺跡 [文献296]

印旛沼に南面する台地上で標高約30mを計る。表採品であるが、碧玉質の原石とみられる石が採集されており周辺に古墳時代の玉作遺跡の存在が想定されているが詳細は不明である。

成田市

磯部遺跡 [文献296]

利根川に北面する台地上に位置し、標高約20mを計る。1980年10月から11月にかけて調査が実施された。未報告のため詳細は不明であるが、古墳時代後期の工房が検出されたようである。

水掛遺跡 [文献296]

利根川から南に少し入り込んだ沖積低地の微高地上に位置し、標高3m～5mを計る。表採品ではあるが、古墳時代の剣形模造品の成品・未成品3点が採集され石製模造品製作遺跡とされているが、祭祀遺跡の可能性もありうると併記されている。

石塚遺跡（公津原Loc. 20） [文献196]

根木名川から入る2つの支谷に挟まれた標高33mの細尾根状の台地の基部にある。成田ニュータウン関係で1970年～1971年に調査された。古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居のほか古墳・掘立柱建物跡、鍛冶跡、また寺院と関係すると考えられる銅跡を検出した。

このなかで石製模造品工房は9軒で古墳時代中期に属する。出土遺物は白玉未成品が主体であるが、勾玉や剣形品の未成品も含んでいる。焼失により廃絶したものが多い。近くに玉作工房が発見された八代遺跡や外小代遺跡があり、これらと本遺跡との関連が注目される。また周辺の公津原古墳群には石枕や白玉を出土する古墳を含む。

八代遺跡（公津原Loc. 39） [文献94・196]

印旛沼東岸の標高30m程の台地上に立地し、現在一部が県指定史跡になっている。周辺の台地上には前方後円墳・前方後方墳を主墳とする総計100基以上の公津原古墳群（八代台古墳群・天王塚古墳群・瓢塚古墳群）が連なっている。また北方500mに外小代遺跡、北西2kmには大竹遺跡といった玉作遺跡がある。

1963年・1964年に八代花内遺跡の名称で調査され、東国における初めての玉作遺跡の調査として注

3. 千葉県内玉作遺跡の概要

目された。この調査で6軒の竪穴住居を検出し、玉作工房と判断されたのは第1・3・6号址の3軒で、いずれも焼失住居である。原石、管玉・勾玉・平玉等の各種未成品や剥片等を多数出土したほか、砥石・鉄器等の工具類を出土した。また第3号址検出の工作用ピットは大和田稲荷峰遺跡の第1号址検出の工作用ピットと同じ形式で攻玉技術も類似している。

その後、成田ニュータウンの造成に伴い1971年にも調査され、古墳時代前期の玉作工房7軒を検出した。やはり緑色凝灰岩の管玉未成品を多数出土した他、滑石製の管玉未成品等も出土している。

外小代遺跡（公津原Loc. 40）

[文献196]

小橋川に開析された支谷に面した舌状台地に立地し、集落と古墳を検出した。南西200mに八代台古墳群、同500mに八代遺跡がある。

成田ニュータウン関係で1971年調査された。弥生～古墳（前）・奈良・平安の集落で、竪穴住居84軒、玉作工房8軒、掘立柱建物跡、古墳3基を検出した。玉作工房は古墳時代前期のもので同時期の竪穴住居は22軒検出している。緑色凝灰岩による管玉の製作を主体としているが、大型管玉状石製品や勾玉の未成品、石製腕飾類の刳貫円板片等も出土している。この他に原石・砥石を出土した。

大竹遺跡

[文献101・131・152・183]

印旛沼に面する標高32mの台地上に位置する。1972年市の教育委員会が実施した市内埋蔵文化財分布調査で発見され、1974年に学術調査された。遺跡の南東に八代遺跡、外小代遺跡が所在し、遺跡周辺には大竹古墳群・上福田古墳群・龍角寺古墳群がある。

確認した遺構は12遺構で、このうち完掘したのは第1号址と第9号址の2軒である。第1号址は古墳時代前期に属する玉作・石製模造品工房で、2段に掘り込まれた工作用ピットを持ち、緑色凝灰岩を用いた管玉や管玉未成品のほか、白玉・橐玉状品・白玉未成品と、数千にのぼる剥片・石屑、及び原石2個等を出土した。また大型管玉状石製品（未穿孔）、出雲形砥石を出土したことは特筆される。また八代・大和田遺跡でみられない敲打施溝技法が確認された。このほか第2号址、第4号址も玉作・石製模造品工房であろうと推定される。八代遺跡とはほぼ同じ時期の玉作遺跡と考えられる。

市川市

杉ノ木台遺跡

[文献181]

県の西部、市川市東部の大柏谷に張り出す、通称柏井台から一段下った千葉第1段丘上に位置し、標高は11m～12mを計る。1974年、梨畑の施肥作業中に弥生時代終末期の広口壺が発見され、以後市立市川博物館によって継続的な調査が行われている。

発掘によって検出された遺構の時期は、縄文時代と弥生時代が主となる。古墳時代中期のH-1号住居址は台地の西側に位置し、1978年までの調査で、この1軒のみが古墳時代の所産に比定される。遺構の平面形は隅丸長方形を呈し、4.8m×3.4mの規模を有する。南東コーナー部に貯蔵穴をもつが柱穴はない。出土遺物は土師器の甕、高杯、埴、椀の土器類の他に、土玉7点、滑石を原材料とする有孔円板1点、白玉1点、若干の石片、それに軽石がある。報告では滑石の石片や、工具と考えられる軽石の出土から、石製模造品工房の可能性が高いとされている。

船橋市

夏見台遺跡

[文献49・132・133]

海老川支流に東西を挟まれた台地上に立地する古墳後期から奈良・平安の集落である。3次にわたって調査が行われた。

1次調査では21軒の竪穴住居を検出し、このうち古墳時代後期の住居は15軒であった。この中で古

II 基礎資料

い時期に属する4号址が石製模造品工房と推定される。炉は中央にあり、柱穴は遺構内のほか壁外にも検出した。遺物は白玉未成品や原石、多数の剥片等である。このほかにも白玉・管玉・有孔円板・紡錘車を出土する竪穴住居があり、このなかで白玉・管玉・砥石を出土した15号址については断定はしていないものの他の住居と違う性格をもつ可能性を指摘している。2次調査では、古墳時代後期の竪穴住居を13軒検出した。このうち7号址が石製模造品工房で、炉が存在する、南壁隅にピットが存在する、壁外にピットが存在する点などが第1次の4号址と共通する。

また3次調査で検出した第2・5・6号住居址からは未成品、原石を出土しておりやはり石製模造品工房である。

八栄北遺跡

[文献99]

海老川に挟まれた台地上に立地し、夏見台遺跡の北縁にあたる。1972年に調査された。古墳時代後期の竪穴住居のうち最大規模の3号址が石製模造品工房に比定される。焼失住居で、土師器のほか滑石の原石、白玉未成品多量の滑石屑、敲石様石器、砥石、軽石等を出土した。規模、出土遺物の種類と量以外は他の竪穴住居と大きな差異は認められない。

柏上遺跡

[文献81・185]

印旛沼に注ぐ神崎川の水源地近くの八木ヶ谷とその支谷の分岐する南側の台地上に位置する。1971年と1973年の2次にわたり調査が行われた。

竪穴住居を4軒検出し、いずれも古墳時代中期に属する。このうち第1号住居址と第4号住居址から有孔円板、剣形品を出土したが全て成品で未成品は含まない。また第1号住居址と第3号住居址から砥石を1点ずつ出土した。

白井先遺跡

[文献98]

印旛沼に流入する主要な河川神崎川の右岸台地上に立地する古墳時代中期から後期の集落である。千葉ニュータウン関係で1970年に調査が行われた。

白井先D地点を中心に石製模造品を伴う竪穴住居が検出された。古墳時代中期では11軒中9軒から、古墳時代後期では12軒中7軒から出土している。後期の竪穴住居に白玉を出土する例が1軒しかないのが特徴である。報告では石製模造品の製作については未成品の量が多くないことなどからその可能性は薄いとされている。また製作していたとしても、製作していた竪穴住居と完成品を保有していた竪穴住居の差は認められず、専門の石製模造品工房ではなく自家用製作の可能性を指摘している。

外原遺跡

[文献82]

東京湾に面した標高23mの舌状台地上に位置する古墳・平安時代の集落である。1970年に調査された。古墳時代中期に属する竪穴住居は10軒検出し、白玉・勾玉・剣形品・紡錘車・有孔円板等を出土した。このなかで3号址は成品・未成品等のほか原材・素材・砥石・軽石等を出土し、石製模造品工房であると推定される。構造は他の竪穴住居と大きな差がないが、最も規模が大きく鉄器の出土量も多い竪穴住居である。このほか第1・8・10号址でも滑石製品や製作工具、原材、素材が出土した。この時期の集落としては鉄器が豊富で羽口や小鉄挺を出土した竪穴住居(11号址)もある。

印旛郡白井町

中西山遺跡

[文献31]

印旛沼東端の支谷に開析された標高約18mの舌状台地上に位置し、調査は1960年8月に実施された。竪穴住居が2軒調査され、1軒は約4.8m×4.8mの方形を呈し、柱穴4か所、炉1基、貯蔵穴か工作用と考えられるピット3基が検出された。住居には焼土、炭化材がみられ焼失住居と思われる。遺物は、焼土の中から滑石製の白玉が1点と壺が1点出土している。もう1軒については、完掘されてい

3. 千葉県内玉作遺跡の概要

ないが、約4.7m×4.7mの方形になるものとみられ、柱穴は確認されなかったが、貯蔵穴もしくは工作用ピットとみられる径82cm、深さ65cmのピットが検出されている。炉は、1基検出され、床面に焼土が散布していたことから焼失住居と考えてよからう。出土遺物は、滑石製の紡錘車、剣形品、石製模造品の破片が床面中央から、壁際に砥石、ピットの端から石製模造品の破片が出土している。土器は、甕5、椀1、土玉2が検出されている。石製模造品類は、滑石製の紡錘車1、白玉1、剣形品1、緑泥片岩製の鏃形石製品1、有孔円板の破片1が検出されている。2軒の竪穴住居共に古墳時代中期のものともみられる。

神々廻宮前遺跡B地点

[文献360]

神崎川によって開析された、標高20mの台地上に所在する。1986年にゴルフ場の造成に伴い発掘調査が行われた。

14,500㎡の面積を調査し、竪穴住居17軒、方形周溝墓5基、土坑3基が検出された。その調査区の最も南側に位置する、013A・B住居跡から石製模造品が出土した。013住居跡はB→Aと新旧関係を有するが、Bを廃棄してAへと拡張したと理解される住居である。A住居跡の出土遺物は、土師器の杯・甕の土器のほか、石製紡錘車、滑石製有孔円板欠損品2点、滑石製剣形品1点、滑石の原石・剝片各1と鉄鏃、鉄鎌がある。またB住居跡からは、須恵器高杯、土師器の杯と、滑石製有孔円板2点、滑石剝片3点が出土している。

報告書においては、B住居跡出土の須恵器を根拠に、時期的には5世紀後半代の年代が与えられているが、原石・剝片の数の少なさから、石製模造品工房と断定することは避けている。しかし、原石や剝片の存在から、この住居において加工していたことは十分考えられるため、石製模造品の工房の可能性は高いといえよう。

復山谷遺跡

[文献210]

神崎川とその支谷に開析された標高20m～21mの広大な台地に所在する。神崎川から南に入る谷に面して白井第一遺跡が立地し、また神崎川を東に向かうと白井先遺跡群、神々廻宮前遺跡がある。

本遺跡は千葉ニュータウン計画区域内にあり、当文化財センターが数次にわたって発掘調査を担当し多くの成果を得てきており、なかでもローム層中の石器群は注目を集めている。1978年から1980年に行われた第4・5次調査では、弥生～古墳時代の竪穴住居40軒が検出され、古墳時代後期の一軒から多量の石製模造品が出土した。

5次調査の調査区中央に位置する120号住居址は、4.3m×4.5mの規模から4.6m×5.3mの長方形のプランに拡張している焼失住居である。炉を住居中央から東に寄せて設置し、北西のコーナーに浅い貯蔵穴を設けている。カマドは存在しない。玉類は大きく2か所に分かれて出土し、貯蔵穴のある北西コーナー寄りの位置からは、白玉、有孔円板等150点、南東コーナーの集中地点には滑石の破片300点を確認された。さらに勾玉、滑石の原石、砥石、軽石、鉄器が出土している。また、甕・杯・椀・高杯の土器類が35個体以上豊富に出土している。報告書で述べられているように、石製模造品工房と判断される。

八千代市

権現後遺跡

[文献249]

印旛沼から注ぎ出る新川の支谷に面した台地上にある先土器～縄文・弥生～古墳～奈良・平安の集落である。1977年～1981年に4次にわたり調査が実施された。

古墳時代の竪穴住居は前期から後期にわたっている。中期に属するのは5軒で、このうち4軒が石製模造品工房である。剣形品・有孔円板・白玉・勾玉を出土したが、白玉とその未成品がほかの製品

II 基礎資料

を凌駕している。後期の竪穴住居は10軒検出し、剣形品・紡錘車を出土するものもある。4軒の石製模造品の出土状態にはやや差がみられるが技術的な差は認められない。この他、石製模造品工房であるD035遺構から銅鏃を出土している点が注目される。

北海道遺跡

[文献285]

印旛沼から流れ出る新川の西側の洪積台地上に位置している。台地は複雑に開析され樹枝状に谷が入り込み、遺跡は標高10mから20mを計る舌状台地西半部に所在している。住宅・都市整備公団による区画整理事業に伴い調査した遺跡の一つで、谷を挟んだ北側の台地上には権現後遺跡が立地する。

本遺跡は1978年から1980年にわたって調査が実施され、旧石器時代・古墳時代・歴史時代の遺構が調査された。そのなかで、古墳時代中期の竪穴住居は22軒検出され、石製模造品工房が12軒を占める。その他に模造品を出土した竪穴住居が4軒確認され、白玉・勾玉等が出土している。これら22軒のうち13軒（石製模造品工房10軒）が一群にまとまり、それ以外は1～2軒の群で存在する。また、後期の工房1軒が検出されている。

川崎山遺跡

[文献186]

印旛沼西南部、新川の本谷と支谷に区画された台地上にある弥生～古墳時代の集落跡で、1979年に調査された。

古墳時代の竪穴住居は3軒検出され、いずれも中期に属する。このうち5号址から滑石製白玉や有孔円板、剣形品などとその未成品、滑石剥片、勾玉、棗玉を出土した。しかし、工具・砥石や砥糞等を出土しないため報告では石製模造品工房とはしていない。また6号址でも剥片を出土したが、成品・未成品・工具・砥石・軽石や砥糞等を出土しないため、やはり石製模造品工房とはしていない。周辺での石製模造品工房の存在を想定し、ここからの流れ込みとみている。

小板橋遺跡

[抄80]

新川西岸の標高24m～25mの台地上に位置する。600m北には川崎山遺跡が立地し、さらにその北には萱田遺跡群が所在する。

1980年、宅地造成に伴い発掘調査が行われ、古墳時代中期の竪穴住居7軒、後期の竪穴住居6軒等が検出された。出土遺物に石製模造品や未成品が含まれており、石製模造品工房の存在が確認されている。

印旛郡印旛村

古山遺跡

[文献307]

印旛沼の西北岸へ流れ込む師戸川によって開析された、標高26m～27mの台地上に所在する。1985年に村道の改良工事に伴い、遺跡の中央部の約4,200㎡が発掘調査され、縄文時代の遺物包含層、弥生時代の竪穴住居2軒、古墳時代の竪穴住居1軒、歴史時代の竪穴住居1軒などが明らかになった。

唯一の古墳時代中期に属する022住居址は、台地の西端部に位置する焼失住居である。ここからは、白玉の成品をはじめ、未成品、滑石の剥片、原石が床面および貼床中から出土し、また、住居周辺から剣形品、垂飾品、滑石原石が採集された。出土点数の詳細は不明であるが、石製模造品工房と判断される。

一ノ台遺跡

[文献308]

印旛沼の曲折部へ突き出る標高24.5m～26mの台地上に所在する。この半島状の台地に展開する仲ノ台遺跡、駒込遺跡、油作第1・2遺跡などの遺跡は、広く平賀遺跡群としてとらえられ、本遺跡はその中で最も南側の印旛沼寄りに位置する。1981年、宅地造成に伴い50,000㎡の発掘が行われた。調査では旧石器時代の資料をはじめ、弥生から古墳時代後期にかけての竪穴住居41軒を検出した。

3. 千葉県内玉作遺跡の概要

古墳時代の竪穴住居は31軒で、23軒が中期に比定される。玉類を出土している住居は8軒あり、報告では白玉未成品、剣形品未成品、剥片、残核、砥石片を出土した第20号住居址の1軒を、石製模造品工房と断定している。しかし報告中にふれられているように、白玉未成品、勾玉・棗玉、剥片が出土した第32号住居址も工房の可能性が高く、また、第25号住居址も同様に工房と考えられる。

佐倉市

白井田小笹台遺跡

[文献411・435]

印旛沼の南湖岸に張り出す標高27m～28mの台地上に所在する。1989年に住宅建設に伴って発掘調査が実施され、古墳の周溝、弥生・古墳時代の竪穴住居、溝、土坑、柵列などが検出された。古墳時代中期のうち3軒が石製模造品工房と考えられ、特に第4号住居址は、約半分が調査されたにすぎないが、剣形未成品、有孔円板、同未成品、滑石の剥片、チップ、砥石が出土した。

この工房は主軸を北西にとり、検出した壁の規模は6.32mを計る。炉はやや北寄りに設けられ、床面は固くしまる。焼失住居である。

岩富漆谷津遺跡

[文献232]

鹿島川の支流弥富川の右岸台地上に立地する縄文～奈良・平安の集落。1980年から1981年に調査された。古墳中・後期～奈良・平安の竪穴住居81軒、土坑9遺構から多数の石製模造品・玉類・土製模造品を出土した。この中で石製模造品の未成品や原石・石屑等を含むのは古墳時代中期の7軒と古墳時代後期の9軒であるが、古墳時代中期の043号住居址を除くと量が少なく、石製模造品工房かどうかについては検討を要する。

畔田川崎東遺跡

[文献103]

印旛沼の南端に開析する手繰川谷の分岐点より奥の台地上にある。畑地の表採資料で、古墳時代中期の土師器とともに石製模造品（有孔円板・剣形品・勾玉・未成品）が発見され、未成品を含むことから石製模造品工房の存在が予想される。

四街道市

西向井遺跡

[文献211]

印旛沼に流入する鹿島川の主谷に鹿渡支谷が合流する地点の南岸で北へ張り出した台地上に位置し、標高20m～26mを計る。1979年に東京電力の北総線送電線建設事業に伴って調査が実施され、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居5軒と石製模造品工房2軒、溝などが検出された。この工房の1軒は5.4m～6.2mのゆがんだ方形を呈し、柱穴が4か所に配される。炉は1基あり、ピット2基が壁際に存在する。遺物は多数の成品・未成品・原石・碎片が出土しており、それらの多くは南東側壁の付近の床面上に分布している。伴出土器は杯、鉢、甕があげられ、それらからみてこの工房の時期は古墳時代中期に該当するものとみられる。もう1軒の工房は、他の住居の床面を切って重複したかたちで検出され、一辺4.3mの隅丸方形を呈するものとみられる。柱穴2と炉が1基検出され、遺物は炉を中心として、6か所にわたり集中して床面上から出土した。

印旛郡八街町

滝台遺跡

[文献296]

北総台地上、太平洋と東京湾との分水嶺周辺で、標高約60mの太平洋岸に注ぐ地域に属している。表採品であるが、滑石製の白玉・剥片が採集されており、古墳時代の石製模造品製作遺跡とされている。詳細は不明である。なお、本遺跡からは「山邊郡印」が出土しており広く知られている。

II 基礎資料

佐原市

堀之内遺跡

[文献212]

大須賀川を東に臨む標高33mの台地上に位置する。1974年に調査され、古墳5基と古墳時代から平安時代の竪穴住居25軒を検出した。古墳時代後期に属する19軒のうち3軒（第1・17・21住居址）から滑石の原石や石製模造品及びその未成品を出土した。他の竪穴住居に破壊されるなどして遺存状態が良くないため関係遺物の量は多くないが、石製模造品工房であると考えられる。5基の古墳のうち1号墳と3号墳からは石枕、立花、白玉等の滑石製品を出土しており、工房との関係が注目される。また南東1km程の同じ台地上に白玉、刀子・鎌・斧等の石製模造品を出土した鶴崎天神台古墳がある。

玉造上ノ台遺跡

[文献363]

利根川に北面した標高約30mの台地上に位置する。佐原市教育委員会が1982年から1985年に調査を行った。古墳時代から奈良・平安時代の集落で、古墳時代後期の石製模造品工房が検出された。未報告のため詳細は不明であるが、生産遺跡から立花を出土したということで注目された。

古屋敷遺跡

[抄81]

利根川に面した舌状台地上に立地する。玉造上の台遺跡（石製模造品製作遺跡）は同じ台地の南西にある。1981年に調査された。古墳時代後期の竪穴住居は47軒検出し、このうち4軒が石製模造品製作の工房であった。未報告のため詳細は不明である。

岩ヶ崎（野中台）遺跡

[文献64]

利根川に面した標高約10mの台地縁辺部に位置する。1971年に丸子 亘氏によって調査が実施され、十数軒の竪穴住居を検出した。そのうちの数軒からは多数の石製模造品、未成品、原石、剝片・屑片等を出土し、石製模造品の製作を行っていたことを示している。また、工作用ビットも良好なものが検出されており、注目すべき遺跡として紹介した。

香取郡下総町

木挽崎遺跡

[文献414]

下総台地の北部、利根川の沖積水田に張り出した標高10m～20mの台地上に所在する。山砂採集により遺跡の大部分がすでに湮滅し、わずかに東側の一部を残すにすぎない。1975年に木挽崎古墳群を調査した際に、古墳時代中期に属する石製模造品工房1軒を確認し、滑石剝片・屑片多数を出土した。

若庄司遺跡

[文献94・414]

下総台地の北部、利根川に面する標高20m～30mの台地上に所在する。山砂採集、団地造成のために削られ、台地北側はすでに煙滅している。大和田玉作遺跡群の東にあり、また木挽崎遺跡とは谷を挟んで向かい合っている。また1970年に発掘調査された大日山古墳（前方後円墳）が西に接している。開発時に散乱していた遺物が内藤武義氏により発見され、管玉未成品、有孔円板未成品、剣形品未成品、白玉未成品が採集された。今日にいたるまで発掘調査は実施されていないので、明確な時期や遺構の存否について知ることができないが、状況から考えて石製模造品工房が存在する可能性が大きい。

治部台遺跡

[文献53・65・94・414]

大和田玉作遺跡群の中の一つで、西に稲荷峰遺跡、東に大日台遺跡等が続く。稲荷峰遺跡と同様、古くから玉作と石製模造品製作に関連する遺物が多く採集されていた。1969年12月和洋女子大学考古学研究会と下総郷土史研究会により予備調査が実施され、翌1970年3月に千葉県教育委員会を主体として、大和田玉作遺跡調査団が組織され発掘調査が実施された。その結果4軒の竪穴住居を検出し、第1号址が玉作・石製模造品工房であった。遺構の遺存状態は必ずしも良好とはいえなかったが、碧玉・滑石質の管玉成品・未成品、有孔円板、剝片等が出土した。古墳時代中期に属すると思われる。

大和田坂ノ上遺跡

[文献364・414]

利根川に面する台地最先端に立地している。大和田玉作遺跡群の西端にあたり、旧称稲荷峰北（A地区）遺跡の一部である。山砂採取と校舎拡張にともない、1982年に発掘調査され、弥生時代から古墳時代の竪穴住居4軒と前方後円墳1基を検出した。このうち古墳時代中期の竪穴住居（住居址No1）から剣形品・有孔円板・白玉等の成品及び未成品のほか石片や原石片を出土した。古墳の周溝によって一部が攪乱され、遺構の遺存状態は良好とはいえない。また工作用ピット等も検出されなかったが石製模造品工房であったことは間違いのないと思われる。棒状の鉄製品が1点出土しており、工具である可能性もある。

稲荷峰遺跡

[文献65・77・94・414]

大和田玉作遺跡群と総称されている遺跡の一部である。北総台地の先端部に位置し、利根川の沖積低地に接している。周辺には古墳群も存在する。旧称稲荷峰南（B地区）遺跡で、旧称稲荷峰北（A地区）遺跡が大和田坂ノ上遺跡である。また東約200mには治部台遺跡、そこからさらに200m程東に大日台遺跡、さらに南東300mには仲道遺跡、その東には小山遺跡等が存在する。本遺跡からは古くから玉作関連資料が採集され、玉作工房の存在の可能性が指摘されていた。発掘調査は、1970年8月から9月にかけて千葉県教育委員会が主体となり、大和田玉作遺跡発掘調査団が実施した。この結果、約100㎡程の調査区内から竪穴住居7軒が検出され、古墳時代に属する4軒から玉作関係の遺物を出土した。このうち1号址と4号址の2軒で、玉作と石製模造品製作を行っていたと考えられる。1号址は焼失住居で古墳時代前期に属する。碧玉質・滑石質の管玉の成品・未成品のほか有孔円板、白玉未成品を検出し、2基の工作用ピットも検出した。4号址は時期が明確ではないが、碧玉質・滑石質の管玉の成品・未成品のほか有孔円板未成品、白玉未成品等を検出した。1号址に比べ碧玉質材の量が4分の1にすぎず、滑石製品の製作が主体であったようである。工作用ピットも検出されなかった。工作用ピットの有無や石材の相違等が時期差と共に考慮される。

房台（八幡神社）遺跡

[文献414]

稲荷峰遺跡や治部台遺跡の南東、利根川から入り込む支谷に面した台地上に立地する。碧玉・滑石の管玉、管玉未成品、剥片が採集され、玉作工房が存在した可能性が高い。既に削平されている。

仲道（八幡神社裏）遺跡

[文献414]

利根川に合流する境川に面した台地上に所在する。1984年に行われた生産遺跡基礎資料作成調査の踏査の際に、有孔円板・剣形品・刀子形模造品・白玉・滑石剥片等が採集された。明確な時期は不明であるが、石製模造品製作遺跡の可能性が大きいと指摘されている。

小山（宮作・小山岱）遺跡

[文献414]

房台遺跡の東、利根川の沖積水田から入り込む谷に面した標高35m前後の台地上に所在する。滑石製管玉・剥片のほか有孔円板・剣形品・白玉等の成品・未成品が採集され、石製模造品製作遺跡であるとみられている。表採であるため明確な時期については不明である。

高岡遺跡

[文献145・414]

大和田玉作遺跡群の西方、利根川の沖積地の中にある標高約5mの微高地にある。発掘調査は、1976年3月から4月にかけて実施され、テラス状遺構と溝、ピット、遺物集中地点が検出された。遺物集中地点からは、有孔円板成品・未成品、剣形品成品・未成品、白玉成品等の石製模造品類が出土した。また、滑石の原石が20点余り検出されている。白玉3点は、小型粗製土器に入った状態で検出された。他には、手捏土器3点、土玉3点、土師器の高坏・甕・埴等が出土している。土器の時期からみて、古墳時代中期のものとみられる。生活遺構を伴わず遺物のみの出土ということを考えると、祭祀遺跡としての機能を考慮することもできよう。

II 基礎資料

天神台遺跡

[文献414]

利根川に北面した標高15m～20mの台地の縁辺部に位置している。1978年に調査が行われ、古墳時代後期の2号住居址から滑石製白玉と剝片が出土しており、石製模造品工場の可能性がある。未報告のため詳細は不明である。

東明神山遺跡

[文献94・414]

根木名川が利根川に合流する地点の近く、両河川の沖積平野を臨む台地の縁辺部に位置している。大和田玉作遺跡群からは2.5kmほど南西方にあたる。

1971年に調査が実施され、竪穴住居2軒を検出したがこの他にも遺構の存在が予想される。調査された2軒のうち1軒が石製模造品工房で、全掘できなかったものの遺物の種類と量の豊富さは他に見られないもので非常に良好な資料である。南東コーナーに工作用ピットが1基検出され、この中と周辺を中心に石製模造品やその未成品、剝片等が多数出土している。古墳時代中期に属するものとされている。

八幡神社遺跡

[文献414]

利根川の沖積低地の中の標高約4mの微高地に位置する。玉類・石製模造品が多数表面採集されており、玉作工房と石製模造品工場の両者の存在がうかがわれるが、残念なことに発掘調査によるものではないので、遺構・出土状況等知ることができないのが惜まれる。

大日台遺跡

[文献414]

利根川に面した台地先端部に位置し、西側には治部台遺跡・稲荷峰遺跡と続き、反対の東側には、房台遺跡・小山遺跡と続く。調査歴はないが古くから多くの玉作や石製模造品製作の関連遺物が採集されており、他の周辺の遺跡同様、玉作・石製模造品製作遺跡としてよいだろう。

小野女台遺跡

[文献414・415]

小山台遺跡の南に位置する。古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落で、古墳時代後期の竪穴住居2軒から石製模造品の未成品、滑石の原石・剝片を出土し、石製模造品工房であると思われる。

猫作・栗山古墳群

[香年88・89]

1990年から古墳群の調査が行われ、石製模造品工場の存在がわかったが調査中であるため、詳細は不明である。また石枕・石製模造品類が副葬された古墳が発見され、注目される。

松葉遺跡

[文献414]

治部台遺跡と大和田坂ノ上遺跡の中間に位置する。碧玉質の管玉未成品と剝片、滑石の剝片が採集され、玉作遺跡と思われる。

平台遺跡

[文献414]

治部台遺跡の南東に位置する。滑石の剝片が採集され、玉作遺跡と思われる。

山崎遺跡

[文献414]

仲道遺跡の南に位置する。碧玉の大型管玉状石製品の未成品の他、滑石の剝片が採集された。玉作遺跡である可能性がある。

香取郡小見川町

増田長峰遺跡

[文献253]

利根川に面した台地上に立地する。1982年に調査され、塚1基と弥生時代から平安時代の竪穴住居3軒を検出した。このうち古墳時代後期の住居址No.2から白玉・紡錘車・有孔円板のほか滑石の原石や叩き石、砥石、礫等を出土した。剝片が出土していないので断定はできないが石製模造品工房である可能性がある。

香取郡東庄町

前山遺跡

[文献50]

東庄町は下総台地の北東端に位置し、北側の利根川方面から湾入する沖積低地と、南の干潟町方面から湾入する沖積低地が複雑に台地を刻み、その南北間の距離を狭めている。遺跡は南から入り込む谷に張り出した舌状台地に所在する。付近には弥生時代から古墳時代の集落である高部宮ノ前遺跡のほか、羽計、青馬、高部、東和田には古墳が分布する。1966年に丸子 亘氏によって発掘調査が実施され、竪穴住居6軒が検出された。そのうちの5軒から滑石製の有孔円板、剣形品、勾玉、白玉、原石が出土した。なかでも焼失住居であるB-1a号からは有孔円板、原石、砥石が出土し、石製模造品を製作していたとみられる。また、表採によっても成品、未成品、破片が多く得られている。出土土器が少なく明確な時期比定は難しいが、古墳時代中期から後期に属すると考えられる。

香取郡大栄町

馬洗城址

[文献386]

大須賀川の支谷に面した台地上に立地する。1988年に調査され、城跡関係の遺構のほかに縄文時代中期から奈良・平安時代の竪穴住居も検出された。この中で古墳時代中期の第10号住居址から、量は少ないが白玉・剣形品・有孔円板等の成品・未成品と原石を出土したため、石製模造品工房であると考えられる。やはり古墳時代中期の第7号住居址、第22号住居址からも剣形品、原石を出土しているが、出土遺物がわずかなため石製模造品工房であるかどうか断定はできない。

奈戸五区

[文献116]

大須賀川周辺の遺跡分布調査により発見された。白玉未成品のほか滑石の研磨された板状品、滑石剥片等併せて30数点が採集され、石製模造品工房が存在する可能性が高い。

千葉市

上ノ台遺跡

[文献90・214]

東京湾を臨む標高16.50mの台地上にある。幕張電車基地新設工事、都市計画事業に伴い1973年、1974年、1975年の3次にわたり調査した。その結果、竪穴住居200軒以上を検出し、そのほとんどが古墳時代後期に属する。土錘を多数出土したことから漁撈を生業としていた大集落として有名になった。このうち古墳時代中期の竪穴住居はわずか4軒で、すべて石製模造品工房であった。1次調査で検出した3軒は隣接しており、遺構の遺存状態は必ずしも良好といえないが第1号址には二重構造の工作用ピットを検出し、底面に砥糞と考えられる灰白色粘土質土が堆積していた。遺物は土器類のほか白玉・勾玉・有孔円板・剣形品等の成品・未成品、紡錘車、原石、剥片、屑片等のほか砥石を出土した。この中で勾玉未成品は第1・2号住居址からあわせて14点出土し、勾玉の製作技法を推定することができる。もう1軒の2J-62号住居跡からは白玉と白玉未成品が出土した。

馬加城遺跡

[文献189]

東京湾岸の花見川・浜田川の河口に発達した砂丘（検見川低地）を臨む台地上に立地する。1980年に緊急調査された。弥生時代中期と古墳時代後期を中心とした集落で調査区域外には古墳時代中期、平安時代の住居の存在も予想される。検出した古墳時代の竪穴住居6軒は後期に属する。このうち第6・7・8号住居址から滑石製の石製模造品と滑石の剥片・細片を出土した。第8号住居址からは剣形品の未成品を出土するため石製模造品の製作を行っていた可能性も考えられる。しかし、他の2軒については関係する遺物が覆土中に散在したもので量も多くなく、他の住居との構造上の相違がみられないことから報告ではこれらが石製模造品工房である可能性は少ないとしている。

II 基礎資料

東寺山戸張作遺跡

[文献147]

東京湾に注ぐ都川の支流葭川が開析する支谷に挟まれた台地上に立地する。第1次(1974)、第2次(1975)の2回にわたり調査された結果、台地東に古墳群、西に集落を検出した。古墳は後期に属し、直刀・鉄鏃等のほか管玉・白玉等を出土した古墳もある。竪穴住居は11軒のうち台地西側にまとまって検出した9軒が古墳時代後期に属する。このなかで3・4・5・8号住居址が石製模造品工房で、石製模造品(白玉・勾玉形・剣形品・有孔円板)・白玉未成品・勾玉形未成品のほか鉄製鋸・砥石等の道具を出土している。白玉の穿孔した未成品は整った長方形を呈した薄いものが主体で、丁寧に乗っている。雑な多角形のものが多い他の遺跡と違いが見られる。また、石材も緑がかかった透明度のある良質のものである。同じ台地上に小支谷を挟んで隣接する稲毛台東遺跡(東寺山I区)の古墳時代後期の竪穴住居から紡錘車未成品を出土している。

大森第1遺跡

[文献92]

通称松ヶ丘谷に面した舌状台地に位置する。京葉道路(第4期工事)・一般国道16号の建設に伴い1971年・1972年に調査され、古墳時代中期から奈良・平安時代の竪穴住居34軒を検出した。このうち古墳時代中期の竪穴住居は25軒、後期は3軒で、石製模造品は各時期の竪穴住居に混入している。中期の竪穴住居で出土するのは第6・25号址、後期では第3・26号址で、特に25号址では多量に出土しているため石製模造品工房とされる。剥片は報告書に掲載してある2点の他にも数点出土している。また第6号址ではチキリ形石製模造品を出土した。

西花(大森第2)遺跡

[文献92]

通称大蔵寺支谷と大森支谷に挟まれた台地上に位置する。1971年に調査され、弥生時代から奈良・平安の竪穴住居を90軒検出した。このうち古墳時代中期は33軒、後期は4軒である。石製模造品は多くの竪穴住居から出土してはいるが点数はすくない。このうち特に多いのは第12・035B号址である。どちらも古墳時代中期に属し、白玉、勾玉、有孔円板、管玉、紡錘車等を出土する。わずかだが白玉の未成品を含む035B号址が石製模造品工房である可能性がある。

箕輪遺跡

[文献291]

花見川から入り込む小支谷が開析された台地上に立地する。1983年調査され、古墳時代前期から中期の集落を検出した。古墳時代中期の竪穴住居は11軒で、6軒から滑石の原石・破片、石製模造品を出土した。またこのうち3軒には原石や剥片があった。遺物の量が少ないので断定はできないが石製模造品工房であった可能性がある。

山武郡芝山町

上吹入遺跡

[文献171]

栗山川に合流する高谷川によって開析された谷に面した標高41m~42mの台地上に所在する。東側に続く多古町林遺跡とは同一の遺跡である可能性が高い。1977年に成田用水事業に伴い、同遺跡調査会によって発掘調査が実施されている。

調査は線的であるが、第1号住居址はほぼ完掘され、古墳時代中期の土師器とともに滑石製の遺物を多量に出土している。特に貯蔵穴状のピットから白玉の完成品が一括出土したほか、有孔円板、円板、剣形品、白玉、管玉、未成品、剥片が検出されている。また、工具になるか不明なものの鉄製品も認められる。焼失住居である第2号住居址も古墳時代中期に属し、剣形品、白玉未成品、剥片、原石が覆土を中心に出土している。約半分ほどの調査にとどまった第4号住居址からは、有孔円板、剣形品、白玉、白玉未成品、剥片が出土した。比定時期はやはり古墳時代中期になろう。第5号住居址は、コーナー部分を調査したにすぎないが、白玉未成品と剥片を出土している。

3. 千葉県内玉作遺跡の概要

各竪穴住居とも、覆土中に含まれる遺物が多いことから、『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』では、第1号住居址のみが石製模造品工房とされている。しかし他の3軒についても、床面上の遺物は確かに少ないものの、未成品、剥片、原石等を有しており工房であった可能性が高く、4軒の工房の存在を認めてよいと思われる。

宮門遺跡

[文献105・439]

木戸川流域の標高40mの台地上に所在する。付近には小池地藏遺跡、小池新林遺跡、小池元高田遺跡等の集落跡のほか、山田、宝馬、芝山の古墳群がある。1973年住宅の建設に伴い、山武考古学研究会によって発掘調査され、縄文時代中期の遺構と、古墳時代の竪穴住居4軒が検出された。古墳時代中期の4号住居跡からは、剣形品や有孔円板、原石、剥片が出土し、石製模造品工房であろう。この後、1984年にも成田松尾線関係で調査され、中期の竪穴住居から剣形品を出土した。

殿部田遺跡

[文献105]

栗山川と高谷川の合流地点に向かって張り出す標高10m～15mの台地の南側に所在する。1972年に土取りに伴い芝山町教育委員会によって緊急調査が実施された。この結果、石製模造品工房が1軒検出され、有孔円板等が出土したようである。未報告であるため詳細は不明である。

下吹入東台遺跡

[文献340]

高谷川に面した台地上に立地し、1km程北には上吹入遺跡、多古町林遺跡等がある。1986年度に2次にわたって調査された。古墳時代の遺構としては前期の竪穴住居1軒、中期の竪穴住居2軒が検出され、中期の1・3号住居址が石製模造品工房と考えられる。1号住居址からは白玉のほか紡錘車の成品と未成品が出土した。また3号住居址からは白玉成品・未成品、勾玉模造品の成品・未成品、有孔円板等の滑石製品のほかコハク製棗玉1点、コハクの加工が認められるもの1点、コハク小破片2点出土し、石製模造品製作のほかコハク製品の製作を行っていた可能性があり注目される。

香取郡多古町

林遺跡

[文献293]

栗山川に合流する高谷川に開析される、標高50m前後の台地上に所在する。同台地上には上吹入遺跡があり、同一の遺跡である可能性が考えられる。1978年から1981年にかけて、県営畑地帯総合土地改良事業の実施に伴い、同遺跡調査会によって4次にわたる調査が実施された。調査の結果、遺跡全体の成果として古墳時代から歴史時代を主とする竪穴住居140軒をはじめ、掘立柱建物23棟、古墳3基、円形周溝1基、方形周溝1基等が検出された。10地点に分かれる調査地区のうち、長井戸・新畑地区において、古墳時代中期の竪穴住居12軒が検出され、その中の3軒（第104・105・106号住居跡）が石製模造品工房とみられる。3軒は主軸方向をほぼ同じくしており、同時期に所在していたと考えられる。

東金市

道庭遺跡

[文献296]

九十九里海岸平野を一望する、標高52m前後の台地上に位置する。周辺には久我台遺跡、妙経遺跡、平蔵台遺跡のほか、古墳群が密集して分布する。1977年から1979年にかけて千葉県農業大学校建設に伴い同遺跡調査会によって発掘調査が実施され、弥生時代中期の集落と方形周溝墓を中心に各時代の遺構が検出された。古墳時代の竪穴住居も多数検出され、その中の3軒から滑石の剥片が出土している。特に滑石製品の量が多い1軒が石製模造品工房であると考えられている。弥生時代以外は未報告のため詳細は不明である。

II 基礎資料

市原市

草刈六之台遺跡

[文献270・407]

村田川の右岸台地上に位置する。小支谷をはさんだ北側に草刈遺跡、村田川の対岸に菊間遺跡、大厩遺跡などがある。

旧石器時代から中世の遺構を多数検出したが、中心となるのは古墳時代前期から後期の集落である。このなかに古墳時代前期の玉作工房1軒が含まれていた。県内の玉作遺跡としては最も南に位置するものである。鳥取県長瀬高浜遺跡の玉作工房と類似した長方形の工作用ピットをもち、緑色凝灰岩を用いた管玉を製作している。

南縁中央部にある草刈3号墳からは特種な彫刻文を施した石釧を出土し、堅穴住居からも多数の石製模造品類を出土した。また紐をもつ大型の鏡の石製模造品も出土している。

袖ヶ浦市

宮ノ台遺跡

[文献47]

小櫃川の中流で、沖積地の面積が急に増しはじめる地域の北側の、標高32m～33mの台地上に所在する。野田遺跡はここから北へ約2kmの地点に立地する。

この遺跡上には国勝神社が所在し、その神職によって採集された剣形品が、椋山林継氏の目にとまることになり、1966年同氏によって、1958年・1959年に表採された有孔円板、紡錘車と合わせ、それらの資料報告が行われた。これを受け、1967年森谷ひろみ氏による発掘が実施された。

発掘は、1m×20mのトレンチ調査で、遺構としてはV字形の断面を呈する溝状遺構が検出されたにとどまっている。玉作関係の遺物では、剣形品、有孔円板、白玉、石製模造品破片、石屑、砥石5点が出土した。さらには鉄製模造品として報告した鉄製品7点、手づくね土器が認められる。祭祀関係の遺跡とされているが、剥片、工具、各種の成品から石製模造品の製作遺跡ともみられ、その可能性は大きい。

野田遺跡

[文献123]

小櫃川中流域の北側で、宮ノ台遺跡からさらに内陸部へ入った台地上に所在する。

1974年、東洋大学考古学研究会の、袖ヶ浦町(当時)におけるフィールド調査の際に玉類、石器類、土器類が発見された。

表採品は主に石器類であるが、玉類では碧玉製の管玉1点のほか、滑石製の白玉、白玉未成品、管玉未成品と滑石の原石がある。これらの玉類は、天地返しが行われた畑の一部分に集中して発見されたもので、石製模造品の製作遺跡である可能性を高くしているが、詳細については明らかになっていない。

文脇遺跡

[文献427]

遺跡は小櫃川流域の北岸に所在する広大な台地に位置し、標高約40mを計る。公民館・運動公園建設事業によって(財)君津郡市文化財センターが発掘調査を実施している。弥生時代後半から古墳時代前半にかけての住居が遺構の大半を占め、約300軒ほどが調査されており、さらに弥生時代の方形周溝墓や古墳時代中期の住居が2軒調査されている。その古墳時代中期の住居のうち1軒が石製模造品工房で、滑石の原石をはじめ白玉の成品・未成品・剣形品が出土している。工具として砥石も検出されている。また弥生時代後半から古墳時代前半の住居の中で、大型の焼失住居の中から多くの土器とともに、銅釧・勾玉等の特殊遺物が検出されている。

木更津市

マミヤク遺跡

[文献396]

遺跡は1985年度から1988年度にかけて調査された小浜遺跡群の内の一遺跡ではかに依ヶ谷遺跡・古墳群がある。調査は小浜地区土地区画整理事業に先立って1985年・1986年度にかけて調査されている。遺跡は、東京湾に面した丘陵の先端部分に位置している。遺跡の位置する丘陵は海岸線近くまで接近し、旧海岸線まで約500mの距離である。丘陵北向き傾斜面に遺跡は立地し、南北長350m程である。丘陵南側の標高は約65m、北側尾根先端の標高は約40mで遺跡の両端で約25mの標高差があり南側は特に傾斜が急になっている。調査面積は12,000㎡であるが、遺跡の広がりとしてはさらに南東部・北東部に展開している。

集落は、竪穴住居を主体とし弥生時代後期から古墳時代～奈良時代にまでわたり総数275軒を数える。弥生時代後期のものは89軒・古墳時代前期78軒・同中期41軒・同後期59軒・奈良時代8軒である。南側に古墳群の築造されたことにより集落は北に移動していることがうかがわれる。これらの中で古墳時代中期の集落には、住居跡の他に石製模造品の工房址が1軒、2か所の祭祀遺構が検出されている。工房は住居の重複により明瞭ではないが、不整な方形を呈し南北長4.1mを測る。床面が軟弱で壁の依存も良くなかった。炉・壁溝は存在せず、床面に7基のピットが検出されたが柱穴とは考えられず工作用ピットと考えられる。床面上または床面に食い込んだ状態で滑石製の白玉未成品及び剝片が検出されており、滑石製の白玉工房址と考えられる。完成品は1点もなくまた白玉以外のものは検出されていない。

また、2か所の祭祀遺構は1号祭祀遺構と2号祭祀遺構に分けられ、1号祭祀遺構は、土師器・須恵器・石製模造品と大量の白玉、特殊な鉄製品類が3.5m～4mの範囲にわたって分布している。石製模造品等は滑石製の鏡形品・有孔円板・偏平勾玉・剣形品・白玉・白玉未成品・剝片類、碧玉製の管玉が出土し、さらにそれらから約25m離れた地点からであるが滑石製子持勾玉1点が検出されている。2号祭祀遺構からは、貝殻・焼土の堆積層がみられ、土師器・須恵器に混じって石製模造品・白玉・鉄製品・軽石等が検出されている。石製模造品等は滑石製の偏平勾玉・有孔円板・白玉が出土している。1号祭祀遺構は、白玉の総数約2,000点以上を数え祭祀遺物の中では中心的な位置を占めていたと考えられ、それ以外の石製模造品の数量は多いとはいえない。白玉の実際の使用状態は、出土状況から復元するのは難しいとしている。遺物の中に白玉未成品・剝片等が検出されることから、祭祀執行の場において応急的に白玉等の増産をしたものと考えられるとの指摘がされている。また、白玉の供給源として石製模造品工房が主要な役割を担っていたものとしている。そしてこの工房の位置づけを、集落内から多数の工房の検出された「工人集団の集落」遺跡と対比して、集落内での自給自足的な生産に限られた工房としている。

君津市

新御堂荘台遺跡

[文献23・42]

小糸川下流域の標高65m～67mの台地上に所在する。1958年縄文中期の遺跡として、立正大学によって調査されたが、その折りに地主によって集められていた石製模造品が注目されることとなり、その後それら祭祀遺物の出土状態を確認する発掘調査へと、調査目的の変換が計られた。

しかし調査では出土状態を明確にすることはできず、僅かに出土層位についてある程度のみとおしを得たにとどまっている。表採によって得られている遺物は、土師器のほか、有孔円板、剣形品、白玉等の石製模造品がある。これまで工房の検出はないが、椋山林継氏により石製模造品製作遺跡の可能性が高いと指摘されているものの、詳細は不明である。

Ⅲ 各 論

1. 旧石器～縄文時代の玉

A. はじめに

これまで千葉県内の旧石器～縄文時代の玉に主眼を据えて、総合的な研究を行った例はわずかである。集成に関しては、硬玉製大珠など個々の玉を対象とした蓄積はあるものの、種類を問わず県下全域にわたっているのは、千葉県立房総風土記の丘の「房総出土の古代の玉」¹が唯一になろう。また攻玉技術をめぐる問題については、製作工程を窺い知る資料を出土した二・三の遺跡の報文中で、工程と原材が俎上にのぼっているにとどまる。生産に関連するところでは、県内の攻玉遺跡が『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』で紹介され、原材の産地についての予察も示され、はじめてその状況が整理された²。しかし資料の増加には著しいものがあり、多角的に新たな試みが必要な時期を迎えている。

以上のような研究現状に照らして、本紀要は、現時点での県内における縄文時代を主とした玉の実態を把握することを一つの目的にしている。そのためにまず出土遺跡の集成を実施し、玉の種類、原材、出土状況等を再整理した。その結果、明らかになった部分が多いと決して言えないまでも、遺跡数の増大とともに幾つかの問題も生まれてきている。ここにその一部を提示し、新たな段階に備える一助としておきたい。

B. 集成結果の概要

千葉県内玉類出土遺跡の集成で得られた結果の概要を、以下に簡単にまとめておく。

a. 旧石器時代 本県の旧石器時代に比定される遺跡で、装身具と考えられる遺物を出土しているのは、四街道市に所在する出口・鐘塚遺跡³の1か所である。「垂飾様石製品」と仮に呼んでいる磨製の小型品で、比較的近接した状況で2点が出土している。出土層位は立川ローム層の第2黒色帯の下部とみられている。ただ有孔装身具との判断には問題も含まれているので、この点後述したい。

b. 縄文時代 全国的に石材を原材とする玉類の出土が一般化するのには縄文時代にはいつからである。当地域においても例外ではなく、今回の集成で、48市町村に所在する165か所の遺跡で出土が確認され、点数の総計は1,047点以上を数えることが確実となった。また攻玉を行っていた可能性の高い遺跡は8か所確認できた。

遺跡の分布 はじめに玉類を出土した遺跡の分布にみられる特色から述べておこう。最も端的な傾向は、南部に比して北部により多くの遺跡が認められたということである。正確な線引きではないという前提のもとに、北部を千葉市以北、南部を市原市以南と仮定して遺跡数を比

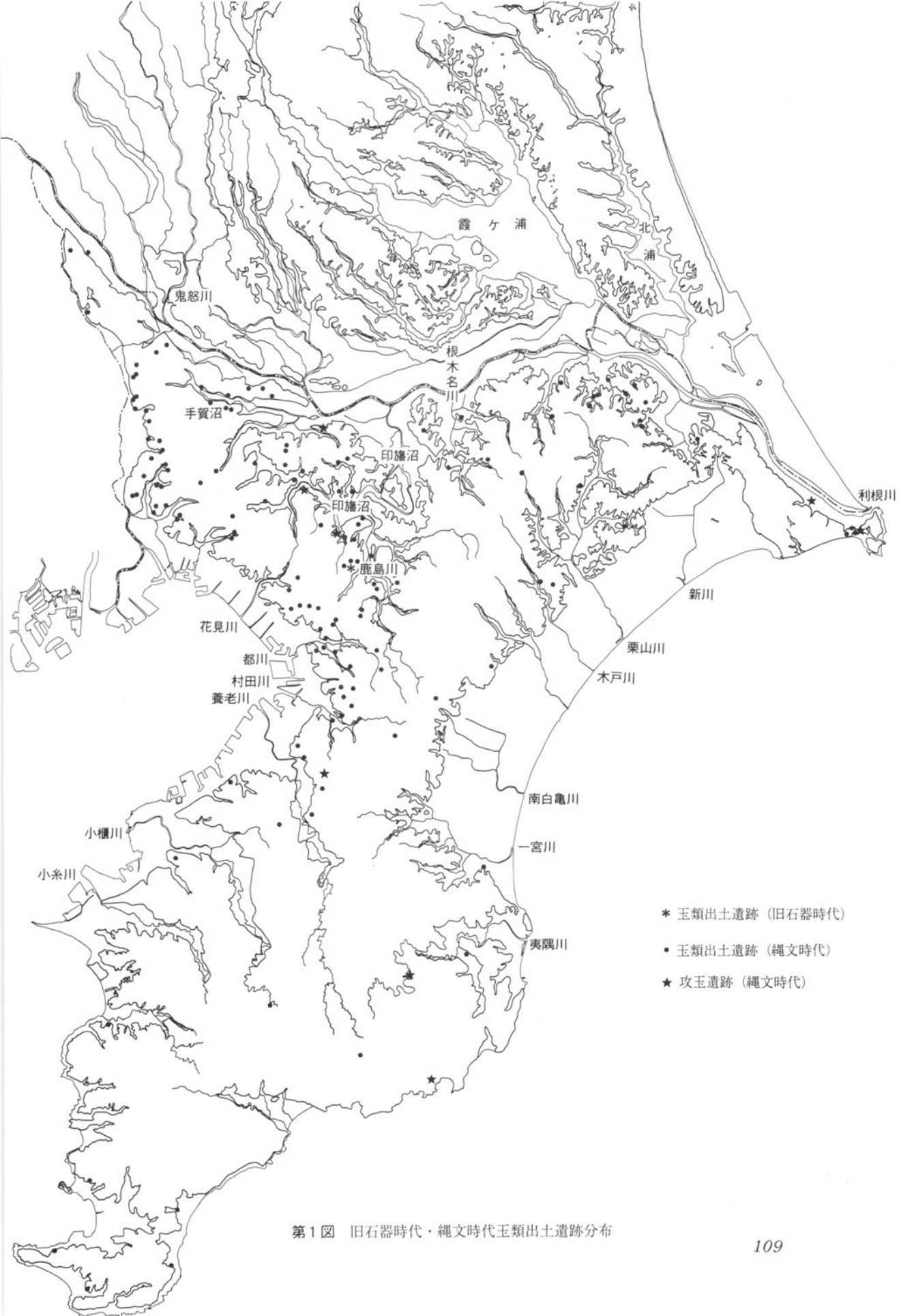
Ⅲ 各論

較すると、北部に135遺跡確認できたのに対し、南部では30遺跡を抽出したにすぎない。県の北部はその大部分が下総台地に含まれ、遺跡のほとんどがその台地上に立地する。それに対し、房総半島の南は起伏のある丘陵地帯が続いている。このような地形的条件に加え、開発が早い段階から進められていたことによる発掘調査件数の違いが、遺跡数に反映されたと理解できる。今後南部地域においての開発行為に伴う発掘の増加が予想されても、玉類が検出される機会という意味において、しばらくこの傾向は変化しないと思われる。

玉類の種類 次に出土している玉の種類について瞥見し、問題点について指摘したい。慣用的な名称にしたがうと、定型の特徴を有する部類では、玦状耳飾、大珠、玉斧、管玉、丸玉、白玉、勾玉などが存在しバラエティーに富んだ様相を呈する。しかし、完形かそれに近い玦状耳飾を別にすれば、玉の種別を明確にする分類基準が曖昧であるため、報告書ではしばしば、「垂飾」とか単に「玉」との記載をみかける。報告者の意図するところもあろうかと酌みつつも、集成の際、一部については掲載実測図に基づいて、見かけ上同形態を示すものは統一を図るようにした。厳密な数をつかむにはなお障害が存在するが、一応玦状耳飾の出土遺跡は48遺跡63点以上、大珠29遺跡40点以上、玉斧6遺跡8点以上、管玉（管玉状を含む）14遺跡20点以上、勾玉25遺跡37点以上、白玉19遺跡489点以上、丸玉12遺跡67点以上、玉・小玉22遺跡47点以上、また垂飾としたものが50遺跡110点以上あることが判明した。それぞれに以上と付したのは、実際は集計数を上回ると考えられるからである。未公表や見落とし、それに個人所有を加えれば、優に1,100点を越える玉類が県内で発見されていると考えられる。

出土状況 玉類の出土状況については、顕著な特徴として遺構に伴う例が極めて少数であるということを描ける。数字の面では、165遺跡で1,000点を上回る出土点数のうち、1遺跡の1遺構で白玉ばかり372点出土した四街道市御山-1遺跡を例外とすると、遺構から出土しているのは26遺跡の40点である。これが玉の帰属時期の比定を大変困難にしている。たとえ包含層からの出土であっても、存続期間が短い遺跡であれば、時期を絞ることが可能となる。だが遺跡の多くは数時期にわたって営まれ、よほど条件が良好でなければ伴出する土器を限定するのは難しい作業となる。大部分が共伴する遺物を特定できない状況で出土するからである。このような問題点は古くから再三取り上げられてきているが、やはり房総の玉の基準資料の作成を遅らせる一因ではあるだろう。不確実はあるとして、時期ごとの遺跡数は、早期が1遺跡、前期から中期初頭が34遺跡、中期から後期初頭が53遺跡、後期から晩期が39遺跡、不明が41遺跡である。

攻玉遺跡 攻玉を実施していたと考えられる遺跡は8か所である。時期的な内訳は前期1か所、中期1か所、後期から晩期に属する遺跡が6か所となる。地域分布では北部に5遺跡、南部に3か所をそれぞれ数え、玉全体の出土遺跡の割合と対比すると、南部地域もかなり高い分布傾向を示している。ところで縄文の攻玉遺跡を規定する基準が今のところ不明確であるため、



第1図 旧石器時代・縄文時代玉類出土遺跡分布

Ⅲ 各 論

第1表 市町村別の縄文時代玉類出土状況

	市町村名	遺跡数	早 期	前~中初	中~後初	後~晩期	不明	点数
1	関宿町	2		1	1			2
2	野田市	1		1				1
3	柏市	3		3				5
4	流山市	7		2		3	2	10
5	我孫子市	5		2	2	1		7
6	沼南町	3		1	1	1		3
7	松戸市	12		6	4	1	1	25
8	印西町	7		2	3	2		97
9	栄町	2			2			2
10	本埜村	1					1	1
11	成田市	3				2	1	7
12	鎌ヶ谷市	2			1		1	2
13	市川市	6		1	3	2	1	13
14	船橋市	5		2	2	1		19
15	白井町	3		2	1			5
16	八千代市	2				1	1	36
17	印旛村	2				1	1	2
18	佐倉市	11			4	4	3	70
19	酒々井町	1					1	1
20	富里町	1				1		11
21	浦安市							
22	習志野市							
23	四街道市	5		2		3		380
24	八街町							
25	佐原市	4			3		1	5
26	下総町	1					1	1
27	神崎町							
28	小見川町	6		1	3		2	7
29	東庄町							
30	大栄町	2					2	2
31	栗源町							
32	山田町	1			1			1
33	干潟町							
34	海上町							
35	千葉市	23	1	4	7	4	7	53
36	芝山町	2			2			2
37	多古町	2					2	2
38	八日市場市	1					1	2
39	旭市							
40	飯岡町	1			1			1
	小計	127	1	30	41	27	29	775

	市町村名	遺跡数	早 期	前~中初	中~後初	後~晩期	不明	点数
41	銚子市	4			1	1	2	109
42	山武町							
43	横芝町	2			1	1		11
44	松尾町							
45	光町							
46	野栄町							
47	成東町							
48	蓮沼村							
49	東金市	1				1		1
50	大網白里町	1				1		3
51	九十九里町							
52	市原市	11			4	4	4	90
53	長柄町							
54	茂原市							
55	長生村							
56	白子町							
57	長南町							
58	睦沢町							
59	一宮町	1				1		1
60	袖ヶ浦市	2				1	1	2
61	木更津市	1			1			1
62	君津市	3				1	2	4
63	富津市	2		1			1	3
64	夷隅町							
65	岬町							
66	大多喜町	3			1	1	1	15
67	大原町	1		1	1			6
68	御宿町							
69	勝浦市	1		1				14
70	天津小湊町							
71	鴨川市							
72	鋸南町							
73	富山町							
74	富浦町	1			1			4
75	三芳村							
76	丸山町	1			1			3
77	和田町							
78	館山市	2		1	1			3
79	千倉町	1					1	2
80	白浜町							
	小計	38	0	4	12	12	12	272
	総 計	165	1	34	53	39	41	1047

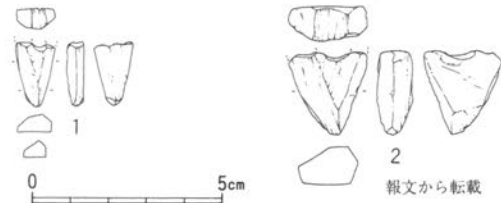
玉を出土する遺跡は潜在的な攻玉遺跡になるともいえる。便宜的に今回は攻玉が行われていたという判断は、完成品と共に原石や未成品の出土を第一においた。またその観点は次の項でふれることにするが、攻玉遺跡は原材料の産出地との関係も深く係わり、製作工程および方法・技術論のほか、流通や消費を巡る問題も含むため、派生する課題は多方面にわたる。

C. 県内出土玉類の推移

a. 旧石器時代 本県ではローム層から出土する人工遺物の圧倒的部分が、石材を用いた道具で占められている。石材を原材とした玉類であれば、石器同様ローム層中でほとんど変化を受けずに保存されているはずである。また下層の発掘件数も増加の一途をたどっているため、包含されていれば発掘される機会は多分にある。ところが今日までで、装身具と考えられる石製品を検出した遺跡は1か所である。これが装身具の普及の度合いを如実に物語っている。

四街道市に所在する出口・鐘塚遺跡の2点の垂飾様石製品がそれである。出土層位は第2黒色帯の下部で両者は距離を置かずに出土し、遺構に伴う状況は観察されない。2点とも欠損品と推察されており、現存部の形態は三角形を呈し表裏に研磨痕跡を残し板状に整形されている。穿孔された部分で欠損したと判断され、それによって孔部がわずかしか遺存しないため、穿孔状態を不明にしている。残存する穿孔部の観察によれば「穿孔部には錐による回転痕はなく、

平行条線が密に並走している」という。この遺存する平行条線の由来については、穿孔後の「孔壁の修整」によるものとする、穿孔を前提とした報告者の考えと、欠損品とは受け止めず、本来の形態が保たれていたとすれば「穿孔品でないという考えも成り立つ」という見解が提出



第2図 最古の装身具

1, 2: 出口・鐘塚遺跡

されている。後者の意見は、完形の類例発見を待って垂飾品であることを証明しようという慎重な立場である。いずれにせよ追加資料の発見は必要である。ただこの「垂飾様石製品」が利器的な機能をもっていないのは明らかなので、装身具の範疇に入る性格を有していた、と解しておきたい。

b. 縄文時代 この時期については4区分して記述を進め、出土玉類の特色と、併せて製作工程の事例を示すことにする。

早期 全国的に視野を広げると、草創期の玉も散見され、希少であった旧石器時代とは一線を画している。転じて県内に目を向けると、これまでに縄文時代初頭まで溯る玉類の検出は報告されていない。今までのところでは、撚糸文土器に伴っていた可能性がある、千葉市東大野第3遺跡⁶の2点の出土品が最も古くなると考えられる。1点は管玉と丸玉の中間的な形態を呈する欠損品で、石材は蛇紋岩よりは軟質で滑石に近い石材が使用されている。もう1点は隅に丸さのある略方形に整形された板状の垂飾である。これには2か所に孔が穿たれており、さらに

Ⅲ 各論

一端に切れ込み状の穿孔痕跡をもっている。この遺跡は、現在整理作業が進行中なので、より明確な時期比定が行われることになろう。

然糸文に続く沈線文、条痕文の時期には類品や別形態の玉の出土が見当たらなくなる。孔を穿つ方法と技術はすでに獲得されていたので、各種石材への応用はいくらでも可能であったと容易に想像することことができる。それでも未だ零細な段階で、発展の様相が看取されないのは、技術面の未克服が残されていたのではなく、需要とか原材料の入手ルート等、当時の社会を取り巻く情勢が第一にあったと思量される。

前期から中期初頭 前期に至ると、それまでと一変して各種の形態をもつ玉が出現する。そして何と言っても玦状耳飾の盛行がこの時期を特徴づける。また管玉、丸玉、小玉、垂飾はそれぞれ少しずつ形を変えてバラエティーをもつので一層多彩な展開となる。石材は滑石、蛇紋岩が多くを占め、加えてヒスイ製の玉も見つかるようになる。第3図6は我孫子市西野場遺跡の竪穴住居から出土した管玉で、原材はヒスイといわれている。他にも船橋市下郷後遺跡⁸の管玉がヒスイである。玉類の発見のほとんどは包含層中においてであるが、遺構から出土する場合は土坑に伴う例が多い。

消極的な玉の生産と攻玉 さてここでもう一度この時期を代表する玦状耳飾に話を戻し、そこから派生して、生産の観点について述べておきたい。玦状耳飾は滑石などの比較的軟質な石材を使用することと、形態上の特質とにより、完形品として出土することは希有で、どこか欠損しているのが常であるような観がある。第3図2は1と対になる形で土坑から出土したもので、二つに割れてから補修孔を穿っているのがわかる。おそらく補修して装着を続行していたのであろう。このような補修のためと考えられる孔は欠損品の多くに認められ、また、破断面に調整が施されたものも少なくない。垂飾への作り替えを行ったものも確かにある。こうした作業が集落内で行われていたことは疑いないところで、仮に「消極的な玉の生産」と呼んでおきたい。続けていうと、これに対比できる生産行為が「攻玉」で、その実施場所が「攻玉遺跡」と位置づけられるのである。ここでの攻玉遺跡の現象面での判断基準は先に記したとおりである。次に前期の玉の製作工程を例示しておきたいと思う。



第3図 前期から中期初頭の玉類

いずれも報告書から改図転載

1, 2: バクチ穴遺跡 3: 中山新田Ⅱ遺跡 4, 5: 飯山満東遺跡 6: 西野場遺跡

勝浦市長者ヶ台遺跡の玉¹⁰ 発掘による資料は僅少で表採品が多い。しかし地表面でさえ剥片や未成品、半完形品が揃っているのだから、攻玉遺跡とするに不足はないであろう。それでは図に則して説明を進める。

第4図の1・2は円盤状に整形された後に磨きを施して、前の段階まであったであろう凹凸を取り去る工程の途中のものである。表裏両面と側面に研磨痕跡がはっきりと認められ、1の裏面を除くと、まだ研磨方向の変化するところに微弱な稜を残している。

3は研磨によって表裏が平滑になったところに孔位置を決定し、穿孔を開始している。穿孔は両面から行われ、孔底には丸さが認められる。4は穿孔完了の直後である。穿孔方法は、寺村光晴氏の分類による「連続的回転運動」¹¹によるものと考えられるが、これに用いられた穿孔工具の特定は難しい。

5は孔の拡大と切目の作出がうかがわれる。4の様な穿孔が完了すると、今度は「非連続回轉運動穿孔」で、「切削手法の一種」である「挟り穿孔」¹²によって孔径の拡張が実施されたと推測できる。このことは孔壁に残る条痕跡が周回せず、数か所で止まっている状況から理解することができる。次に挽き切りにより切目が作られ、切目の幅を広げるため、右の脚にさらなる挽き切り手法を行使している。

以上により、不足する工程や同時期の所産の保証を欠いてはいるものの、一応塊状耳飾の製作工程を垣間見ることができる。同様に第4図6～10も丸玉の製作工程を示している。6・7は研磨段階で、8は穿孔が完了している。9・10は仕上げが行われた完成品である。

これら成品の流通は明らかでないが、ここで製作されていた玉類の原材については、房総に産する岩石との予想がたてられており、さらに周辺地域に同様な遺跡が存在することに期待が寄せられている。

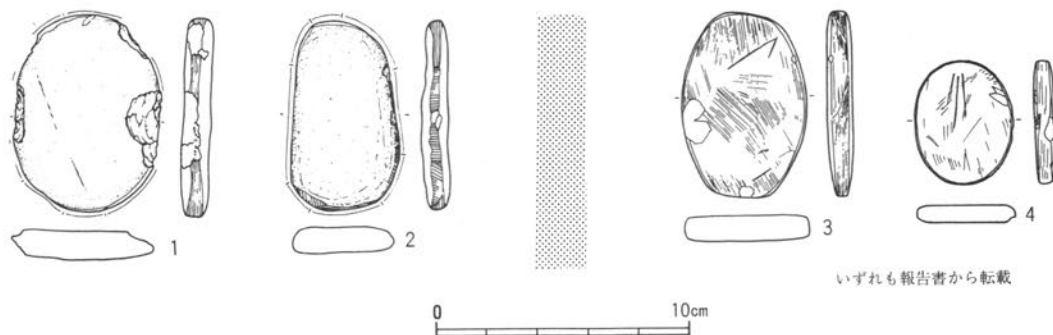
長者ヶ台遺跡および周辺で展開していた攻玉の規模が、どの程度であったかの解明は将来に委ねるとして、「消極的な玉の生産」に関連する資料は随所で認めることができる。最も一般



第4図 勝浦市長者ヶ台遺跡の玉類

Ⅲ 各論

的であるのが、欠損した玦状耳飾の再利用に伴う加工で、他に未成品が集落に持ち込まれた例が少数ながら存在する。第5図の1・2がそれである。加工工程がどこまで進捗した段階に遺跡に搬入されたかわからないとしても、形態的に3・4の岩手県北上市滝ノ沢遺跡¹³の「円盤状石製品」との類似性が指摘されている¹⁴。ここから加工を進め、玦状耳飾か垂飾への完成を目指したものであろうか。



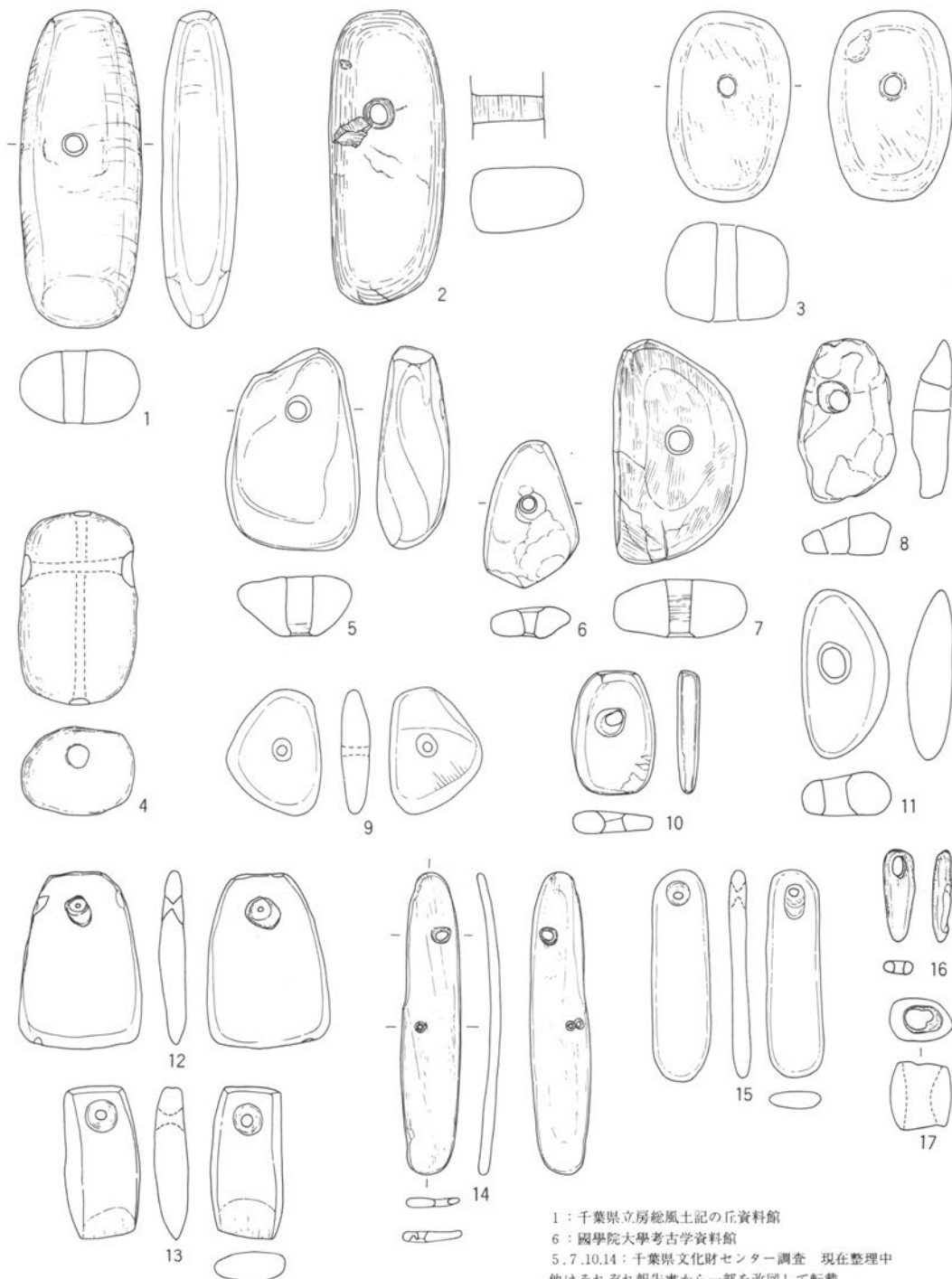
第5図 穿孔前の玦状耳飾未成品

1：上貝塚遺跡 2：若葉台遺跡 3,4：岩手県滝ノ沢遺跡

このように本県においては、長者ヶ台遺跡のように原材の入手から始まる一連の工程、すなわち攻玉という作業を経て行われる生産と、再加工、転用、搬入未成品の加工に伴う消極的な玉の生産が併存していたと考えられる。そして、攻玉によって生産された玉類がどこで消費されたか判明するまでは、どちらも自給自足の生産であることに差異はないといえる。

中期から後期初頭 玦状耳飾の伝統がわずかに残るが、第一に大型の玉類が活況を呈する。本期に特徴的にみられる玉類は大珠、玉斧で、他に多様な垂飾、管玉、丸玉状がある。石材に認められる特色は、ヒスイ製品が多くあることと、コハクの使用を挙げることができる。出土状況は、遺構に伴う場合が希という現象に変化はない。

この時期を代表する大珠をどのように規定するのか、研究者間によって若干の相違があるようだが、広くは八幡一郎氏の定義にしたがっていると思われる。形態に関しては、その後寺村光晴氏が再び整理¹⁶されているが、八幡氏の分類に大きな変更を要する部分はなく、今日においても分類の根底となっている。県内出土の大珠も形態的には、鏢形（第6図1・2・3・5～11）と緒締形（4）とがあり、前者には半月形をなすもの（7・9・11）、上下端のいずれかが肥大しているもの（5・6）がある。また一般には斧形を呈する部類を玉斧として分離して扱っており、12・13がそれに該当する。ただし玉斧はヒスイ製だけを指し、それ以外は有孔石斧とする場合が多い。しかし石材を問題にしなければ、現実には10のように斧形に近いがそうとも断定できず、さりとて8のような不整形とは同様にできないものもあるので、石材を問わずここでは玉斧とした。未だ細かな分類を行う余地も多少残されてはおり、垂飾とか玉と報告されたなかに大珠に分類できるものを見受けるのも、この辺に問題があるようである。一応



1：千葉県立房総風土記の丘資料館
 6：國學院大學考古学資料館
 5.7.10.14：千葉県文化財センター調査 現在整理中
 他はそれぞれ報告書から一部を改図して転載

第6図 中期から後期初頭の玉類

- 1：片野遺跡 2：堀之内貝塚 3：草刈貝塚 4：白井通路貝塚 5.7.10：武士遺跡 6：松山遺跡 8：深名瀬島遺跡
 9.13.15：子和清水遺跡 11：箕輪遺跡 12：一本松遺跡 14：有吉北貝塚 16：龍角寺ニュータウン遺跡 17：中峠貝塚

Ⅲ 各論

集成での出土点数は、29遺跡で40点にはなる。

大珠は、その原材がヒスイであるものを特に硬玉製大珠と呼んで、他の原材から作られた大珠と分けている。周知のように国内におけるヒスイの原産地は限定されており、考古学上の使用は新潟県の糸魚川産地と富山県の宮崎産地が利用されているにすぎない¹⁷、といわれている。また硬玉製大珠の製作は、その産出地に近接した遺跡に限られると考えられ、関東地方はじめ各地で発見される大珠の製作地も、ヒスイ産地地方に求められている。今のところこれを否定する材料はなく妥当な見解である。第6図1～6はヒスイ製であり、穿孔技術の確かさから、ヒスイ産出地方の攻玉遺跡からもたらされたものと断じて誤りないだろう。7はヒスイ製ではない鏝節形大珠で典型的な半月形に整形されている。これには仕上げの研磨が施されていないので、半成品の状態で搬入されたとみることができる。穿孔はほとんど片側から行われ、技術的にはヒスイとの違いはない。それに対し、10・11などは石材選択や、両側からの穿孔であること、孔壁に研磨を施すなどの手法上の違いから察すると、ヒスイ産地で製作された可能性は低くなる。12・13の玉斧、14の篋状品、15～17も大珠を製作していた硬玉の攻玉遺跡での製品でなく、別に生産地を探す必要がある。

前期の塊状耳飾は欠損品に対して、補修用の穿孔や破断面の研磨により、再利用を試みていたが、ヒスイ製品には再加工の状況、特に穿孔の痕跡をうかがうことはない。これは石材の違いからくる穿孔の難易が原因の一つであるほか、ヒスイ製大珠あるいは大珠がもっていた意味によるところが大きであったと考えられる。

ところでこの時期の軽石製品の一部に大珠を模したと思われるものが存在する。従来から軽石製品の使用については、砥石状の用いられ方や、漁網の附属品との見方があり、素材の悪さからか大珠や垂飾の模倣に結びつけることは少ない。丁寧に整形が施されていたり、穿孔部位が大珠と同位置になるものなどは、模倣である可能性の検討も必要である。仮に硬玉製大珠の模倣であるとするならば、それは縄文人の並々ならない宝器への憧れの現れである。

次にコハクを原材とする玉について述べておかなければならない。コハクで作られた玉類は、前期ではまだ不確定であるが中期中葉には確実に存在し、以後晩期まで玉の素材の一つになり、房総の地ばかりでなく各地においてその出土が認められる。今回県内の出土遺跡は、18か所に確認され、その多くが中期に比定されている。第7図1～9が代表例で、大珠、垂飾、不定形の小玉などの種類が存在する。

粟島台遺跡のコハク攻玉 コハクは本県の東端に位置する銚子が産出地として知られ、粟島台遺跡の発見によりコハクの攻玉が明らかとなった。特に1989年に行われた調査では、56点の¹⁸コハク資料の出土があり、より一層アンバールートの中核的性格を確固たるものにした。それでは発掘資料により、玉の製作工程を確認しておくとする。

第8図1は裏面に原面を大きく残しており、小型のコハク塊を分割したものと考えられる。

ここから目的とする玉の形態と大きさが制約されてくるので、古墳時代の玉作工程に準ずるならば、荒割から形割の段階に相当する。

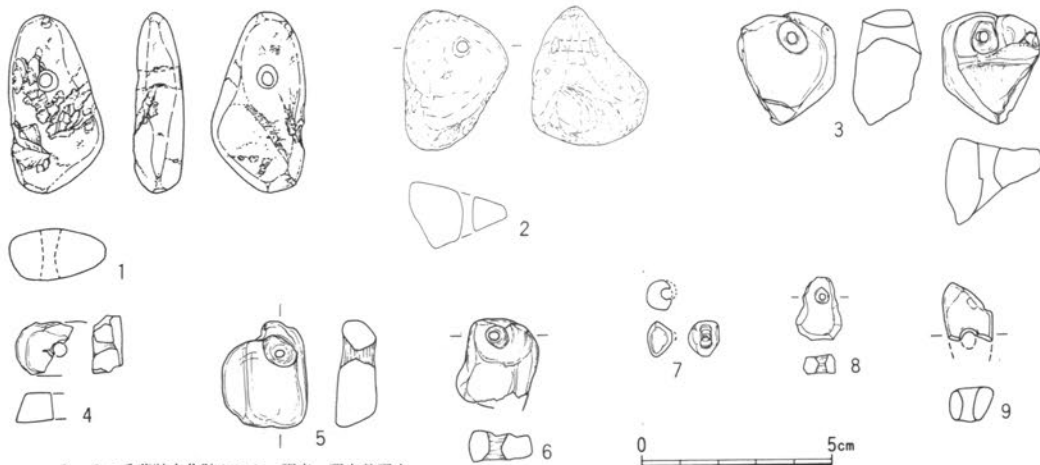
2は周辺に原面を残す剥片で、表裏に剝離がみられるものである。整形の初期段階を示すと考えられる。

3は研磨工程を経て、穿孔工程に進捗したことがわかる。穿孔は片面のみに残り、逆円錐状の穿孔断面を呈する。

4は両面から穿孔を行い、これを完了したところである。孔壁がくの字状になったままなので、孔壁の修整はまだ実施されておらず、仕上げの一手手前といった状況である。

この後仕上げの工程に移り、完成品となったと考えられる。

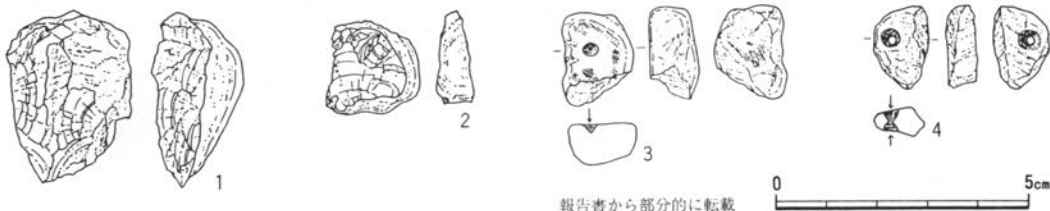
粟島台遺跡では、コハクの加工に伴うと予想される平砥石や筋砥石の攻玉工具の発見がある¹⁹。しかし穿孔用と断言できる工具の出土は知らない。軟質な素材なので、木製か骨製の錐や、尖頭部を有する石器類もその候補になる。穿孔は両面から実施されるのが普通なので、軟らかい素材に対してこの穿孔方法は矛盾があるような気もする。破損の心配、技術の未熟に要因があったかもしれないし、適用していた穿孔方法が、連続的回転運動ではなく抉り穿孔に近い穿孔であったとも考えられる。これらの解明と工房跡の検出、交易ルートがこれからの課題である。



3～8：千葉県文化財センター調査 現在整理中
他は報告書から転載

第7図 中期のコハク製玉類

1：粟島台遺跡 2：東長山野遺跡 3,4：草刈遺跡 5～8：有吉北貝塚 9：向原遺跡



報告書から部分的に転載

第8図 コハクを原材料とした玉の製作

いずれも銚子市粟島台遺跡

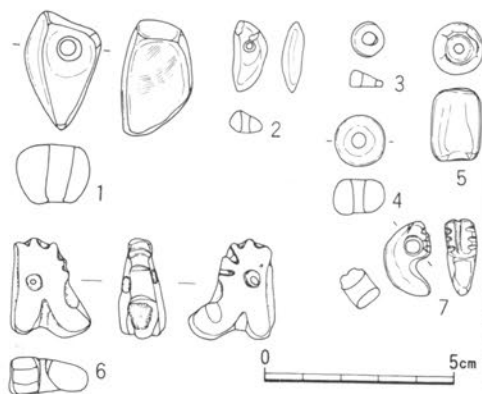
Ⅲ 各論

ヒスイ製品に代表されるように、原材の産出地に隣接して攻玉遺跡が立地し、そこでの生産品が各地に運ばれる、攻玉遺跡主体型の玉文化が展開するのが本時期である。房総では粟島台遺跡がそのような、原材料の産出地に隣接する主体型生産の核と位置づけられ、石製玉類の再加工などの消極的な玉の生産がやや低迷する時期と映る。

後期から晩期 大型の玉類が盛行した前段階と対照的に、小型化の傾向に向かう。種類では、鏢節形大珠をそのまま縮小したような垂飾や、白玉、丸玉、管玉、勾玉が認められる。この時期に比定できる出土遺跡は39を数える。これは縄文時代の時期ごとの遺跡調査数と玉の検出機会と比較した場合、特に晩期の遺跡での玉類の出土頻度が、他の時期を圧倒していることを示している。出土数の増大は、すなわち玉類の需要の増大を意味する。本期の玉類は、単独で垂れ飾りとして用いるのではなく、幾つかの玉を組み合わせたか、連珠状に繋がるような在り方であったと考えられ、一つの装身具が複数の玉による構成になる。この点が前の時期との大きな変革の現れとみることができる。遺構に伴って出土する玉類はわずかであるが、第10図の四街道市御山-1遺跡の土壌出土例²⁰は、本期の玉の使用の状況を良く示している。

玉類の需用に応えるかのように、攻玉遺跡がこれまでにない状況で出現する。印西町天神台貝塚²¹、八千代市神野貝塚²²、佐倉市神楽場遺跡²²、銚子市余山貝塚²³、市原市武士遺跡²⁴、大多喜町堀之内上の台遺跡²⁵が玉類の製作が行われた遺跡で、いずれも拠点的な集落と評価できよう。生産された玉類には、白玉、丸玉、管玉、勾玉があり、列挙した順の4番目までの遺跡でヒスイ製玉類の攻玉が確認できる。また本期の玉の素材に占めるヒスイの割合は、滑石と並ぶ観がある。

さて、ヒスイ製品を代表する大珠は、中期に盛行を極め後期前葉に終焉を迎えたと考えられている。その後ヒスイ製の小型玉類が活況を呈することから、かつてヒスイ製大珠の伝世、分割・解体説が説かれ²⁶こともある。しかし天神台貝塚や余山貝塚の複数の未成品類を観察する



1～5.7：千葉県文化財センター調査 現在整理中
6：報告書から改図転載

第9図 後期から晩期の玉類

1：妙経遺跡 2.3：御山-1遺跡 4.5.7：武士遺跡 6：殿台遺跡



第10図 晩期の玉の出土状況

御山-1遺跡：千葉県文化財センター調査

と、それぞれ質観が異なり、同一個体の分割とみる訳にはいかない。このような状況は仮に多量の大珠の分割の結果というなら有り得ることだが、中期の大珠の出土状況からは否定せざるを得ない。また「未成品として搬入された可能性」²⁷も指摘されているが、数量も多くヒスイ産出地域との交易によって未成品と共に、原材料がもたらされたものと思われる。別の石材、例えば産出地が限定されている黒曜石にしても、原石が供給され、集落で石鏃等に加工されている。原材の産出地において、その資源の強固な管理・独占が行われるか、枯渇の心配がなければ、必要とする地域に供給が続いたはずであり、その意味ではヒスイも例外ではない。したがって、「原材料の入手ということにおいてのみ特殊な位置にあった」²⁸ヒスイ産地に隣接した遺跡に限らず、ヒスイの攻玉は行い得るのである。ただ黒曜石等とヒスイを、受容者側の意識や目的、技術基盤、さらに生産集落の性格自体において同一視できないのは当然のことである。

武士遺跡と堀之内上の台遺跡ではヒスイ製の玉類の製作は認められず、油脂光沢をもった薄緑色の石材を素材にした玉の生産が行われている。この石材は前期の長者ヶ台遺跡の塊状耳飾で使用されていたものと同じで、特論のなかで高橋氏は、「比較的特徴のある滑石」としている。これまで考古学的な見地からは、「滑石は蛇紋岩の一部が変質して生じた岩石」であることから、原材採取の候補地に、蛇紋岩を産する嶺岡山地周辺を挙げていた²⁹。しかし房総に産する蛇紋岩は「あまり滑石化しておらず、かなり硬い岩石」なので、必ずしも遺跡から出土する滑石とは一致しない。希少であったからこそ玉の原材となった、と仮に考えると、嶺岡山地周辺に未発見の場所があるのかもしれない。そうなれば、原材料産出地隣接型の攻玉遺跡になるだろう。次に最も多く出土している白玉の製作をみておくことにする。

白玉の製作順序 ここでは天神台貝塚と武士遺跡の遺物を取り上げて説明する。

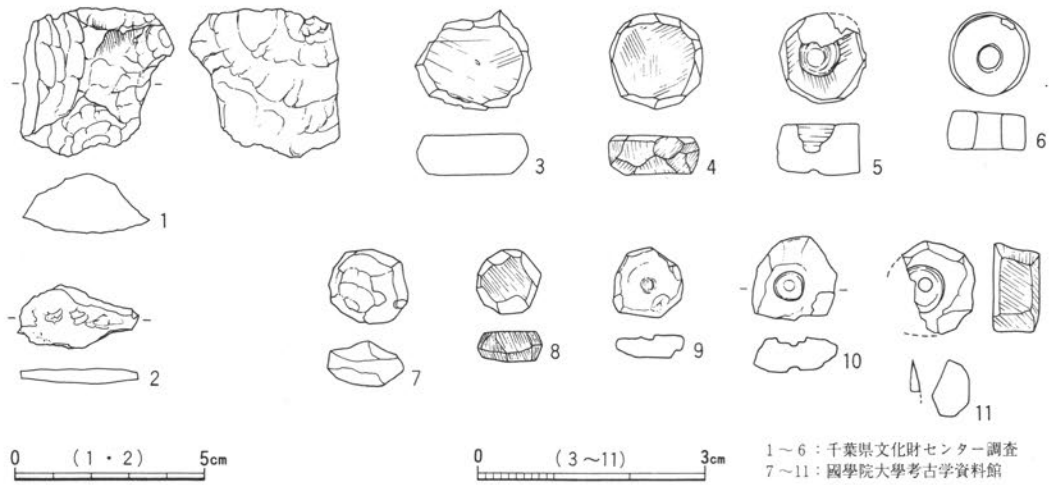
第11図の1は玉の素材として作出された剥片である。母岩は拳大内外と推測され、通常の剥離によって、目的とする玉よりも大きな剥片をとる。やや大きめの剥片は、切断などにより分割したであろう。2などがより白玉の大きさに適合する。

滑石のような軟質な石材では、剥片に対してすぐに表裏両面の研磨を行い、側面部に調整を加える。3は側面調整の途中段階である。7は硬質の石材であり、剥離によって整形が進められるが、まだ研磨は施されていない。

4・8は側面に研磨を施し、それまであった凹凸をなくし、平面形を円形に近づけていく。

続いて穿孔作業に移る。5は両面および周縁部の研磨が完了した後に穿孔に取りかかっているが、9・10では側面の調整が不完全でも穿孔が開始されている。5はかなり深くまで一方からの穿孔を進め、10は両側からほぼ同程度の進捗を計っている。石材の硬軟の違いと考えられるが、穿孔は基本的に両側から行われる。5・7は孔底に小さな凹部ができており、その断面形がUの字形を呈することから、先端に丸さのある錐によって穿孔されたことがうかがわれる。錐の種類と使用された材質の同定は難しい。穿孔途中のヒスイ製未成品のなかには、孔底

Ⅲ 各論



第11図 白玉の製作

1～6：武士遺跡 7～11：天神台貝塚

に「ヘソ」と呼ばれる凸部を残すものがある。土田孝雄³⁰氏の実験などによれば、竹管による穿孔がヒスイに対して可能で、孔底に凸部が生じるという。竹管による穿孔の可能性は大きい。

11のように穿孔が完了すると孔壁の修整、仕上げの研磨が施され、成品となる。

最後に後期から晩期にかけての玉を取り巻く事情についてまとめておくと、玉の需要の増加に伴う生産増大という社会的要求が背景にあり、それにより成品の搬入や原材料搬入型の攻玉が拠点的な集落で行われ、南部地域においては原材料産地隣接型の可能性のある攻玉も興ったとすることができる。そして攻玉遺跡で生産された製品が供給されたのである。

第2表 縄文時代主要玉類

玉の種類	時 期					計
	早 期	前～中初	中～後初	後～晩	不 明	
状 耳 飾	0 (0)	31 (24)	9 (6)	0 (0)	23 (18)	63 (48)
大 珠	0 (0)	0 (0)	37 (27)	2 (1)	1 (1)	40 (29)
玉 斧	0 (0)	0 (0)	7 (5)	0 (0)	1 (1)	8 (6)
管 玉 (状)	1 (1)	6 (3)	2 (2)	7 (5)	4 (3)	20 (14)
垂 飾	1 (1)	4 (4)	51 (18)	42 (17)	12 (11)	110 (50)
勾 玉	0 (0)	0 (0)	6 (5)	27 (16)	4 (4)	37 (25)
白 玉	0 (0)	1 (1)	5 (1)	479 (14)	4 (3)	489 (19)
丸 玉	0 (0)	2 (2)	23 (2)	39 (5)	3 (3)	67 (12)
玉・小玉	0 (0)	5 (4)	16 (10)	21 (3)	5 (5)	47 (22)

上段は出土点数、下段の括弧内は遺跡数 点数不明はいずれも1点として集計

D. まとめ

ここまで県内の玉類の蓄積を概括する形で述べてきたが、生産から流通を以下のように整理できるだろう。まず玉類の生産は、攻玉によるもの（仮にⅠ型と呼ぶ 以下同）と、簡単な補修や再利用での消極的な生産（Ⅱ型）がある。そして攻玉遺跡は、立地条件によって原材料産出地隣接型（A型）と、原材料産出地遠隔型（B型）が存在し、作られた玉類の流通の面からは自給自足型（a型）、供給型（b型）、自給供給併存型（c型）に分類することができる。

旧石器時代から縄文時代早期までの県内における玉類の発見例は乏しい。そのなかで旧石器時代に属する出口・鐘塚遺跡の垂飾は、体系化や組織化された生産でないことを別にすれば、小規模なⅠBa型生産の初現期の製品と見做すことができる。しかし、単発的で他に類例がないので実態は不明である。

玉類の獲得欲求の高まりは、前期になると顕著に現れ、県外のⅠAb・ⅠAc型で生産されたと考えられる玦状耳飾が各所で検出されるようになる。同時にⅡa型が行われるようになり、県南ではⅠAa型の可能性のある遺跡が出現する。

中期に盛行するヒスイ製大珠は消費の最終を示す形で遺跡から発見され、ヒスイ以外の素材を含めると大珠は40個が確認できた。いずれもⅠAb型あるいはⅠAc型の遺跡から供給されたものである。一般にこの時期の玉類の入手はⅠA型の遺跡からの供給に頼る傾向が看取され、銚子市に所在する粟島台遺跡は、コハクと結びついた本県で唯一のⅠAb型の遺跡で、その頼りの一端を担っている。

後期から晩期にかけては小型玉類の発見機会が多く、連珠の普及による需要の増大をうかがうことができる。それに呼応して、県外からの成品搬入ばかりでなく、県北の拠点的な集落においてⅠBc型の生産が展開し、南部地域でも滑石と結びつくと考えられる、ⅠAc型生産遺跡の形成が認められるのである。ただこの問題については、前期のⅠAa型の遺跡とともに今後岩石学的検証を必要としている。

以上時期の推移にしたがい、出土玉類と生産の在り方の一部を追ってみたが、工房についてふれなかったのでここで一言述べることとする。本県に所在するⅠA型あるいはⅠB型の8か所の遺跡では、確実に工房と認め得る竪穴住居は未発見である。将来検出される可能性をもつ遺跡もあるので、早急に判断は下せないが、現時点では、縄文時代の玉生産が非生業的性格であり、また屋外における作業でも十分に対応できると考えられるため、製作空間としての上屋を有する工房の必要性は薄いと思っている。

今回のように県内だけの玉を対象に置いてみても、研究領域が多方面にわたることが改めて理解できた。しかし、玉の個別研究にしても製作技法についても、それぞれを掘り下げて論ずるまでには至らなかった。ただ幾つかの課題を抽出できたことが成果であろう。

Ⅲ 各 論

註

1. 青木 豊 「縄文時代の玉類」 [文献202]
2. 寺村光晴 「縄文時代の攻玉遺跡」 [文献296]
3. 北総のほぼ中央部に位置する四街道市物井字出口に所在し、1987年に千葉県文化財センターが発掘調査を実施した遺跡である。整理作業が途中であるため(1992年3月時点)、詳細は明かでないが、成果の一部については文献385において紹介されたほか、全体的な概要は下記にふれられている。
千葉県文化財センター 「四街道市池花南遺跡・御山遺跡・出口・鐘塚遺跡」 『昭和62年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』 1988
4. 出口・鐘塚遺跡(前掲註3)の北東約900mの位置に所在し、1984年に千葉県文化財センターが発掘調査を実施した遺跡である。立川ローム層中の石器群、古墳時代の遺構をはじめ、縄文時代晩期の良好な土器が出土している。また縄文時代の遺構としてはピット群や土壌が検出されており、その土壌の1基から多量の白玉が出土した。
5. 土肥 孝氏は、出口・鐘塚遺跡の「垂飾様石製品」について述べるなかで、「穿孔品特有の錐などの整形具による回転痕はなく、平行する擦痕が走っており、穿孔品と断定するには躊躇を感じる」とし、有孔装身具とするには「なお検討を要する遺物」と位置づけている。[文献405]
6. 1990年千葉県文化財センター調査。現在整理中。
7. 文献409
8. 文献230
9. 文献234
10. 長者ヶ台遺跡の玉類のうち、立教大学考古学研究会が紹介した吉野忠衛氏収集資料 [文献125] と、1973年に行われた調査で出土したもの [文献108] については、橋口定志氏のご教示により、勝浦市教育委員会において実見し、同教委のご高配により実測させて頂いた。また1990年の調査で出土した第4図1に関しては、整理作業中のところ調査担当者である新井和之氏のご厚意により、実見する機会を得たうえ実測させて頂いた。
11. 寺村光晴氏は穿孔方法を、「回転による穿孔と、打撃すなわちタタキ法による穿孔」に大きく分類し、さらに回転による穿孔を「非連続的回転運動によるもの、連続的回転運動によるもの、連続的回転運動によるもの」に細別しており、もみ錐や回転の反復運動による穿孔法を「連続的回転運動によるもの」と呼んでいる。[文献73]
12. 前掲註11において寺村氏が概略を述べ、藤田富士夫氏が具体例を示して解説している。基本的には「工具を指先に持ち、手首をよじって抉り取る方法」とされる。[文献221]
13. 稲野祐介ほか 『滝ノ沢遺跡』 岩手県北上市教育委員会・北上考古学会 1983
14. 田村 隆氏は流山市上貝塚遺跡・若葉台遺跡から出土した特殊な石器を「円盤型磨製品」と呼んで、滝ノ沢遺跡(前掲註13)との類似を指摘している。[文献302]
15. 文献6
16. 寺村光晴氏は大珠を、鰹節形、緒締形、石斧形、不整形に分類している。[文献37]
17. 藤田富士夫 「硬玉の加工遺跡」 [文献372]
18. 文献418
19. 文献104
20. 長径160cm、短径110cm、深さ13cmの楕円形を呈する土壌である。白玉は土壌の北に寄った位置から出土し、大半が原位置を保って連珠状に連なった状態で検出され、一部がばらけた状態で周辺に散在する。荒海式期に比定される。

21. 文献30、文献296のほか、小野良弘氏が長年にわたって収集された資料が最も充実して注目される。この資料は現在國學院大學考古学資料館に移管されており、同資料館のご厚意により実見し、一部について実測させて頂いた。〔文献406〕
22. 國學院大學考古学資料館の小野良弘氏旧蔵資料に基づく。
23. 文献441
24. 千葉県文化財センター調査。現在整理中
25. 文献174
26. 前掲註15に同じ。
27. 藤田富士夫氏は「千葉県や長野県などでも硬玉未成品が検出されているが、数は少なく、そこで加工されたというよりも未成品として搬入された可能性もある」と考えている。前掲註17に同じ。
28. 西田正規 「生産と消費 専門化の程度」 〔文献375〕
29. 前掲註2に同じ。
30. 土田孝雄 「硬玉加工の実験的考察」 〔文献204〕

2. 弥生時代の玉

弥生時代の墳墓以外の玉類出土遺跡数は、県内で23遺跡しかなく、確実な玉作遺跡・遺構は確認できなかった。発端となった『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』¹でも、該期の玉作遺跡は確認されていないので予想された結果といえる。また、1982年の『房総風土記の丘年報』²に「房総出土の古代の玉」のなかで小川和博氏が弥生時代の玉を端的に、かつ要領よくまとめている。³

弥生時代の玉は、碧玉質（緑色凝灰岩）の管玉、ガラス製の小玉類の出現がみられる点で縄文時代の玉と区別され、技術的にも古墳時代の玉作と同質であることからその前段階的なものとして受けとめられている⁴。弥生時代を特色づける管玉に関しては、九州・四国・畿内の西日本、山陰・北陸・佐渡地方では製作遺跡が検出されている。同様にガラス・ヒスイ等の玉類製作遺跡は国内各地から検出されているが、千葉県には確実な玉類の製作遺跡は検出されていない。

県内の玉の出土は、集落遺跡の竪穴住居からのものがほとんどで、玉の種類は勾玉・管玉が主体である。勾玉はコハク・ヒスイ・滑石製で、管玉は緑色凝灰岩（碧玉を含めて）製が大部分である。これらの中からコハク製の勾玉に注目してみたい。コハク製勾玉は、県内で2遺跡の2遺構から出土している。銚子市佐野原遺跡⁵の竪穴住居から2点、市原市椎津茶ノ木遺跡⁶の竪穴住居から2点であり、全国的にもこの2例しかないとみられる。銚子市佐野原遺跡の例は出土状況から時代が下る可能性を指摘する論もあるが、市原市椎津茶ノ木遺跡の例は、中期宮ノ台式期の竪穴住居からコハク製の勾玉2点、玉4点、破片4点とまとまって出土しており、コハクの玉の出土が優越している。本遺構が玉作に関連するのかはよくわからないが、これか

ら同様な遺構の例は増加しても良いだろう。

また、この時期に特徴的にみられる鉄石英製の管玉は、鉄石英の産出地が限定されていることから、将来流通経路や製作遺跡の追求によって、その解明の糸口がつかめるかもしれない。

最近の論文で、山本哲也氏の「西上総における古墳時代中期の玉作」において、今までの資料では古墳時代の石製模造品製作遺跡として扱っている、君津市下荘台遺跡について滑石の模造品製作遺跡ではなく、弥生時代後期の勾玉の製作遺跡の可能性があると指摘がなされている。今回の集成表では従来通りの取り扱いをしたが、このことが確実ならば、本県では初の弥生時代の玉作遺跡となろうし、今まで玉作とは縁の薄いとみられがちであった千葉県南部の上総地区での玉作遺跡の検出となる。坂詰秀一氏の報告以外に資料がないのが残念であるが、今後本遺跡の調査の機会があるかもしれないし、周辺遺跡で弥生の玉作工房が検出されるかもしれない。今後の資料の増加に期待するばかりである。

註

1. 文献296
2. 文献202
3. 小川和博 「房総出土の古代の玉 III 弥生時代の玉類」 「文献202」
4. 藤田富士夫 「II 各時代の玉文化の特色 弥生時代」 「文献372」
5. 文献120
6. 文献442
7. 山本哲也 「西上総における古墳時代中期の玉作～文協遺跡の例を中心として～」 「文献427」

3. 古墳時代の玉作

(1) 千葉県内の玉作遺跡について

A. 千葉県内の玉作関係遺跡とその研究のあゆみ

今回の文献等による資料調査により、玉類等の出土遺跡334遺跡、玉類の製作工房34遺構、石製模造品の製作遺構121遺構が確認された。発掘調査による出土資料が主体となるため発掘調査の頻度による影響が反映されるのは仕方がないが、遺跡数を地区別にみると北総地区に圧倒的に多く出土遺跡数の約7割を占め、上総・安房地区に少ない傾向がみてとれる。全体的な傾向は以上のようなものであるが、石製模造品を出土した祭祀遺跡についてみるとこれとは逆に上総、安房地区に多く下総地区に少ないということがいえる。これについては、石製模造品を出土した遺跡に限定して抽出したことと、明らかに祭祀遺構であるという確証が得られるものが少なかったために、総計19遺構しか確認されていないことから全体的傾向をつかむのは難しいといえよう。19遺構のうち複数の遺構の検出された遺跡は、佐原市綱原遺跡¹で2遺構、木更津市マミヤク遺跡²で2遺構、安房郡白浜町小滝涼源寺遺跡³で6遺構があげられる。

玉類の出土する遺跡というと古墳に代表される墳墓等からの玉類の出土を忘れることはでき

Ⅲ 各 論

ない。今回の研究紀要の編集作業の当初において墳墓等からの玉類の出土については取り上げないこととして作業を進めたので、古墳等の出土品としては特別な例を除いて集成・分析・検討は行っていない。ただし、生産された玉類の最も重要な消費遺構である墳墓類からの出土を無視して玉類の生産は語れないと思われる。

玉作工房は、成田市で19軒、下総町で12軒の計31軒となり、今回確認の全34軒の9割を占め、成田市八代、外小代、大竹、香取郡下総町大和田地区に玉作工房が集中している状況が知られる。その他の地区では市原市で1軒が検出されているのみで、栄町、富津市の例は工房の検出ではなく、未成品が表採されたことにより工房の存在の可能性が示唆されたものであるため遺構としては確認されていない⁴。つまり利根川南岸の下総町大和田玉作遺跡群とでも呼ぶべき一群と、印旛沼東岸の成田市八代（周辺）玉作遺跡群とでも呼ぶべき一群とに大きく分けられる。両者は共に、『和名抄』に記載のある下総国埴生郡玉作郷との関係に注目され、いくつかの論考もされている⁵。県外ではあるが茨城県稲敷郡江戸崎町桑山上の台遺跡⁶にも玉作工房が確認されている。一方、上総国に属する、市原市草刈六之台遺跡⁷検出の玉作工房は報告書が刊行されていないため、その詳細は明かではない。

調査・研究対象として玉作遺跡が発見されたのは、成田市八代字花内の後に八代玉作遺跡として千葉県指定史跡に指定される地区からであった。1962年に八代玉作遺跡調査団が組織され第1次発掘調査が実施され、玉作工房を1軒検出、調査した。翌1963年に第2次調査が実施され2軒の工房他が調査された⁸。一方石川県の加賀市片山津玉作遺跡の発掘調査も1955年に実施されており、玉作遺跡の重要性が認識されはじめた頃であった。この八代遺跡の成果に基づいて1967年に千葉県は八代遺跡を八代玉作遺跡として指定した。また、地元の研究者によって香取郡下総町大和田の台地上にも玉作に関連した遺物が出土することが知られ、1969年に予備調査、1970年に千葉県教育委員会によって第1次・第2次調査が実施され工房の検出・調査に至った¹⁰。その後、1971年から外小代遺跡、八代遺跡の調査が実施され、玉作工房が多数検出され報告書が『公津原Ⅱ』¹¹として刊行されている。

成田市大竹遺跡は成田市教育委員会が実施した1972年の分布調査の際に玉作遺跡であることが確認され、1974年に発掘調査が一部実施され、玉作工房が検出されている¹²。

現在のところ上総で調査された唯一の玉作遺跡である市原市草刈六之台遺跡は1983年に重層的な遺構の中から工房が1軒検出され、緑色凝灰岩製の管玉を製作していたことが確認された。

B. 印旛沼東岸地域の玉作遺跡（第13図）

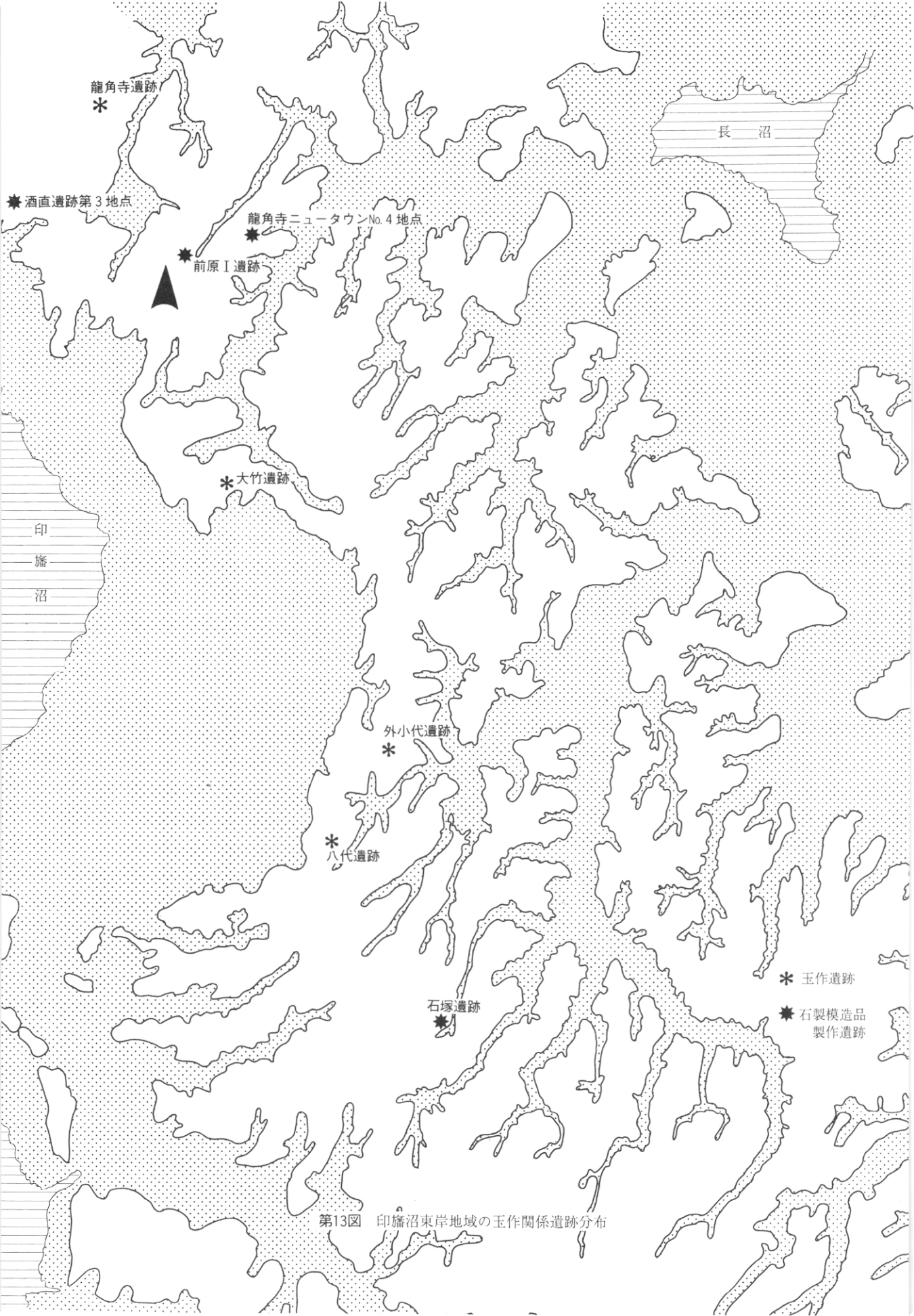
印旛沼東岸地域には、玉作関係遺跡が集中してみられ、南から順に成田市八代遺跡（八代玉作遺跡¹³）、外小代遺跡¹⁴、大竹遺跡の3か所の遺跡があげられる。さらには、石製模造品製作遺跡も比較的多く成田市石塚遺跡、八代遺跡、外小代遺跡、大竹遺跡、印旛郡栄町前原Ⅰ遺跡、龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点、酒直遺跡第3地点の7か所の遺跡がみられる。また龍角

3. 古墳時代の玉作

第3表 市町村別玉作関係遺跡検出状況

番号	市町村名	遺跡数	前期	中期	後期	奈良平安	不明	玉作	工房	整六住居	祭祀	他
1	関宿町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	野田市	5	4	6	0	0	1	0	4	5	1	1
3	柏市	12	0	10	2	1	4	0	0	13	0	4
4	流山市	2	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0
5	我孫子市	6	1	1	24	1	2	0	0	27	0	2
6	沼南町	6	3	3	12	0	2	0	1	17	0	2
7	松戸市	4	0	2	2	0	2	0	1	2	0	3
8	印西町	5	1	1	0	0	3	0	2	2	0	1
9	栄町	12	0	6	34	0	5	1	4	35	0	5
10	本埜村	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	成田市	21	17	17	18	3	10	19	10	28	1	7
12	鎌ヶ谷市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	市川市	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0
14	船橋市	5	0	26	26	0	2	0	11	37	0	6
15	白井町	4	2	5	2	0	1	0	4	5	1	0
16	八千代市	5	0	21	3	0	2	0	20	5	0	1
17	印旛村	6	0	10	9	0	0	0	3	16	0	0
18	佐倉市	20	7	23	52	8	13	0	15	78	0	10
19	酒々井町	1	0	0	0	3	0	0	0	3	0	0
20	富里町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	浦安市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22	習志野市	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
23	四街道市	7	0	5	19	0	3	0	2	23	0	2
24	八街町	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
25	佐原市	12	0	2	11	0	5	0	6	5	2	5
26	下総町	25	1	7	6	0	17	12	10	3	1	5
27	神崎町	2	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1
28	小見川町	4	3	0	1	0	1	0	1	3	0	1
29	東庄町	3	1	0	0	0	5	0	1	2	0	3
30	大栄町	2	0	3	0	0	2	0	2	2	0	1
31	栗源町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
32	山田町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
33	干潟町	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
34	海上町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
35	千葉市	38	3	33	91	8	53	0	14	154	0	20
36	芝山町	7	0	9	17	0	6	0	8	22	0	2
37	多古町	10	0	6	8	1	7	0	3	14	0	5
38	八日市場市	4	1	3	1	0	2	0	0	6	0	1
39	旭市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
40	飯岡町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	233	44	202	340	26	151	32	124	511	6	90

41	鏡子市	5	0	0	6	0	6	0	0	7	0	5
42	山武町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
43	横芝町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44	松尾町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
45	光町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
46	野栄町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
47	成東町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
48	蓮沼村	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
49	東金市	4	0	0	10	6	7	0	1	18	0	4
50	大網白里町	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
51	九十九里町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
52	市原市	33	15	8	44	4	44	1	0	71	1	42
53	長柄町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
54	茂原市	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
55	長生村	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
56	白子町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
57	長南町	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3
58	睦沢町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
59	一宮町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
60	袖ヶ浦市	13	2	0	0	0	13	0	3	2	1	9
61	木更津市	14	2	13	9	0	21	0	1	37	2	5
62	君津市	7	0	0	0	0	7	0	1	1	0	5
63	富津市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
64	夷隅町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
65	岬町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
66	大多喜町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
67	大原町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
68	御宿町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
69	勝浦市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
70	天津小湊町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
71	鴨川市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
72	鋸南町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
73	富山町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
74	富浦町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
75	三芳村	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
76	丸山町	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
77	和田町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
78	館山市	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
79	千倉町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
80	白浜町	2	5	1	0	0	1	0	0	0	6	1
	小計	94	25	22	69	10	115	1	6	136	11	87
	総計	327	69	224	409	36	266	33	130	647	17	177



第13図 印旛沼東岸地域の玉作関係遺跡分布

寺遺跡は玉作の可能性が指摘されているが、現在のところ確実な資料がないため、ここではふれないことにする。

玉作遺跡としてあげた3遺跡は、すべて成田市に所在し、そのいずれもが印旛沼の東岸の台地上に位置する。八代遺跡は、八代花内遺跡の名称で発掘調査が行われ、3軒の玉作工房が検出され、それから緑色凝灰岩製の母岩、管玉、勾玉、平玉等の未成品や剥片を多数出土した他、砥石・鉄器等の工具類も検出されている。その後の1971年の調査では、玉作工房7軒が検出されている。緑色凝灰岩だけではなく滑石製の玉類と、模造品類の製作が明らかになった。

外小代遺跡は八代遺跡から北へ約500m離れた玉作遺跡で、工房8軒が検出された。工房は、古墳時代前期のもので緑色凝灰岩製の管玉、大形管玉状石製品未成品、勾玉、石釧の刳貫円板片等も出土している。外小代遺跡も八代遺跡と同様に、緑色凝灰岩だけでなく滑石製の玉類と模造品類が製作されていた。

大竹遺跡は、緑色凝灰岩製の管玉、大型管玉状石製品、工具のうち出雲形砥石が出土し、また滑石製の白玉等も製作していたことが知られ、技法的にも「八代・大和田技法」とは別の敲打施溝技法が確認されている。

C. 下総町周辺地域の玉作関係遺跡

香取郡下総町周辺地域にも玉作関連遺跡が数多く確認されている。下総町大和田地区を中心としてその周辺地域に玉作遺跡、石製模造品製作遺跡が多く所在し、一般には大和田玉作遺跡群という名称で呼ばれて知られている。1969年・1970年に発掘調査が実施され治部台遺跡では玉作・模造品製作工房を1軒検出し、稲荷峰遺跡では玉作・模造品製作工房を2軒検出している。玉作工房の検出をした遺跡としては、治部台遺跡で1軒、稲荷峰遺跡で2軒とそれほど多くはないが、地元の研究者によって綿密な表採が行われ、玉作関連遺物が収集され玉作工房が確実に存在するであろう遺跡がいくつかあげられている。それらをあげてみると、若庄司遺跡、房台（八幡神社）遺跡、仲道（八幡神社裏）遺跡、小山（宮作・小山岱）遺跡、大日台遺跡があげられる。また同じように石製模造品製作工房の検出もあり、木挽崎遺跡で1軒、大和田坂ノ上遺跡で1軒、治部台遺跡で1軒、稲荷峰遺跡で1軒、天神台遺跡で1軒、東明神山遺跡で1軒、小野女台遺跡で2軒が検出されている。玉作工房と同様に地元の方の表採の成果により石製模造品製作工房が確実に存在するとみられる遺跡は、若庄司遺跡、房台（八幡神社）遺跡、仲道（八幡神社裏）遺跡、小山（宮作・小山岱）遺跡、高岡遺跡、八幡神社遺跡、大日台遺跡等があげられる。

最近、発掘調査例が増加し、今まで知られていなかった玉作遺跡が確認されてきているが整理作業が発掘調査の進捗に追いついて行けない状況のため、詳細な状況がつかめない遺跡がある。猫作¹⁵・栗山古墳群¹⁶、松葉遺跡¹⁷、平台遺跡¹⁸、山崎遺跡¹⁸等であるが玉作遺跡として紹介されている。



利根川



遺跡番号は玉類出土遺跡集成表(3)古墳時代 香取郡下総町の番号と対応する

- * 玉作遺跡
- ★ 石製模造品製作遺跡
- 石製模造品出土遺跡

第14図 下総町周辺地域の玉作関係遺跡分布

水掛遺跡

14

D. 県外周辺地域の玉作遺跡

県外の玉作遺跡へ目を向けると、千葉県とはやや距離があるが、弥生時代の玉作が行われていた群馬県甘楽郡甘楽町の笹遺跡があげられる。笹遺跡は弥生時代後期に、滑石質の勾玉の製作を行っており、関東では最も古い玉作遺跡と考えられる。しかし、古墳時代の玉作とは製作工程が異なっており、関東では弥生時代の玉作が古墳時代の玉作に継承されていないという見方がされている¹⁹。そのため古墳時代の玉作は、各地域に突然現れるという考え方がされている。そこで玉作遺跡の系統の見方はせずに、ここでは千葉県に近接した玉作遺跡から見ていくことにしたい。

下総町と利根川を挟んだ対岸の茨城県稲敷郡江戸崎町に桑山上の台遺跡が所在し、表面採集により玉作関連遺物が認められ、試掘調査によって玉作工房が検出され緑色凝灰岩・滑石の未成品・剥片が出土している。管玉・白玉・有孔円板・剣形品等の未成品で石製模造品、玉類の両者を製作していたとみられ大和田玉作遺跡群に類似した玉作遺跡であるとみられる²⁰。また、霞ヶ浦西岸の土浦市烏山遺跡でも玉作が行われ、緑色凝灰岩・滑石・メノウによる玉類の製作が行われていたことがうかがわれる。緑色凝灰岩製管玉・滑石製管玉・メノウ製勾玉・滑石製勾玉の製作技法については寺村光晴氏が報告書で「烏山技法」として復元している²¹。烏山遺跡の管玉の製作については後に「烏山技法」として説明する。

一方東京湾を挟んだ神奈川県に目を向けると川崎市久地不動台遺跡で玉作（笠形状品）、横浜市上谷本遺跡²²で玉作、逗子市持田遺跡で玉作等の遺跡が調査、確認されている。海老名市の本郷遺跡は玉作工房が6軒検出され管玉、紡錘車形石製品未成品、円筒状未成品、大型管玉状石製品未成品等が出土している。それらの中から緑色凝灰岩の管玉の製作技法に関して1つの特徴的製作法が抽出され、寺村光晴氏によって「本郷技法」と名付けられ報告されている²³。この「本郷技法」についても後に説明をする。

(2) 成田市八代遺跡について

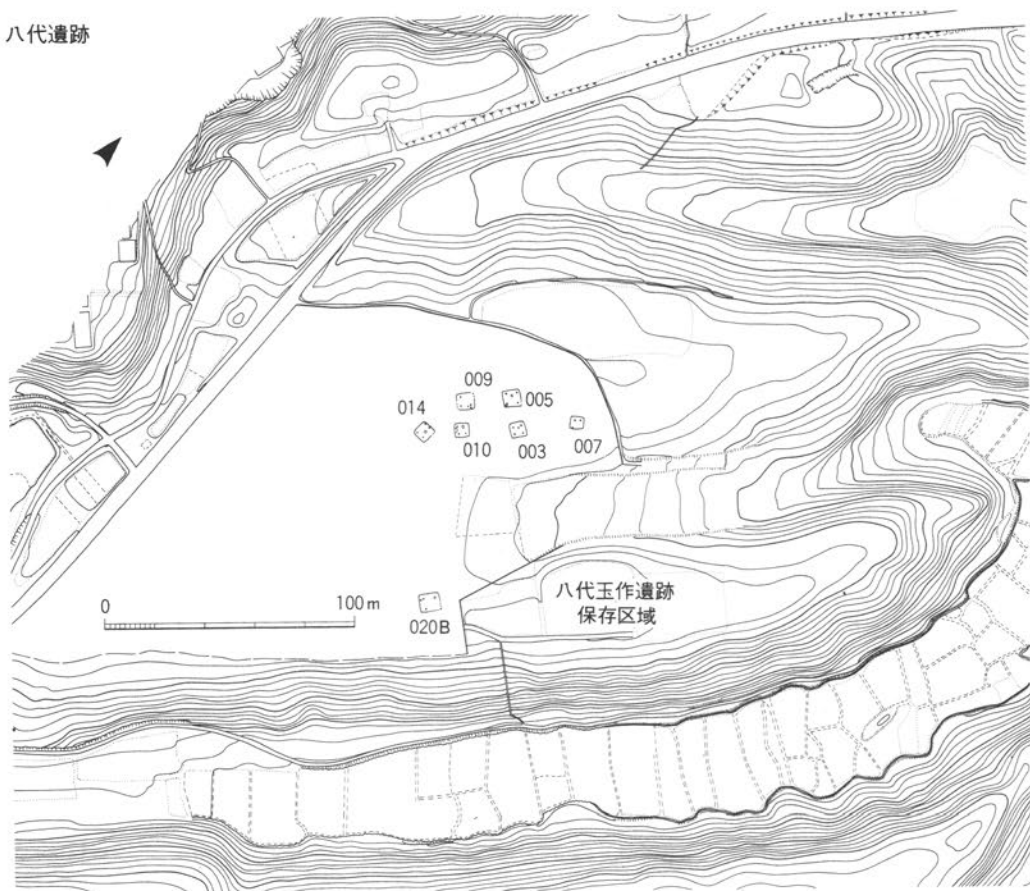
A. 遺跡の概要（第15図）

成田市八代字花内（旧地番）に位置する。西側を印旛沼、北東を小橋川、南西を江川に囲まれた広大な台地の北西端にあたる。この台地は小橋川や江川に複雑に開析され、本遺跡も小橋川の支谷に囲まれる。中央に浅い谷が入り込んだカニの手のような形態の半島状の台地で、標高33m前後である。西側に印旛沼を見下ろしている。

印旛沼東岸一帯には公津原古墳群（八代台古墳群・天王塚船塚古墳群・瓢塚古墳群）と総称される100基以上の古墳が連なり、存在は古くから知られていた²⁴。八代遺跡も1962年に玉作遺跡である可能性が指摘され、1962年・1963年に2次にわたって発掘調査が行われた。その結果、予想通り玉作工房を検出した。調査したのは台地中央の谷の南東側に当る部分で、2回の調査で完掘した6軒の竪穴住居のうち3軒が玉作工房であった。これは東国における最初の玉作遺

Ⅲ 各論

八代遺跡



外小代遺跡



第15図 八代遺跡・外小代遺跡の玉工房配置図

跡の調査で、整理の結果「八代・大和田技法」が確認され、学史上も貴重な調査であった。1977年には千葉県指定史跡となり、当初小字から花内遺跡と呼ばれていた遺跡名を大字から「八代玉作遺跡」²⁷と改称した。

この後、周辺は新東京国際空港建設と関連した成田ニュータウン造成事業に伴い、1969年から予定地内の分布調査が実施され、玉作遺跡を含む集落の存在も明らかになっていった。同年10月からは発掘調査も開始されて、古墳59基と集落34遺跡を発掘調査した²⁸。玉作遺跡は八代遺跡（公津原Loc. 39）と外小代遺跡（公津原Loc. 40）が調査され、古墳時代中期の石製模造品製作遺跡である石塚遺跡（公津原Loc. 20）も検出した。外小代遺跡は、八代遺跡と小支谷を挟んで隣接しており、北東へ500m程のところにある。また石塚遺跡は、印旛沼からはさらに奥に入った八代遺跡の南西にある。このほか石塚遺跡からさらに奥まった所に位置する米野向台遺跡（公津原Loc. 9）、米野赤坂遺跡（公津原Loc. 9-Ⅱ）等からも古墳時代前期の集落を検出し、八代遺跡や外小代遺跡との関連が考えられるが、ここからは玉作工房は検出していない。公津原古墳群のなかには八代台古墳群12号墳等のように5世紀前半に位置づけることができる古墳や、石枕を出土したり（瓢塚32号墳）、石製模造品類を出土したり（瓢塚47号墳、天王船塚32・33・36号墳）し、時期や内容等から玉作遺跡や石製模造品製作遺跡との関連が考えられる古墳もある³⁰。また、印旛沼の北には大竹遺跡・栄町龍角寺遺跡、その周辺には栄町前原Ⅰ遺跡、栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No. 4地点等があり、印旛沼北岸から東岸にかけて玉作・石製模造品製作遺跡がまとまっている。また、北東の下総町大和田玉作遺跡群との間にも成田市水掛遺跡、成田市磯部遺跡等の石製模造品製作遺跡が存在する³¹。

八代遺跡の調査は1971年に、1962年・1963年の調査区と隣接する南東から北側にかけて行われた。この結果円墳1基（八代台7号墳）と縄文時代から古墳時代の竪穴住居40軒を検出した。このうち7軒が玉作工房で、最初の調査で検出した3軒も含め、10軒の玉作工房が谷を囲むように位置していたことが判明した³²。

B. 玉作工房と遺物の概要(第4表～第7表)

八代遺跡で調査した玉作工房は10軒である。1962年・1963年の調査で3軒（第1・3・6号址）、その後1971年の調査でさらに7軒の玉作工房を検出した。今回あらためて検討の対象としたのは1971年に調査した玉作工房で出土した遺物である。

検討の方法については「Ⅰ 序論 2. 研究の目的と方法」で簡単に述べたが、八代遺跡の概要を記載するにあたり、若干補足しておく。

八代遺跡出土遺物を含め、外小代遺跡、石塚遺跡出土の遺物については『公津原Ⅱ』に既に正式に報告が行われている。しかし、玉類製作や石製模造品製作に関する遺物は剥片や碎片を含めると膨大な量で、紙面の都合上、報告書に掲載する遺物を成品や未成品を中心に選択している。したがって、原石から未成品に至る間の段階やこの段階で得られる剥片類について再度検

Ⅲ 各論

第4表 八代遺跡玉作工房出土の緑色凝灰岩製品

遺構名	003		005		007		009		010		014		020B		合計	
種類	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
管玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
管玉(穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
管玉(研磨)	0	0	5	51.29	0	0	1	13.47	6	114.79	1	3.12	0	0	13	182.67
管玉(側面調整)	6	55.08	4	51.02	3	31.83	4	59.27	12	103.13	3	22.97	0	0	32	323.30
管玉(形割)	16	125.15	0	0	7	156.21	0	0	0	0	0	0	0	0	23	281.36
大型管玉状石製品	0	0	0	0	0	0	0	0	1	81.19	1	69.77	0	0	2	150.96
類円板・輪縁彫石製品等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒割品	1	148.62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	148.62
剥片大(5cm以上)	10	222.19	1	33.45	0	0	0	0	0	0	0	0	3	50.88	14	306.52
剥片中(3~5cm)	25	223.55	1	7.43	0	0	15	152.54	1	9.83	1	10.36	9	52.40	52	456.11
剥片小(3cm以下)	93	142.93	5	9.00	2	4.36	49	76.01	4	3.60	4	5.60	6	12.37	163	253.87
残核	12	507.85	0	0	0	0	0	0	1	170.55	0	0	0	0	13	678.40
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	2	910.00	0	0	0	0	2	910.00
合計	163	1425.37	20	596.96	12	192.4	69	301.29	27	1393.09	10	111.82	18	115.65	315	3691.81

第5表 八代遺跡玉作工房出土の滑石製品

遺構名	003		005		007		009		010		014		020B		合計	
種類	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
管玉	0	0	4	4.92	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4.92
管玉(穿孔)	2	2.27	0	0	1	1.00	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3.27
管玉(研磨)	0	0	2	10.60	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.94	3	12.54
管玉(形割)	1	5.47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	12.80	3	18.27
勾玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平玉(未穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板(未成品)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板状品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.32	0	0	0	0	1	2.32
板状品(未研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒割品	0	0	4	444.77	0	0	0	0	0	0	0	0	1	67.45	5	512.22
剥片大(5cm以上)	1	11.66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	19.27	2	30.93
剥片中(3~5cm)	26	141.58	3	37.35	0	0	0	0	0	0	0	0	3	31.12	32	210.05
剥片小(3cm以下)	29	59.01	15	52.63	0	0	0	0	1	1.06	2	7.90	2	5.92	49	126.52
残核	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	59	219.99	24	105.50	1	1.00	0	0	2	3.38	2	7.90	10	138.50	102	921.04

第6表 八代遺跡出土の緑色凝灰岩製品

遺構名	001	004	表採	合計
管玉	0	0	0	0
管玉(穿孔)	0	0	0	0
管玉(研磨)	0	1	0	1
管玉(側面調整)	1	0	0	1
管玉(形割)	0	0	3	3
大型管玉状石製品	0	0	0	0
割貫円板・紡錘車形石製品等	0	0	0	0
その他	0	0	0	0
荒製品	0	0	1	1
剥片大(5cm以上)	0	1	5	6
剥片中(3~5cm)	2	12	9	23
剥片小(3cm以下)	6	19	4	29
残核	0	0	0	0
母岩	0	0	0	0
合計	9	33	22	64

第7表 八代遺跡出土の滑石製品

遺構名	表採
管玉	0
管玉(穿孔)	0
管玉(研磨)	0
管玉(形割)	0
勾玉	0
平玉	0
平玉(未穿孔)	0
有孔円板	0
有孔円板(未成品)	0
板状品(研磨)	0
板状品(未研磨)	0
荒製品	2
剥片大(5cm以上)	0
剥片中(3~5cm)	0
剥片小(3cm以下)	2
残核	0
母岩	0
合計	4

討を行うことで、製作工程をさらに詳細に復元できる可能性が考えられた。このため千葉県立房総風土記の丘資料館で保管している八代遺跡(公津原Loc. 39)、外小代遺跡(公津原Loc. 40)、石塚遺跡(公津原Loc. 20)の3遺跡の玉類製作に関係する遺物を借用し、あらためて検討を行うことにした。借用した遺物は玉作工房や石製模造品製作工房出土のものに限らず、表採遺物を含め、関係する遺物を全て抜き出して頂いた。そして、遺構ごとに石材、成品の種類、製作工程等の要素にしたがって分類した。この分類作業の際に剥片や碎片にいたるまで一通り目を通し、この過程で新たに割貫円板の破片や紡錘車形石製品・紡錘車形石製品未成品等を拾い出すことができた。また、遺物の量が豊富な外小代遺跡については接合作業も行い、018号址・071号址等で接合可能なものを数点発見し、さらに詳しい製作の工程を明らかにすることができた。実測は外小代遺跡の018・019B号址を中心に製作工程ごとに特徴のあるものを選んで行った。また、外小代遺跡のこの他の玉作工房については遺構ごとに製作工程がわかるように遺物を選び、特徴ある遺物と共にまとめて写真撮影を行いこれを掲載した。

接合作業と実測作業に当たっては石器製作等と同じような知識を必要とするため、旧石器時代の石器研究を専門とする当センター技師島立 桂の多大な協力を得た。また、遺構ごとの工程別の遺物を選ぶにあたって、寺村光晴先生のご助言を頂いている。この他分類した各段階、遺物の種類ごとに点数を数え、重量を計測してこれを遺跡ごとにそれぞれ表にまとめた。剥片については大きさによって作出される製作工程が違うことが考えられるためさらに3段階(大5cm以上、中3cm~5cm、小3cm以下)に分けてそれぞれの点数と重量を記載した。時間や人手の制約があり、接合作業については必ずしも充分とはいえないが、このような作業によって

Ⅲ 各論

さらに細かい製作工程の復元や遺構ごとの特徴、傾向をつかむことができた。

玉類の製作は、今回検討した遺跡でも寺村氏が復元されたように、荒割工程、形割工程、側面打裂工程、研磨工程、仕上げ工程の順で行われている。ただ「側面打裂工程」は研磨の前の調整を行う工程であること、打裂によるものより、押圧剝離によるものが多いため、本紀要では「側面調整」という名称を使用することにする。

八代遺跡と外小代遺跡で出土した緑色凝灰岩は肉眼観察で大きく3種類に識別される。最も多く使用されているのは灰色がかってくすんだ緑色の色調を呈し、細粒で硬質なもので、これを緑色凝灰岩Aとする。二つ目は淡い水色と緑色の中間のような色調で、緑色凝灰岩Aより細粒で緻密であるが脆い感じを受ける。これを緑色凝灰岩Bとする。三つ目は緑色と水色の中間よりは緑色が勝る色調で、現状においてはくすんでいる。粒子は3種類の中で一番粗く硬質である。これを緑色凝灰岩Cと呼び、以下石材説明の際の基準とする。

ここでは1971年に調査した八代遺跡で検出し、玉作工房と報告された7軒の概要と前述のような作業を経て得られた結果についてを中心に紹介する。1962年・1963年調査分については遺物を検討することができなかったが、検出した3軒（第1号址・第3号址・第6号址）の玉作工房については『下総国の玉作遺跡』をもとに比較資料として簡単にふれておく。

1971年の調査では古墳時代の前期と後期に属する竪穴住居は23軒検出した。このうち古墳時代前期の7軒（003・005・007・009・010・014・020B号址）から玉類製作に関係する遺物を出土し玉作工房であったと報告された。玉類製作に関係する遺物はこの7軒以外に001・004号址からも出土している。001号址は003号址と007号址の間に位置し、出土した土器は古墳時代前期に属するため検討を要する。このほか遺構外からも緑色凝灰岩と滑石の剝片類、砥石を出土した。

玉作工房7軒はいずれも古墳時代前期に属し、台地中央部に入り込む浅い谷の縁辺に谷を取り囲むようにまとまって位置している。6軒（北から007・003・005・010・014）は谷の北側に並んでおり、このうち谷頭に近い所に位置する014号址以外は主軸をほぼ同じにしている。また020B号址は谷南側の谷頭に近いほうに位置し、この北側が1962年・1963年に調査した県指定地域である。

003号址

谷の北西部に位置する。ほぼ正方形（5.60m×5.90m）の整った形態で、支柱穴4本と中央より西に炉を検出した。炉と並ぶピットは性格不明である。玉類製作と関係する遺物は点数・重量とも7軒中最も多い。緑色凝灰岩を原材とするものは剝片類を除くと形製品が多く、全点数の10%を占めている。形製品のなかには横長剝片のものがある。残核が12点あるが、直方体に近い形態のものも多く見られる。形製品の作出が容易なように調整しているようである。滑石は管玉の穿孔工程2点、形製品1点のほかは95%が剝片類である。管玉は研磨途中で両面か

ら穿孔を行っている。縦方向の稜線が残った多角柱状で、どちらも穿孔を失敗したものである。土器類は甕を中心に出土するが遺存状態が悪い。

005号址

003号址の北西7mの所に位置し、主軸は003号址とほぼ同じである。わずかに横長の方形(6.98m×7.20m)を呈する。対角線上に柱穴を4本配し、炉は中央よりやや西にある。また南隅に横長方形のピットがある。2段に掘り込み深さは60cm程である。性格は不明である。緑色凝灰岩を原材料とする管玉は剥片のほか研磨工程、側面調整工程のものがある。研磨工程のものには多角柱に研磨されたものほかに濃緑色で四角柱のものも1点ある。また滑石製品には管玉成品4点と研磨工程のものが2点、荒割工程品4点がある。研磨工程の1点はやはり四角柱である。いずれの石材のものも出土点数は少ない。成品は北西壁際にまとまっている。この他に砂岩の砥石片1点が出土している。土器類は多量に出土しているが遺存状態が悪い。

007号址

003号址から谷に沿って17m程北東に位置する。これより北東は調査していない。4.60m×5.30mの方形で、中央より西に炉が2か所検出された。このほか性格不明のピットが3本ある。玉類に関係する遺物は15点しかない。緑色凝灰岩のものは剥片のほか、管玉の側面調整工程のものと形割工程のものがあり、形割品のなかには横長剥片に調整を加えたものがある。滑石は管玉の穿孔失敗品1点で、多角柱に研磨し、穿孔は両面から行っている。土玉を1点出土した。土器類の遺存状態がよく、埴・器台・壺・甕・甗等他の竪穴住居に比べ器種も豊富である。

009号址

005号址の南西11mの所に位置する。わずかに横長の方形(6.10m×6.75m)を呈する。八代台7号墳の周溝が重複し南北に溝状に破壊される。北隅を除く3隅に柱穴と考えられるピットを検出し、このほか東隅に性格が不明のピットを検出した。炉は検出しなかった。土器類は図示できるような遺存状態の良いものは出土しなかった。玉類製作関係の遺物はすべて緑色凝灰岩で、滑石製品は出土していない。管玉の形製品1点と側面調整品4点で、剥片の点数が全体の90%以上を占めている。

010号址

009号址の南東5mの所に位置する。5.20m×5.70mの方形で北隅を除く3隅に柱穴と考えられるピットを検出した。009号址と似たプランである。中央より北西に寄った所に炉がある。床面から多量の焼土・炭化材を検出し、焼失住居であったと考えられる。緑色凝灰岩を原材料とするものが中心で滑石はわずか2点である。緑色凝灰岩の管玉は研磨と側面調整の工程のものが主体で全点数の67%を占めている。このほか研磨工程の大型管玉状石製品1点と残核1点、母岩2点を出土した。大型管玉状石製品は、四角柱に近い形態で3面と上下面の研磨が行われている。緑色凝灰岩Cである。母岩2点は平坦な面を作っており、やや不整形ながら直方体を

Ⅲ 各 論

意識して調整されている。残核も直方体を呈している。緑色凝灰岩の管玉の研磨品、側面調整品、母岩は西壁際に出土した。また砂岩の砥石破片3点がある。

014号址

谷頭付近に位置するため他の堅穴住居と主軸方向をやや異にする。北東隅を013号址に破壊される。不整形な縦長の方形で(6.80m×5.80m)、柱穴と考えられるピット4本と中央より東寄りと南西隅付近に炉を検出した。玉類製作関係の遺物は少なく、緑色凝灰岩の管玉は研磨と側面調整のものが出土している。滑石は剥片が2点出土しているのみである。また、側面調整工程の大型管玉状石製品1点が出土している。四角柱で側面3面と上面に調整を行っているが、残る2面は破損している。失敗品を再利用しようとした可能性もある。緑色凝灰岩Aである。また粘板岩質の砥石1点を出土している。

020B号址

他の6軒とは谷を挟んで向かい合う。谷に沿って北東に3軒の玉作工房を検出した県指定史跡がある。8.40m×7.66mの縦長の方形で東側は020A号址に破壊されている。中央より北東寄りに炉を検出し、柱穴4本の他に西隅付近に性格不明のピット1本を検出した。緑色凝灰岩は剥片のみで、滑石は研磨と形割工程のものを含んでいた。形割工程のものには金属製の工具を使用したと考えられる切削痕が認められる。このほかメノウ片1点と砂岩の砥石破片3点を出土した。

第1号址 (1962年・1963年調査)

南西1辺7.5mの正方形で、対角線上に4本の主柱穴を検出した。炉は北東と南東の2か所に検出した。また、南壁際に完形の甕形土器を埋設したピットがあり、周辺に未成品・剥片を出土したため工作用ピットである可能性がある。床面からは焼土・炭化材を出土し、焼失住居である。出土遺物は土師器・須恵器のほか緑色凝灰岩の管玉未成品2、剥片29、滑石の管玉未成品5、平玉未成品2点、板状品2、剥片6、メノウ剥片1、石英剥片2、筋砥石1点、刀子1点、土玉6点等である。

第3号址 (1962年・1963年調査)

北壁が遺存しないが1辺4.6m前後の方形を呈していたと推定できる。柱穴は4本検出した。南東隅の円形のピットからは砥石を出土し、底面付近には灰白色に近い泥状の砂質土が沈澱していたため研磨に使用された工作用ピットと考えられている。また、南東壁際の方形のピットは2段に掘り込み、壁溝とつながっている、またこの北壁にそっでもう1本ピットが並び、間に粘土塊を検出した。この2本のピットからは多量の未成品や剥片を出土している。緑色凝灰岩を原材にしたものは管玉未成品66、勾玉未成品1、剥片・屑片581である。また滑石のものは白玉2、板状品4、管玉未成品1、剥片・屑片26で、このほか砥石・土玉を出土している。八代遺跡で検出した10軒中最も遺物の出土量が多く、種類も豊富である。第1号址と同様焼失

住居である。

第6号址 (1962年・1963年調査)

方形(6.1m×7.5m)で支柱穴を4本配する。南西隅に工作用ピット2本を検出した。このうち一方から完形の甕形土器1点を出土した。炉は検出されなかった。焼失住居である。緑色凝灰岩は管玉未成品、勾玉未成品、滑石は管玉未成品、白玉未成品、板状品、メノウ片1を出土した。このほかに鉄製錐や砥石片、土玉を出土した。八代遺跡で検出した10軒中二番目に遺物の出土量が多い。

(3) 成田市外小代遺跡について

A. 遺跡の概要(第15図)

印旛沼東岸に面した標高33m前後の台地上、成田市八代字外小代(旧地番)に位置する。西側は根本名川から分かれた小橋川に開析される小支谷に囲まれて半島状になっており、調査した区域はこの基部にあたる。小支谷を挟んで南西に続く細尾根状の台地には古墳が並び(八代古墳群)、さらに南西に八代玉作遺跡が所在する。

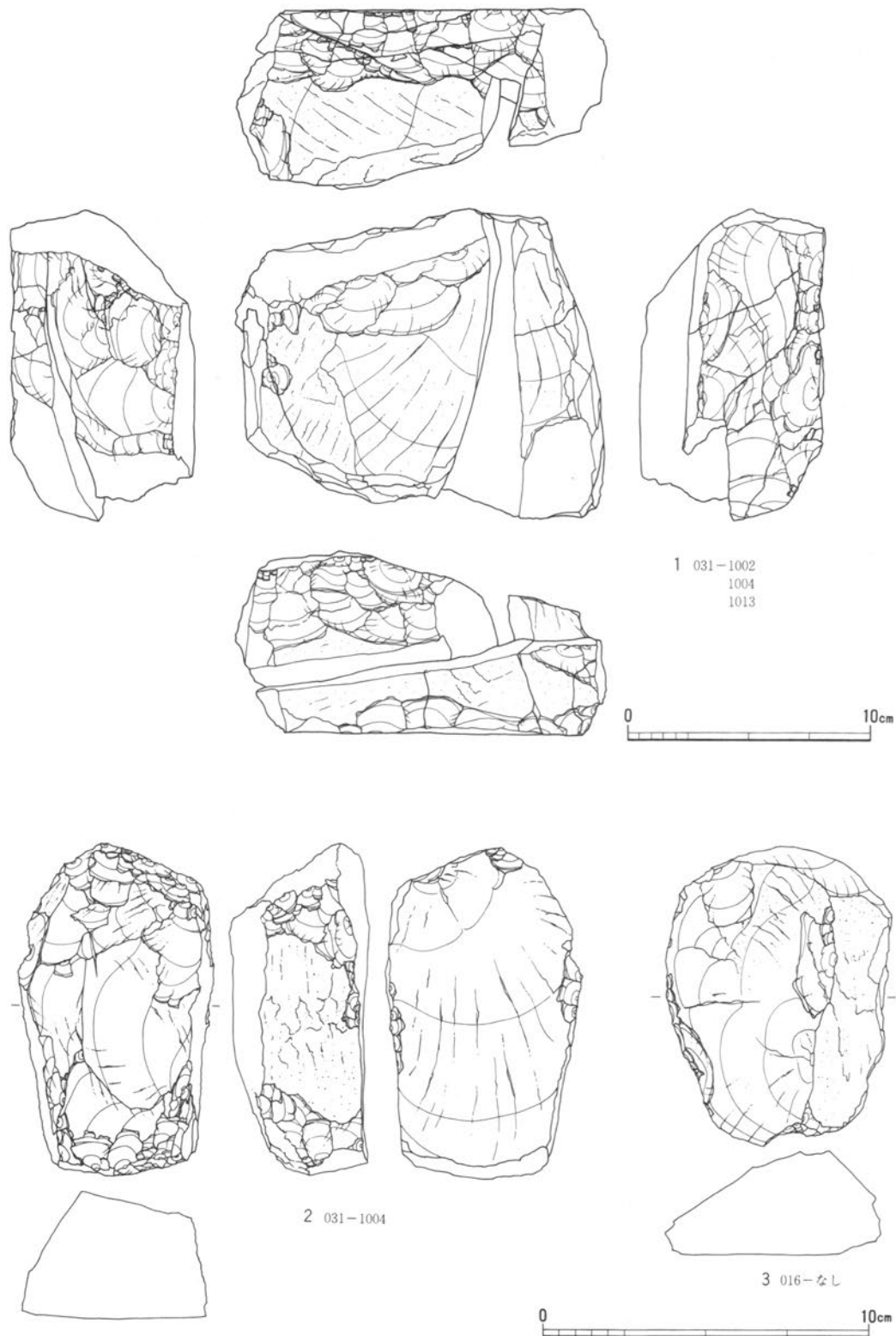
1969年の分布調査で管玉未成品や剥片類を採集し、玉作遺跡の存在が指摘された。その後、1971年に成田ニュータウン関係で発掘調査が行われ、古墳3基と弥生時代から奈良・平安時代の集落を検出した。報告によると検出した古墳時代の竪穴住居は30軒で、すべて古墳時代前期に属し、このうち8軒(016A・018・019B・034B・040・041A・055・071号址)から多量の管玉未成品や剥片類を出土し、玉作工房であったと判断された。千葉県生産遺跡調査票ではこのほかに030・035・036・060・079号址を加え、055号址を除いた12軒を玉作工房としている。また古墳時代前期に属すると考えられる025・028・046・047・065・067号址からも関係遺物が出土している。生産遺跡調査で加えられた5軒も含め、これらは関係遺物の点数が20点以下であること、遺構の遺存状態が必ずしも良好でないものもあるため、玉作工房であった可能性は否定できないが今回は報告書で玉作工房とした8軒を中心に扱った。

B. 玉作工房と遺物の概要 (第8表～第11表)

8軒の工房の配置は、調査範囲の中央に2軒、そのやや西に3軒のまとまりが認められ、3軒が周辺に位置する。この工房と出土遺物全般はすでに報告書でふれられている。その中で製作工程を理解する上で良好な資料を含んでいる018・019B号址は、今回資料の接合や再実測も行ったので別に検討することとし、残る工房の概要について、新たな発見を加えながら下記に紹介していく。

016A号址 (第16図、図版6)

工房のなかでは西側に位置し、この西に018・019B号址が所在する。規模は7.30m×7.60mで平面形は方形を呈する。壁溝はなく、南西コーナー部に性格不明の小ピットがあるものの、柱穴と断定できるピットをもたない。床面は一部に貼床を認めるが、攪乱を各所に被り全体の



第16図 外小代遺跡016A・031号址出土遺物

状況は把握されない。床面遺存部に炉はなく、設置されていたか否かは不明である。

出土した玉類は、緑色凝灰岩の管玉未成品を主体にし、剥片類、残核、母岩がある。また滑石の管玉未成品、板状品、剥片類も出土する。2種類の石材の割合は、緑色凝灰岩が圧倒的に多く、滑石はその10分の1程度にすぎない。これらの分布は北側に比して南側で密度が高く、床面上から検出される。管玉の未成品では形割品が多く、側面調整の施されたものがこれに次ぐ。両石材とも研磨品と穿孔が開始されたものはあるが、成品は認められない。メノウ製の勾玉が唯一成品として存在する。第16図3は母岩の一つで、分割されたり周辺に剥離が及んではいても一部に自然面を残しているもので、本来の大きさが拳大であったことがわかる。玉作に係わる工具類では砥石がある。土器類は甕、埴が僅かに出土している。

034B号址（図版6）

検出工房中最も西に位置し、近くに工房は存在しない。規模は6.10m×6.30mで平面形は隅にやや丸さのある方形を呈し、北・南の壁下に壁溝を伴う。対角線上の4か所に柱穴を配し、北東のコーナー部に楕円形で深さ37cmになるピットが所在する。他に南壁寄りの中央に確実に伴うのかの判断が難しいピットがある。床面の全体の状態は不明であるが、北東壁際には凹凸が認められる。炉は中央部からやや北に寄せて設けられる。

玉類は管玉の製作に関する資料を中心とし、緑色凝灰岩を原材料とする未成品を147点数え、剥片類、残核、母岩がある。また大型管玉状石製品の存在とともに、石製腕飾類の製作が行われていたことをうかがわせる、刳貫円板の一部(第26図)が明らかになり注目される。数の面では及ばないが、滑石の管玉未成品もあり、板状品を含むことから平玉製作の可能性もある。緑色凝灰岩製の管玉未成品は、形割品と側面調整の工程まで進んだものが大部分で、床面上に散在した状況もあるが、6か所のまとまりを認めることができる。北東の柱穴の南側に置かれたように20点以上がまとまって出土したほか、北壁の壁溝中に2か所、東壁際に3か所に量の多寡をもって検出される。工具類では、砂岩の砥石と、両端に使用痕があり、側面には凹部が認められる叩き石が出土している。土器は破片や欠損品が少量出土しているにすぎない。

040号址（図版7）

全工房のはほぼ中央に位置し、東に041B号址が近接して所在する。規模は5.90m×6.20mで隅に丸さのある方形を呈する。検出面から床面までは大変浅く、壁下に壁溝はない。4か所に大型のピットが認められるも、直接伴うものではなく床面に大きな破壊を与えている。遺存する床面は堅緻な状態を示す。炉は中央からわずかに北東に設けられ、火床面はよく焼けている。

出土玉類の主体は緑色凝灰岩の管玉未成品で、形割段階のものが最も多い。剥片類も多く出土するが母岩は含まない。滑石製品は剥片類と管玉の未成品もわずかに存在し、穿孔を開始しているものが4点認められる。また滑石製の勾玉が1点成品として検出される。緑色凝灰岩製管玉の形割品は床面上の4か所の集中場所と、その周辺に散るように出土している。集中場所

Ⅲ 各論

は、炉の北東側と、北西側の北壁寄り、東壁側と南壁側のそれぞれ中央部の4か所である。これら形製品のうち、側面調整に移行できるものについては長さに顕著な差がなく、目的としていた成品の長さがうかがわれる。工具類では砥石片が8点あるほか、可能性があるものとして不明鉄製品の2点の破片が出土している。土器類は少量の甕が出土しているにとどまる。

041A号址（図版7）

040の東側に主軸方向を変えて近接する。規模は7.70m×7.70mで平面形は隅に僅かに丸さのある方形を呈する。検出面から床面までは浅く、壁下に壁溝は伴わない。床面は大型のピットによる破壊を各所に受けるものの、柱穴と考えられるピットが4か所に存在するが、対角線上ではなくややずれて配置される。遺存する床面については平坦で堅緻な状態が認められる。炉の設置は攪乱のため不明である。

緑色凝灰岩を原材とする管玉の未成品と成品が認められるが、量的にはわずかに21点で、ほかは剥片類になる。滑石を原材料とするものは、管玉の未成品、板状品、有孔円板があるが、やはり剥片類が多い。石材の点数比は緑色凝灰岩7に対して、滑石が3となり他の工房と同様、緑色凝灰岩製玉の製作に中心がおかれる。南東コーナーに規模の小さい集中部分があるが、全体に南半分側に散って出土している。工具類と考えられるものでは砥石片が2点存在する。土器は埴1点を除いては小破片が少量にすぎない。また床面上から多量の焼土と炭化材の検出があり、焼失住居であることを示している。

055号址（図版8）

工房のなかで最も東側で台地の縁辺部に位置し、周辺に近接する工房の存在はない。規模は6.20m×6.95mである。平面形は隅に丸さがあり、南東の一部が張り出し部分があって不整とはなるが、基本的に方形をとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には壁溝が全周する。柱穴はほぼ対角線上に4か所配される。柱穴と同じような掘り方を示すピットが、南西壁直下西よりに1か所あり、その西に近接し（南西コーナー部付近）、径80cm×60cmの楕円形で深さ30cmの工作用ともみられるピットが存在する。床面は堅緻で炉は中央からわずかに北に所在する。

製作玉類の原材料は緑色凝灰岩、滑石、メノウがあり、後者2種は剥片類がわずかに認められるのみで、圧倒的な部分を前者が占める。緑色凝灰岩では管玉の形製品が少量と、多量の剥片類、残核2点があるほか、注目される石製品として、いわゆる紡錘車形石製品未成品2点の存在がある。遺物の分布は主に南側に顕著に認められ、工作用と考えられる、南西コーナーのピット中からも形製品等が検出されている。工具の類では砥石3点の出土がある。土器の出土量はやや多いが、遺存度が良好なものは少ない。

071号址（図版8）

調査区の北側に位置し、周辺に隣接する工房はない。規模は7.15m×6.45mで東西方向をやや長くとり。検出面から床面まで大変浅く、攪乱により壁が検出されていない部分もあるが、平

3. 古墳時代の玉作

面形は隅に丸さがある方形であろう。検出壁下には壁溝が伴う。柱穴は対角線上の4か所に配されていたと考えて妥当な状況である。しかし攪乱により北側の2か所を検出したにとどまり、そこに炭化した柱材が残されていた。ほかに4か所から性格不明の小ピットが検出されている。南側の床面はすでに失われており、東壁側の遺存状態も不良である。北側の床面が残る範囲において炉は検出されていない。

玉類の原材料は緑色凝灰岩とメノウで、滑石は出土していない。メノウは剥片1点のみであ

第8表 外小代遺跡玉作工房出土の緑色凝灰岩製品

遺構名	016A		018		019B		034B		040		041B		055		071		合計	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
管玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.94	0	0	0	0	1	0.94
管玉(穿孔)	1	2.20	2	3.31	3	2.79	0	0	3	3.36	0	0	0	0	0	0	9	11.66
管玉(研磨)	1	1.84	2	8.56	4	10.38	5	22.20	1	5.63	1	1.79	0	0	0	0	14	50.40
管玉(側面調整)	9	47.19	5	43.12	14	94.56	60	224.56	9	40.93	2	21.79	0	0	4	18.71	103	490.86
管玉(形削)	52	401.33	71	410.02	39	386.83	82	751.80	47	300.60	17	159.62	14	179.96	126	855.40	448	3445.56
大型管玉状石製品	0	0	0	0	1	58.84	2	162.70	0	0	0	0	0	0	0	0	3	221.54
翡翠円板・緑輝石形石製品等	0	0	0	0	1	2.97	1	5.27	0	0	0	0	2	77.28	0	0	4	85.52
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
剥片大(5cm以上)	0	0	3	101.39	13	280.35	12	244.48	1	13.99	3	71.10	11	265.53	1	13.65	44	990.49
剥片中(3~5cm)	8	169.07	13	158.58	109	656.22	129	827.58	39	229.52	27	153.75	50	426.47	4	66.73	379	2687.92
剥片小(3cm以下)	840	1338.19	48	96.84	667	666.66	405	500.14	326	346.53	122	97.55	507	395.59	1	1.05	2916	3442.55
残核	5	156.90	0	0	5	171.74	9	544.58	0	0	0	0	2	203.87	4	199.82	25	1276.91
母岩	3	509.69	0	0	0	0	2	500.00	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1009.69
合計	919	2626.41	144	821.82	856	2331.34	707	3783.31	426	940.56	173	506.54	586	1548.70	140	1155.36	3951	13714.04

第9表 外小代遺跡玉作工房出土の滑石製品

遺構名	016A		018		019B		034B		040		041B		055		071		合計	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
管玉	0	0	0	0	5	2.31	2	1.27	0	0	0	0	0	0	0	0	7	3.58
管玉(穿孔)	5	5.17	0	0	6	8.62	0	0	4	4.22	3	2.27	0	0	0	0	18	20.28
管玉(研磨)	2	3.55	1	2.49	6	22.47	6	9.08	2	1.92	1	0.86	0	0	0	0	18	40.37
管玉(形削)	9	53.51	3	16.46	2	8.90	6	18.82	3	7.14	2	13.31	0	0	0	0	25	118.14
勾玉	0	0	1	1.26	0	0	0	0	1	0.99	0	0	0	0	0	0	2	2.25
平玉	0	0	1	0.52	2	0.33	2	0.76	0	0	1	0.43	0	0	0	0	6	2.04
平玉(未穿孔)	0	0	7	7.29	3	0.65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	7.94
有孔円板	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3.34	0	0	0	0	1	3.34
有孔円板(未成品)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板状品(研磨)	3	3.65	0	0	4	1.87	5	18.63	0	0	6	3.01	0	0	0	0	18	27.16
板状品(未研磨)	3	97.65	1	17.54	4	49.09	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	164.28
荒製品	1	32.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	62.53	0	0	2	94.59
剥片大(5cm以上)	0	0	0	0	3	30.85	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	30.85
剥片中(3~5cm)	8	56.82	2	16.90	19	97.57	29	137.20	11	65.69	5	48.62	5	35.78	0	0	79	458.58
剥片小(3cm以下)	64	107.84	24	50.86	184	208.87	67	79.51	133	230.14	58	62.12	19	49.29	0	0	549	788.63
残核	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	61.38	0	0	0	0	0	1	61.38
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	95	360.25	40	113.32	238	431.53	117	265.27	155	371.48	77	133.96	25	147.60	0	0	747	1823.41

Ⅲ 各論

るので、緑色凝灰岩に限られるといってもよいであろう。遺構の遺存状態が不良であったことを考慮しなければならないが、総点数140点のうち実に126点を管玉の形製品で占めるという、他の工房と比較し際立った特徴を有している。さらにこれらが、北壁東側直下の床面上および壁溝内、北西の柱穴際、西壁南側直下から一括出土した点は特筆される。特に北壁直下の一括形製品の中に接合するものが含まれていることが明らかになり、製作工程を理解するうえで、018・019B号址の資料を補強する材料となった。また工程別の製品保管状況や作業空間を探るうえで重要な意味をもつものと思われる。工具と考えられるものでは叩き石が1点出土している。土器は大型の破片類を主体にその量はやや多く、杯、皿、甕がある。炭化材の出土などから焼失住居と考えられる。

第10表 外小代遺跡出土の緑色凝灰岩製品

遺構名	001	005	009	011	015	017	020	021	022	023	025	028	029	030	031	032	033	035	036	037	038	039	小計
管玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
管玉(穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
管玉(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4
管玉(側面調整)	1	0	4	0	0	0	0	1	0	6	0	0	0	1	0	0	0	1	2	1	1	0	18
管玉(形割)	0	1	3	0	0	2	1	0	4	3	1	1	0	1	0	1	1	4	0	1	7	2	33
大型管玉状石製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
筒貫円板・経線非形石製品等	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒製品	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5
剥片大(5cm以上)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	2	1	7
剥片中(3~5cm)	2	0	4	0	0	5	0	0	0	3	3	1	1	3	7	0	2	3	3	2	5	6	50
剥片小(3cm以下)	11	0	33	1	0	49	0	6	13	1	12	7	0	12	12	0	3	5	6	3	22	49	245
残核	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
合計	14	1	45	2	1	58	1	7	20	13	17	9	1	19	22	3	6	15	11	7	38	62	373

外小代遺跡出土の緑色凝灰岩製品

遺構名	043	044	045	046	047	048	049	050	051	054	060	062	064	065	067	069	072	074	079	081	表採	小計	合計
管玉	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
管玉(穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
管玉(研磨)	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	5	12
管玉(側面調整)	1	0	0	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5	13	31
管玉(形割)	2	2	7	5	0	0	1	0	3	0	0	0	1	3	0	0	0	0	3	0	10	37	70
大型管玉状石製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
筒貫円板・経線非形石製品等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒製品	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
剥片大(5cm以上)	3	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	14
剥片中(3~5cm)	3	2	6	1	1	0	2	1	1	1	1	1	3	0	2	2	0	1	1	0	8	37	87
剥片小(3cm以下)	5	8	22	3	0	0	3	4	1	4	2	0	17	1	2	0	1	0	5	0	75	153	398
残核	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3	6
合計	14	14	35	15	2	1	8	6	6	5	3	1	21	7	4	3	1	1	9	1	103	260	633

3. 古墳時代の玉作

第11表 外小代遺跡出土の滑石製品

遺構名	001	009	017	021	022	023	024	025	030	031	032	035	036	038	039	043	045	046	047	050	054	060	小計
管玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
管玉(穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
管玉(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	5
管玉(形割)	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
勾玉(未成品)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
平玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平玉(未穿孔)	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3
白玉・霽玉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
有孔円板	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板(未成品)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板状品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板状品(未研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒割品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
剥片大(5cm以上)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
剥片中(3~5cm)	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	8
剥片小(3cm以下)	1	2	7	0	4	2	0	2	7	17	0	1	2	7	19	3	1	0	1	1	2	0	79
残核	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	1	3	9	1	6	2	1	2	11	19	1	4	5	8	19	3	3	1	2	3	2	2	108

外小代遺跡出土の滑石製品

遺構名	064	065	066	067	079	表採	小計	合計
管玉	0	0	0	0	0	0	0	2
管玉(穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	2
管玉(研磨)	0	1	0	0	0	3	4	9
管玉(形割)	0	0	0	0	0	2	2	7
勾玉(未成品)	0	0	0	0	1	0	1	2
平玉	0	0	0	0	0	0	0	0
平玉(未穿孔)	0	0	0	0	0	0	0	3
白玉・霽玉	0	0	0	0	0	0	0	2
有孔円板	0	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板(未成品)	0	0	0	0	0	0	0	0
板状品(研磨)	1	0	0	0	0	0	1	1
板状品(未研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0
荒割品	0	0	0	0	0	0	0	0
剥片大(5cm以上)	0	0	0	0	0	0	0	0
剥片中(3~5cm)	1	0	1	0	0	2	4	12
剥片小(3cm以下)	1	0	1	1	0	30	33	112
残核	0	0	0	0	0	0	0	1
母岩	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	3	1	2	1	1	37	45	153

C. 018、019B号址の玉作工房・遺物について

a. 018号址の玉作(第17~21図、図版1~3) 018号址は、調査区の中央やや西側に位置し、すぐ南東には019B号址が所在している。018号址と019B号址とは、ごく一部重複関係にあるが新旧関係は不明である。ただし両者の位置関係・間隔から同時存在はありえない。018号址の北約20mには012号址が位置し、東約20mには016A号址が位置する。一部攪乱されていたもの

Ⅲ 各論

の掘り込みも深く、比較的遺存状態は良好であった。ほぼ南北方向に主軸を向け、規模は南北長5.9m、東西長6.0mの隅丸方形を呈する。壁溝が全周し、確認面からの掘り込み深さは約50cmである。床面は貼り床によって構築されている。対角線上に柱穴と見られる4か所のピットが存在する。また南東のコーナー近くに長さ120cm、幅50cmの長方形を呈するピットが位置している。それは隅丸方形のピット2個を連ねた様な形態で、新旧関係があり西側のものが古く、東側のものは新しい。工作用ピットというよりも貯蔵穴とみたほうがよいだろう。深さはともに約50cm程である。炉は中央からかなり南西に寄った柱穴の側に位置している。住居一面に炭化材・焼土が存在し焼失住居である。玉類以外の遺物は、東南のコーナーから東壁に沿って約2mにわたって、甕7、埴1、高杯4、器台1がほぼ並んだ状態で出土している。また新しい方の東側のピットの中から甕1、杯1、高杯1が出土している。貯蔵穴周辺に置いていたものが、そのまま焼けてしまったものと思われる。他に土玉3も出土している。玉作に関連して石製模造品も出土している。滑石製の管玉の未成品数点、小型円板か薄い白玉とでも言うべき直径1.5cm前後、厚さ2mm～3mmの円板である。両面研磨の7点、穿孔された1点の計8点、さらに滑石製の勾玉1点、管玉未成品数点（形割品3点、研磨品1点等）が南西のコーナー近くから、ややまとまって出土している。

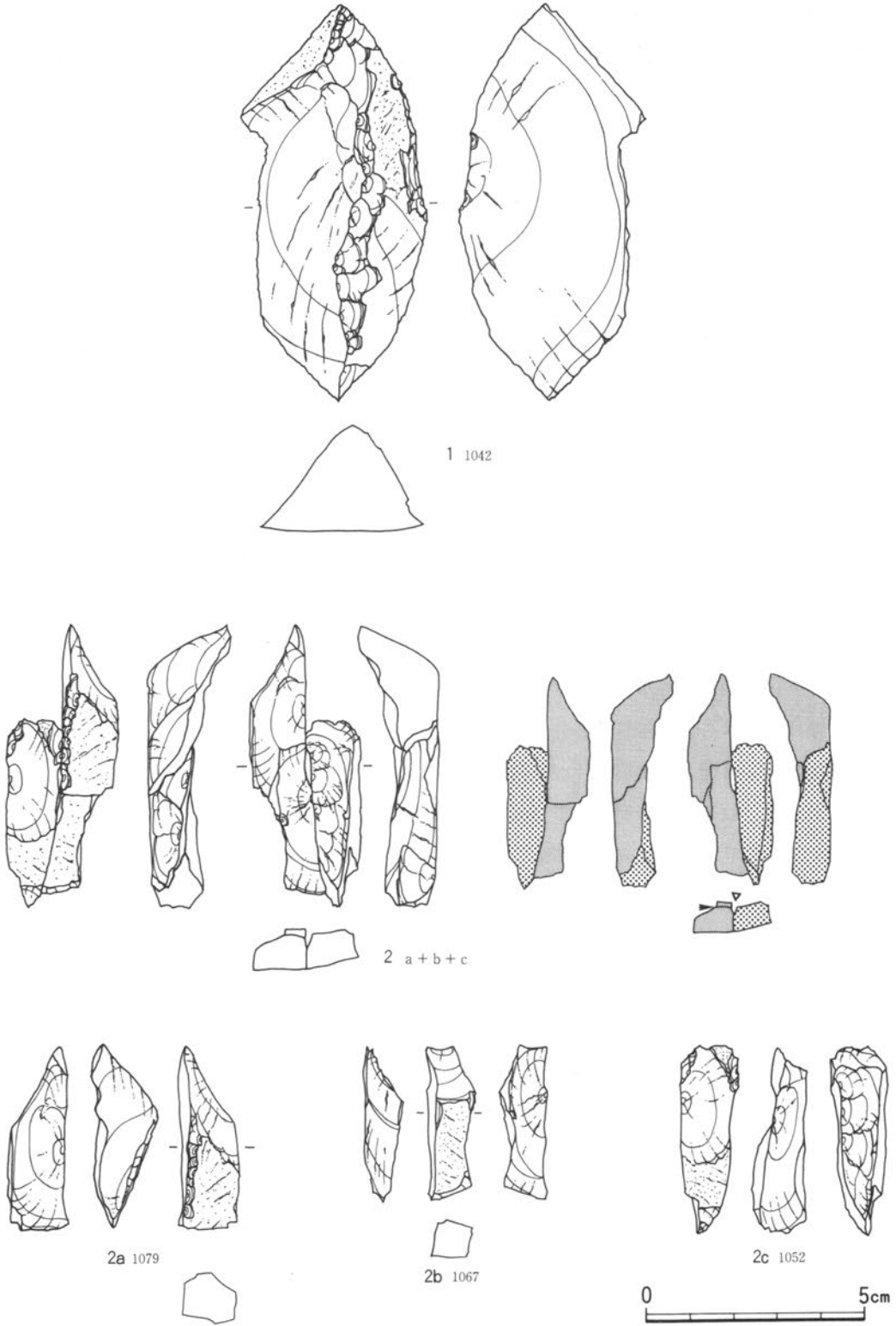
玉作と同時に滑石製の白玉、管玉も製作していたものとみられるが、数量・未成品の状態などからみて主体をなすものではない。玉作関係遺物は、緑色凝灰岩を主体とする管玉の製作工房とみられ、成品は検出されていない。未成品の内、北側壁の中央からやや西寄りに約20cm位の範囲にまとまって、形割品が集積された状態で約50点ほど出土している。この形割品は、今回の検討作業において接合された遺物を多く含んでおり、形割工程のものをまとめて置いた場所とみられ、工房ごとの分業の可能性、工房内の機能・作業場所を考える際に重要な資料となる出土状態を示している。接合した形割品の出土状況図（第21図）を編集作成したので参照していただきたい。

では次に、今回抽出した各工程上の資料を実測図にしたがって説明を加えていこう。第17図から第20図までが今回抽出した資料であり、材質はすべて緑色凝灰岩である。

遺物の実測図は、左側から順にA・B・C・D面と呼んで説明をする。

第17図1は荒割による大型剥片である。A面上端の左右には自然面が残る。断面形は三角形を呈しており、その稜を境として、左半は右方向から、右半は左方向からの大きな剥離面がみられる。これは本剥片の剥離に先立ち、打面と作業面を交互に入れ替えながら、剥片剥離作業を行った結果と考えられる。稜上には、剥片剥離作業に伴う細かな剥離面が観察される。打面部は細かな加工により除去されている。

2は、形割品3点の接合資料である。まず、B面上半部の剥離が2枚連続して形成された後、同一方向から本接合資料を含む大型の剥片が剥離される。主要剥離面は、D面に残されている。



第17図 外小代遺跡018号址出土遺物(1)

Ⅲ 各論

次にD面を打面としてA面左半に小剥離がなされる。次にA面中央部を加撃し、 $a + b$ を含む中型薄手の剥片と、 c を含むほぼ同形の剥片とに二分される。さらに、それぞれの中型剥片が石核となり、一方からは $a \rightarrow b$ の順で、もう一方からは c が剥離される。各小形剥片は形状が角柱状を呈しておりそのまま形製品として準備されたものと考えられる。本資料から、①母岩から大型剥片を剥離する→②大型剥片を2分割して中型剥片とし、それぞれを石核とする→③小型剥片を剥離する=形製品という工程手順が復元できる。

3は、形製品4点の接合資料である。A面上半部の剥離面→B面の剥離面→A面下半部の剥離面の順で中型剥片が剥離された後、B面を打面として $a + b \cdot c + d$ が連続して剥離されている。両中型剥片は、それぞれ分割され、形製品となっている。なお、形製品の分割面は、バルブが発達せず平坦であること、加撃部の反対側に損傷があることなどから、分割に両極打法が用いられた可能性がある。本資料から①母岩ないしは大型剥片から、交互剥離によって中型剥片を連続的に剥離する→②中型剥片を分割して断面形が角柱状の形製品とする、という工程が復元できる。

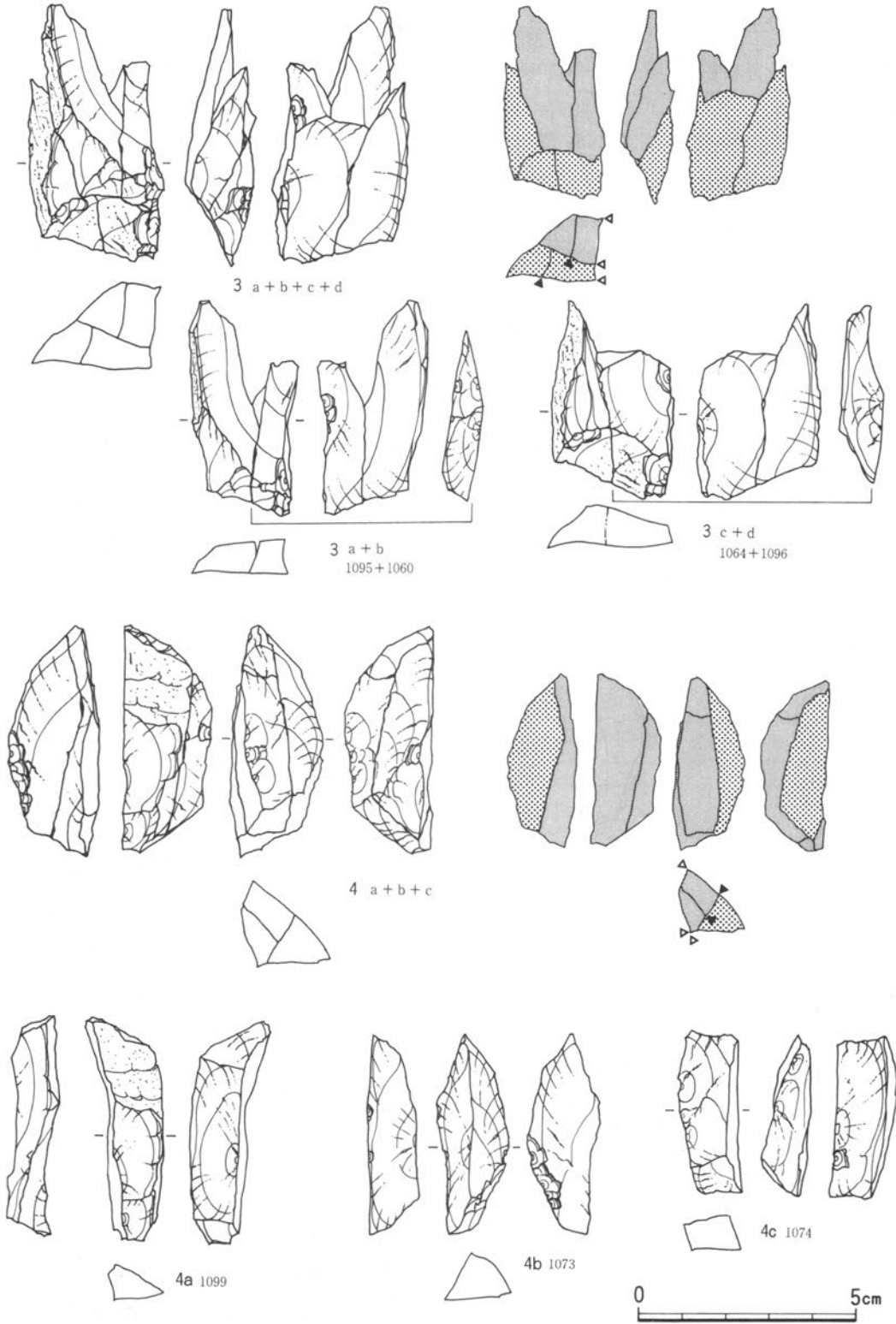
4は形製品3点の接合資料である。接合して1点の中型剥片に復元された。B面上半部には自然面が残る。A面にみられる大型の剥離痕が最初に形成され、次にB面の小剥離面、C面の剥離面が形成される。剥離がスムーズに通らなかったためか、C面には複数のバルブが残されている。A・C両面ともポジティブな剥離面である。つぎにC面中央部を加撃し、 $a + c$ と b とに分割する。さらに $a + b$ は2分される。以上から、まず①型剥片が剥離される(A面が主要剥離面)→②B面より小型剥片が剥離される→③C面を主要剥離面とする中型剥片($a + b + c$)が剥離される→④中型剥片を分割して形製品を作り出す、という工程になる。

5は、形製品5点の接合資料である。本資料は、B面左半→中央→上半部の順で、求心的な剥離方向の各剥離面が形成される。次に作業面をA面に変え、A面下半部の剥離面が形成される。次に、本資料全体を含む大型剥片が剥離される。主要剥離面はD面下端に残る。その後D面右上半部の剥離がなされ、 $d \rightarrow c \rightarrow e \rightarrow a + b$ の順で中型剥片が剥離されている。各剥片は2・3点に分割され形製品となっている。以上から、①母岩に対し求心的な剥離を行い、大・中型の剥片を剥離する。次に本資料全体を含む大型剥片を剥離する→②大型剥片を石核として中型剥片を剥離する→③各中型剥片を分割して形製品とする、という工程が復元される。

6～8は、それぞれ形製品2・3点が接合して中型剥片に復元された資料である。各資料とも中型剥片をその剥離軸に直交する方向に2～4分割し、形製品を作成している。なお、7は中型剥片の分割に先立って左側縁に加工が施されており、形製品の上端部(管玉上端部に対応)を平坦にする配慮がうかがえる。また、8の分割面には上下からのリングが観察されており、分割の際両極打法が用いられたことを示している。

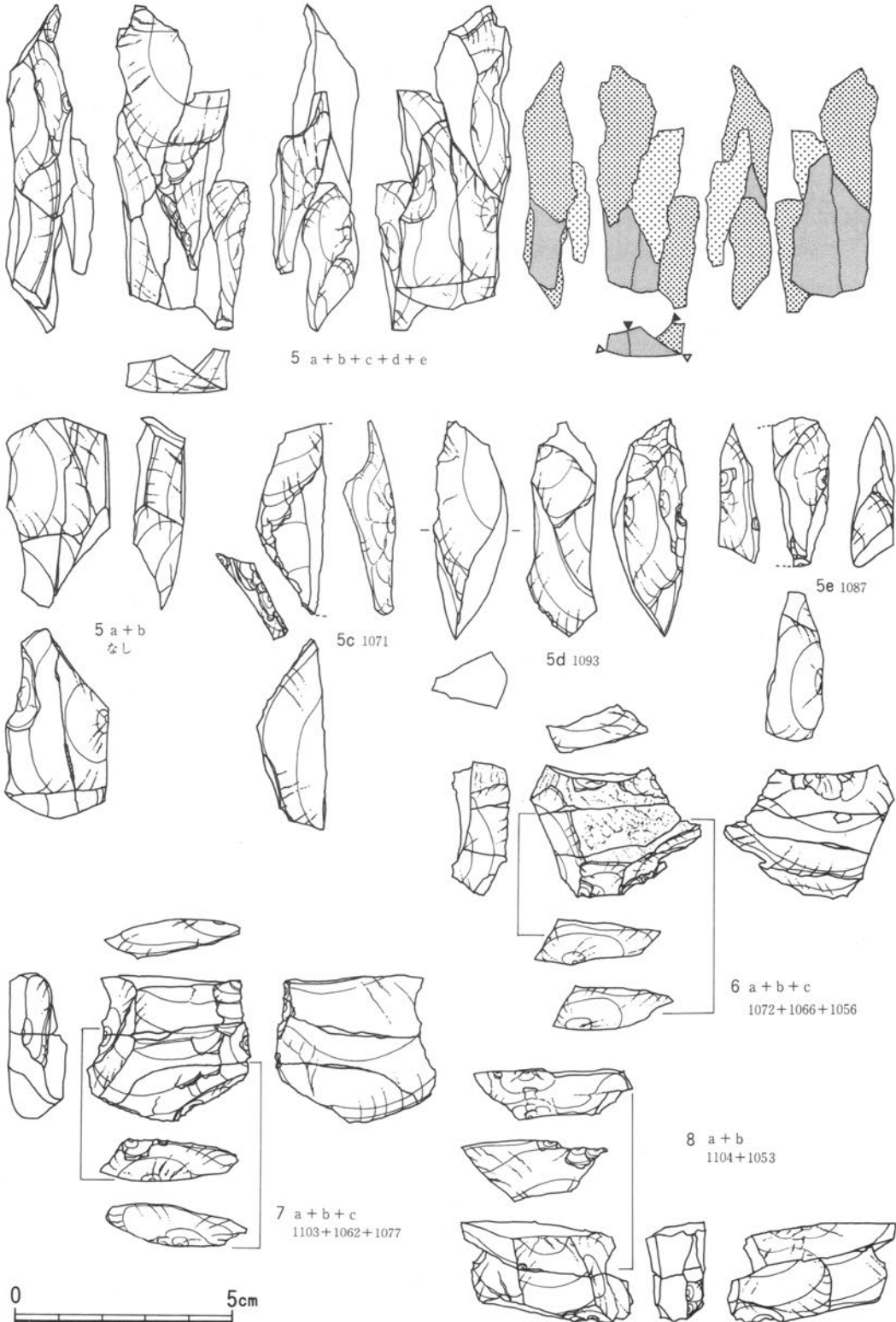
9は形製品5点の接合資料である。B面上半部には自然面が残る。まず、C面右下半部の剥

3. 古墳時代の玉作

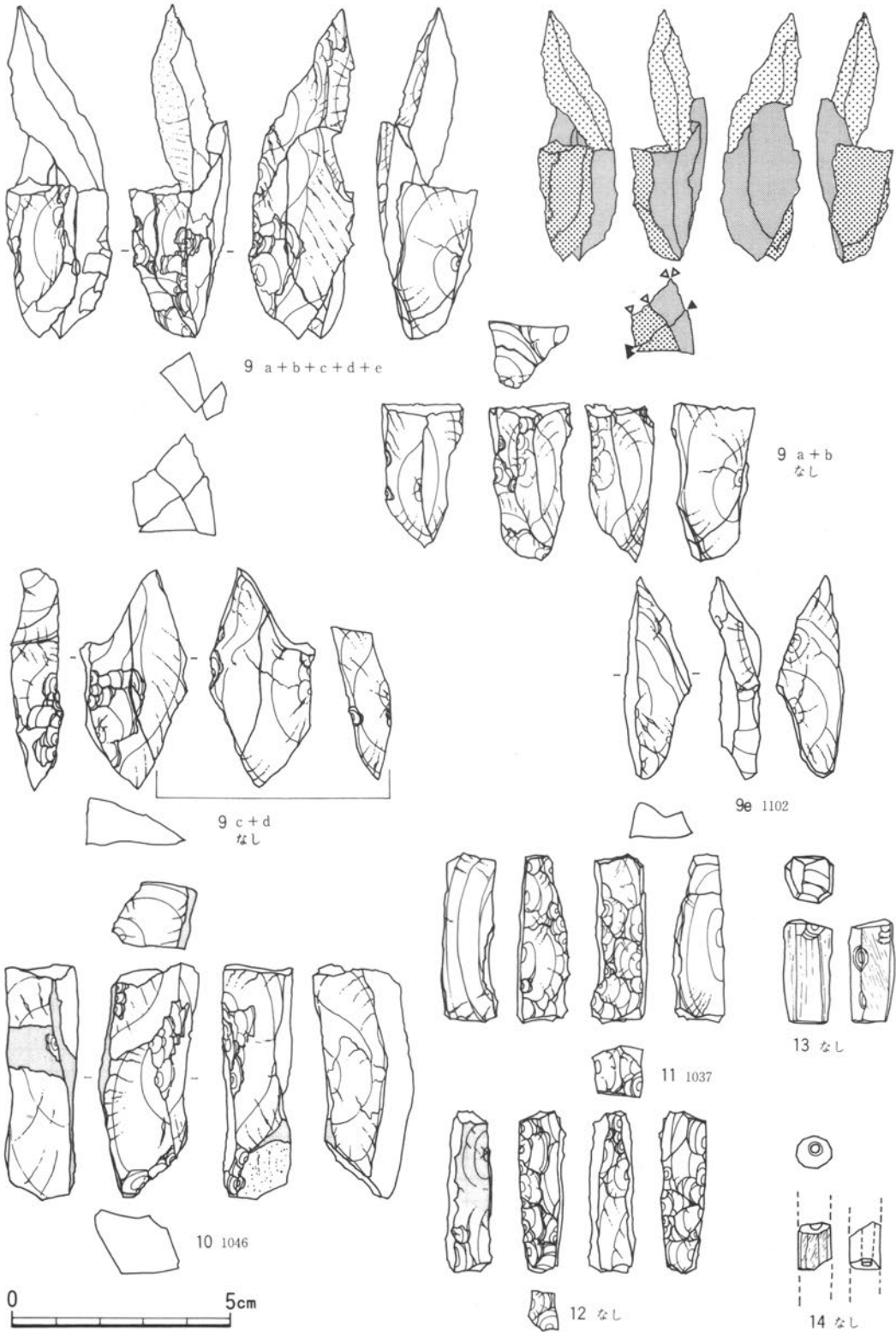


第18図 外小代遺跡018号址出土遺物(2)

III 各論

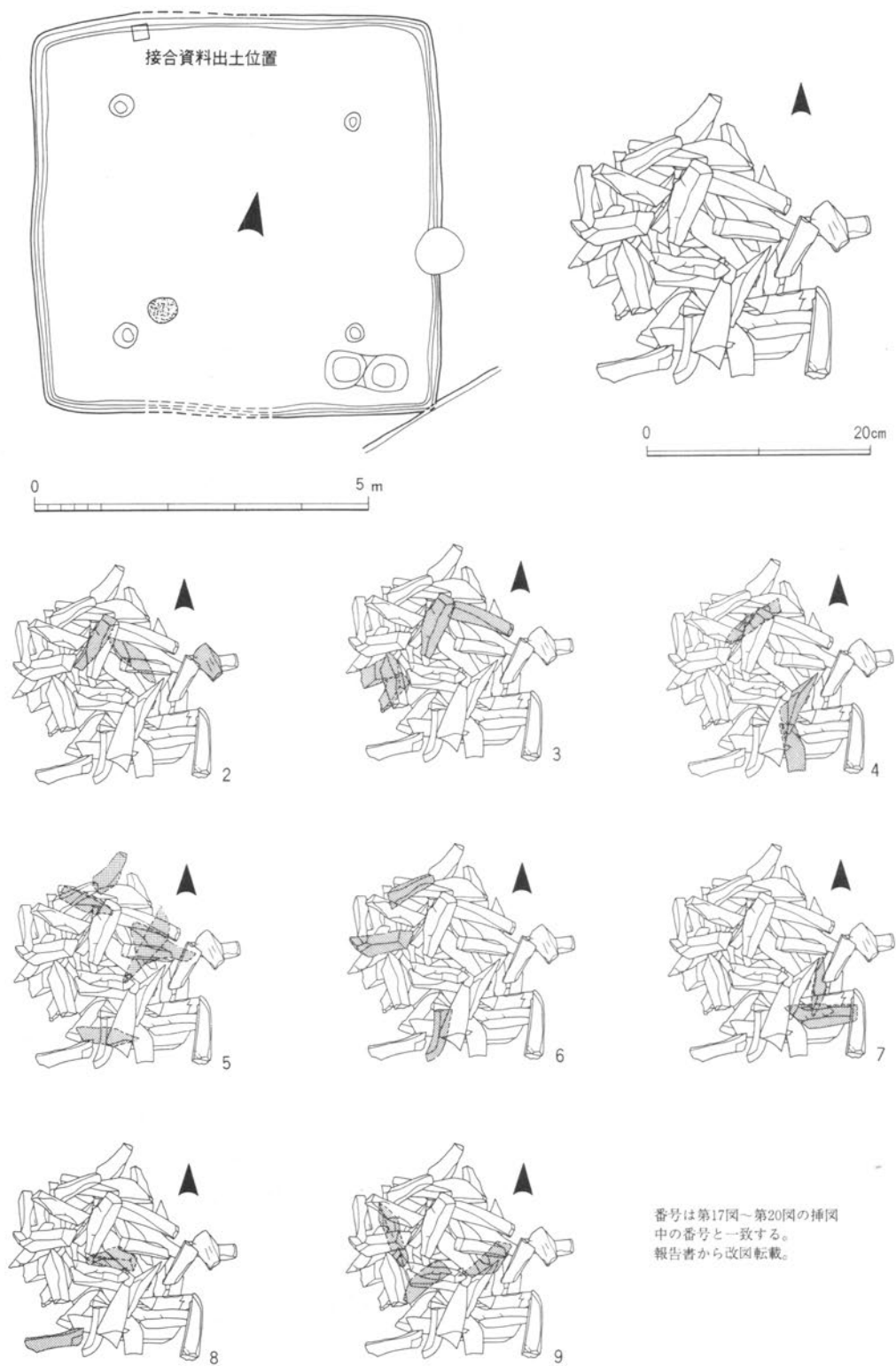


第19図 外小代遺跡018号址出土遺物(3)



第20図 外小代遺跡018号址出土遺物(4)

Ⅲ 各論



番号は第17図～第20図の挿図中の番号と一致する。
報告書から改図転載。

第21図 外小代遺跡018号址接合資料出土状況

離面が形成される。本剥離面は、ポジティブな面であり、石核素材の大型剥片の主要剥離面と考えられる。次にD面上部の剥離面が形成される。さらにeを含む剥片とa～dを含む剥片とに分割される。一方は、C面とB面とで交互剥離を行った後、 $c + d \rightarrow a + b$ と中型剥片が連続して剥離され、もう一方からはeが剥離されている。 $c + d$ 、 $a + b$ は剥離軸に直行する方向で分割されており、形割品となっている。なお、 $a + b$ の下端には分割面があり、本剥片がさらに大きかったことを示している。以上より、①母岩から大型剥片を剥離する→②大型剥片を3個体以上の大・中型剥片に分割する→③それぞれから中型剥片を剥離する→④各中型剥片を分割して形割品とする。分割の際には両極打法が用いられている、という工程が観察される。こうした工程内容は、先述した資料2・5・6についても認められた。

11は、形割品に対して細かな側面調整を施した資料である。平坦な剥離面はそのまま加工を施さず、2側面に限って側面調整を行っている。10・12は研磨の工程を開始した資料である。12は各側面に細かな側面調整を施し、断面正方形の角柱とし、A面より粗い研磨を行っている。10は比較的大型の形割品に簡単な側面調整を施して研磨を開始した資料である。C面の細かな剥離は、わずかに突出したバルブを除去する目的でなされたように思われる。各側面とも平坦なため、側面調整をほとんど行わずに研磨を開始している。しかし、各側面を観察するとD面のように粗い研磨面を切る剥離面があり、研磨開始後も不都合な箇所があれば打撃を加えていたようである。

b. 019B号址の玉作（第22～25図、図版4・5） 調査区の西側に位置する工房で北に018が一部重複する。規模は7.45m×7.20mで平面形は隅に丸さのある方形を呈する。壁高は35cmを残す部分も認められるが、全体には浅く、壁下に壁溝は存在しない。柱穴は対角線上の2か所について明らかになり、このことから4か所配されていた可能性が大きくもたれる。また南東と南西の各コーナー部に不整形のピットが位置する。その一方の南西部のピットは掘り込みが2段になり、深い方は75cmを計る。床面は部分的に貼り床が施されている。炉は中央から僅かに南西に寄った場所に2か所設けられている。

玉類の生産は緑色凝灰岩製の管玉を主体にし、形割品を取った残核、形割品、側面調整の施された段階、研磨が認められるもの、穿孔品、それと多量の剥片類が存在する。残核と形割品あるいは、018のような形割品と形割品の接合関係は今一つ明らかにならなかったが、後で詳述するような、管玉の製作工程を理解するうえで良好な資料を提供している。管玉以外では大型管玉状石製品、腕飾類の製作に伴い作出されたと考えられる剝貫円板が出土している。石材でほかに用いられているものに滑石がある。滑石製品では管玉の未成品、成品、平玉未成品、板状品と剥片類が認められる。ただ滑石製管玉に関しては緑色凝灰岩製品で捉えられたような、製作工程とか技法を良好な形で示す資料は見いだせなかった。出土遺物の大部分が床面から出土しており、特に南東のコーナー部の柱穴や、掘り込みが2段となるピットの周辺に集中した

Ⅲ 各論

状況を認めることができる。玉の製作に関与したと考えられる石の道具に、砂岩の砥石片7点、叩き石1点、磨石1点がある。また、土器類は高杯、器台、罎、壺、甕があり、数量的にはそれほど多くはない。さらに炭化材や焼土ブロックが床面から検出されており、焼失住居の可能性が高い。

前述のとおり本工房からは、緑色凝灰岩製管玉の製作工程上の特徴を示す資料が出土している。それでは019B号址における玉作を実測図にしたがい検証していきたいと思う。

外小代遺跡019B号址の出土遺物の説明にあたり、018号址の説明と同様に、実測図の左側から順に、A・B・C・D面と呼んで説明することをお断りする。

1は、中・小型不定形な剥片を剥離した石核である。C面中央にはポジティブな面が残されており、本石核が厚手の剥片、ないしは分割礫を素材にしていたことがわかる。剥離作業は打面と作業面を頻繁に転移して行われており、最終的には残核となっている。B面中央には細かな剥離痕が数多くみられつぶれていることから、残核を形割品とするために、さらに2分割しようとした意図がうかがえる。

2は、中型厚手の不定形な剥片を素材とする形割品である。B面が素材剥片の打面、A面が主要剥離面である。D面、E面には主要剥離面を打面とした粗い調整加工がみられる。

3は、中型の横長剥片を素材とする形割品である。A面左側には主要剥離面（C面）からの剥離があり、剥片の形状を方形に近づける意図がうかがえる。

4は、中型の横長剥片である。A面には、主要剥離面の剥離方向とは異なる剥離面があり、多方向から剥片剥離を行う石核より得られたことがわかる。パルプは平坦で発達していない。

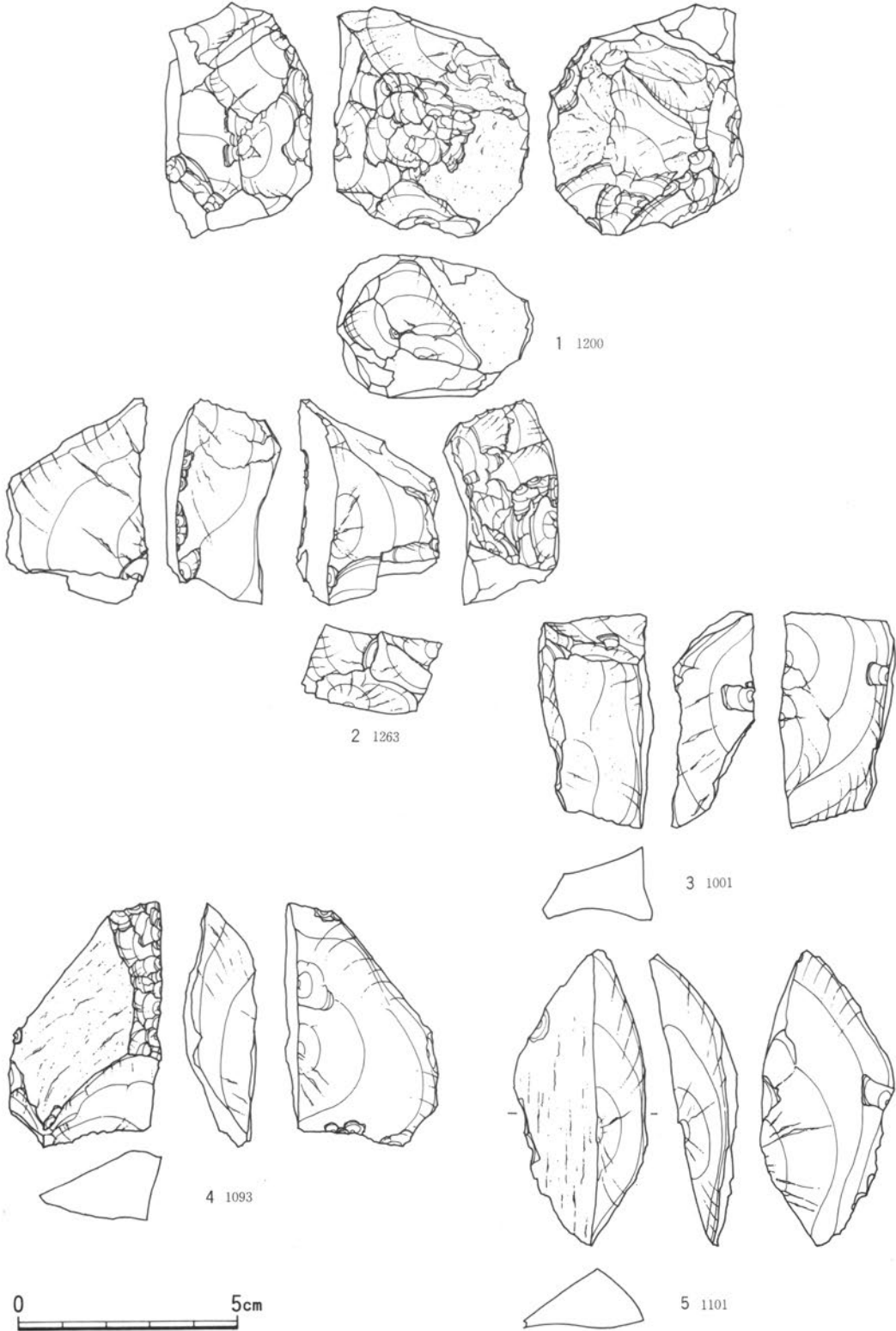
5は、大型の横長剥片の打面側を折り取った形割品である。A面には節理面が大きく残されている。

6は、大型の横長剥片である。打面と作業面を交互に入れ換える剥離手法により剥離されている。打点が4か所もあり、数度の加撃の後に剥離されたものである。打面部の細かな剥離痕は、剥片剥離時の加撃に付随したものである。

7は、中型横長剥片である。A面は多方向からの剥離面によって構成されていることから、打点が石核の周囲を巡る求心的な剥離によって本剥片が得られたことがわかる。

8は、横長剥片である。B面は左右の平坦面よりなされた細かな剥離痕に被われている。大型厚手の剥片を石核とし、分割を経ずにそのまま形割品となるような中・小型の剥片を剥離する際に得られたものか、大型の管玉を製作する際に生じた側面調整の剥片であるのか判然としない。A・C面は石核素材の剥片の表裏（あるいは大型形割品の側面）と思われる。

9も、8同様の特徴を持つ横長剥片である。A面左側の細かな剥離痕は主要剥離面（C面）によって切られており、A面の細かな面が本剥離以前のものであることがわかる。B面には自然面が残されており、これを打面としている。



第22図 外小代遺跡019B号址出土遺物(1)

III 各論



第23図 外小代遺跡019B号址出土遺物(2)

3. 古墳時代の玉作

10は、大型厚手の剥片を素材とする、石核より剥離された横長剥片である。B面は石核素材剥片の主要剥離面、C面は本剥片の主要剥離面である。分割はされていないが、長さや幅はそのままでも十分に形割品としての条件を備えていると思われる。

11は、中型厚手の剥片の打面部と末端部を折り取った形割品である。A・C面は、折り取った際の面である。また、D面下半部に主要剥離面が残る。

12は、中型厚手の剥片を素材とし、各側面を折り取って角柱状に整えた形割品である。おそらく、これから側面調整が開始される予定であったのであろう。D面には節理面が残されている。

13も、12と同様、中型厚手の剥片を素材とし、各側面の不要部分を除去した形割品である。A面は、その折断面であるが、相対する2か所に打点がみられ、両極技法により折断されたことがわかる。細かな側面調整を施す前に、上下両端を平坦に加工している点は注意される。

14は、12・13と共通した形状をもつ形割品の一部に側面調整が施された資料である（A面）。素材剥片の主要剥離面はD面下半部に残されている。

15は、中型の横長剥片を分割した形割品である。剥片の主要剥離面はD面に広く残されている。この後、B面右側縁が折り取られている。

16は、中型厚手の横長剥片を素材とする形割品に側面調整を施した資料である。A～C面は形割品を製作した段階の分割面と粗い側面調整痕によって構成されている。主要剥離面は、D面に残されている。

17も、16と同様の工程を示す資料である。D面に素材剥片時の主要剥離面がみられる。各側面の不要部分を折り取った後、A・C面を中心に、側面調整を開始している。

18は、厚手の剥片を素材とする石核から剥離された剥片の末端部を折り取った形割品である。C面は分割面、A面は石核の表面の一部である。

19は、厚手の剥片を素材とする形割品である。細かな側面調整を施す直前の粗い分割・折断の段階に属する。C面に素材の主要剥離面が残されている。

20は、剥片を分割した後A面に側面調整を施した資料である。C面は素材の主要剥離面、B面は分割面である。側面調整中途の段階で、上下面が形成されている。

21は、3面に側面調整を施した資料である。D面には素材の主要剥離面を残す。A、C面は、D面よりの調整を行い、B面はそのA面を打面として調整加工を行っている。

22～24は、側面調整の完了した例である。各側面を調整した後に、上下端面を整えている。

25～28は、側面調整に伴う剥片である。打面と底面が平坦で、バルブが発達しない。表面は、左右両方向からの細かな調整痕で構成されている。

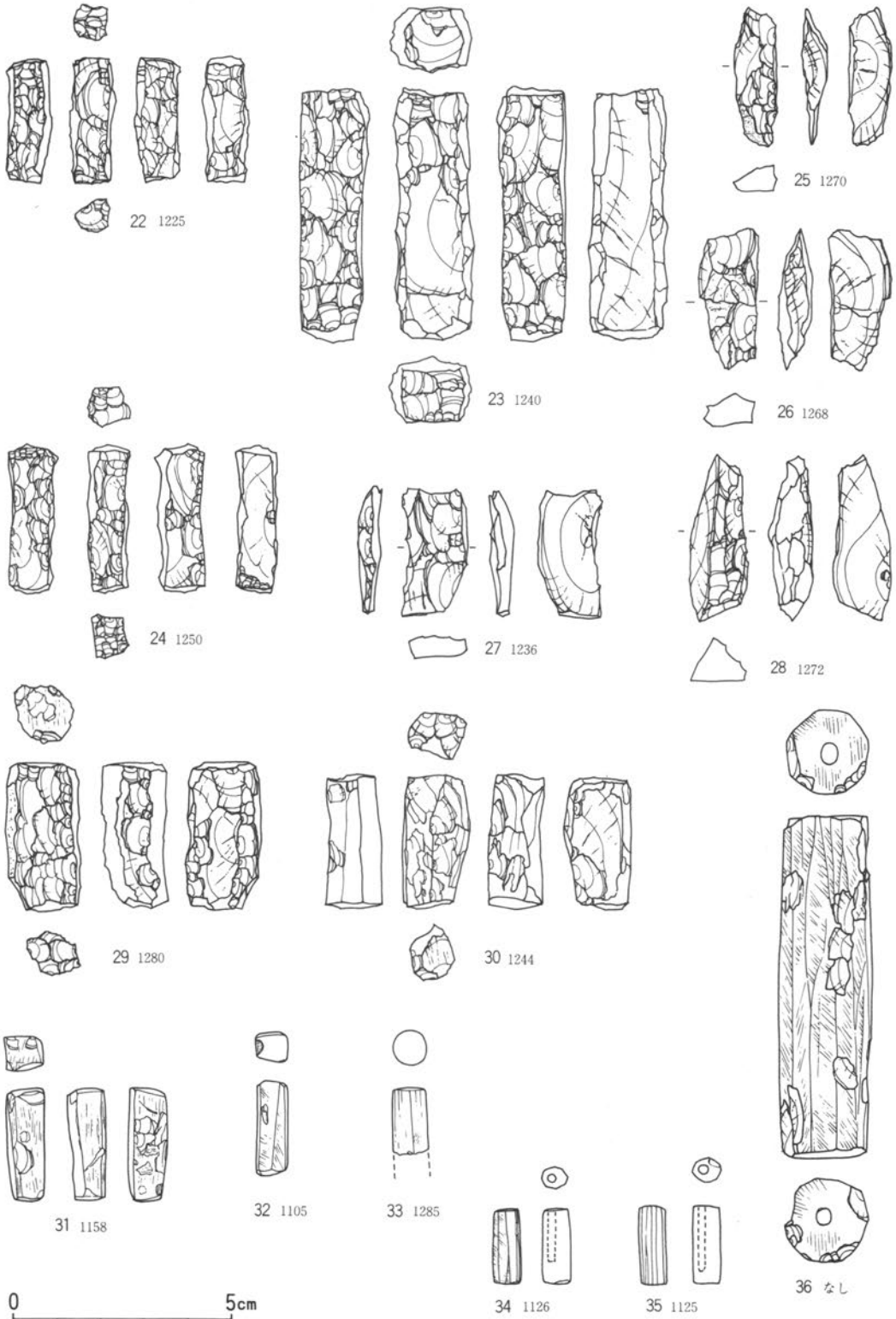
側面調整により四角柱に整形された後、研磨工程へと進んでいくと推察される。第25図29は上端面に研磨が開始されているが、まだ側面については認められない。30は両端面と側面に研

III 各論

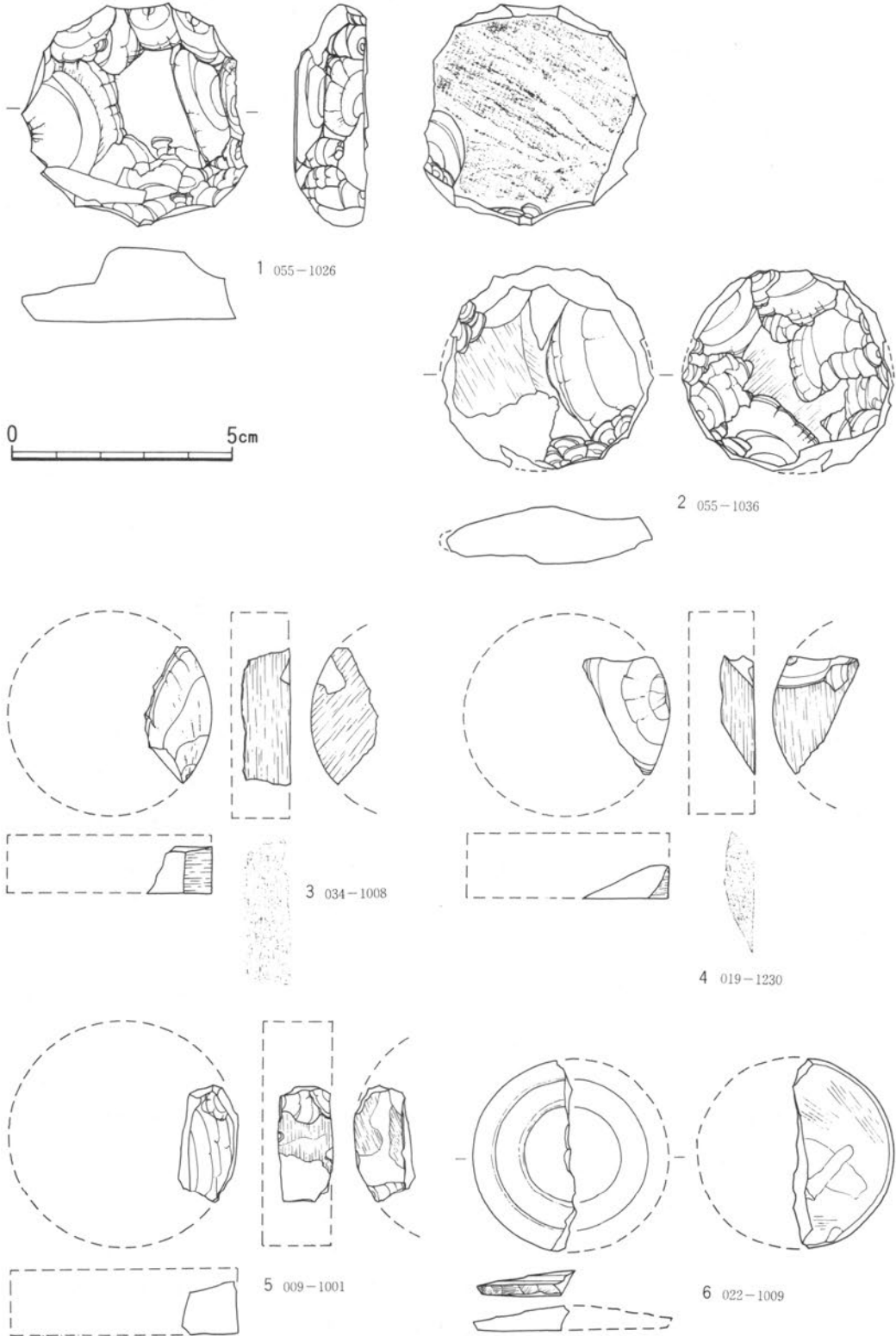


第24図 外小代遺跡019B号址出土遺物(3)

3. 古墳時代の玉作



第25図 外小代遺跡019B号址出土遺跡(4)



第26図 外小代遺跡出土遺物

Ⅲ 各 論

素材として再利用しようとしたらしい。3・4も剝貫円板を再利用して別の製品を製作しようとした剥片である可能性がある。3点とも石材は緑色凝灰岩Aである。

6は有段の紡錘車形石製品の破損品である。2分の1周での復原直径46.0mm、中央部の厚さ5.7mm、側縁部の厚さ2.0mmである。外形と同心円状に段を2段作り出している。また側縁部の立ち上がりはわずかに外傾している。中央部の穿孔はまだ行われていない。表裏面と側縁部に研磨痕がみられる。表面の段が不明瞭で、これは研磨によるものと考えられる。失敗品か不用品を別の製品に加工し直そうとしたものである可能性が考えられる。石材はやはり緑色凝灰岩Aである。

6の存在から、1・2は紡錘車形石製品の未成品であることが推察できる。これは3・4・5のような剝貫円板を利用して製作される場合があり、大きさからこの可能性も考えられる。

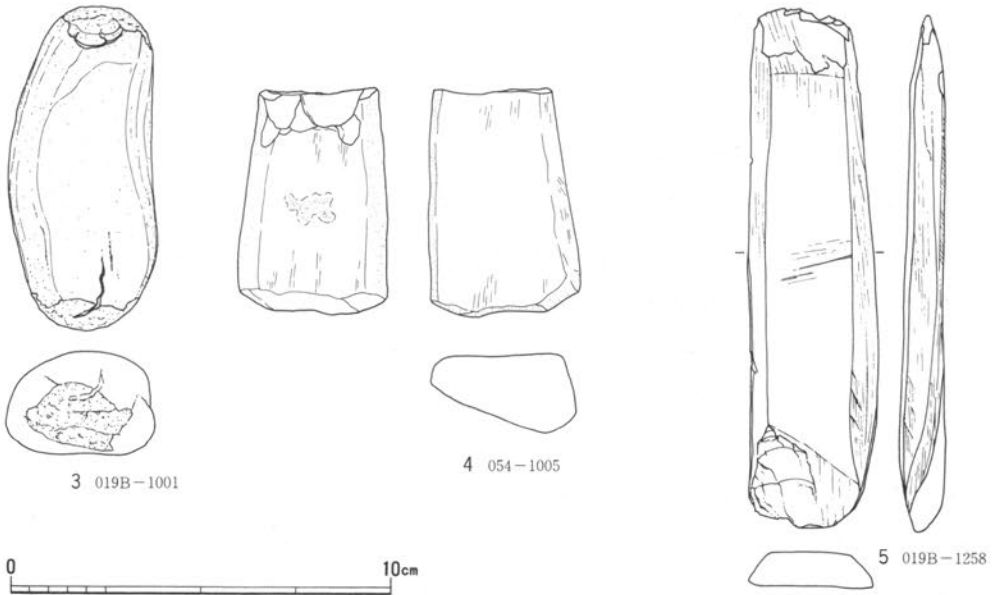
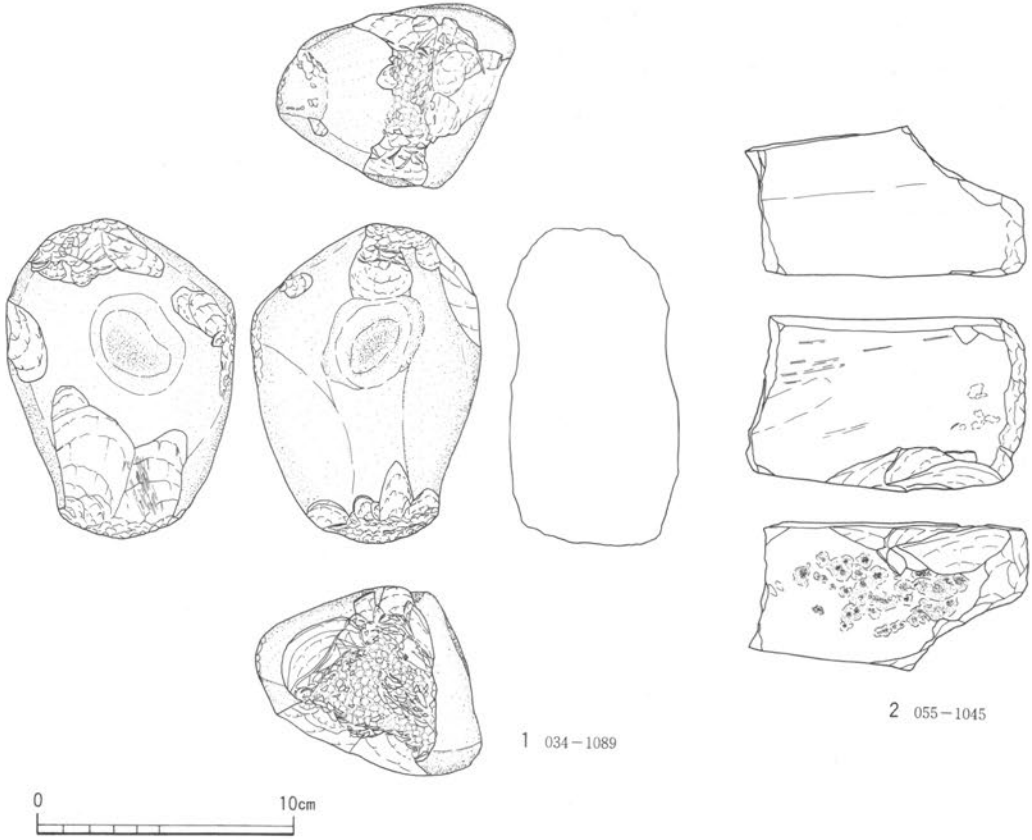
E. 工具類について (第27図、図版10)

外小代遺跡から出土した玉作に関係するとみられる工具類をまとめてとりあげる。今までに玉作に使用する工具として色々なものが指摘され、寺村光晴氏の『下総国の玉作遺跡』に何種類か例示されており、土錘、石墨状品、砥石、コマ、鉄製品等があげられている。土錘・コマは穿孔時のはずみ車として使用し、石墨状品は線引きとして、砥石は研磨に用い、鉄製品は切削・剝離・分割・穿孔等に用いたとされている。以上のような指摘があるなかで工具類の可能性のあるものすべてをピックアップすることはできなかったが、石製の工具類の一部を紹介する。第27図1から5までの5点で、実測図にしたがい以下に説明を加えていくことにする。

第27図1は、台石兼叩き石として使用されたもので各面に様々な使用・加工痕が認められる。材質は砂岩で、全長14cm、幅10cm、厚さ8.5cmの丸みの強い表面の平滑な河原石を利用したものであろう。表面中央と、裏面中央には直径3cm～4cm、深さ5mm～10mm程の緩やかなくぼみが各一か所ずつ認められる。これは台石としてくぼんだ部分に加工対象物を固定して上方から加工をしたものとみられる。また上端と下端は叩き石として使用したとみられ、打撃痕が数多くみられ、そのうち一部にはかなり大きな剝離が認められことから、かなり大きい力で打撃が行われたことがうかがわれる。打撃痕だけでなく打撃痕の上から摩耗痕も認められ、縄文時代の擦り石のような用途にも用いられたことがうかがわれる。母岩の分割や剝離、研磨等に用いられたものであろう。左右両端にもいくらかの打撃痕・摩耗痕が認められ同様な用途で使用されていたものであろう。

2は粒子の荒い砂岩製の砥石で、左側は折損しているため全体の大きさは不明である。現存長12.2cm、幅7.6cm、厚さ6.6cmの直方体をしているが、右側の上側一角を大きく破損している。4面を砥石として使用しているが、溝は認められないため溝砥石ではなく平面的に使用したものであろう。右側端部にはいくらかの打撃痕、裏面は少し表面の荒れが認められ幅、深さ共に1mm程の溝が幾つかみられる。鉄器用の砥石ともみられるが、通常認められる鉄器用の砥石よ

3. 古墳時代の玉作



第27図 外小代遺跡出土の玉作関係工具類

Ⅲ 各論

り形状が大型のため玉生産に関する砥石という見方をしておく。

3は砂岩製の叩き石である。ほぼ円形断面の細長い河原石を使用したものとみられ、上下両端に打撃痕が認められる。長さ8.6cm、幅3.9cm、厚さ2.4cmを計る。4は砥石として使用したもので、表面、裏面と左側面は砥石として使用されている。上下両端は折損しているため全容は不明である。長さ6cm、幅4cmを計る。砂岩製の河原石を利用したものであろう。

5は砥石として使用されたもので、長さ13.9cm、幅3.4cm、厚さ1.2cmを計る、非常に薄い頁岩製のもので表裏両面と、左右両側は斜めに稜が鋭くなるように砥石として利用している。上下両端は細長く刃部を作り出すように、薄く研磨されており、端部は破損している。上下両端と左右両側の稜は、溝を彫りつけるような用途に用いたものであろう。表裏両面は細かい研磨に用いたものとみられる。内磨き砥石としてよいだろう。

(4) まとめ

A. 八代遺跡の玉作

八代遺跡では緑色凝灰岩と滑石の両方の石材を使用した玉類の製作が行われている。緑色凝灰岩の管玉には長さ2.5cm前後のものとは4cm以上の中・大型のものがみられ、管玉のほかに大型管玉状石製品を製作している。滑石製品は1962年・1963年の調査で検出した3軒で管玉未成品のほかに板状品や臼玉、平玉、勾玉等を出土した。また1971年の調査では010号址で研磨した板状品を1点出土し、管玉の成品と未成品を003・005・007号址の3軒であわせて10点出土した。滑石の遺物の出土量は少なく、製作の主体は緑色凝灰岩製品であったようである。しかし、わずかではあるが管玉以外に石製模造品の製作が開始されていた工房があったことは確実である。緑色凝灰岩と滑石の他にはメノウ片・石英片等が出土している。

緑色凝灰岩製品は、剥片を除くと研磨・側面調整の工程のものが中心で成品は1点も出土していない。また10軒中、第1号址と第3号址を除く残りの8軒は剥片類も極端に少ない。寺村氏は1962年・1963年に調査した第3号址出土資料を中心に「八代・大和田技法」を復元された。1971年の調査では、出土遺物の量が少なく、また、工程を検討する上で必要な形割工程と荒割工程の遺物が不足していることから、玉類の製作工程については必ずしも十分な復元ができない状況である。しかし、わずかな量の遺物の観察でも「八代・大和田技法」の特徴とする点を見出すことはでき、緑色凝灰岩の管玉は同じ方法で製作を行っていたことがうかがわれる。まず、母岩は四角柱の荒制品や形割品の作出が容易なように、直方体になるよう調整されている。残核も直方体のものが多く見られ、横長剥片を剥離した痕跡がある。また形割品の中には横長剥片や横長剥片に調整を加えて直方体を作り出しているものが確認できた。側面調整は四角柱または三角柱になるよう行われているものが多い。しかし調整は3面または4面の全てに行われているわけではなく、分割の際にすでに平坦面が得られたものについては側面調整を省略している。上下面の調整についても同様なことがいえる。このようなことから、直方体に調

整した母岩から打点を次々に移動して横長剥片を作出することを特徴とする、「八代・大和田技法」によって玉類の製作を行っていたといえるであろう。しかし、Aトレンチおよび周辺の表採品のなかにみられたという「矢」・「クギ」の痕跡のあるものは、1971年の調査でも出土していない。

工具類は刀子・錐・叩き石・土玉・砥石等が出土している。1971年の7軒では砥石の破片が見られるのみで、工具類も1962年・1963年の調査の3軒の方が豊富である。

遺構は正方形に近い形態で3本から4本の主柱穴をもち、柱穴を結ぶ線からやや中に入った所に炉を構築する構造が基本で同時期の竪穴住居と比較してきわだった特徴は認められなかった。しかし1962年・1963年の調査で検出した3軒では第3号址で工作用ピットを検出しているほか、第1・6号址でも完形の甕を出土したピットがあり、これが工作用ピットとして機能していた可能性がある。

出土状況では形割・側面調整・研磨工程のものが西壁際で出土している場合が多いようである。作業場所を復元するにあたり注意しておきたい。また工作用ピットを検出した第3号址ではここに剥片の集中がみられた。

遺構の時期は、1962年・1963年の調査のものも含め、古墳時代前期から中期に位置づけられると考えられる³⁷。1962年・1963年の調査の3軒は遺物の量が豊富なこと、工作用ピットの存在等、工房としての条件が整っている。これがわずかな時期差であるのか、遺構ごとの役割や性格の違いなのかを検討していくことが今後の課題であろう。

B. 外小代遺跡の玉作

八代遺跡に近接した外小代遺跡は、やはり緑色凝灰岩と滑石による玉作等が行われていることが確認された。玉作工房は8軒確認されたが、その他にも工房の可能性をもつ遺構があり、詳細な検討をすることにより工房と認定される遺構は増える可能性もある。量的にも八代遺跡と同様に緑色凝灰岩による管玉の生産が主体となり、滑石製の管玉も製作されていたことが出土資料からうかがわれた。

緑色凝灰岩製の管玉以外には刳貫円板等の石製品の類例が増加した。刳貫円板は石製腕飾類製作の際に生じるものである³⁸。関東地方では茨城県稲敷郡江戸崎町桑山上の台遺跡³⁹で出土している。また、埼玉県比企郡川島町正直遺跡⁴⁰・神奈川県海老名市本郷遺跡⁴¹では石製腕飾類未成品（形割品、亀甲状品ともいわれる）を出土しており、本郷遺跡では石釧未成品（中央部刳貫後の環状の部分）を出土している。上の台遺跡は現在のところ石製品を製作している最北端の遺跡と考えられており、利根川を挟んで北と南に位置する本遺跡でもその存在が確認されたことは注目される。外小代遺跡の刳貫円板破片のうち一点は一部研磨が開始されており、管玉素材として再利用されている。また他の2点も再利用しようとした際の剥片である。正直遺跡でも管玉に再利用しようとしたものが出土している。刳貫円板は紡錘車形石製品にも利用される場

Ⅲ 各 論

合があるため製作遺跡においてもその出土点数は少なく、遺存状態が良好なものは出土しないようである。逆に出土した刳貫円板の数以上に石製腕飾類の製作が行われていたといえよう。

紡錘車形石製品は外小代遺跡で1点出土し、紡錘車形石製品未成品と考えられるものも外小代遺跡で2点出土した。関東地方の製作遺跡では本郷遺跡のほか神奈川県川崎市久地不動台遺跡⁴²で研磨工程の未成品（笠形品）が出土している。千葉県内の紡錘車形石製品は石倉亮治氏により紹介され、県内では古墳や生産遺跡以外の集落遺跡で出土している例が多い点で注目された。⁴³その後類例は増加したが、外小代遺跡で新たに確認されたもの以外はやはり集落遺跡からの出土である。

石製品としては以上のほかに大型管玉状石製品未成品が出土している。⁴⁴八代遺跡で2点、外小代遺跡で4点でいずれも側面調整、研磨工程のものであり成品はない。これは近接した玉作遺跡の成田市大竹遺跡に、未穿孔の研磨段階品4点の出土があり、そのほか下総町山崎遺跡で出土している。また、県外の玉作遺跡では、神奈川県海老名市本郷遺跡、神奈川県横浜市上谷本遺跡⁴⁵で出土している。

滑石製品も管玉、勾玉、平玉、有孔円板、板状品と種類は多くみられるが、その量は少なく、やや点数の多い管玉と板状品の製作を行っていたといえる。これらは緑色凝灰岩の管玉の製作と同時に、行われていたものとみられるが滑石製の玉と模造品の製作が開始されていたとみることができる。

玉類生産の主体となる、緑色凝灰岩の管玉は母岩から荒割品、形割品、側面調整品、研磨品、穿孔品にいたるまで各工程の未成品が数多く出土している。しかし、成品の出土例は1点しかなく八代遺跡と同様な傾向を示している。八代遺跡で指摘したが成品は搬出される性格とはいえず、両遺跡をみても成品は1点しか出土しておらず、成品に対する厳格な管理が行われていたとみることができよう。一方、遺構の出土資料に対する分析・検討作業により、工程と技法上の特徴が把握できるような状況がみられた。そこでさらに入念に資料の検討を重ね、接合する資料が確認され、それにより玉作技法の解明が行えることとなった。この接合資料を主とした分析・検討により、母岩から大型剥片を分割・剥離する荒割工程、大型剥片の再剥離・分割、形割工程での分割等、今まで「八代・大和田技法」といわれてきた製作工程と、やや異なる様相が確認された。それは、今まで言われてきた関東地方の諸技法（「八代・大和田技法」、「本郷技法」、「烏山技法」）の各要素が認められるもので、南関東地域の玉作遺跡に共通した工程上の特徴がうかがえることであった。そのためはじめに南関東地域で知られている玉作技法の包括的な要素の抽出を行い、その後外小代遺跡の管玉製作について説明することとする。

C. 周辺地域の玉作技法・玉作資料について（第28・29図）

a. 「八代・大和田技法」について 「八代・大和田技法」とは県内の玉作遺跡の中で最も早くから着目され発掘調査の機会があった成田市八代遺跡と、次いで注目され発掘調査された下

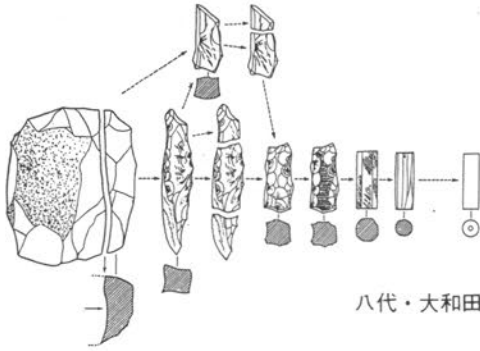
総町大和田に所在する玉作遺跡群の遺跡名にちなんで命名されている。両遺跡の緑色凝灰岩による管玉の製作に関する出土資料に基づいて寺村光晴氏によって、分析・検討された結果、提唱された玉作工程上の一技法である。緑色凝灰岩による管玉の製作について原石から荒割、形割、側面打裂、研磨、穿孔、仕上げにいたる工程上の作業段階を分析・区分し、その加工を類型的に理解しようとしたものである。「八代・大和田技法」は『下総国の玉作遺跡』、『古代玉作形成史の研究』等に示されてきているのでここに引用しながら説明をすることにする（第28図、八代・大和田技法参照⁴⁶）。

原石の入手については、拳大の転礫もしくは破碎礫が予想されている。この原石に調整を加え母岩として、次の大型剥片を作出する作業に移る。この原石から大型剥片を作出する作業工程を荒割工程と呼んでいる。荒割工程は母岩に対し横長剥片を剥離するものと、一定の厚さの長方形石塊の作出との2つの類型が考えられている。この荒割工程のうち後者は、横長剥片を連続して剥離することを容易にするための調整的なもので、前段階的な作業である。これは荒割工程の第1工程ということが出来よう。この荒割第1工程によってほぼ一定の厚さになった石塊に対し剥離された面を打撃面として周囲から横長剥片を次々と連続して取っていく。この工程が荒割第2工程といえよう。横長剥片の作出は剥離によるもので、断面が四角形になるように行われる。この横長剥片が大型の場合は剥片に対し、さらに、剥離を行い管玉の製作に適した大きさの剥片となるようにする。この段階のものを荒割（工程の未成）品と呼んでいる。

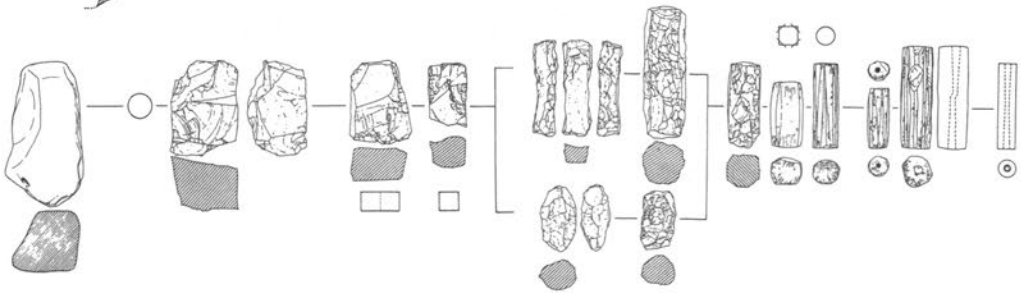
こうして作出した剥片が三角形断面の場合は、四角形となるように整形を加え薄い部分を剥離する。この工程からは形割工程になり、以上の工程が形割第1工程である。この形割第1工程によって目的の大きさの四角柱が作出されないときにはさらに整形を加えるわけである。これらの剥片は、両端部が管玉の製作に十分な形態や厚さをもっていないことが多いために、両端部を取り去るために打撃が加えられ、不要な部分が削除される。目的の形態に至るまでこの作業が繰り返される。この工程は形割第2工程とされている。このように荒割品から管玉の製作に適する断面四角形の四角柱である形割（工程の未成）品を作出していく工程を形割工程と呼ぶ。

形割工程により作出された、四角形断面で四角柱の形割品は、より整った四角柱とするために、凸凹が調整される。この調整は打撃（間接打撃）・押圧剥離により行われ、ほぼ正四角形断面に整形され、研磨工程の前段階となる。調整の方法は、押圧剥離によるものが多く、間接打撃によるものは「矢」、「クギ」痕が認められ、その例は少なく特定の地点にしかみられない。この段階のものを側面打裂（の未成）品と呼んでいる。

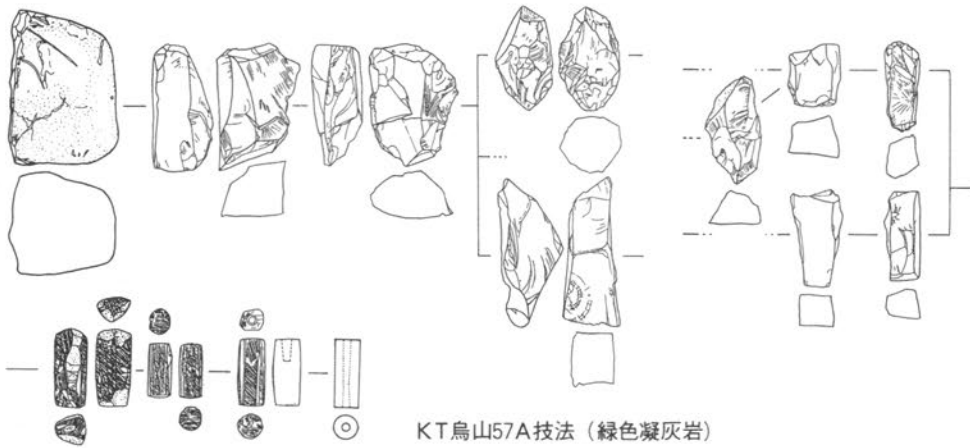
次に研磨（工程）が行われる。ある面に研磨を開始し、その後次の面へと移り、4面に対して順に研磨が行われる。その場合の面の順序については、明確な規則性はない。その後面に面の間の稜に対して研磨を行い、八角柱、次いで十六角柱へと、面取りをするように研磨をして円



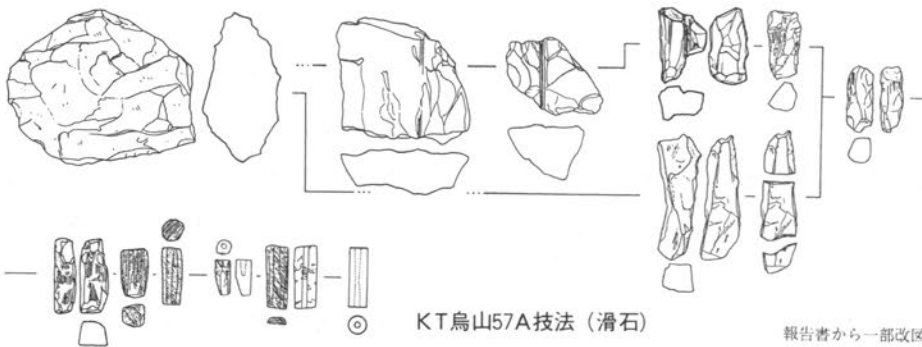
八代・大和田技法（緑色凝灰岩）



KJ本郷DOE17技法（緑色凝灰岩）



KT烏山57A技法（緑色凝灰岩）



KT烏山57A技法（滑石）

報告書から一部改図転載

第28図 周辺地域玉作遺跡の管玉製作工程

形に近づけていく。研磨の開始の段階は、側面打裂品に対して研磨を開始するのが通常の例であるが、中には形割品に対して研磨が行われているものもあり、形割品の状態であっても加工に良好な状態のものに対しては、側面打裂を行わずに研磨を開始するものもあったとみて良い。また、形割工程の状態を試みの研磨を形割品の一部に施すものもあったとみられている。この研磨工程のものを研磨工程（の未成）品と呼んでいる。

次に穿孔工程に進む。穿孔作業は研磨工程を経たものに対して施されるもので、側面打裂品や、形割品に対しては穿孔は行われなかったといつてよい。穿孔は上下両方向からの、両側穿孔で行われ穿孔を行う際のぶれ止めとなる小凹痕（ポンチ痕）は認められていない。この段階の資料に一部穿孔時のぶれの認められるものがあり、穿孔技術の稚拙さを示しているとも考えられる。穿孔の終了したものに対して、再度研磨が実施され仕上げとなる。この仕上げの研磨工程を経て、管玉の成品となる。

b. 「本郷技法」について 神奈川県海老名市に所在する本郷遺跡では1981年からの調査において、玉作工房が検出されておりその数6軒を数えるに至っている。これらの工房の中で管玉の製作技法の観察に最も適すると思われるDOE地区の17号住居址が取り上げられ、その工程の検討に用いられている。玉作技法の検討にあたり、寺村光晴氏はその報告書『海老名本郷』第1分冊の中で「本郷技法とでも称すべきもの」と呼んでいるが、さらにDOE地区調査の報告書の中で「KJ本郷DOE17技法」と名付けてその製作技法を模式図で図示している（第28図 KJ本郷技法DOE17技法参照）。

本郷遺跡DOE地区17号住居址からは、156点の玉作関係遺物が出土しており、90%近くが床面及び覆土下層からの出土である。出土玉類は、管玉が主体で、勾玉、笠形石、穿孔残屑物が各1点ずつ検出されており、材質は勾玉以外はすべて緑色凝灰岩である。この工房で製作の主体をなすとみられる管玉の製作について検討がなされている。本遺構の管玉の製作工程の大筋は荒割、形割、側面打裂、研磨、穿孔、仕上げで基本的な工程は他の技法と同一である。加工の加わる前の原石については、遺跡内の他工房より出土例があり5cm～10cm程の転石（礫）である。ここでは直方体ないしは、偏平に近い礫を原石として工房に搬入されたものとみている。搬入された原石は、打撃によって荒割される。この打撃には両極剝離（両極打法によるものを指しているとみられる）とそうでないものが半々にみられるとのことで、両極剝離には叩き石と台石の使用が推察されている。この荒割工程には原石の大割り（第Ⅰ工程）、形割工程に近い小割りのもの（第Ⅱ工程）の2者に分類されている。大まかな形ができたものに対し、管玉製作時の基本形であるほぼ正方形断面の四角柱状品を作出するための形割が行われる。この段階では偏平柱状（第Ⅰ工程）から四角柱状（第Ⅱ工程）への順序が認められる。形割工程によってほぼ四角柱状に整形されたものを、さらに凸部を除き正四角柱状になす微調整の段階が側面打裂工程で、この「打裂」は押圧剝離と敲打が多用されている。押圧剝離は一面をブラッ

Ⅲ 各 論

トフォームとして左右両側面に押圧をなしている。この剝離は本郷遺跡の特徴の一つとされ、プラットフォームの選定には第一次ないしは第二次の剝離による平滑な剝離面を利用している。その反対側の面も剝離が大きいためプラットフォームとして用いることが多い。この工程を側面打裂第Ⅰ工程とし、通常の玉作工程ではこの第Ⅰ工程から研磨を開始するが本遺構では、さらに4側面に敲打を加えられ面取りが行われている。この段階を側面打裂の第Ⅱ工程と呼んでいる。押圧剝離による側面打裂工程後に、さらに敲打調整する例は本遺構例が初めてとみられる。これが「本郷技法」の最も特徴的な工程であろう。この他にもう一点注目すべき特徴があり、側面打裂工程上で押圧剝離をせずに敲打により整形したものがみられることである。

研磨工程は、四角柱から八角柱、十六角柱へと進むが、本遺構では側面打裂工程上の特徴から四角柱からではなく、八角柱から十六角柱へと研磨が行われている。穿孔は多角柱となったものについて上下両側から行われるのが一般的である。上下両面に小凹痕（ポンチ痕）がつけられ錐のぶれを防ぐようにされる。烏山遺跡でみられる、穿孔時の位置決めに用いたとされる石墨等による素描（下書き）は確認されていない。研磨工程は、始めに長軸方向に研磨が開始され途中の穿孔直前に直交方向の研磨が行われるようになり仕上げ研磨により円形となる。穿孔が終了すると、仕上げの研磨が行われ成品として完成する。以上のように念入りの側面打裂工程で押圧剝離の後にさらに角の稜を取り除くように敲打によって調整を行うのが「本郷技法」の特徴であるといえる。

c. 「烏山技法」について いわゆる「烏山技法」は茨城県土浦市の烏山遺跡の調査で、報告書の中で寺村光晴氏によって提唱された玉類の製作技法である⁴⁹。烏山遺跡A地区の竪穴住居跡82軒のうち、玉作工房と報告書で認定されたのは4軒で可能性のある1軒を加えても計5軒である。この玉作工房のうちで遺構の遺存がよく、なおかつ出土遺物の条件のよかった第57号住居が、玉作技法の検討対象にあげられ報告書では、碧玉質材の管玉製作工程を「K J 烏山A57技法」、滑石質材の管玉製作工程を「K T 烏山A57技法」、そしてメノウ材の勾玉製作工程を「MA 烏山A57技法」、さらに滑石質材の勾玉製作技法を「MT 烏山A57技法」として4種類の玉作製作工程として提唱されるに至っている。このいわゆる「烏山技法」は、碧玉質の管玉製作、滑石質の管玉製作、メノウ質の勾玉製作、滑石質の勾玉製作の、4種類の玉作を包括した総称として呼ばれるべきものであるが、外小代遺跡の緑色凝灰岩の管玉製作技法との比較のために、碧玉質の管玉製作をさす「K J 烏山A57技法」のことをここでは主に指すことにし、報告書の挿図、記述を引用しながら説明をする（第28図 K J 烏山A57技法・K T 烏山A57技法参照）。

烏山遺跡の管玉製作は、碧玉質材と滑石質材により行われている。それらのうち、ここでは碧玉質のものをういた管玉製作の技法を主としてふれる。報告書では「K J 烏山A57技法」と呼ばれるものである。製作の基本的な工程は、荒割、形割、側面打裂、研磨、穿孔、仕上げで

「八代・大和田」、「本郷」の各技法となんら変わりはない。原石は拳大の大きさの転石で河原石か砂礫層中からの採取とみられている。この原石を打撃により荒割するがこの際、両極打法により分割されているようで、叩き石と台石の使用が推察されている。荒割は母岩から大型の剥片を作出し、形割工程では周辺を主に剝離により調整して断面円形の楕円形状に整形し、さらにやや細かい剝離を主とした調整を行い、管玉製作の基本形とされる正方形断面の直方体形に成形するものと考えられる。これをAタイプとしている（第28図 K J 烏山A57技法の上段の技法）。一方、直方体に近いところまで打撃（剝離か？）により整形されているものをBタイプとしている（第28図 K J 烏山A57技法の中段の技法）。これらのA・Bタイプに対して荒割された剥片から横長剥片を作出し、その剥片の両端を切断することにより直方体形に整形していくのが「八代・大和田技法」と呼ばれているものである（第28図、K J 烏山A57技法の下段の技法）。このタイプも本遺跡では1・2例みられるが、ほとんどは先述のA・Bタイプに属するようである。このA・Bタイプによる玉作技法が「烏山技法」の特徴といえよう。以上の形割工程を経たものは、正四角柱断面にすべく側面打裂が施され、整形が行われる。側面打裂工程では、「本郷技法」と同様に主に押圧剝離によって調整が施されている。側面打裂工程を経たものには研磨が施されるが、必ずしも四角柱、八角柱へと規則的順序をたどるものではなく、より円柱状へと近づけるように研磨が施される。この際の研磨は、長軸方向に対して斜行するものが多く、平行または直交するものは少ない。穿孔は、両方向からなされている。穿孔位置の決定に際し、素描（下書き）がなされている。穿孔位置の円に対し、十字または中央に直線が引かれ、十字の交点に打撃による小凹痕（ポンチ痕）が施されている。穿孔位置への小凹痕は神奈川県の本郷遺跡でもみられるが、沈線による素描は本例が初めてとしている。玉作の際の素描用具として石墨状の石筆によるものがあげられているが、本遺跡では石墨状品は検出されていないので、素描には沈線によったものとみられている。穿孔を終了したものに対し、仕上げの研磨が施される。研磨は穿孔部の面取り等が行われたとみているが、成品の出土がなかったので確認はされていない。以上のように緑色凝灰岩製の管玉の製作工程を復元しているが、形割段階での「八代・大和田技法」との差異により、本郷遺跡の玉作技法である「本郷技法」に類似性を認めながらも、その独自性によって「K J 烏山A57技法」と提唱している。

また、滑石質材の管玉製作技法である「K T 烏山A57技法」についても参考のため、ここに報告書より簡潔に説明する。滑石の偏平円板状の母岩に対し一端より打撃を加え剝離を行い、形割品を作出する。また一方直方体を作出し分割により大型の形割品を作出する方法もある。これらの作業が荒割第Ⅰ工程である。荒割第Ⅱ工程は浅い溝を付け、そこを打撃点として剝離を行い形割品を作る。第Ⅲ工程もこれと同様なことが繰り返される。この剥片に対し形割作業が行われる。剥片から直方体状品を作出する際に、溝状の切削痕を付けそこに打撃を加えるも

Ⅲ 各論

のや、横長剥片を作出し上下両端を折断することにより直方体状品を作出する工程のものがみられ、この工程は「八代・大和田技法」と同じである。烏山遺跡では緑色凝灰岩に対しては「烏山技法」がそのほとんどを占めたが、滑石に対しては「八代・大和田技法」がかなり認められている。形割により作出された直方体状品は刃部を持つ工具によって切削され整形することにより、四角柱あるいは円柱形に整えられる。報告書では、この工程を切削と名付けている。この後研磨が施され、四角柱・八角柱・十六角柱に整えられる。次に両側から穿孔がなされるが素描の有無は明かではない。穿孔の終了したのものについて仕上げ研磨を行い、成品となる。穿孔面の面取りはほとんど行われていない。以上の工程が「KT烏山A57技法」である。玉作技法上は緑色凝灰岩に類似しているが、切削溝を付けた後の打撃による剥離、円柱形への整形時の切削工程、「八代・大和田技法」が多くみられること等が緑色凝灰岩の「KJ烏山A57技法」との相違点といえよう。

d. 市原市草刈六之台遺跡の玉作資料について 市原市所在の、草刈六之台遺跡で玉作工房が検出されていることは、県内の玉作遺跡の項でふれているが、現在整理作業中であり報告書の刊行には至っていない。そのため詳細な玉作の工程・技法等については報告書の刊行を待つしかないが、整理担当者の厚意により、玉作資料の一部の実測図を借用し掲載させていただくことができた⁵⁰。掲載した資料の材質はすべて緑色凝灰岩で、形割品から研磨・穿孔品にいたるまでの資料がみられ、外小代遺跡の玉作と似たような様相を呈するものと見られるが、その全容は明らかになっていない。遺構の時期は、古墳時代前期で、今まで知られている玉作工房の時期と微妙に前後しそうだ、との指摘があり⁵¹、玉作の開始時期の解明に、貴重な資料となりそうである。今後刊行される報告書にその全容が紹介されるであろう。

e. 大竹遺跡の玉作とその比較、時期差について 成田市八代遺跡の玉作工房出土資料に対する分析・検討は、寺村光晴氏や今回の作業によって、不十分な部分があるにせよかなり解明することが出来た。一方、下総町大和田玉作遺跡群の玉作についても、寺村光晴氏によって分析・検討が実施されている。その両遺跡を通して寺村光晴氏が導きだした玉作技法が、「八代・大和田技法」である。成田市内に所在する大竹遺跡の玉作工房の調査の際の資料についても、寺村光晴氏が分析・検討を行っておりそれによると、緑色凝灰岩の管玉の製作が主体で、滑石の管玉が少量検出されている。そして、大型管玉状石製品の検出が特筆されており、玉杖との関連が指摘されている。これらの様相は、今回の主な分析・検討対象である外小代遺跡の玉作と、ほぼ同じ様な様相を呈している。

一方、それまでの玉作遺構とは異なるとされる点もいくつか指摘されている。まず、工房の構造に関するものからいうと、工房の規模がやや大きいこと、工作用ピットと見られる長方形の二重ピットの検出、工作用ピットの所在する空間への間仕切溝の存在等があげられる。工房の構造に関して、全国的に普遍的な構造であるとの指摘がみられ、初現的な構造の玉作工房か



第29図 市原市草刈六之台遺跡の玉作関係資料

Ⅲ 各 論

ら普遍的な構造の玉作工房への変換とみて、工房構造の発展としてとらえようとしている。この工房内の工作用ピット、間仕切溝によって工房内が「仕事の場」と「居住の場」とに、明瞭に区分されているという想定がなされ、「工房址」は「住居址」であるとしている。この点に関しては、第21図外小代遺跡018号址接合資料出土状況の状態からも、工作用ピットの存在しない北側壁際の中央やや西側にまとまって検出されている事実が確認される。

遺物に対する玉作技法上の特徴も、何点かあげられている。技法的な問題として、周囲の玉作工房ではみられないものとして、形割工程に敲打施溝法の痕跡を示すものがあるとされている。この敲打施溝法は、弥生時代によくみられる擦切施溝と類似した工法であるが、擦り切りではなく敲打により施溝して分割していくものである。古墳時代の玉作としては、初めてみられるもので、その玉作技法の系譜について究明への貴重な資料となるだろう。出雲形内磨き砥石⁵⁴の出土もあり、大竹遺跡と関東以外の地域の玉作との関連も考えなければならないだろう。

大型管玉状石製品の未成品の出土にも注目している。4点の出土がみられ、研磨工程の未成品で、穿孔はされていない。この遺物の成品は、畿内の奈良県桜井市茶臼山古墳、近くは、市原市新皇王塚古墳等からの出土例が知られており、儀礼的な遺物としての位置づけができるような見方がされている。この大竹遺跡の玉作の時期は、古墳時代前期が想定されている。

D. 外小代遺跡の玉作技法について

外小代遺跡の玉作工房のうち、資料の詳細な分析作業を行った018号址、019B号址の資料について前節で詳細な説明をした。しかし、工程の説明上必要な資料が、すべて出土しているわけではなかったので、説明の都合上それ以外の遺構からの出土資料も一部取り上げて、工程および技法上の特徴を明らかにしておきたい（第30図、図版9）。

外小代遺跡では、純粋な意味での玉作の原石は確認されていない（ここでの原石とは、まったく加工の痕跡のない原材料を指している）。主要な母岩にあたる資料は、第16図1、2、3に図示しているが、1（第30図1に再掲）は中でも大型のものであり、荒割工程により作業に適した大きさに分割された資料から3点が接合している。母岩を、形製品の作出に適する一定の厚さでなるべく整った形態となるように、分割している。分割にあたっては母岩に対する整形を施し、分割しやすくしている。その結果、母岩に各方向からの剥離痕が極めて複雑に認められる。この母岩の分割・母岩からの剥片の剥離等の方法に関しては、第17図から第20図に至るなかで、接合資料をもとに幾通りかが復元されている。以下に再び簡潔に取り上げる（第17図～第20図参照）。

第17図2の形製品3点の接合資料からは、①母岩から大型剥片を剥離する→②大型剥片を2分割して中型剥片とし、それぞれを石核とする→③小型剥片を剥離する＝形製品という工程手順が復元できる。

第18図3の形製品4点の接合資料からは、①母岩ないしは大型剥片から、交互剥離によって

3. 古墳時代の玉作



第30図 外小代遺跡の管玉製作工程

Ⅲ 各 論

中型剥片を連続的に剥離する→②中型剥片を分割して断面形が角柱状の形製品とする、という工程が復元できる。

第19図5の形製品5点の接合資料からは、①母岩に対し、求心的な剥離を行い、大・中型の剥片を剥離する。次に本資料全体を含む大型剥片を剥離する→②大型剥片を石核として中型剥片を剥離する→③各中型剥片を分割して形製品とする、という工程が復元される。

第20図9の形製品5点の接合資料からは、①母岩から大型剥片を剥離する→②大型剥片を3個体以上の大・中型剥片に分割する→③それぞれより中型剥片を剥離する→④各中型剥片を分割して形製品とする、という工程が観察されている。以上のように、形製品を作出する際に、母岩の状態に応じてそれに適する剥片の剥離を行い、剥離された大型・中型の剥片に対しさらに剥離・分割等を行い、必要に応じてその後さらに分割・剥離等を行い形製品の作出を行っている。

第30図2は、荒製品である。長方形断面で直方体に近い形態は、形態からみると第28図「K J本郷D O E17技法」の2分割し、形製品を作出していく前の荒製品に類似している。本品も、多分この後本郷遺跡例と同様に、2分割される目的で作出されたが、上端部が薄くなってしまったので使用されなかったのであろう。「K J本郷技法D O E17技法」の特徴が外小代遺跡でもみられることを示す資料といえよう。

一方3は、三角形断面で楕円形に近い形態で、これは下の5に近い形態である。3も、5と同様に交互剥離によって作出された中型剥片で、この後に分割して形製品が作出されていくものと見られる。5は、形製品3点(9、10、11)の接合によって中型剥片が復元されたものである。5は、①母岩からの大型剥片の剥離、②打面を変え、大型剥片より小剥片の剥離、③打面を変え、大型剥片より本中型剥片の剥離、という工程により本剥片が作出される。打面の変換は、打面と作業面を交互に入れ換える交互剥離によるものと見られる。次に中型剥片5は、9と10+11に2分割される。次に10+11は、再び2分割され、その結果、5から9、10、11の3点の形製品が作出される。この分割は、両極打法によって行われたと見られる。

4は、形製品3点(6、7、8)の接合により中型剥片が復元されたものである。荒制作業によって剥離した剥片に対し、左側縁に加工を施し平坦にして4の中型剥片にしている。後に、その剥離軸と直交する方向に3分割して形製品を作出している。こうして分割された形製品が、6、7、8の3点であるが、4に至るまでに左側縁部を平坦に加工しているので、6、7、8の形製品の上端部は平坦になっており、形製品作出の際にその形製品の整形にまで配慮がされている。

12は、形製品に対し両端部の折断を行い、平坦な端部となるように加工を施したものである。

13は、形製品の一部に側面調整が施された資料である。

14は、側面調整の完了した資料である。この側面調整は、分割面のような平坦な面に対して

は実施されず、他の側面に調整を施してから上下両端部の調整を行い、さらにもう一度側面の調整を行う。この順序を示しているのが本資料で、側面調整→上下両端調整→側面一部の調整という工程が確認できる。ここでは「八代・大和田技法」でいわれるような、形割品の両端をどれもが折断しているわけではない。

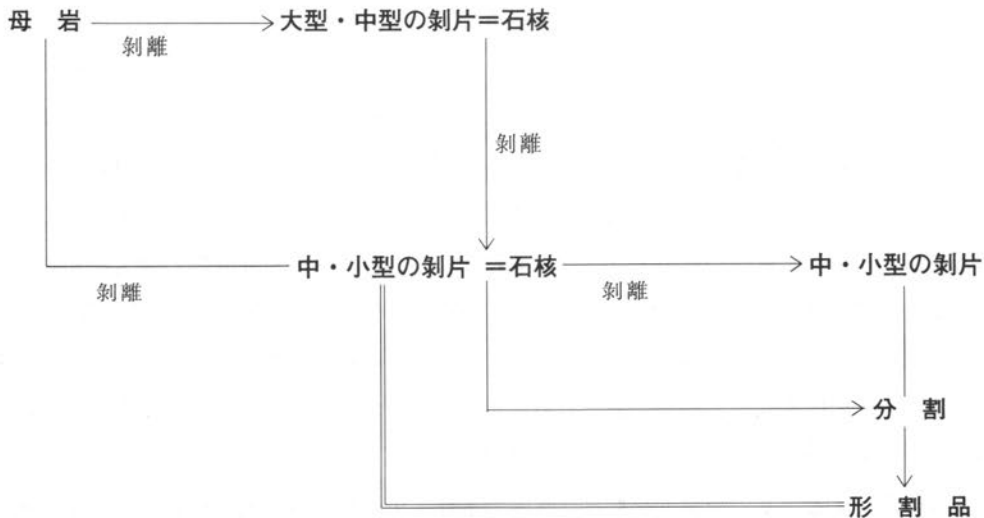
15は、研磨工程が開始された資料であるが、研磨の開始にあたって側面から開始するのではなく、上端部から研磨が開始され、側面には至っていない。16では、上下両端部、側面に研磨が開始されているものの、側面調整の剝離の深かった部分までは研磨が届いていない。断面形も、まだ整った四角柱にはなっていない。17に至ると、研磨もほぼ全体に行き届き、断面形はほぼ正方形の直方体にまでなっている。18は、四角柱から八角柱へと移行しはじめた段階の研磨品である。一部に剝離の痕跡がまだ残っている。19は、ほぼ円柱形に研磨されている。また研磨の開始後に、側面調整を部分的に施した資料を、第20図10に提示しているように、研磨の開始後にも不都合な箇所があれば、打撃による調整を行っていたことがうかがわれる。

20、21は、穿孔を開始した資料である。側面に一部稜が残り、完璧な円柱形にまで研磨しないうちに上端からの穿孔が開始され途中で止まっている。穿孔は両側から行われるのが一般的で、本例もこの後に下端部からの穿孔が開始され、貫通するものと見られる。

この後、穿孔の終了したものに仕上げの研磨を行い、管玉の完成となるが、本遺跡では成品は1点しか検出されていない。そのため22・23は模式的に図示したもので出土資料ではない。

以上のように、外小代遺跡では形割品の作出に際し、母岩の状況、荒製品の状態に応じ、それぞれに最も適した様々な方法を用いて加工を施しており、「八代・大和田技法」の要素が認められる部分がある一方で、部分的には「K」本郷技法DOE17技法」の要素が認められる部分もあり、全体的には各技法の特徴がうかがえるといってもよいのではないだろうか。

これらを総括すると、形割品の作出までの工程について、以下のような流れが看取できる。



Ⅲ 各論

E. 工具について

今回の分析・検討作業において、石製の工具についてはそのうち何点かを第27図に掲載した。これらは、荒割・形割の際の台石であり、叩き石であり、砥石の類である。工具は、寺村光晴氏の『下総国の玉作遺跡』⁵⁵に何種類かが例示されており、土錘、石墨状品、砥石、コマ、鉄製品等があげられている。土錘・コマは穿孔時のはずみ車として使用し、石墨状品は線引きとして、砥石は研磨に用い、鉄製品は切削・剝離・分割・穿孔等に用いたとされている。⁵⁶今回の作業では、工具類に関しては作業目的と時間的な制約から、それほど注意を払えなかったため目が行き届かなかったことは事実である。八代遺跡で指摘された「矢」、「クギ」に関しては、1970年の調査時にその使用痕跡を持つ資料を選出しているが、その後の調査では検出されていない。これらの工具痕のある遺物や、工具そのものの検出がまたれる。今後の検討作業では、工具の検出、工具の差による加工痕の認識等による工具類の復元も必要となろう。

母岩や荒割品の分割の際に、よく用いられている両極打法の工具について、その資料を観察した島立によると、旧石器時代の石器製作の際に用いたと想定される工具では、分析資料の様には分割されないだろうとの感想を示されており、⁵⁷下に置いた台石と、上からの当て具にあたる鉄器類似のものによる結果ではないかと指摘された。これらの工具が「矢」、「クギ」になるのかどうかは資料の検討に待たねばならないが、工具としての鉄製品、さらに広く材質を求め、その他の有機物（例えば木器）を工具として想定してもよいだろう。

F. 原材料の原産地について

玉作工房で原材料として用いた、原石の原産地はどこに求めたらよいだろうか。玉作工房から出土した緑色凝灰岩は、肉眼観察によると大きく3種類に分けられることは、前述の通りである。これら3種類は、科学分析が出来なかったために、便宜的に分類したもので岩石・鉱物学的な裏付けのあるものではない。緑色凝灰岩に対して科学分析等を駆使し、原産地を求め、加工遺構である工房と、さらには消費地である遺跡とを結び付けることによって、当時の玉類の生産・流通についての関係が把握できるものと思われる。しかし、科学分析による同一岩石の同定には試行錯誤を経た分析法の開発、多数にわたる基礎資料の集積によって、導き出されるもので今回の紀要の作業では成し得なかった。また岩石・鉱物の専門家からの指摘によると、堆積岩であるが故に地層毎の差異が大きく1枚1枚の緑色凝灰岩層をチェック出来ないこと、堆積岩であるため科学組成からのアプローチもしにくいこと、風化や異質物の混入などにより本来の組成が損なわれている可能性が高いこと、単層内での均一性の不安があることなどから、科学的分析等による原産地の追求はむずかしく、産地同定の拠り所の乏しい岩石であるとの指摘がある。⁵⁸今後の研究課題として、資料の蓄積から始めて、統計的処理による原産地の数量化等が行えると流通の問題についてはかなりの光明を与えられると思われる。

高橋直樹氏による「V 特論」をもとに県内の玉作工房で使用された緑色凝灰岩の原産地を

想定できるだろうか。グリーンタフ地域といわれる緑色凝灰岩の産地は、茨城県北部大子一山方地域、栃木県東部烏山一茂木地域、同西部の塩原地域、同宇都宮一日光地域、群馬県北部赤谷川・四万川流域、同太田市付近の八王子丘陵、神奈川県西部丹沢山地、大磯地域があげられている。以上のように、千葉県内での緑色凝灰岩の産出はなく、県外からの流入によるものと見られる。原石は、重量があり運搬には不便なため、船を主体とした河川交通によって運び込まれていると見られ、河川の系統によってその原産地を想定することにする。前述の産地の中で、県内近くまで流れてきている河川は、那珂川水系、鬼怒川水系、利根川水系であり、それらの流域の原産地なら搬入は比較的容易といえよう。それらの中で、玉作が古くから行われていた群馬県北部の赤谷川・四万川流域、⁵⁹太田市付近の八王子丘陵の可能性が最も高そうである。また鬼怒川水系も、距離からすると近いので搬入には有利であろう。今回は、これ以上の原産地の追求はせず今後の分析等による資料の増加をまって原産地を求めることとしたい。

島立によれば市原市草刈六之台遺跡の玉作工房出土資料である緑色凝灰岩は、北総の外小代・八代遺跡の緑色凝灰岩とは、違うらしいということで、異質の緑色凝灰岩であるとすれば、原材料の供給に関して別のルートが考えられる可能性のある指摘ともいえる。この場合は、海路からの搬入ということも考えられるのかも知れない。

G. 今後の課題・展望

以上、玉作工房出土資料をその製作技法を中心として検討を行ってきたが、その結果、外小代遺跡の玉作の技法を復元することができた。そして関東地方の玉作は、技術基盤に共通する要素が認められ、遺跡間の技法の違いはそれほど大きくないのではないかと感じられてきたことである。関東地方の玉作技法の、詳細な検討による玉作技法の解明も重要な課題であろうが、さらに視野を広げて、関東地方の玉作技法と他地域の玉作技法との比較、玉作工房で出土した製品の種類、原材料の流通、成品の流通、玉作の開始から衰退までの時期・経過の究明等が、個々の工房とそれにつながる支配体制・権力、社会構造の解明へのアプローチの一部となるものと思われる。

註

1. 文献437
2. 文献396
3. 文献400
4. 文献296
5. 文献94・175
6. 文献94
7. 本書のⅡ-3. 千葉県内玉作遺跡の概要参照、なお本書の作製に協力のあった当センター職員島立 桂氏、白井久美子氏からもご教示を受けた。

Ⅲ 各 論

8. 文献94
9. 文献33
10. 文献94
11. 文献196
12. 文献94・131・152
13. 文献94・196
14. 文献196
15. 『(財)香取郡市文化財センター事業報告昭和63年度』『(財)香取郡市文化財センター事業報告平成2年度』
16. 文献414
17. 文献414
18. 文献414
19. 文献35・44
20. 文献94
21. 寺村光晴 「烏山遺跡の玉作—その様相と意義—」 [文献351]
22. 文献38
23. 文献75
24. 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作」 [文献267]
25. 同上 文献267
26. 文献94
27. 1962年・1963年に調査した県指定部分については「八代玉作遺跡」と呼び、この他の部分はこれと区別するため「八代遺跡」の名称で呼ぶこととする
28. 文献130
29. 文献196
30. 杉山晋作 「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」『国立歴史民族博物館研究報告 第1集』 国立歴史民族博物館 1982
31. 「Ⅱ-3. 千葉県内玉作遺跡概要」参照。
32. 文献196
33. 文献94
34. 参考文献
寺村光晴「石製品」 [文献33]
中口裕「片山津遺跡における攻玉技術上の2・3の問題」 [文献33]
文献350
文献373
35. 参考として石川県漆町金屋サンバワリ遺跡出土石釧未成品は内径60～64mm、刳貫円板は直径47mm～50mm [文献350]、神奈川県海老名市本郷遺跡の石釧未成品の復原内径は56mm [文献403]、市原市新皇塚古墳出土石釧内径57mm [文献106]である。
36. 4の019号址出土の刳貫円板は紡錘車形石製品(笠形石製品)として紹介された [文献224]。
刳貫円板を紡錘車形石製品として利用することもあり、この破損品である可能性は否定できないが、表面は剝離面で笠形石製品(紡錘車形石製品未成品で研磨工程のもの)のように研磨が行われていたかは不明で、側面に削り目が残ることから刳貫円板と理解しておくほうが妥当かと思われる。

37. 1962年・1963年に調査した部分の出土の時期については、調査された相山林継氏に御教示を受けた。
38. 参考として緑色凝灰岩製の石製腕飾類は、県内では木更津市手古塚古墳（石釧、車輪石）市原市新皇塚古墳（石釧）、市原市大厩浅間様古墳（石釧）等、東京湾沿岸の前期古墳から出土している。しかし、これらが、県内の玉作遺跡から直接供給されたかどうかについては検討を要する。
39. 文献94
40. 文献177
41. 文献267・403
42. 文献38
43. 文献224。県内の出土品として外小代遺跡019B号址のほか千葉市矢作貝塚003号址、市原市草刈遺跡C区123B号址、木更津市手古塚古墳出土品が上げられているが、この後、市原市草刈遺跡I区057号址、市原市下鈴野遺跡20号住居跡、四街道市入の台第2遺跡第88号住居址からも出土している（Ⅱ-2. 千葉県内玉類出土遺跡の集成参照）。
44. 大型管玉状石製品の県内の出土例としては市原市市原条里制遺跡実信地区がある（Ⅱ-2. 千葉県内玉類出土遺跡の集成参照）。このほか市原市新皇塚古墳3点（長さ60.5mm～74.4mm）、市原市大厩浅間様古墳2点（長さ5.4mm～7.0mm、実測図より計測）から出土しており〔文献33・106〕、緑色凝灰岩製の石製腕飾類同様に東京湾岸の前期古墳から出土している。
45. 文献75
46. 文献49
文献175
47. 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作」 〔文献267〕
48. 寺村光晴 「本郷遺跡の玉作—1986年の調査から—」 〔文献403〕
49. 寺村光晴 「烏山遺跡の玉作—その様相と意義—」 〔文献351〕
50. 本紀要の作業にあたって協力を受けた、当文化財センターの島立 桂が草刈六之台遺跡玉作関係遺物の整理作業の担当のため、整理中の遺物の一部について実測図を借用し、本紀要に掲載することに了解をいただき、所見に関しても教示いただいた。
51. 草刈六之台遺跡の出土土器等の整理を担当している当センターの白井久美子からのご教示による。しかし、あくまでも整理途中での予見として教示いただいたものであり、今後刊行される報告書の見解を正式なものとしていただきたい。
52. 文献152
53. 敲打施溝法は、石材の分割に用いられる技法で、寺村光晴氏によると「ノミをあて槌で敲打をくりかえし溝をつけ、所用の溝ができ上がるとさらに打撃を加えて分割するものである。……攻玉の工程からすれば、荒割・形割工程において認められている。……また、千葉県大竹遺跡の敲打施溝は、弥生時代の擦切施溝と同一の意義を有し、その系譜化にあるものかとも思われるが、出現の契機については未だ詳らかではない。いわゆる大竹技法である。」、とその独自性を説明されている。一方擦切施溝は、「擦切施溝とは、石材に擦切溝をつけ、施溝部に打撃を加えて打ち割るものである。この施溝は、多くの場合形割未成品に施溝痕が残っているが、荒割工程品中にも見出される。」、と説明されている。〔文献117〕
54. 出雲型内磨砥石とは、寺村光晴氏によると、古墳時代に鳥根県玉作諸遺跡に見られる紅簾片岩を主体とする偏平板状の砥石を指してそのように呼んでいる。氏は、形態上砥石を大きく平砥石、筋砥石、窪砥石、内磨砥石、特殊砥石に分け、内磨砥石は石材の内面研磨に使用するものとしている。

Ⅲ 各論

その中で、内磨砥石は、定置のもの、可動のものがあり、可動のものとして出雲型内磨砥石があげられている。大竹遺跡での出土例のほかには、茨城県土浦市烏山遺跡でも、同様な砥石が13点出土している。烏山遺跡の報告書の中で寺村光晴氏は、「……出雲型内磨砥石（山陰地方に分布）が紅簾片岩製で薄型であるのに対し、肉厚な点が注目される。類似の砥石は千葉県大竹遺跡第1号住から出土している以外、現在のところ報告例に接していない。私はかつて、この様な内磨砥石をすべて出雲型内磨砥石と称したのであるが、烏山・大竹遺跡例から、今後は別に呼称しなければならないと思っている。」と、今までの名称について変更を考えておられ、それは形態上で材質・厚さの違いという点から出雲のものとの関連には、やや距離を置きたいという観点からであろう。しかし、内磨砥石の出土についての重要度は変わらず勾玉製作の存在を示しているという見方は存続している。

寺村光晴 「第1章 研究の基礎的前提 三 攻玉技術の基礎」 [文献117]

寺村光晴 「Ⅳ 烏山遺跡の玉作—その様相と意義— 2 烏山遺跡の攻玉」 [文献262]

55. 註8参照

56. 寺村光晴 「第3章遺物各節 第1節玉類及び未成品 (3)八代玉作遺跡の玉類および未成品」 [文献59]

57. 註20の「矢」、「クギ」の使用を想定されているが、今回の作業では確認できる資料はなかった。また、玉作工程における両極打法については、阿部朝衛氏が旧石器から古墳時代の石材加工技術を取り上げ、その中で縄文時代の攻玉として新潟県寺地遺跡、弥生時代の玉作として新潟県下谷地遺跡、古墳時代の玉作として千葉県八代玉作遺跡を取り上げ、各遺跡の資料により両極打法による加工の検証をされており、さらに古墳時代の玉作遺跡である埼玉県正直遺跡の資料も例示している。このような石器研究者が、その加工技術の面から玉作技術を取り上げた着眼点は評価される。ただし阿部氏の場合には、上下共に石材による両極打法を想定しており、鳥立とはその点で異なる。

阿部朝衛 「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」 [文献157]

58. 本紀要「Ⅴ 特論 千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」に指摘している。

59. どちらも利根川水系に属し、利根川水系と一括して呼んでもよいだろう。また、滑石の原産地ではあるが、三波川流域にも多くの玉作等関連遺跡が所在している。

4. 石製模造品の製作

(1) 千葉県内の石製模造品製作遺跡について

千葉県とくに下総を中心とする地域は全国的にみても石製模造品製作遺跡や石製模造品を出土する遺跡が数多く存在し、石製模造品に関する研究が盛んに行われている。これらの研究は様々な方向からなされており、製作遺跡の検討や製作工程・製作技術の復元を基礎とした研究¹、祭祀遺跡との関係や集落出土品からの研究²、古墳出土品を中心とする研究等³がある。石製模造品にかかわる問題は古墳時代の葬送儀礼や祭祀、生産・流通、これらの背景となる政治的・社会的な問題等多岐にわたり、古墳時代の社会を解明する上で重要な問題を含んでいる。今回は様々な問題のなかから石製模造品研究の最も基礎となる県内の石製模造品製作遺跡の集成作業

と製作工程の検討を行い、研究の一助とすることを目的とした。

県内の石製模造品製作遺跡については、千葉県教育委員会が1983年から1985年に千葉県生産遺跡基礎資料作成調査を実施し、集成しているのが新しい資料である（『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』⁵）。しかし、その後も発掘調査の実施や報告書の刊行等で資料は大幅に増加した。今回は石製模造品製作遺跡のみでなく、流通の状況を把握するために出土遺跡の集成もあわせて行った。

製作技法による検討は寺村氏により積極的に行われ、この成果は『下総国の玉作遺跡』⁶や『古代玉作形成史の研究』⁷で集大成された。この後も石製模造品製作遺跡の調査が行われ、いくつか製作工程模式図が呈示されている。これらの成果をふまえ、当センターが整理にかかわった成田市石塚遺跡（公津原Loc. 20）と調査・整理を行った八千代市北海道遺跡を具体的な例として取り上げることとした。成田市石塚遺跡⁸は印旛沼東岸に所在し、周辺に八代遺跡・外小代遺跡といった古墳時代前期の玉作工房があり、これらとの関連が考えられる遺跡である。また新川流域の八千代市北海道遺跡⁹は、古墳時代中期になって石製模造品工房が出現した地域にある。どちらにも数軒の工房があり、専門的に石製模造品製作が行われ、良好な資料を豊富に出土している。まず、「Ⅱ-2. 千葉県内玉類出土遺跡の集成」で得られた結果についてまとめ、次に製作工程の検討を行っていく。

A. 千葉県内の石製模造品製作遺跡について

今回の集成の結果、千葉県内の石製模造品製作遺跡は70遺跡を確認し、このうち発掘調査されて内容が明らかな石製模造品工房は113軒である。関係遺物の表採により存在の可能性が推定できるものや発掘調査を実施していても未報告のもの等を追加すると軒数は今後これを大きく上回るものと思われる（第12表¹⁰）。市町村別の検出状況をみると、石製模造品工房を検出した市町村は27市町村で、このうち10軒以上検出したのは成田市、八千代市、下総町、佐倉市、千葉市である。この数は発掘調査件数や調査規模の影響を受けるので、これに5軒以上検出した船橋市、佐原市を加えるとかなり限定した地域に検出されていることがわかる。県内の石製模造品製作遺跡の分布の状況について、『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』では8つの中心となる地域を設定している。遺跡数は増加しているもののこれと大きな変化はなく、これを補強する結果となった（第12図¹¹）。このなかでも利根川南岸から印旛沼東岸にかけての地域と花見川と都川流域は、現在のところ規模・内容とも他地域に比べ突出している。

石製模造品工房は工作用ピットを伴うものもあるが、構造や規模から一般の竪穴住居と区別することが困難な例が多い（第31図）。したがって今回の集成にあたっては、未成品のほか製作に伴い出土すると考えられる剥片や碎片等を出土している遺跡については、工房の可能性のある遺跡として扱った。しかし、石製模造品工房を数軒まとめて検出し、未成品や剥片・碎片等の出土量が突出している遺跡と出土量がわずかである遺跡が存在する。前者のように専業

Ⅲ 各 論

第12表 石製模造品製作遺跡

遺 跡 名	遺 構 番 号	白玉 未成品	白玉 成品	勾玉 (模)	勾玉形 未成品	剣形 品	剣形品 未成品	有孔 円板	有孔円板 未成品	板状 品	その他 成品	その他 未成品	剥片・ 碎片	原石 母石	工 具 類	備 考
尾崎梨ノ木遺跡	1						1					1	1			中
	2											2	複数			中
	3												複数			中
城山遺跡	表採		○						2						石製模造品・有孔砥石	
殿平賀向山遺跡	7				1			1								中
天神台遺跡	表採	○		○		○		○								
大竹遺跡	表採			○	○							○				
酒直遺跡第3地点	043		○										○			中
前原Ⅰ遺跡	3		○			1		1		○			○	○		中
	4		○										○	○		中
龍角寺ニュータウン集会所	21	○											○			中
磯部遺跡	表採															
水掛遺跡	表採					1	1									
杉ノ木台遺跡	H-1	1						1					若干			中
夏見台遺跡	4	54	42							○			○	○	有孔軽石	後
	2次 7	28	316										9044	18	砥石	後
	3次-Ⅱ 2	○	○			○							○	○		後
	5		○					○	○				○	○		後
	6		○					○	○				○	○		後
八栄北遺跡	3		○										○	砥石・明き石・模造石	後	
白井先遺跡	D203A-B	11			1	3		3				1	1	6		中
	D207							2						2	1	中
	D208	29						1						13		中
	D310	3						1			1			3		後
外原遺跡	3	多数	多数	○				3		7	1	1		○	軽石	中
中西山遺跡	Ⅱ	2				○		○							砥石	中
神々廻宮前遺跡B	013A					○		2					○	○		中
	013B							2					3			中
復山谷遺跡	120	140		2				14					300	○	砥石・軽石他	中
権現後遺跡	D035	12	27			1							2136	1		中
	D131	33	275	1		1		1	1				11225	4		中
	D132	28	98	1		1							5905	1		中
	D133	46	446	1				1				1	14881	4		中
北海道遺跡	D010	6	291							1			703	5		中
	D011	4	111					2		3		6	1338	4		中
	D012	48	1862	3		1		4	2			2	48472	12		中
	D013	6	143										2498	2	叩き石	中
	D014	39	927	6		2		10				53	11622	6		中
	D016	64	532	2	1			3	3			7	7615	6		中
	D022	22	431			3		3		9		9	8600	5		中
	D058	5	40	1									423	1		中
	D059	55	294	1		1		13	12	4		1	4139	8		中
	D080	18	328										4718			中
	D039	3	2										35	3		中
	D021	2						1					29	1		中
D037	12	331				1		1				2	3723	1		後
川崎山遺跡	5	3	49	2			○	○	○				499			中
	6								○	○			49			中
小板橋遺跡																

4. 石製模造品の製作

遺跡名	遺構番号	白玉	白玉未成品	勾玉(模)	勾玉形未成品	剣形品	剣形品未成品	有孔円板	有孔円板未成品	板状品	その他成品	その他未成品	剥片・砕片	原石母石	工具類	備考
古山遺跡	002	○		○									○	○		
一ノ台遺跡	20 32		78 5	1			9					1	300 2	1	砥石	
白井小笹台遺跡	4 SI-008 SI-009	1				○		○					○ 6 1		砥石 釘 砥石・土玉・模状品	中 中 中
岩富漆谷津遺跡	033 043 073 085 089 091 093 095 100 134 145	6 2 4 2 2 161 9 38 6	83	1 1 1 1 1		1 1 1 4 2 3 1		3 2 5 11 2 5 1				1 1 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	砥石	後 中 中 後 後 後 中 中 中 後 中
畦田川崎遺跡	表採				1	1	1	1								中
西向井遺跡	2 4		8	1		1		1	1					6 ○	軽石	中
滝台遺跡		○											○			
堀之内遺跡	1 17 21	1												1 2	土玉	後 後 後
玉造上の台遺跡		○	○								1					後
古屋敷遺跡																後
岩ヶ崎遺跡		○						○					○			後
木挽崎遺跡	1												○			中
若庄司遺跡	表採		10				2		1							玉作
治部台遺跡	1 表採		2 400 2330	1	52		38	4 11		5			8 5 40000		砥石・コマ・石製模造品	中・玉作 玉作
大和田坂ノ上遺跡	No1	17	112			2	2	3	6				266	○	60	中
稲荷峰遺跡	1 4 表採		3 1 22 5 16					1 5 4		3			84 96 ○		砥石・コマ・他 砥石・土錘	前・玉作 中・玉作
房台遺跡	表採															玉作
仲道遺跡	表採	○				○	○	○			○		○			玉作
小山遺跡	表採	○				○		○					○			
高岡遺跡		3				4	8	4								中
天神台遺跡	2	○											○			後
東明神山遺跡	1	38		8		12			16		2	1	○	○		中
八幡神社遺跡	表採	20	10		3		3		10		1	15	6000			
大日台遺跡	表採	○	○					○			1		○			玉作
小野女台遺跡	SI-15 SI-33											○ ○				後 後
篇作・栗山古墳群																
増田長峰遺跡	No2	1							1		1			2		後
前山遺跡	B-1a B-1b							5 1						0		
馬洗城址	10	3	35			3	3	3	3					6		中

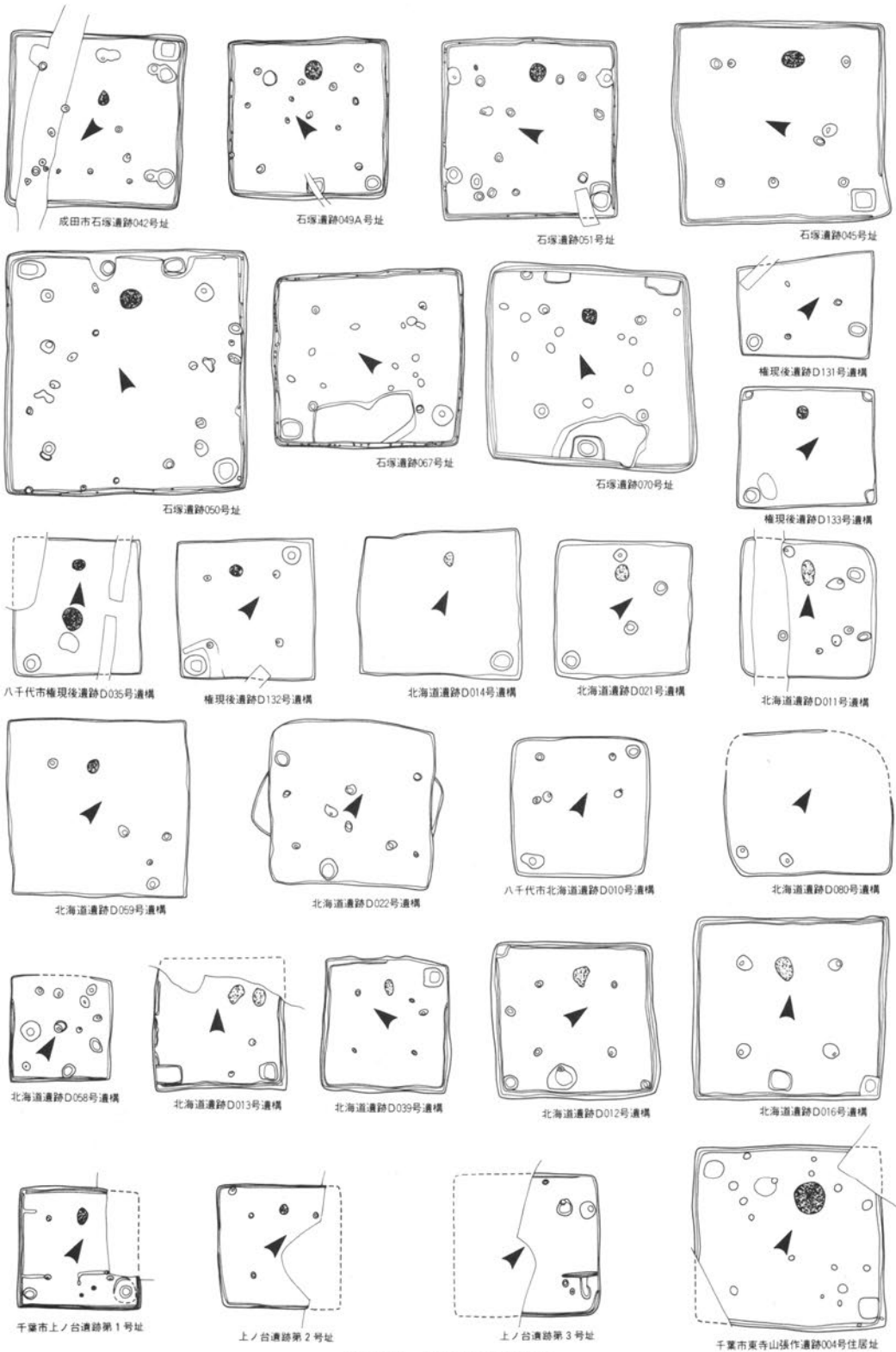
Ⅲ 各論

遺跡名	遺構番号	白玉	白玉未成品	勾玉(模)	勾玉形未成品	剣形品	剣形品未成品	有孔円板	有孔円板未成品	板状品	その他成品	その他未成品	剥片・破片	原石母石	工具類	備考
奈戸五区	表採															
上ノ台遺跡	1	13	153		6	3		16	24	1			15	3	砥石・軽石	中
	2		114		8	3		2	5	1	2		50	18	軽石	中
	3		68		1	2			5			1	18	6		中
	2J-62	14	1													後
馬加城遺跡	8					1	4	2					2	1		後
東寺山戸張作遺跡	3	19	6					1							土手	後
	4	22	273	5	14	7	3	10	4						鋸・鎌・土玉	後
	5	6			1										凹石・土玉	後
	8				1										土玉	
大森第1遺跡	25	72				2	5			2			2	土玉	中	
西花遺跡	35(B)	45	3	1				1			3				土玉・刀子・鎌	中
箕輪遺跡	001												2	1		中
	005												○		軽石・刀子・釘	中
	008												4	1	砥石・軽石	中
上吹入遺跡	1	○	○			○		○			○		○		鉄製品	中
	2		○			○							○			中
	4	○	○			○		○					○			中
	5		○										○			中
宮門遺跡	4					21	5						○	○		中
殿部田遺跡	7							○					○			
下吹入東台遺跡	1	3									1	1				中
	3	41	3	1	1			10			○	○	○			中
林遺跡	104	○	○					○								中
	105	○	○													中
	106					○		○								中
道庭遺跡													○			
宮の台遺跡	表採	6				24	12				1		14			中
野田遺跡	表採	2	10										3			中
文臨遺跡	192	○	○										○		炭石・工作台・土簾	中
マミヤク遺跡	66		○										○		軽石・砥石	中
新御堂荘台遺跡																

石塚遺跡は第14・15表参照

的に製作を行っている遺跡と後者では遺跡の性格が異なるため区別すべきである¹²が、報告書のみでは出土点数が明確につかめない場合があること（特に剥片類）、両者の基準をどこにするか等の問題があるため、今回はとりあえず工房として扱った遺跡もある。このほか長野県神坂¹³に代表されるように祭祀遺跡からも未成品や剥片類を出土する場合がある。県内では佐原市網原遺跡¹⁴、干潟町清和乙遺跡¹⁵、白浜町小滝涼源寺遺跡¹⁶で未成品や剥片を出土しているが、祭祀遺構であることが明らかなものについては工房からは除外した。木更津市マミヤク遺跡¹⁷のように、祭祀遺構と石製模造品製作工房が両方検出されている場合もある。

石材は「滑石製模造品」とも呼ばれるように一般に滑石と呼ばれる石を材料に製作される。すでに指摘されているように岩石学的には滑石片岩や緑泥石等と呼ばれるものも含んでいる。これは蛇紋岩の一部が変質したものであり、色調や性質も黒っぽいものから白っぽいもの、緑



第31図 石製模造品工房

Ⅲ 各論

色に近いもの、透明度のあるもの、片岩質のもの等様々である（V 特論参照）。しかし、石の性質が軟質で加工が容易なものを選んでいることは共通する。したがって本書ではこれらを総称して「滑石」の名称で呼んだ。滑石以外の石材では芝山町下吹入東台遺跡¹⁸で、コハク製品を製作していた可能性がある。中期の工房でコハク原産地に近いこともあり注目される。県内では古墳時代後期の古墳を中心にコハク製の棗玉をはじめとする玉類（コハク玉ともいわれる）が出土しているがこの時期の製作遺跡は確認されていない。他県に比べてコハク製品の古墳からの出土が突出していると言う見解¹⁹もあり、今後の周辺の調査例を注目していきたい。このほかには、メノウ・石英などの剥片類をわずかに出土した工房もあるが未成品を出土した例は確認できなかった。

県内で出土した滑石製品の種類には管玉²⁰・白玉・勾玉・棗玉等の玉類、有孔円板・剣形品・鏡²¹・鎌・斧²²・刀子²³・チキリ・箴²³・タガネ・人形等の模造品類のほか立花・立花状製品・子持勾玉・紡錘車²⁴・垂飾品²⁴・石枕等がある。このうち白玉・勾玉・有孔円板・剣形品を除くと極端に数が減少し、古墳から出土することの多い農具類の模造品や石枕のように製作遺跡でも未成品をほとんど出土していない種類もある。しかし、製作した製品は搬出されるべき性質のものであり、成品や未成品が出土しないからといって製作の可能性は否定されないであろう。

県内で石製模造品製作を行っていた時期は古墳時代前期から後期である。時期が明確な遺構では古墳時代前期17軒、中期81軒、後期26軒で奈良・平安時代のものはない。中期の工房が圧倒的に多く、後期の工房も古い時期に属するものが多い。滑石製品製作の盛期は古墳時代中期から後期前半で、後期後半には衰退していったといえる。古墳時代前期に位置づけられるのは成田市外小代遺跡²⁵・八代遺跡、下総町治部台遺跡²⁵・稲荷峰遺跡²⁶のように緑色凝灰岩の管玉の製作も行っている玉作工房でもあり、ここでは緑色凝灰岩の管玉製作を主体とし、同時に滑石の管玉や白玉・平玉・有孔円板等の滑石製品も製作している。その後、古墳時代中期になると成田市石塚遺跡や八千代市権現後遺跡のように工房を数軒まとまって検出し、大量に生産を行う専門的な製作集団の出現が確認できる。成田市や下総町周辺のように古墳時代前期の玉作遺跡からの継続性がうかがわれる地域と船橋市から八千代市周辺に代表されるよう中期になって石製模造品類製作遺跡が出現する地域がある。しかし、現在のところ石製模造品類製作遺跡の出現した契機が明らかでないため、遺跡の分布の上からは玉作遺跡との関連が考えられるものの、その詳細については不明である。

生産遺跡以外で玉類を出土した遺跡は242遺跡を数える。祭祀遺構のほか竪穴住居から出土している。遺跡の分布は石製模造品製作遺跡の分布より散漫な状況を呈しており、製作遺跡の稀薄な東葛地域や東京湾南岸地域にかけても検出している。たとえば玉類を出土した竪穴住居は工房が検出されていない柏市で13軒、我孫子市で27軒、工房が1遺構の東金市で18軒、市原市で71軒、木更津市で37軒等が顕著な例である。出土する竪穴住居の時期は、古墳時代前期47

軒、中期131軒、後期365軒、奈良・平安時代39軒である。古墳時代中期から後期が中心で、この後奈良・平安時代になると出土例は減少する²⁸。県内の石製模造品類を出土した遺跡で現在最も古く位置づけられるのは白浜町小滝涼源寺遺跡である。房総半島の南端の太平洋を臨む海岸段丘上に位置する古墳時代前期から中期の祭祀遺跡である。報告によれば4世紀中葉を中心とした時期に白玉や勾玉、有孔円板、剣形品などの石製模造品を使用した祭祀が行われていたということである。畿内政権の影響を強く受けた祭祀遺跡でありきわめて特殊な例である。また佐原市網原遺跡では中期初頭の古墳の旧表土上面で有孔円板や剣形品を使用した祭祀が行われている。墓地選定にあたり行われた地鎮的な行為と考えられており、時期が明確な古墳の墳丘下の旧表土上というきわめて良好な出土例である。また古墳時代前期の堅穴住居からは滑石製の管玉や勾玉を出土する例はいくつか認められるが、有孔円板や剣形品といった石製模造品が確実に遺構に伴う例は現在のところ確認されておらず、集落での石製模造品の使用が一般的になったのは古墳時代中期になってからである。滑石製品を出土する遺構にはこのほかに古墳等の墳墓類がある。石製模造品類をはじめとする滑石製品を出土した古墳の主要なものを参考として別表にまとめた(第13表)。滑石製品の古墳への副葬は古墳時代前期後半から後期前半に行われ³¹、県内では佐原市山之辺手ひろがり3号墳が古い段階のものである。滑石製品出土古墳の分布状況をみると佐原市から成田市にかけての利根川南岸地域と千葉市・木更津市を中心とする東京湾岸地域に分布の中心がある³³。特に佐原市や下総町周辺は製作遺跡との密接な関係がうかがわれ、佐原市堀之内遺跡³⁴や下総町栗山・猫作古墳群³⁵、多古町多古台遺跡群のように石製模造品類出土古墳と製作遺跡とが近接している例がある³⁶。一方、船橋市から八千代市周辺のように石製模造品製作遺跡分布の密度に比べ、石製模造品類を出土する古墳が少ない地域もある。

このように、遺跡の分布の上からは石製模造品製作遺跡と供給先には密接な関係が見られ、そこに地域性がうかがわれるが、さらに多角的な視点からの検討が必要である。

B. 石製模造品製作工程について

前項でのべたように石製模造品の製作工程や製作技術は寺村光晴氏の研究により復元された成果がある。県内の石製模造品製作遺跡の研究のほとんどは氏が体系的にまとめられており、今回の成田市石塚遺跡、八千代市北海道遺跡の検討でもこれと大きな相違は認められなかった。2遺跡を説明するにあたりこれを簡単にまとめておく。

工程はまず原材採取と製作の二つに分けられる。

原材の採集または供給がどのように行われたかは現在のところ全く不明である。これを考える上では、まず滑石の原産地が問題となる。関東地方のなかで原産地の候補地としての可能性のあるところとしては関東山地北部地域、群馬県北部地域、茨城県北部日立地域、房総-三浦半島地域があげられている(V 特論参照)。関東山地北部地域は地質学的に「三波川帯」といわれる地域で、群馬県ではこの地域に水源をもつ鮎川、鎭川流域を中心に玉作遺跡・石製模

Ⅲ 各 論

第13表 県内石製模造品類出土の主要古墳

番号	古墳名	所在地	墳形	滑石製品	伴出遺物	文献
1	金塚古墳	我孫子市根戸荒追	円	石枕1・立花1	鏡・短甲・鉄鏃・銚・埴輪・須恵器	58
2	河原塚1号墳	松戸市紙敷西屋桶台	円	刀子3・紡錘車	直刀・鉄鏃・剣・鹿角製刀装具・ガラス小玉他	28
3	鶴塚古墳	印旛郡印西町小林宿	円	白玉30	直刀・銚・刀子・鉄鏃・砥石・ガラス玉	89
				白玉140	直刀・鉄鏃・砥石片	
				白玉11		
4	瓢塚32号墳	成田市赤坂	円	滑石片・石枕1・立花1	鎌・刀子・鉄鏃・土師器	130
				滑石片	剣	
5	瓢塚47号墳	成田市橋賀台	方	白玉186	剣・刀子	
6	天王・船塚32号墳	成田市橋賀台	方	白玉21	刀子	
7	天王・船塚33号墳	成田市橋賀台	方	白玉21		
8	天王・船塚36号墳	成田市赤坂	円	剣・有孔円板・白玉	斧・刀子・土師器・須恵器	
9	浅間台001号跡	成田市野毛平浅間台	円	剣・有孔円板・紡錘車	管玉	27
10	神野芝山4号墳	八千代市神野芝山	円	石枕1	伝鏡・刀子・埴輪	
11	光勝寺境内古墳	佐倉市白井小笹台	前方後円	石枕1		
12	大鷲神社古墳	酒々井町上岩橋大鷲	不明	石枕1		324
13	堀之内1号墳	佐原市堀内字平台	円	石枕1・立花3	直刀・刀子・鉄鏃	212
14	堀之内3号墳	佐原市堀内字平台	円	白玉1・立花2	直刀・管玉・コハク玉・埴輪	
15	鶴崎天神台古墳	佐原市鶴崎字天神台	円	刀子3・斧2	剣	363
				刀子2・鎌1・斧3・白玉180	直刀	
16	禪昌寺山古墳	佐原市大戸川中宿	前方後円	石枕1	鏡・直刀・鉄鏃・銚・衝角付冑・桂甲・馬具類	325
17	大戸宮作1号墳	佐原市大戸宮作	長方形	刀子8・白玉1145・石枕1・立花8	剣・刀子・玉類	363
				紡錘車形石製品1		
18	山の迎手ひろがり3号墳	佐原市山之迎へたの前		勾玉1・白玉1473・石枕1・立花状石製品3	管玉・切子玉	363
19	片野古墳群	佐原市上小川	不明	石枕1		363
20	仁井宿十三塚	佐原市仁井宿	不明	石枕1		363
21	木挽崎1号墳	下総町名木		白玉60	直刀・小刀・鉄鏃	414
22	峯之内古墳	下総町高倉		有孔円板10・剣2・白玉2・勾玉2・石枕1	直刀・鉄鏃・斧・砥石	414
23	栗山・備作古墳群第16号墳	下総町滑河	円	刀子・鎌・斧・白玉・石枕3・立花		
24	熊照寺裏古墳	神崎町小松	不明	刀子・鎌・鏡・剣・石枕1	剣	279
25	向台古墳	神崎町並田向台	円	石枕1	直刀	279
26	船塚原古墳	神崎町新	前方後円	白玉3・紡錘車1	土師器・須恵器・埴輪	160
27	一之分目古墳	小見川町一之分目	円?	刀子・斧		
28	城山5号墳	小見川町城山	前方後円	有孔円板2・勾玉1・白玉1	銅鏢・土師器・埴輪	160
29	石神1号古墳	千葉市東寺山	円?	刀子1・立花1		95
30	石神2号古墳	千葉市東寺山	円	刀子20・鎌4・勾玉1・白玉1854・石枕2・立花18	剣・鉄製模造品(斧・鬘先)	140

4. 石製模造品の製作

県内石製模造品類出土の主要古墳

番号	古墳名	所在地	墳形	滑石製品	伴出遺物	文献
31	戸張作13号墳	千葉市東寺山	前方後円	白玉1	刀子・管玉・小玉	147
32	七廻塚古墳	千葉市生実町	円	立花5	直刀・銚・鎌・斧	95
				立花5	剣・銚・鎌	
				刀子・斧・剣・石鋼1		
33	上赤塚1号墳	千葉市南生実町	円	鎌2・斧4・勾玉3・石枕1・立花6	直刀・鋤先・鎌・斧・銅鋼・玉類	215
				刀子2・鎌4		
34	椎名崎3号墳	千葉市椎名崎町道作	円	白玉15	直刀・刀子・鉄鏃・耳環他	169
35	椎名崎7号墳	千葉市椎名崎町道作	円	白玉10	直刀・刀子・鉄鏃・玉類他	
36	ムコアラク4号墳	千葉市大金沢町六通台	円	白玉23	直刀・耳環・玉類	170
				白玉4		
37	多古台古墳	多古町多古台	円	鏡2・鎌6・刀子9・斧5・有孔円板15・ 剣2・白玉1153	剣・直刀・刀子・鉄鏃・斧	137
				剣3	針・釣針・土錘・須恵器	
38	石橋台古墳	多古町次浦	前方後円	有孔円板		
39	塚原1号墳	八日市場市入山崎塚原	前方後円	勾玉1	直刀・鉄鏃・斧・刀子	29
40	小川台1号墳	光町小川台	円	有孔円板10・白玉32	剣・銚・鎌・刀子	119
				白玉151	剣・斧・鉄鏃	
41	姉崎二子塚古墳	市原市姉崎二夕子	前方後円	刀子5・有孔円板2・勾玉1・白玉3・ 管玉4・石枕1・立花4	直刀・玉類・鏡・垂耳飾・銚・革綴短甲 衝角付冑・柱甲	10
42	大厩3号墳	市原市大厩	方	有孔円板1		107
43	持塚4号墳	市原市	方	白玉15	剣・刀子・斧・玉類	139
44	持塚200号墳	市原市		勾玉2・白玉218		149
45	草刈1号墳	市原市草刈	円	勾玉9・囊玉4・小玉195	小剣・鎌・斧・刀子・鉄・銅鋼・玉類	
				小玉191	剣・矛・鉄鏃・鎌・斧・刀子・麻手刀子・鋸 鑿状工具・きさげ状工具	
				勾玉15・小玉165	剣	
				勾玉3・小玉45	鋤先・玉類	
46	草刈3号墳	市原市草刈六之台	円	有孔円板6・勾玉12・白玉29・管玉12・有文石鋼1	管玉	
47	浅間山1号墳	睦沢村下之郷	円	有孔円板1	鏡・直刀・鉄鏃・三輪玉・胡・具他	122
48	馬門古墳	君津市南子安馬場	円	勾玉1・白玉77	直刀・剣・鉄鏃・斧・刀子他	109
49	東山2号墳	君津市		白玉41	玉類	
50	向原古墳	富津市二間塚	円	白玉1	刀・刀子・鉄鏃・耳環他	160
51	道上谷第2号墳	木更津市請西	円	有孔円板1	直刀・鉄鏃・土器類	150
52	大山台5号墳	木更津市請西	円	白玉2		150
53	長塚古墳	木更津市高柳	不明	刀子3・鎌1・鏡1・斧1		173
54	祝崎2号墳	木更津市菅生祝崎	円	有孔円板3・勾玉1・白玉240	剣	263
55	清見台A-4号墳	木更津市清見台南	円	白玉14	直刀・剣・円筒埴輪	55
56	清見台B-2号墳	木更津市清見台南	円	白玉2	菅玉・鐵片	

Ⅲ 各論

造品製作遺跡の分布が確認され、「三波川帯」と工房との関係が指摘されている³⁷。県内の製作遺跡から出土する滑石には頭大の原石があること、また以上のような原産地を考えると、遺跡周辺の河川等の転石を利用したとは考え難く、採掘したものまたは原産地付近での転石採集品を持ち込んだ可能性が高い。科学的分析や採集サンプルによる比較検討が十分な段階ではないのであくまで推論にすぎないが、鮎川、鎗川は利根川と合流しており、千葉県内でも利根川南岸や印旛沼水系に生産遺跡が集中していること等から、河川利用の運搬が考えられるこの関東山地北部地域が候補の一つとしてあげられる。

製作は、基本的には管玉製作と同じ様に荒割工程、形割工程、側面調整、研磨工程、仕上げ工程の順に行われていく。まず荒割工程では原石を分割して適当な大きさの母岩にする。この母岩を分割しやすい偏平な直方体になるようように調整を加える（母岩の調整）。これを分割してできたものが荒割品である。荒割品は目的とする製品にあわせて適当な大きさにする必要があるため、この工程は何段階かにわたる場合がある。また作出できた荒割品の大きさにより遺物の種類を選択する場合もあろう。石製模造品の主要な石材である滑石は、石の性質上パルプやリングが観察しにくく、荒割がどの様に行われるのか剝離面や分割面の観察を行っても不明瞭な場合が多い。母岩や荒割品のなかにはノミ状の工具痕が観察できるものもあり、なんらかの分割工具を利用している場合もあると考えられる。また栄町前原Ⅰ遺跡では打撃や押圧剝離による分割ではなく釘状の工具により剥ぎ取る方法が観察されている³⁸。この荒割工程によって得られた剝片を目的とする製品にあわせて形と大きさに成形・調整する（形割工程）。これによって得られるのが形割品である。この後、形割品をさらに調整する（側面調整）が形割工程や側面調整の段階で工具による切削が行われる場合がある。石の性質上、細かい調整には打撃等による剝離調整によるよりも切削工具による調整の方が作業が能率的に行われるようである。整形のための削りと調整を目的とした細かい削りが考えられ、製作段階や製品の種類、部位により何種類かの工具が考えられる³⁹。この後、研磨し、最後に穿孔、仕上げをして完成する。以上が石製模造品にみられる製作工程の主要な流れである。これにそって2遺跡の製作工程を遺物の種類ごとに検討していくこととする。

（2）成田市石塚遺跡について

A. 遺跡の概要（第32図）

北東を小橋川、南西を江川に囲まれた印旛沼東岸の標高33mの台地の一角にある。印旛沼の東岸からは1.5kmほど西に入り、小橋川に開析された小支谷に東西をはさまれた南北に細長い台地の基部に位置する。遺跡の北西には八代玉作遺跡や外小代遺跡があり、さらに北には玉作遺跡である大竹遺跡や龍角寺遺跡、石製模造品製作遺跡である前原Ⅰ遺跡、龍角寺ニュータウン遺跡群No. 4地点があり、北東の長沼周辺にはやはり石製模造品製作遺跡である成田市磯部遺跡、成田市水掛遺跡が位置している。

石塚遺跡（公津原Loc. 20）は成田ニュータウン関連で1970年から1971年にかけて調査された。検出した遺構のうち9軒の竪穴住居から滑石を原材とした石製模造品類の成品・未成品やこれらの製作に伴うと考えられる剥片類を多量に出土し石製模造品工房であると判断された。このほか竪穴住居（縄文時代や弥生時代など6軒、古墳時代後期4軒、奈良・平安時代54軒）、古墳（成田市天王船塚原41・44・45・50号墳）などを検出した。東側中央部にさらに小谷が入り込んでいるが、古墳時代の竪穴住居はこの谷を挟んだ両側に占地し、奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物はこの谷より奥の西側にまとまっている。古墳のうち天王船塚原44・50号墳は横穴式石室を持つ方墳で古墳時代終末期に属する。

B. 石製模造品工房と遺物の概要（第33・34図、巻首図版、図版10）

石製模造品工房と判断されたのは041A・042・045・049・050・051・067・070・071号址の9軒で、067・070号址の2軒は谷の南側、残りの7軒は北側に並んでいる。いずれも出土した土器類が少なく時期の判断が難しいものもあるが、古墳時代中期に属すると考えられる。

検討の方法は「Ⅰ 序章 2. 研究の目的と方法」と「Ⅲ 各論 3. 古墳時代の玉作（2）八代遺跡について」で述べたように石塚遺跡についても関係遺物はすべて表に示したよ



第32図 石塚遺跡の石製模造品工房配置図

Ⅲ 各論

うに分類し、あらためて種類ごとの数と重量の計測を行った。ただし、剥片類はほとんどが3cm以下の小破片であるため、緑色凝灰岩のように大きさによる分類は行っていない。また研磨痕跡のある板状品のなかには、これを成品に加工する過程でできたと考えられる2mm～3mmの小破片が多数見られることからこれを研磨品の剥片・碎片として別に数えた(第14・15表)。このほか遺物の出土状況を把握するために、報告書に記載された遺物の出土状況図をもとに、これに任意の50cm四方の方眼をかけて、成品・未成品、剥片、原石の3種類の遺物がそれぞれこの中に何点出土しているかを数え、スクリントーンの種類で分類して表してみた(第33・34図)。これは報告書をもとに作成したものであるため、今回数えた遺物の点数とは必ずしも一致しないが大体の傾向はつかむ事ができると考えられる。

これらの作業の成果をもとに石塚遺跡で検出した9軒の石製模造品工場の概要をまとめていきたいと思う。

041A号址

方形で(3.95m×4.30m)、壁溝が巡る。柱穴4本を検出したが北側に偏っている。北側の一部は平安時代の堅穴住居(041B号址)に破壊される。炉は検出しなかった。出土遺物は9軒中最も少ない。剥片類が中心で剣形品や白玉未成品を数点含んでいた。東隅付近に剥片の集中が見られる。土器類は破片が多く壺1点が図示できたのみである。

042号址

041A号址の北側に隣接する。一部を東西にはしる溝によって攪乱される。方形(6.85m×6.90m)で壁溝は全周し、中央よりやや南東に炉がある。柱穴は4隅にあり、南隅に方形のピット(深さ60cm)を検出したほか、性格不明な小ピットが多数ある。方形ピット周辺には滑石剥片や白玉未成品が多数出土し、埋土中位からも白玉未成品を出土した。未成品は穿孔した白玉未成品が中心でこの他に有孔円板の未成品を出土した。しかし、どちらも穿孔に失敗して破損したものが多。このほかにメノウ片1点を出土している。土器は数が少なく遺存状態は悪い。鉄鎌1点を出土しているが本遺構に伴うか不明である。

045号址

042号址の北に位置する。方形(8.20m×7.95m)で、支柱穴は4本検出した。壁溝は南隅を除き巡っている。炉は中央より東側、2本の柱穴を結んだ中央に位置する。また方形のピット(深さ40cm)が南隅にある。炭化物、焼土ブロックを多数出土し、焼失住居と思われる。方形のピットからは高杯2点と滑石の剥片を少量出土した。成品・未成品、剥片類は南壁から西壁にかけて多く出土している。穿孔前の白玉の形割未成品が主体である。この他に有孔円板の成品が目立つ。出土した全体の点数に対する成品・未成品の点数が44.8%で他の住居に比べ高い割合である。滑石製品の他には鉄鎌2点を出土した。土器の出土量は多いが小破片が主体であった。

4. 石製模造品の製作

第14表 石塚遺跡石製模造品工房出土の滑石製品

遺構名	041		042		045		049A		050		051		067		070		079		合計	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
管玉	0	0	0	0	0	0	2	1.04	0	0	0	0	0	0	3	1.80	1	0.89	6	3.73
白玉	0	0	17	1.09	19	1.05	16	1.26	46	3.24	6	0.41	66	4.78	44	3.38	0	0	214	15.21
白玉未成品(穿孔)	4	0.65	109	16.32	0	0	7	0.81	324	50.20	4	0.44	172	17.25	617	69.90	0	0	1237	155.57
白玉未成品(未穿孔)	4	1.06	55	13.29	187	49.31	30	6.53	411	72.21	17	3.72	112	15.96	275	43.15	0	0	1091	205.23
有孔円板	0	0	6	8.90	7	19.18	1	3.78	5	9.94	0	0	2	4.36	7	10.08	0	0	28	56.24
有孔円板未成品(研磨)	0	0	0	0	3	13.62	2	7.13	5	4.97	3	19.54	1	1.20	16	48.22	0	0	30	94.68
有孔円板未成品(未研磨)	0	0	2	9.03	0	0	0	0	2	11.61	0	0	0	0	0	0	0	0	4	20.64
剣形品	1	1.14	0	0	3	4.40	2	1.99	1	3.34	3	6.07	0	0	0	0	0	0	10	16.94
剣形品未成品(研磨)	0	0	0	0	1	2.65	1	1.02	16	36.45	0	0	0	0	12	35.73	0	0	30	75.85
剣形品未成品(未研磨)	0	0	0	0	1	6.71	2	18.44	2	37.30	3	17.73	1	4.91	2	29.33	0	0	12	114.42
勾玉	0	0	1	5.90	2	3.92	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	9.82
勾玉未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	3	5.56	0	0	0	0	8	9.45	0	0	11	15.01
小型円板	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2.04	0	0	2	1.63	0	0	0	0	6	3.67
小型円板未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3.50	0	0	3	1.13	0	0	0	7	4.63
紡錘車未成品	0	0	0	0	0	0	1	129.92	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	129.92
不明成品	0	0	0	0	1	7.35	0	0	1	0.33	0	0	0	0	2	0.56	0	0	4	8.24
板状品(研磨)	4	11.27	13	15.12	4	10.35	6	8.17	87	123.21	14	33.28	74	58.57	49	75.06	0	0	251	335.03
板状品(未研磨)	4	6.13	36	63.74	5	19.44	4	3.84	23	110.21	3	9.75	1	0.88	52	193.49	0	0	128	407.48
剥片・碎片	127	35.51	704	228.90	280	127.72	375	189.73	6932	2300.49	347	325.25	1331	258.85	7422	1670.40	20	9.71	17538	5146.56
剥片・碎片(研磨)	13	2.90	75	18.53	11	4.57	15	3.94	1012	182.96	5	2.91	205	21.23	1748	225.64	1	1.71	3085	464.39
荒割品・母岩	0	0	0	0	9	462.80	2	269.96	35	1180.97	0	0	1	174.08	29	3518.28	0	0	76	5605.79
合計	157	58.66	1018	380.82	533	732.77	466	647.56	8909	4135.03	409	422.60	1968	563.70	10289	5935.60	22	12.31	23772	12889.05

第15表 石塚遺跡出土の滑石製品

遺構名	007	052	071	075	TF45	表探	合計
管玉	0	0	0	0	0	0	0
白玉	0	0	2	0	5	2	9
白玉未成品(穿孔)	1	0	0	0	1	49	51
白玉未成品(未穿孔)	4	0	0	0	0	49	53
有孔円板	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0
有孔円板未成品(未研磨)	0	0	0	0	0	0	0
剣形品	0	0	0	0	0	0	0
剣形品未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0
剣形品未成品(未研磨)	0	0	0	0	0	0	0
勾玉	0	0	0	0	0	0	0
勾玉未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0
小型円板	0	0	0	0	0	0	0
小型円板未成品(研磨)	0	0	0	0	0	0	0
紡錘車未成品	0	0	0	0	0	0	0
不明成品	0	0	0	0	0	0	0
板状品(研磨)	0	1	0	0	0	0	1
板状品(未研磨)	0	0	0	0	0	1	1
剥片・碎片	0	74	0	20	0	5	99
剥片・碎片(研磨)	0	0	0	0	0	0	0
荒割品・母岩	0	0	0	0	0	0	0
合計	5	75	2	20	6	106	214

Ⅲ 各論

049A号址

045号址の北側に位置する。正方形（6.00m×6.10m）で遺構中央部を平安時代の049B号址に破壊される。支柱穴は4本で炉は北東の支柱穴の間にある。このほか南隅と炉の反対側の南西壁中央に方形のピットがある。壁溝は全周する。焼土・炭化材を多量に出土し、焼失住居である。成品・未成品、剥片は二つの方形のピットを中心に出土している。剥片類が80%程で、このほか白玉成品と白玉未成品が中心である。このほか紡錘車未成品を出土した。出土土器は少なく、破片が中心である。砂岩質の円形の礫を出土しており、砥石として使用された可能性がある。

050号址

9軒の中で最も規模が大きく、出土遺物も多い。正方形（9.35m×9.30m）で、壁溝が全周する。柱穴4本の他に小ピットを多数検出した。また北壁際中央に2本と北隅と南隅に各1本ピットがある。北壁際の2本は壁溝中に作られる。焼失住居である。遺物は白玉が主体で、西壁際には白玉成品が紐でつながれていたような状態で出土した。成品・未成品、剥片類は北隅と南隅のピットを中心に分布し、西壁際には原石がまとまっていた。剣形品の出土点数が多く、製作工程をうかがうことができる。研磨した板状品の点数は最も多い。また、石墨状品を出土した。土器の出土点数も多く、北壁際中央で壺、甕、埴が砥石といっしょに出土した。このほかに土玉3点と鉄鏝3点を出土した。

051号址

050号址の北側に位置する。方形（6.95m×6.70m）で4隅に柱穴を配する。炉は東壁寄りの2本の柱穴の間に位置する。また、北壁と南壁の際にそれぞれ2本ずつピットを検出した。焼土・炭化材を多量に出土し、焼失住居であると考えられる。土器の出土量は多いが破片や欠損品で図示できるものは少ない。出土した滑石の85%近くが剥片類で、このほか白玉、剣形品、有孔円板の成品と未成品等を数点ずつ出土している。叩き石も1点出土している。土器の出土量は多いが破片や欠損品で図示できるものは少ない。

067号址

台地中央に入り込む谷の南側に位置する。方形（7.25m×6.65m）で4隅に柱穴を配する。炉は検出したが図示されていない。南西壁際中央にテラス状に床面より10cmほど1段高くなった部分がある。剥片や未成品はこの部分を中心に出土している。特に白玉未成品が集中していた。白玉成品は北東隅の柱穴脇にまとまっており、紐でつないであった可能性が考えられる出土状況を示すものもある。土器は甕・壺・埴・高杯など完形品や遺存状態の良いものも出土している。また土玉、鎌、不明鉄片各1点出土した。焼失住居で焼土・炭化材を多量に出土した。

070号址

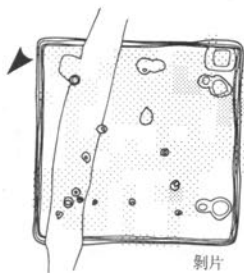
067号址の東側に並ぶ。方形（7.75m×7.65m）で対角線上の4隅に柱穴を検出した。炉は北

成田市石塚遺跡

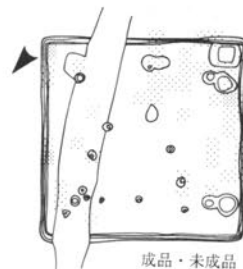


042号址

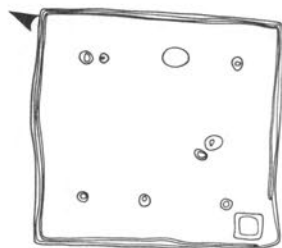
母岩



剥片

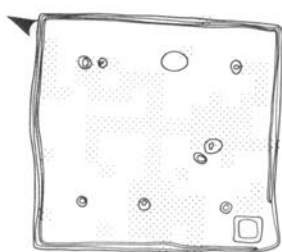


成品・未成品

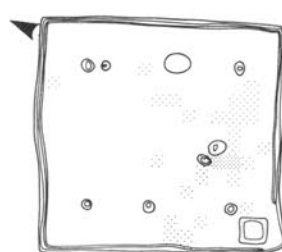


045号址

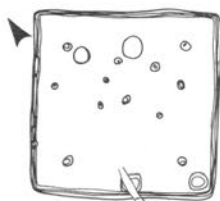
母岩



剥片

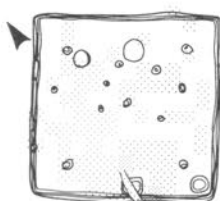


成品・未成品

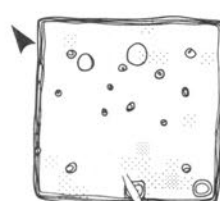


049A号址

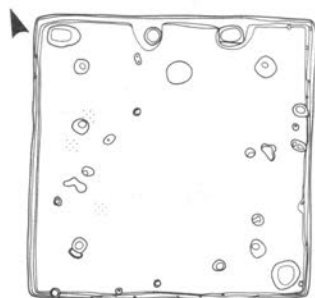
母岩



剥片

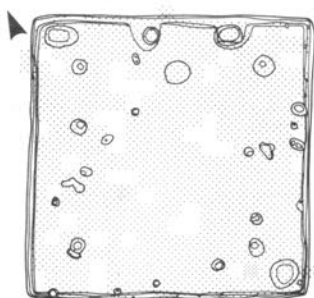


成品・未成品

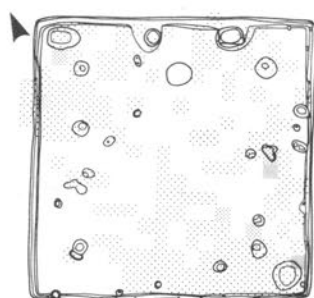


050号址

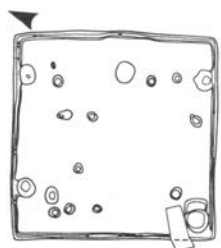
母岩



剥片

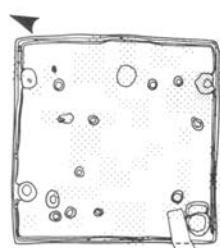


成品・未成品

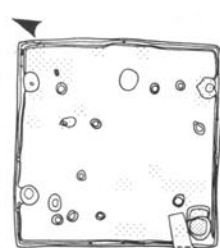


051号址

母岩



剥片



成品・未成品

1~50点

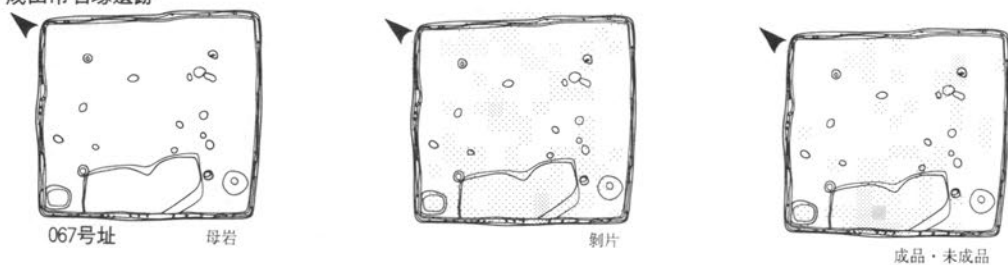
51~500点

500点以上

第33図 石製模造品出土状態(1)

Ⅲ 各 論

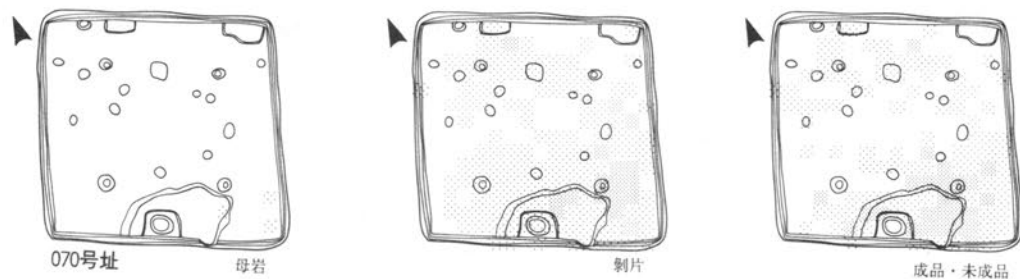
成田市石塚遺跡



067号址 母岩

剥片

成品・未成品

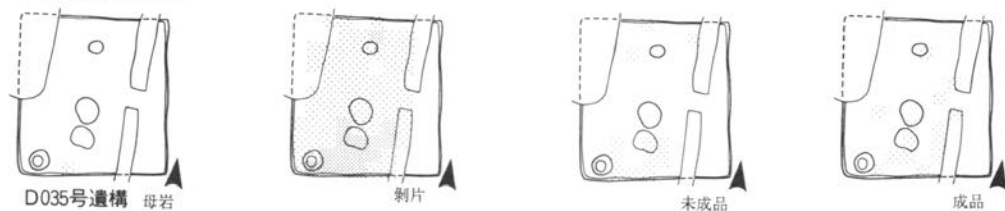


070号址 母岩

剥片

成品・未成品

八千代市権現後遺跡

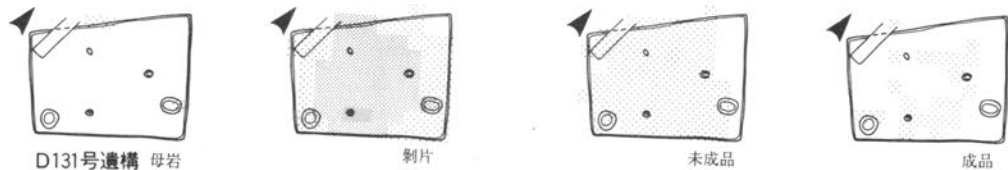


D035号遺構 母岩

剥片

未成品

成品

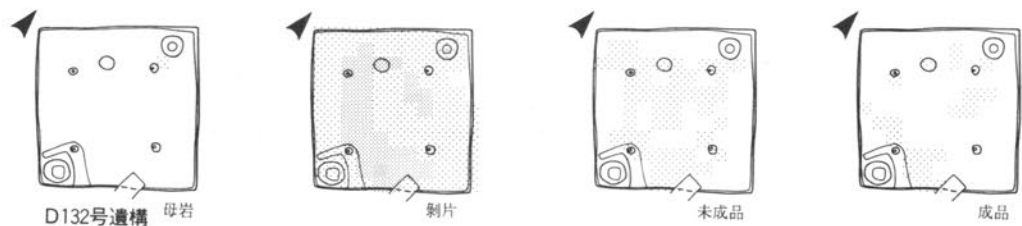


D131号遺構 母岩

剥片

未成品

成品

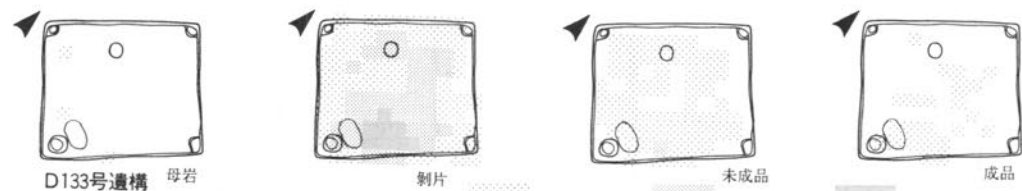


D132号遺構 母岩

剥片

未成品

成品



D133号遺構 母岩

剥片

未成品

成品

1~50点

51~500点

500点以上

第34図 石製模造品出土状態(2)

側の2本の柱穴の中央に位置する。また、北壁際に3本のピットを検出し、このうち西に位置する直径40cm、深さ25cm程の楕円形のピットには砂岩質の砥石が置かれ、その脇から有孔円板・剣形品等の研磨した未成品を出土した。また南壁際中央に2段に掘り込んだ方形のピットがあり、この周囲は床面から一段高くなったテラス状になっている。成品・未成品類と剥片はこのピットの東側に集中していた。遺物は9軒中最も多く10,000点を超える。72%を占める剥片・碎片を除くと白玉の成品・未成品が主体で、このほか有孔円板未成品、剣形未成品、勾玉未成品等も若干出土している。母岩の出土重量も最も重い。焼土・炭化材を多量に出土し、焼失住居であると考えられる。出土土器は破片が大部分で、遺存状態が良いものは少ない。

079号址

方形(6.20m×5.90m)で対角線上の4隅に2本ずつの柱穴を検出した。また壁溝が全周する。炉は検出しなかった。出土遺物は少なく、土器は完形の甕1点の他は遺存状態が悪い。また出土した滑石は22点でこのうち剥片が20点である。このほか砂岩質の砥石を1点出土した。

(3) 北海道遺跡について

A. 遺跡の概要

遺跡は県北のほぼ中央部に位置する八千代市に所在し、東側に印旛沼から流れ出す新川が南に向かって流れている。遺跡をのせる下総台地は、北側が新川方面から浸入する須久茂谷津と呼ばれる谷によって画されるため、新川の流れる東に張り出す大きな舌状台地の観を呈する。この広大な面積を有する舌状台地上には微地形によって分かたれる幾つかの遺跡が展開し、そのなかで最も北に占地する形となる。標高は10m~20mである。また石製模造品工房4軒を検出した権現後遺跡⁴⁰が、須久茂谷津を挟んだ北側の台地上に対峙する。

発掘調査は、宅地の造成に伴い1979年に当センターが担当して行った⁴¹。古墳時代の竪穴住居は、中期に比定される22軒と後期に属する7軒が検出された。このうち石製模造品工房と考えられる竪穴住居は、中期に12軒確認され、それに後期の1軒を加えて全部で13軒が存在することが明らかになった。実に検出竪穴住居の半数近くが石製模造品の工房である。中期の工房は須久茂谷津側である台地の北側に展開し、東から1軒、10軒、1軒の大略3か所に分かれて分布する状況を認めることができる。また後期の工房となる1軒は、いずれの工房よりも東側で検出された。

B. 検出石製模造品工房と遺物の概要

各工房とそれぞれの出土遺物について簡単に記しておく。なお土器等については報告書において述べられているので、詳細はそちらを参照して頂きたいと思う。また同様に模造品類の出土状況についても、原石、未成品、成品、剥片類と分けて平面的、並びに層位的に出土点数を提示しているが、一部煩雑になるところもあるので、今回石塚遺跡と同じように第36・37図のような平面分布に再整理してみた。



第35図 権現後遺跡・北海道遺跡の石製模造品工房関係遺構配置図

D010号遺構

3群の工房分布の中程の群に含まれ、その北に位置する。規模は4.6m×4.65mで、平面形は方形を呈する。壁溝はなく、配置位置からして柱穴とはならない小ピットが5か所に検出されたほか、対向する2か所のコーナーに貯蔵穴状のピットをもつ。床面は堅緻である。

模造品は白玉の未成品、成品を主とし、板状品1点、原石5点などがある。また使用痕のある叩き石が2点出土している。白玉は未成品や破損品が占め、表裏に研磨が施されているものと、研磨が施されないものがあり、後者が圧倒的に多い。いずれも遺構のなかで集中する場所はなく、中央部に広く散って出土しているといえる。土器類は杯、高杯、壺、甕がある。

D011号遺構

中央の群に位置し、D010号遺構が近接する。規模は4.5m×4.55mで、平面形は方形を呈する。壁溝はなく、柱穴とはならない小ピットが8か所に存在し、別に北東のコーナー部に貯蔵穴とは断じ得ないピットがある。床面は全体に堅緻で、中央から北に寄せて炉が設けられる。焼失住居である。

模造品類は白玉の未成品、成品、それに少量の有孔円板、円板状品、原石が出土している。白玉は表裏に研磨が施されない部類が大部分で、有孔円板は小型品である。原石の一部には鑿痕と捉えられている切削痕跡が残されている。炉と対向する南側に出土の集中か所が認められるものの、その規模は小さい。土器は杯と甕がわずかに出土している。

D012号遺構

中央の群のなかで最も西に位置し、他の工房とやや距離をおいている。規模は5.5m×5.2mで、平面形は方形を呈する。壁下に壁溝が全周し、対角線上の4か所に柱穴を配する。性格不明のピットが南西コーナーにあり、南壁の中央寄りに、砥糞と考えられる青白色粘質土を検出したことにより、工作用に比定されたピットがある。床面は全体に堅緻で、中央から北に寄って炉が設けられる。

模造品類は白玉の未成品、成品を主体に、勾玉未成品、剣形品、有孔円板、チキリが認められ、原石、剥片・碎片を合わせ50,000点以上の出土があり、北海道遺跡の全工房で最多の量になる。白玉にみられる特色は、表裏に研磨が施されるものがわずかである点である。チキリは形態を異にする未成品2点である。剥片類や未成品は、南壁寄りの工作用とされるピット周辺に集中して出土する様子があるが、ピット内からの出土はない。土器については、図示できるほどの遺存を保つものが出土してない。

D013号遺構

中央群の中央北側に位置し、南東にD011、南にD014が近接する。規模は4.55m×4.5m内外と推測され、平面形は方形を呈する。壁溝は全周するとみられるが、柱穴はない。貯蔵穴が南東コーナーに、工作用ピットが南西コーナーに配置されるが、工作用とされるピットは貼床の下

Ⅲ 各論

から検出されたもので、両ピットの機能差は必ずしも明確ではない。床面は堅緻で、炉は中央から北東に寄せて設置され、新旧が存在する。

模造品類は白玉の未成品と成品のみで、それに剝片類、原石を加える。全体の量は少ない。白玉は表裏に研磨が施されていないものが多い。他に関連遺物として滑石製の紡錘車、土玉、一端に使用痕のある叩き石が1点ずつ出土している。未成品、剝片等が炉の南側、貯蔵穴と工作用ピットの間になる南壁中央寄りを中心に分布する。土器は杯、甕が少量出土している。

D014号遺構

中央群に位置し、北にD013・D011が近接する。規模は5.41m×5.26m、平面形は方形を呈する。壁溝、柱穴の存在は認められない。南東コーナー部にある貯蔵穴状のピットが唯一の内部施設である。床面は中央部で堅緻な状態を示すものの周辺は軟弱となっている。炉は北に寄せて設置される。

模造品類は白玉の未成品、成品、勾玉、剣形品と有孔円板の未成品、円板状品と比較的多彩で、それに剝片類、原石がある。白玉は表裏に研磨が施されたものが、研磨の認められないものを上回って出土している。また剣形品の未成品も、側面の整形が行われ表裏に研磨が施され板状を呈している。原石の一部には工具痕跡が観察される。特に出土の中心となる範囲は特定できないが、東側に広く分布する傾向が認められる。土器の出土はわずかである。

D016号遺構

中央群に位置し、D022が南に近接する。規模は6.72m×6.38mで整った方形を呈する。対角線上の4か所に柱穴を配し、南東コーナー部に貯蔵穴、南壁寄り中央に工作用とみられるピットを設ける。床面は全体に堅緻な状態で、炉が中央からやや北に寄せられて設置される。

模造品類は白玉の未成品、成品、勾玉、有孔円板、剣形品の成品と未成品の種類があり、剝片類、原石が出土している。白玉は表裏に研磨を施すものが、そうでないものを上回る。また勾玉の未成品は整形を剝離によって行っていることがわかる。他に紡錘車2点が出土している。全体に南半分を中心に出土する傾向がみられる。工作用と考えられるピットの周辺で未成品の密度がやや高いが、ピット内からは出土していない。土器は杯と甕があるが、その量はわずかである。

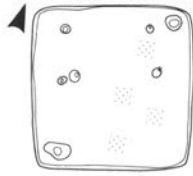
D021号遺構

中央群の東に位置し、他の工房とやや距離をおく。規模は4.5m×4.74mで平面形は方形を呈する。壁溝はなく、柱穴とはならない性格不明の小ピットが3か所に存在し、南西コーナー部に貯蔵穴がある。床面は全体に堅緻な状態で、中央から北に寄った位置に炉が設けられる。

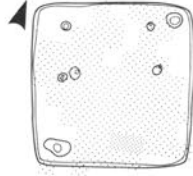
模造品類は白玉が2点と剣形品の未成品1点のみで、あとは剝片類と原石で、総計で32点の出土にとどまる。出土状況は中心となる場所がなく散在する様子なので、工房と断定することは避けておくべきかもしれない。土器は少量の杯と甕がある。

4. 石製模造品の製作

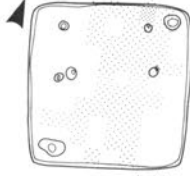
八千代市北海道遺跡



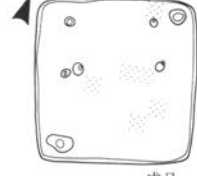
D010号遺構 母岩



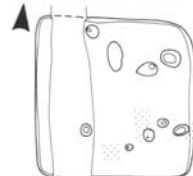
剥片



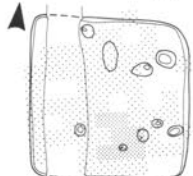
未成品



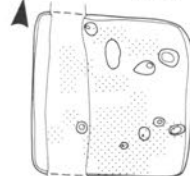
成品



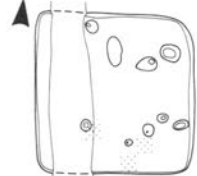
D011号遺構 母岩



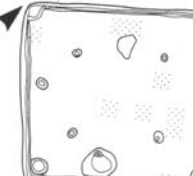
剥片



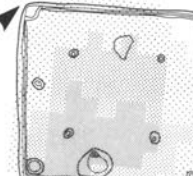
未成品



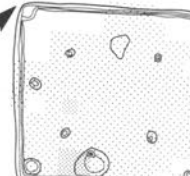
成品



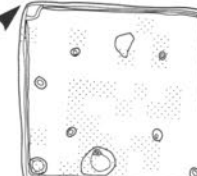
D012号遺構 母岩



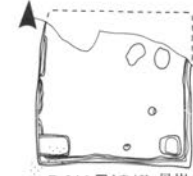
剥片



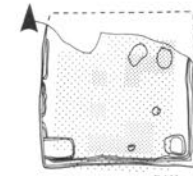
未成品



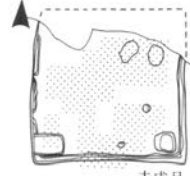
成品



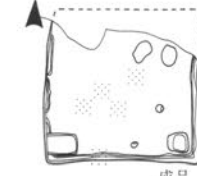
D013号遺構 母岩



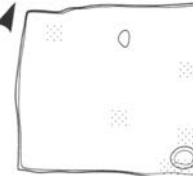
剥片



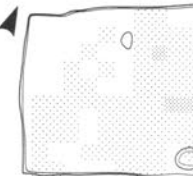
未成品



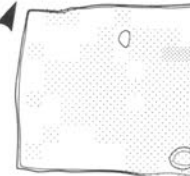
成品



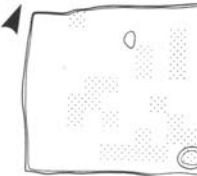
D014号遺構 母岩



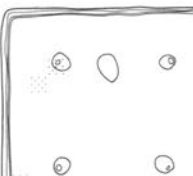
剥片



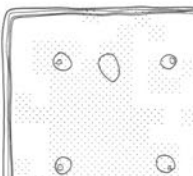
未成品



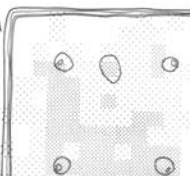
成品



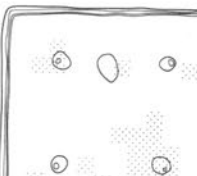
D016号遺構 母岩



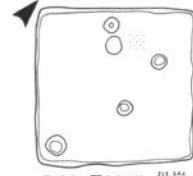
剥片



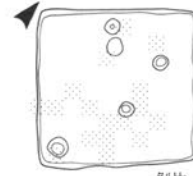
未成品



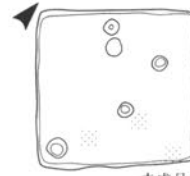
成品



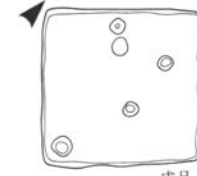
D021号遺構 母岩



剥片



未成品



成品

1~50点

51~500点

500点以上

第36図 石製模造品出土状態(3)

Ⅲ 各論

D022号遺構

中央群の東に位置し、西にD016が近接する。規模は5.57m×5.66mで、平面形は基本的に方形を呈するが、北壁にやや張りがあり、各隅に丸さをもつ。壁溝はない。小ピットが8か所に検出されたが性格は不明で、北西のコーナー部に貯蔵穴、南壁の中央近辺に工作用ともみられるピットを設置する。床面は中央部が若干堅緻であるが全体に軟弱な状態である。炉の設置は認められない。

模造品類は白玉の未成品、成品、剣形品、有孔円板の未成品と成品、板状品、剥片類、原石がある。白玉は表裏に研磨の認められないものが圧倒的に多い。有孔円板の未成品によれば、表裏の研磨、側面調整が完了の後穿孔されたことがうかがわれる。原石の幾つかについては鑿痕跡を残すものがある。遺物の分布は南半分に中心があり、剥片類、未成品は工作用とされるピットの北側に多く出土している。またそのピット内からは白玉19点と剥片類18点がみつき、貯蔵穴と考えられるピット内からも原石1点が出土した。土器は杯、高杯、埴、鉢が出土しているが、遺存状態は悪く量もわずかである。鉄製品では刀子があるがこれも欠損品となっている。

D039遺構

東群の1軒である。中央群で一番近いD021までも約100mの距離をおく。規模は4.61m×4.35mで、平面形は方形を呈する。壁溝は南東コーナー部分を除いて巡り、ほぼ対角線上の4か所に柱穴を配する。貯蔵用、工作用のピットは明かでないが、壁溝の途切れる南東コーナー部に平面形が方形となるピットが設けられる。床面は全体に堅緻な状態で、炉が中央から北に寄って位置する。

模造品類は白玉の未成品と成品、有孔円板の未成品で、剥片類と原石が出土している。合計点数は44点と極めて乏しく、散在して出土する。土器は杯、高杯、鉢、埴、甕、甑と器種が揃い、他の工房と比して出土点数も卓越する。

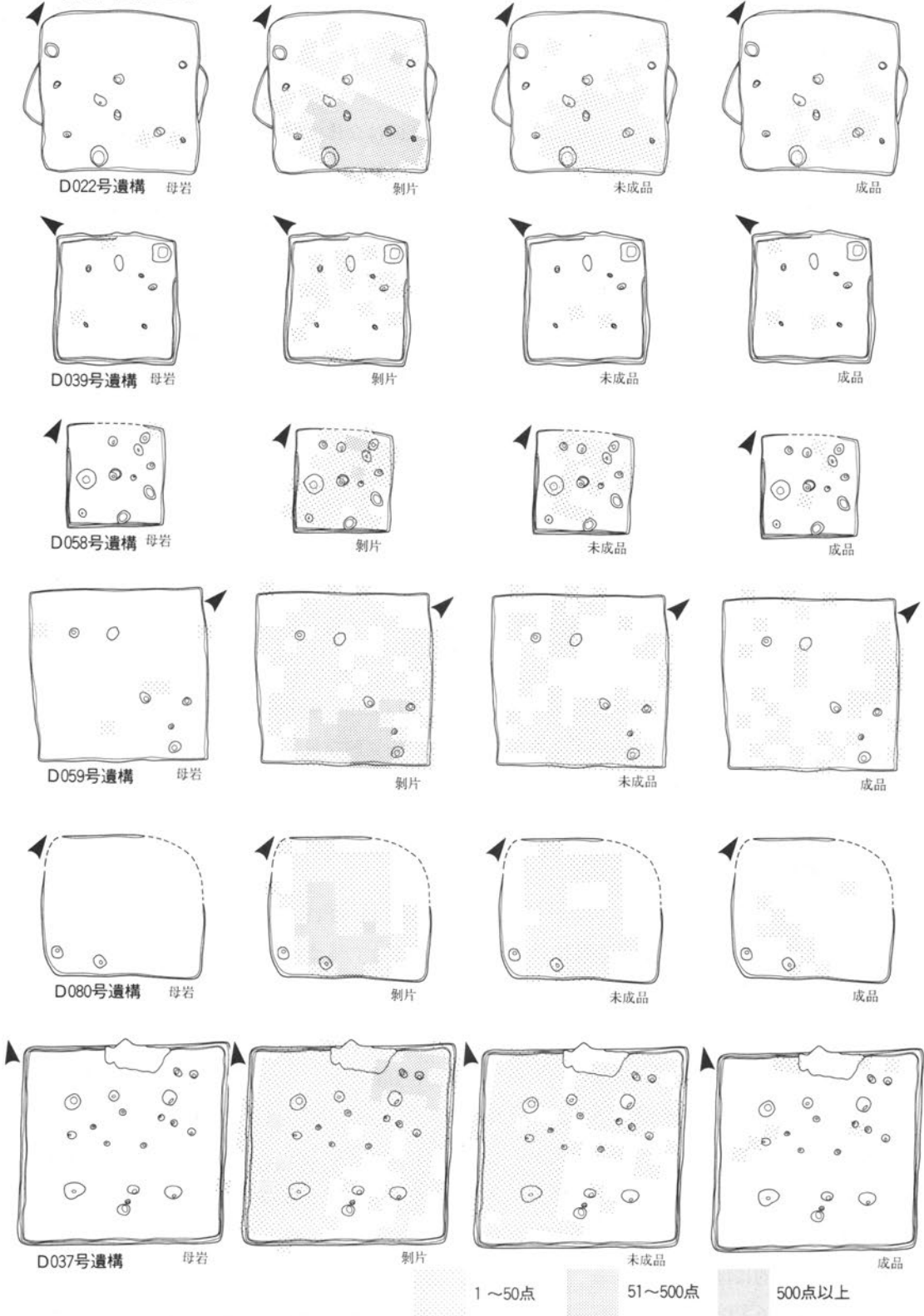
D058号遺構

中央群に位置し、北にD014、西にD059が近接する。規模は3.5m×3.63mで検出工房中最も小型になる。平面形は方形で、壁溝が南壁と西壁に伴う。小ピットが9か所に存在するが柱穴になるものはない。南壁と西壁のそれぞれの中央付近に、貯蔵穴か工作用と考えられるピットが設けられる。床面はやや堅緻で、炉の設置は認められない。床面上の3か所に焼土の堆積が検出されている。

模造品類は白玉の未成品、成品、勾玉の未成品で、剥片類と原石が出土している。白玉は表裏に研磨が施されないものである。勾玉の未成品はその製作の初期を示すもので、腹部と頭部を切削して作出し、製作始めている。遺物は中央部に散在して出土し、中心となる場所の特定はできない。土器は杯と甕が少量出土しているにとどまる。

4. 石製模造品の製作

八千代市北海道遺跡



第37図 石製模造品出土状態(4)

Ⅲ 各論

D059号遺構

中央群の西側で、東にD058が近接し、北にややあってD012が位置する。規模は6.28m×6.22mで、平面形は比較的整った方形を呈する。壁溝は伴わず、柱穴と断定できるピットの検出もなく、性格不明の小ピットが5か所に認められる。床面は全体に堅緻で、炉が中央部からやや西に寄せて設けられる。

模造品類は白玉の未成品、成品、勾玉、剣形品、有孔円板の未成品、成品、円板状品、および剥片等と原石である。白玉は他の工房と比べて、成品の含まれる割合が高くなっている。ただ表裏に研磨が施されたものの割合では、多くの工房と同様な傾向を示す。本工房の特色は有孔円板が25点出土していることになろう。白玉とは対照的に、表裏に研磨が施されたものを多く含む。また原石には鑿痕と捉えられている工具痕跡が残る。剥片類の出土密度が南壁寄りが高くなるのが認められ、未成品や成品がその周辺に分布するが、際だって集中する地点は看取されない。土器は甕、甔各1点の出土があるが、遺存は不良である。

D080号遺構

西の群の1軒である。中央群のD059とは40m以上の距離をおいて位置する。規模は5.03m×5.0mで、隅に丸さのある長方形の平面形を呈する。壁溝、柱穴はなく、南西のコーナーに性格不明の小ピットが2か所に存在する。床面は全体に軟弱で、踏み固められた状況がなく、また炉の設置は認められない。

模造品類は白玉の未成品と成品、剥片類である。別に関連する遺物として紡錘車の欠損品が出土している。白玉は表裏に研磨が施されないもので圧倒的な量を占める。遺物の分布は、東西の壁際ではほとんどなく、剥片類が南壁寄りで多少密な出土状況をみせる。土器は甕が出土し、鉄製品では刀子1点の検出がある。

D037号遺構

検出工房中最も東に位置し、唯一後期に比定される工房である。規模は7.37m×7.38mではほぼ正方形に近い平面形を呈する。壁溝は全周し、対角線上の4か所に支柱穴を配する。また南壁側に梯子ピットが存在し、北側には性格不明の小ピットが10か所に点在する。床面は全体に堅緻である。カマドが北壁の中央に設けられ、両袖のみを残している。

模造品類は白玉の未成品、成品、剣形品の未成品、有孔円板、および剥片類、原石である。本工房の白玉にみられる特徴は、表裏の研磨という点に現れており、研磨の施されないものをはるかに上回っている。また成品の側面中央には弱い陵が周回して、幾分胴の張った形態を示すものが認められる。剥片類の出土はカマドの右にやや集中するものの、広い範囲にわたって分布する。成品の出土は、カマドの両脇と中央から西に寄った3か所に限られる。土器は杯、甕があるが量的にはわずかである。

以上が個々の工房のもつ属性の一部と、出土した模造品類の種類およびその出土状況である。

(4) まとめ

A. 石塚遺跡の石製模造品製作

石製模造品工房9軒はいずれも遺存状態のよい土器類が少ないが、古墳時代中期前半に属すると考えられ、大きな時期差は認められない。また石製模造品製作関係の遺物は量の多寡はあるが製品の種類に大きな差は認めらず、管玉、白玉、勾玉模造品、有孔円板、剣形品、紡錘車等を製作している。量は成品・未成品とも白玉が圧倒的であった。管玉は成品が049号址から2点、070号址から3点出土しているが、未成品は出土しなかった。また紡錘車は049号址から出土した未成品が1点で、有孔円板(62点)と剣形品(52点)の出土量はほぼ同じである。これは需要量の差であると考えられ、本遺跡が白玉の製作を主体としていたわけではないであろう。また白玉の未成品のうち穿孔したものは穿孔場所が偏っていたり、穿孔によって一部が破損したりしたものが多く認められ、同様のことは有孔円板や剣形品等他の種類の遺物にもみられる。石塚遺跡の石製模造品工房に残されていた遺物の多くは失敗品であったといえる。

遺構は主軸がほぼ同じであること、支柱穴が4本であること、炉が北から東の2本の支柱穴の間にあること、南東隅に柱穴より大きいピットをもつこと、壁溝が全周すること等のある程度共通した要素を見つけることができる。しかし、同時期の一般の竪穴住居の構造と比較して大きな違いはない。南東隅のピットも砥糞を検出したり、未成品や剥片等がとくに集中する等という例はなく、工作用ピットとは断定できない。剥片の集中場所は南西壁際に見られ、特にここにベット状の高まりがある067号址と070号址に顕著であった。おそらくこの周辺が作業場所であったと考えられる。また、炉の位置が違うため主軸方向が逆になる042号址でも炉の位置は関係なく、南東壁際に集中が見られる。070号址では西壁際のピット中から砥石を出土し、その脇から研磨未成品が出土している。

9軒のうち070号址から全出土点数の43.2%を、ついで050号址から37.4%を出土し、2軒で80%以上の遺物量を占める。これに続くのが067号址の7.3%であるので2軒の遺物量は突出している。050号址と070号址は谷をはさんで向かい合っている。070号址の隣に067号址が位置し、どちらも南壁際にテラス状の高まりをもつ類似した構造である。050号址は9軒中最も大型の遺構で、北壁際にピットが検出された点が070号址と類似する。いずれにしても3軒で集中的に作業が行われたことがうかがわれる。作業の中心となる遺構または作業のみを行っていた遺構の存在などが推察できるが、これを確認するにはさらに細かい検討や他の製作遺跡との比較を行う必要があり、可能性の指摘だけにとどめておく。

このほか本遺跡の特徴として焼失住居が多いことがあげられる。石製模造品工房9軒中6軒が焼失住居であった。この台地に人が住み始めるのはこの後、奈良・平安時代で、石製模造品の製作は古墳時代中期の一定期間のみで終了したようである。遺構内に残された遺物に成品が少なく、未成品類も白玉に見られるように失敗品や破損品が多く見られること、利用できる原

Ⅲ 各論

石が少ないこと等を考えあわせると工房の廃棄には意図が感じられる。

次に石塚遺跡の石製模造品製作の工程を検討していく。石塚遺跡で製作していた滑石製品のうち白玉以外は出土点数が少なく、製作工程の復元は困難である。しかし、幸いなことに9軒とも古墳時代中期でほとんど時期差がなく、また遺構ごとに遺物の多寡はあるものの技術的な差も認められないため、遺物の量が豊富な050号址と070号址を中心に他の石製模造品工房出品で不足な点を補いながら、種類ごとに製作工程をまとめておく。

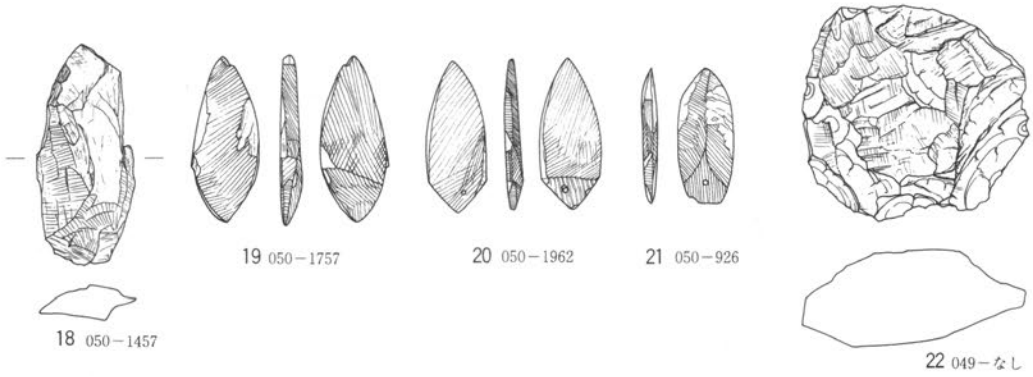
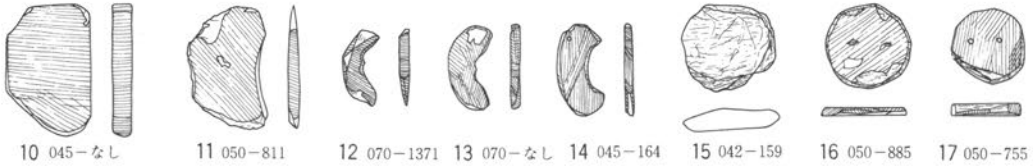
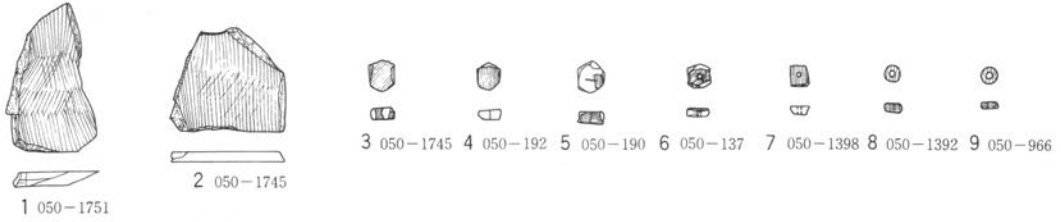
まず、入手した原材を分割する荒割工程であるが、母岩・荒割工程の遺物が少ないことと、素材の性質上剥離の際にできるリングやバルブ等の観察が困難で、どの様に分割が行われたかは不明瞭である。070号址出土の母岩の剥離面に工具痕が観察できるものがある。これには鑿状工具があたった痕跡が観察でき、工具を使用した間接的な打撃によって分割していったことが考えられる。また、荒割工程段階までは成品によって目的的に剥片を作り出すのではなく、分割したものの中から製品の種類によって適当な剥片を選び出していることも考えられる。

a. 白玉 未成品は穿孔が行われていないもの、穿孔が行われたもの（穿孔途中のものを含む）の2つの段階のものに分けられる。前者が形製品である。しかし穿孔したものも、穿孔しないものも外形には変化がなく、四角形または多角形（六角形が多い）を呈する。どちらも表裏面はすでに研磨されており、研磨されていないものはほとんどない。周縁のそれぞれの辺には工具の痕跡が認められ、形割は工具を使用した分割によったと見られる。穿孔は片面から行われたようであり、穿孔途中のものを観察すると、先端が丸くおさめられた工具を使用したものであることがわかる。側縁部の研磨は穿孔後に行われている。

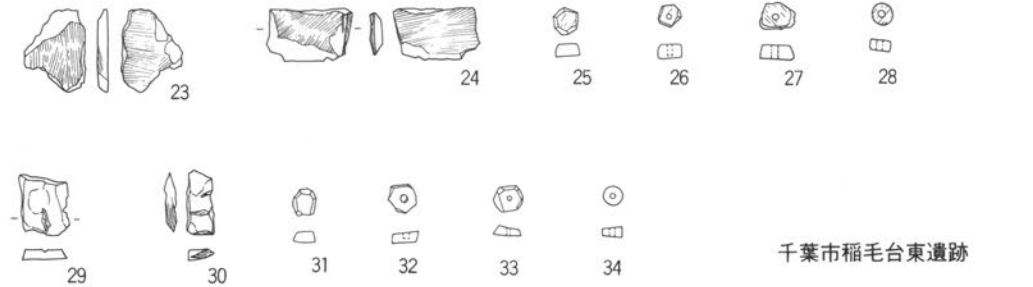
本遺跡では両面を研磨した板状品を多数出土している。形態は不整形で、大きなものはなく、2 cm～3 cm四方のもので比較的大きい方である。分割する際についたと思われる工具痕が側縁の一部にみられるものもある。厚さは3 mm前後である。これを適当な大きさに分割し、方形の形製品を作出し、この形製品の角をとり、多角形に調整していく。この形製品の分割と調整に工具を使用していると考えられる。両面研磨した板状品のなかには明らかに、白玉の直径に達しない小破片が多数含まれており、これは分類の際に研磨した板状品の剥片としたが、白玉の形製品を多角形に整形する際に生じたものと考えられる。また、剥片のなかにはある程度の大きさがあり、厚さがほぼ均一な板状のものが認められる。これが研磨する前の板状品であろう。

以上のことから白玉の製作工程を復元すると、まず原石を分割して、適当な大きさと厚さがほぼ均一な板状の剥片をとる（板状品）。これを両面研磨する（板状研磨品、第38図1・2）。研磨した板状品を白玉の直径に近い大きさの方形に分割し（形製品）、この角をとって多角形にする（側縁調整、第38図3～5）。穿孔し（第38図3～5）、このあと周縁を研磨して仕上げる（第38図8・9）。周縁の研磨の方向は白玉の穿孔方向と同じである。研磨の際生じたと考えられる稜があるものもあるが、不明瞭である。

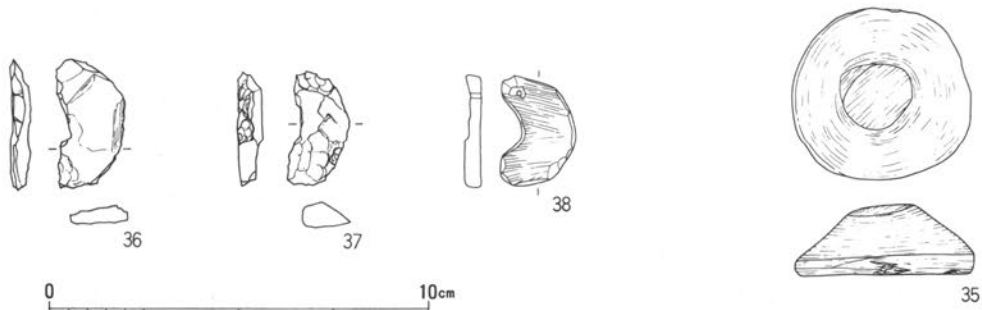
成田市石塚遺跡



八千代市北海道遺跡



千葉市稲毛台東遺跡



0 10cm

第38図 石製模造品製作工程(1)

Ⅲ 各論

b. 有孔円板 出土した未成品は穿孔前の研磨未成品がほとんどであるため、不明瞭な点もあるが次のような工程が考えられる。まず荒割りした剥片の中から適当な大きさのものを選び、有孔円板の大きさ、形に整形する（形割工程、第38図15）。この際、剥離調整のほかに切削が行われている可能性がある。この形割品の両面と側縁を研磨する（第38図16、穿孔位置のしるしが付けられている）。その後、穿孔して仕上げを施し、完成させる（第38図17）。また、両面の研磨が終了しており、側縁に切削痕が残るものは、研磨した板状品から形割品を製作したと考えられる。

c. 剣形品 荒割りした剥片の中から適当な大きさ、形のものを選び、これを剥離調整や金属製工具を使用した切削で形態を整え、形割品とする（第38図18）。この後形割品の両面と側縁を平坦に研磨する。この段階ではかなり厚みがある。次に一方の面をさらに研磨して鑄をつける。また裏面基部も研磨して稜をつける場合がある。最後に穿孔して仕上げる（第38図21）。

d. 勾玉形 勾玉の未成品と考えられるものとしては半月形のもの（第38図10・11）や丸みを帯びたE字形を呈したもの（第38図12・13）がある。どちらも両面の研磨は終了している。後者は腹部が山形になっており、この様な未成品から推定すると、まず半月形に近い形態の板状品を作る。この弦のほうに2か所の抉りをいれ、腹部を作っていく。これが丸みを帯びたE字形になり、最後に中央部の突起をとって、腹部内側の側縁を調整したと考えられる。石塚遺跡で確認できた範囲では腹部の抉りは砥石を利用した研磨によっている。このほか、有孔円板の失敗品を利用したものも認められる。これは有孔円板の穿孔部分を腹部に利用している。

e. 紡錘車 切削による調整を行っている未成品を1点出土しているのみである（第38図22）。荒割品に剥離調整を行って形割品を作ってから工具により上下面と側面の切削調整を行っているようである。この後研磨、穿孔して仕上げるものと考えられる。

f. 工具類 石塚遺跡で出土した石製模造品製作に関係すると考えられる道具には砥石、叩き石がある。砥石は粘板岩質のものと、砂岩質のものがあるが、049・070・079号址の3軒から出土しているのみで全部の工房で出土しているわけではない。このうち070号址ではピット内から砂岩質の大型のものが出土し、置き砥石と考えられる。また042・045・050号址からは鉄鎌が出土している。母岩の分割や板状品・板状研磨品の分割、側面調整、形割品の切削等に金属製の工具を使用していることは、未成品や剥片類に残った痕跡から確実に、これらから分割に使用する鑿状の工具と切削に使用する刀子状の工具の最低2種類の金属製の道具が考えられる。鉄鎌がこの様な用途に転用された可能性がある。051号址からは叩き石を出土した。砥石としても使用された可能性のあるもので、鑿状工具を使用した間接打撃による分割の際にも必要な道具である。このほかに穿孔道具を使用したと考えられるが、これにあたるものは出土していない。穿孔途中のものを観察すると、底面は丸く、穿孔道具の先端は丸い形態であったことがわかる。また050・051号址から土玉を出土し、穿孔の際の舞錐のコマとした可能性がある。

また用途は明瞭ではないが玉作工房等でも出土する石墨状品が050号址から出土した。

B. 北海道遺跡の石製模造品製作

北海道遺跡において石製模造品の製作が行われていた時期は、中期から後期にかけてである。そのなかで主体となる時期は中期で、工房によって出土土器量がそれぞれ異なるものの、顕著な時期差は認められず全般にいわゆる古墳時代中期後半の様相を示している。

本遺跡で製作されていた模造品の種類は、中期では白玉、勾玉、剣形品、有孔円板、板状品、チキリがあり、後期では白玉、勾玉、剣形品、有孔円板が認められ、両時期とも剝片類や原石を伴出している。特殊な部類といえるチキリが、後期の工房で確認できなかったことを除けば、時期による製作種の変化は捉えられない。

工房に残されていた模造品類、すなわち製作されていた模造品で最も多くを数えるのは、白玉である。白玉の未成品は、いずれの工房においても他種類を圧倒的に上回って出土している。これは各工房が白玉の専門工房であったことを物語るものではなく、各種の需要の差の現れであり、必要とする量への対応の結果とみることができるのである。こうした現象は成田市石塚遺跡と同様であり、白玉の数の多さのみによって工房を特徴づけることは妥当ではない。むしろ白玉の製作上の特徴やそれ以外の模造品の製作方法にこそ特色を見いだすべきであろう。具体的には製作工程を復元できる遺物の出土を必要とするが、白玉については未成品が含まれているので、これに基づく検討を可能としている。

a. 白玉 すでに報告書で指摘されているように、白玉の未成品および成品には、表裏に研磨が認められるものと、研磨が施されていないものが存在する。未成品の段階であったならば、表裏の研磨が加われば両者同一の成品となるので、それは工程の違いつまりは手順の違いの問題になる。しかし明らかに成品と思えるものの表裏に研磨が認められないと、これは製作方法自体の特徴ということになる。報告書ではそれを「2通りの工程」と認識し、「表裏両面に研磨を施した剝片を素材としたもの」をAタイプ、表裏に「研磨を施さず剝片そのままを素材としたもの」をBタイプと仮に呼んでいる。そして製作過程は、採石－荒割－形割－側面打裂－研磨－穿孔－仕上げの工程の中で考えることが可能ととらえる。ここでAタイプとBタイプという仮称にしたがうと、先に述べたとおり本遺跡の工房で製作されていた白玉はD014を例外にすれば、Bタイプを主体とし、Aタイプがわずかに伴うといった在り方が、一般に認められ、これが北海道遺跡の白玉生産を特徴づけている。

仮にBタイプと呼んだ白玉は、原材料である滑石の入手後分割が行われ、そこから生産が開始される。この分割は打撃によって行われたと考えられており、そうだとすればD014等から出土した叩き石が工具の有力候補としてあがってくる。しかしどの工房からも出土している訳でもないで、別の工具が用いられた可能性も大きく、工具を断定することは控えたい。

次に適当な大きさになった滑石母岩から、剝離か切截、あるいは切削によって白玉の素材が

Ⅲ 各論

とられていったと想像される。なぜここで「想像」となるかという、これは特に剝離に関していえることなのであるが、緑色凝灰岩あるいは頁岩等の石材と異なり、滑石の剝片を作出してもバルブやリングをはっきりと観察することができないし、それどころか表裏の区別さえつきにくいという実情があるからである。したがって剝離の実態は不明で、発見された遺物をみるかぎり、①やや大型で不整な形態を呈するもの、②小型で不整のもの、③やや大型の板状を呈するもの、④小型の板状を呈するもの等を剝片とするしかない。ただ②・④の剝片をとることは①の剝片からも可能であるし、母岩からの直接剝離も行なっていたはずなので、ここに顕著な技法を見いだすことは困難といわざるを得ない。このような剝片剝離に対し、切截あるいは切削による素材の作出は、残核に残されている痕跡によりその存在を確認することができる。この方法は、はじめから母岩や①のような剝片から、目的とする白玉の大きさや厚さを想定し、それに合った素材をとっていくものと考えられ、剝離による素材獲得より時間はかかっても、無駄は少ないと思われる。その切削に使用された工具は、石の道具と考えられず、おそらく刀子のような鉄器であったと推察される。

いずれかの方法によって作出された素材は、白玉の基本形態を求めると分割を必要とするものと、それを要しないものに分かれる。要しないものとは、すでに白玉の大きさに近い素材のことである。Aタイプの白玉とは、ここから全く別の工程を経ていくことになり、Bタイプの本質は次の工程に求められる。それは素材両面の研磨工程が行われるか否かの違いであり、Bタイプは研磨が施されないで進捗していくのである。

さてBタイプの次の工程は、分割を要する剝片や切削品を、切截によって白玉の大きさに近い四角形の形を作ることである（第38図29・30）。分割の方法は、基本形を失敗なく得られるように厚みの3分の1程度まで切削して、断面がV字を呈する刻目を施し、そこから折断するものと考えられる。ここまできると、四角の角の部分を取り去る側面調整が実施され、六～八角形の多角形品になっていく。なかには円味をもった形に近づくものも存在するがそれは一部であり、大部分は六～八角形を基本としている。このように多角形に整形されたものが白玉の形製品の段階である（第38図31）。

側面調整が施されて形製品となったものは穿孔の工程に移る（第38図32・33）。D012号遺構をはじめ穿孔が開始されてそれが途中となっている未成品を多く認め、それらは片側からの穿孔となっている。かなり穿孔が進んだものにも、もう片側からの穿孔が始められないところから、片側穿孔が基本であったと理解して良いだろう。穿孔に用いられた工具の特定は困難であるが、孔底に凸状の小突起を残していないことから、管状錐とは別の種類であったことがわかる。穿孔が完了すると側面に仕上げの研磨を施し、Bタイプの白玉が完成する（第38図34）。

一方少数ながら存在するAタイプの白玉の製作は、Bタイプで行われる分割の前に研磨工程が追加され板状研磨品が作られる（第38図23・24）。以下の工程についてはほぼ同様であるの

で、この点に最も大きな違いが認められる。

b. 有孔円板 白玉と異なり有孔円板を量産していた状況はうがうことができない。残された成品には両面に研磨が施されたものと未研磨のものがあり前者が多い。これは有孔円板が面を平滑にしてはじめて成品としての意味をもつものだとすれば、未研磨のものは単に仕上げの研磨が施されていない未成品であるかもしれない。白玉のAタイプと同工程で製作された可能性も高いといえるが、仮にBタイプと同じ工程をたどり仕上げの研磨を加えたら同じなので、確実な方法は明らかに有孔円板の未成品といえるもので検証するべきであろう。大きさは全般に小型で長径が2cm内外となるものが多く認められる。

c. 剣形品 D012、D014、D022、D059等で製作しているものの、有孔円板と同様に量産の形跡は認められない。素材に側面調整を施した段階が形割品になるが、この側面調整前にすでに研磨されていたかどうかは不明である。表裏と側面が研磨されて穿孔され、仕上げの研磨が施され完成する。

d. 勾玉形 形割品の素材は剝離か切削によってつくられる。これは最初から勾玉の形状を目的とした切削品の存在と、剝片素材が残されていることにより裏づけられる。剝片を素材とするものは、母岩や荒製品から剝離された剝片のなかで、勾玉形の製作に適した剝片が選ばれて加工されたと考えられる。適合した剝片は細かな剝離を施すことによって頭部、腹部、背部を作出していく。そして勾玉の形が作られてくると研磨→穿孔の工程に運んだと推測され、その蓋然性は高い。この剝離による細部調整が施された未成品は、D012号遺構のなかに認めることができる(第38図36)。一方切削によって作出された素材は、厚さが適当であれば直ぐに切削や折断によって側面の調整が施され、やや厚めのものについては、小刻みに施溝を施して折断を繰り返すことによって目的とする形に変えていったとみられる(第38図37)。腹部の作出は、切削による場合が多いようであるが、D021号遺構の勾玉形には、成田市石塚遺跡に特徴的であった腹部のE字形抉り痕跡が残存する。いずれの方法にせよこの後、研磨→穿孔→仕上げが行われ成品となる(第38図38)。

北海道遺跡ではD012遺構でチキリ形の未成品があるが、出土品としてのチキリが少数であることから、常時製作していたとは考えにくく、必要に応じて製作したものと想像される。製作方法を具体的に復元できないが、主に切削によって形が整えられたとみられる。

報告書において阪田正一氏は、これら模造品製作が行われていた工房の特徴として、遺構の形態がいずれも方形であること、その規模が方4.5m~5.5mにあること、無柱穴である場合が多いこと、炉の設置割合が低いこと、貯蔵用・工作用のピットがやや多いこと等幾つかを挙げている。そして一般の堅穴住居との比較において「明確な相違は認められず、両者が示す傾向が把握できただけであり、傾向は両者を区分するだけの積極的な資料になり得ない」と述べている。⁴²確かに工作用と貯蔵用のピットにしても、両者を明確に分離するだけの資料を持ち合わ

Ⅲ 各 論

せていないし、土器類の出土位置にも際立った違いを見いだすことはできない。指摘のとおり遺構の属性から工房と住居の違いを積極的に抽出するのは難しい。

滑石製の未成品や剥片類が多量に出土することにより、工房として位置づけられるのであるが、それらの出土分布から作業空間に関する一つの仮説を提示することができる。ある程度の出土量があった工房の各工程別の分布状況を分析すると、遺構の南半分からの出土密度が、北半部より高いという傾向を認めることができる。この状況は工作用と考えられるピットの位置とも無関係といっていい。このような分布の在り方は、工房内での工作場所を示すものであり、その場所の決定に、工作に必要な採光を第一においた可能性を考えることができるのである。当時の上屋構造がいかなる状況を呈していたか明確ではないが、入口が南側に設定される場合が多いとすれば、そこから入ってくる太陽光を細部の工作に利用したことはおおいに考えられる。もしこの仮説が妥当であれば、遺物の分布は光の届く範囲であったかもしれないし、炉の設置されていない工房があることもうなずけるのである。⁴³

ここでは北海道遺跡に限って模造品類と工房についてまとめてみたが、本来は谷を挟んで北側に所在する権現後遺跡との対比のなかで語るべきであると思っている。この点については次項で簡単にふれることにする。

C. まとめ

石製模造品製作遺跡のなかでも代表的な2遺跡について製作工程をまとめた。製作工程をある程度復元することのできた白玉と勾玉を中心に他の遺跡と比較しつつ整理しておく。

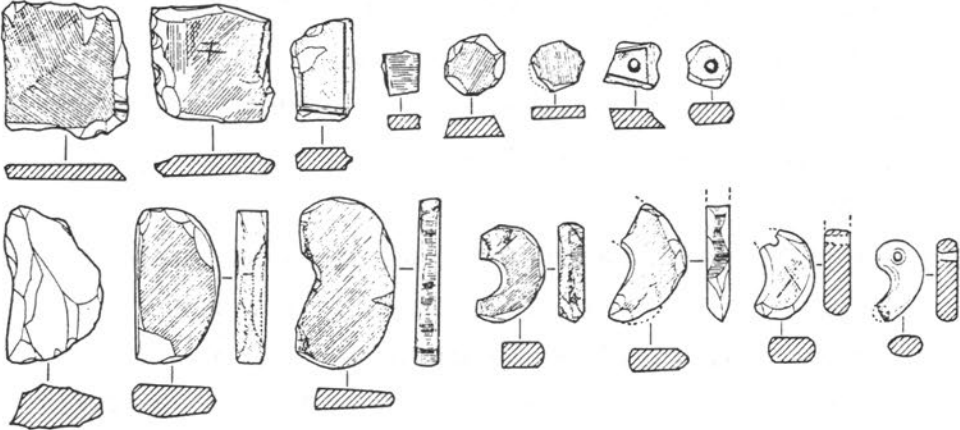
a. 白玉 八千代市北海道遺跡では表裏両面に研磨を施した板状品を素材としたAタイプの製作方法と研磨を施さない剥片を素材としたBタイプの製作方法が確認された。2つの方法は板状の剥片を作出後の作業工程に違いが見られる。Aタイプで製作された成品は両面を研磨されたものであり、Bタイプでは上下面の研磨が行われないうまま成品となる(第40図)。この2種類の製作工程は袖ヶ浦市文協遺跡でも復元されている⁴⁴。北海道遺跡に隣接する八千代市権現後遺跡ではAタイプの方法が主体であった。また、石塚遺跡もこの方法が主体である。このほか、報告書によると下総町治部台遺跡⁴⁵(第39図)、同稲荷峰遺跡、栄町前原I遺跡でも同様の製作工程が考えられる。千葉県東寺山戸張作遺跡⁴⁶でも板状研磨品を出土しており、またこれを分割しようとした溝状の筋がはいったものもある。ここでは穿孔した未成品のほとんどが方形を呈していることが特徴である。多角形にする工程を省略したのだろうか(第39図)。千葉県上ノ台遺跡⁴⁷では偏平に割った原材の側縁を打ち欠き、あるいは削って五~八角形に整形して、孔を中央部に穿ち側面と両面を研磨して仕上げる方法、偏平に割った原材にいくつもの孔を穿ち、孔を中心にして打ち欠き、側面と両面を研磨・整形して仕上げる方法があげられている。実測図によると上下面に研磨痕跡の見られる穿孔工程の未成品・成品がある。形割品を穿孔後、上下面の研磨を行っているということであるが、きわめて効率が悪く、研磨がどの段階なのか検

千葉市東寺山戸張作遺跡

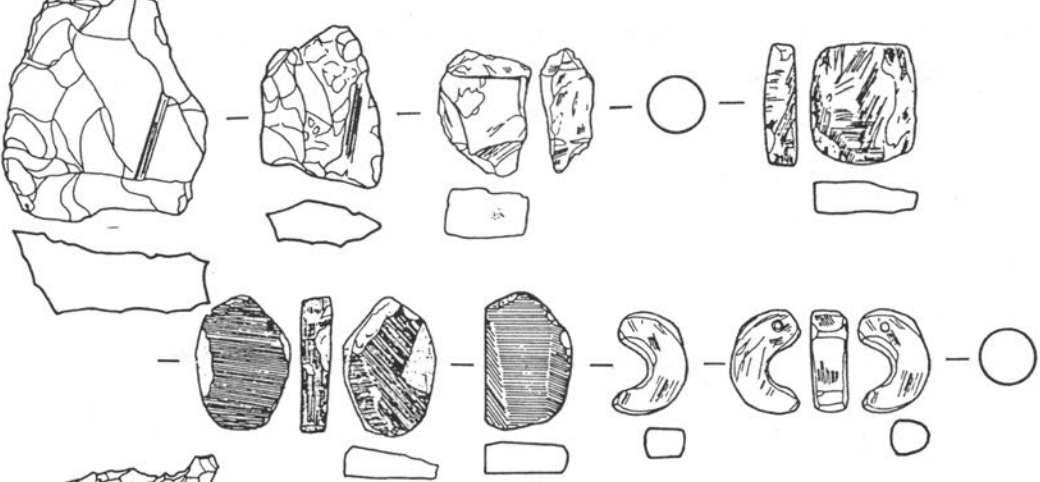


下総町治部台遺跡

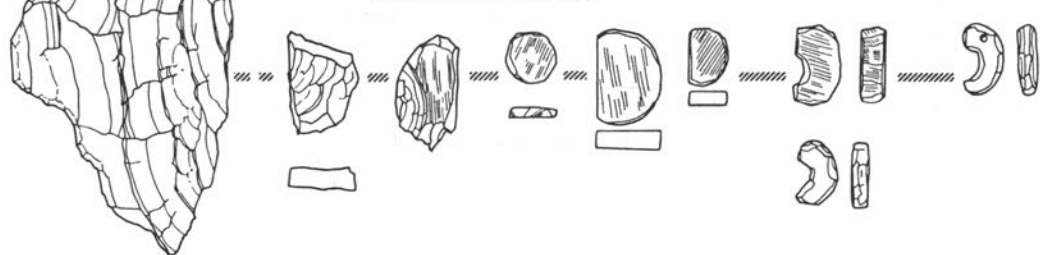
各報告書から一部改図転載



茨城県土浦市烏山遺跡



群馬県高崎市下佐野遺跡



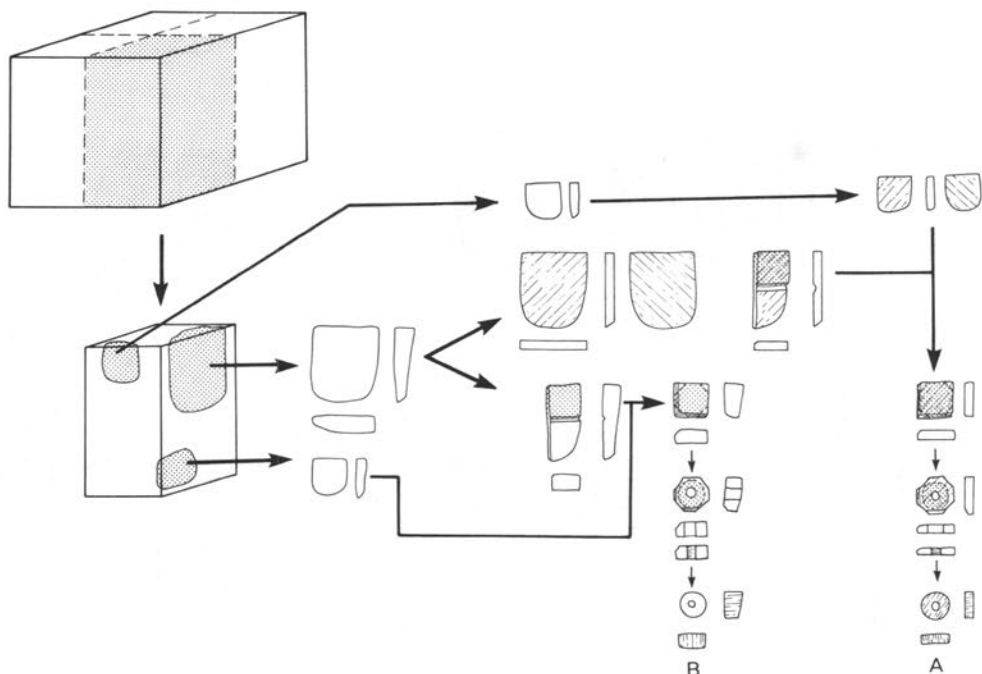
第39図 石製模造品の製作工程(2)

Ⅲ 各論

討する必要がある。後者の方法は板状品に数か所の穿孔が行われたものが出土していることから推測された方法であるが、報告書にも記載されているように穿孔位置のずれで失敗品になる可能性が高く、能率が悪いため、常に行われていた方法かは疑問である。

石塚遺跡や権現後遺跡で主体的なAの方法と北海道遺跡で多用されるBの方法では後者の方が研磨工程を省略できるため効率的である。北海道遺跡では古墳時代中期後半に効率的な方法による生産が行われていたにもかかわらず、後期になると古墳時代中期前半の権現後遺跡のような両面を研磨する方法で製作するようになる。これは、時期が下るにしたがって製作方法が粗雑化するというような製作方法の差が、時期差を反映するものではないことを示しており興味深い。北海道遺跡では中期後半に工房の軒数が最も多いこともあり、需要量が増し量産化をはかったことが推察される。⁴⁸

b. 勾玉形 下総町治部台遺跡では研磨した半月形の未成品の腹部を切削工具で抉ってC字形に整形している。成田市石塚遺跡では山形に2か所の抉りを入れ、E字形にすることが特徴である。この様なE字形の未成品は北海道遺跡、下総町稻荷峰遺跡にも見られる。頭部と尾部の両方から抉りを入れることにより、勾玉の腹部のカーブを緩やかに作り出すことができるためかと思われる。これは玉作工房を検出した成田市外小代遺跡でも出土しており、技術的なつながりを考えるうえで興味深い。北海道遺跡の場合は治部台遺跡と同じ様に切削により抉っているが石塚遺跡の場合は研磨により抉りをいれる。茨城県土浦市烏山遺跡、群馬県高崎市下佐野



第40図 白玉製作工程模式図

遺跡でも半月形の研磨品からC字形にしていく方法が行われている（第39図）。

北海道遺跡にはこれとは別の製作方法が確認できた。一つは剥離で整形するもので、もう一つは切削により勾玉の形に整形して作る方法である。どちらも形割の段階で勾玉の形態に整形し、研磨して仕上げていくもので前述の方法とは整形方法に違いがある。

このように勾玉の製作方法には半月形の研磨板状品から製作するものと形割段階で勾玉の形に整形するものの大きく分けて二つの方法が確認できた。千葉市上ノ台遺跡では後者の方法によっている。また長野県神坂峠では両方の工程によるものがあり、2つの方法によるものは成品段階でも違いが認められる⁴⁹ということである。

註

1. 文献94・175等。
2. 文献80
3. 文献74
4. 文献40・268・269等。
5. 文献296
6. 文献94
7. 文献175
8. 文献137。字名から「山口遺跡」と呼ばれる場合もある。本書では『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）』千葉県教育委員会 1985年 記載の名称にしたがった。
9. 文献285
10. 最近、野田市桜台遺跡が調査され、工房が検出されているということである〔文献446〕。
11. 谷川章雄 「石製模造品製作遺跡の分布」〔文献296〕
12. 同一集落内にもみ供給している場合と、他地域にも供給する場合があると考えられる。
13. 文献56
14. 文献437
15. 文献416
16. 文献400
17. 文献396
18. 文献340。銚子市栗島台遺跡も古墳時代のコハクの玉作遺跡の可能性があるということである〔文献296〕。
19. 安藤鴻基 「房総出土の古代の玉」〔文献202〕
20. 滑石製の管玉は玉作工房での製作が主体で、古墳時代中期の滑石製品のみの製作遺跡では、成品は若干出土するが未成品は出土しなくなる。
21. 鏡形模造品は製作遺跡では下総町東明神山遺跡、集落では栄町植生郡衙跡、市原市草刈六之台遺跡等で出土している。
22. 鎌・斧形・刀子形品は古墳以外では下総町治部台遺跡・東明神山遺跡といった製作遺跡や千葉市荒久遺跡、千葉市榎作遺跡、市原市草刈遺跡等の集落遺跡でも出土している。
23. チキリ・箆は栄町大畑Ⅰ遺跡、船橋市白井先遺跡、八千代市北海道遺跡、千葉市大森第1遺跡で出土している。
24. 垂飾品は琴柱状石製品の一種としてとらえられていたが、出土遺構が集落に限られることから古

Ⅲ 各論

墳出土品とは区別される。

亀井正道 「琴柱状石製品考」 [文献85]

田中新史 「東国の古墳時代出現期とその前後」 『東アジアの古代文化』46 大和書房 1986

鈴木英啓 「石製垂飾品」 [文献320]

県内では印西町向井新田遺跡、市原市潤井戸西山遺跡 [文献320] で出土した。最近、野田市桜台遺跡で発見された工房で垂飾品の未成品と考えられる台形様石製品を出土した [文献446]。古墳時代前期に属すると言うことで群馬県高崎市下佐野遺跡 [文献322] と同じ様にこの他に管玉も製作していると言うことである。

25. 文献53・65・94・414

26. 文献65・77・94・414

27. 古墳の副葬品からもこの時期に緑色凝灰岩から滑石への素材の転換が確認されている。

中司照世・川西宏幸 「滋賀県北谷11号墳の研究」 『考古学雑誌』第66巻第2号 日本考古学会 1980

千葉県内でも滑石製の腕飾類が古墳の副葬品として出土している（第13表参照）。緑色凝灰岩で腕飾類の製作を行っていた外小代遺跡（Ⅲ-3. 古墳時代の玉作参照）での技法が滑石製腕飾類の製作とどのように関係していたのか興味深い。

杉山晋作「特異な彫刻文のある石製腕飾」 [文献270]

28. 奈良・平安時代の石製紡錘車は玉類が出土した遺構でない場合は特に集成をしていない。しかし奈良・平安時代になると石製紡錘車の出土量が増加する傾向にある。この時期の製作遺跡は確認されていないのでこの点について今後検討の必要があろう。

29. 栗田則久 「綱原遺跡の成果」 [文献437]

30. 千葉市南二重堀遺跡63号住居址や市原市番後台遺跡44号住居址、小見川町阿玉台北遺跡B地点007号住居址例を石製模造品の古墳時代前期の出土例とし、県内の集落遺跡での初現としてとらえる論考 [文献402] もある。いずれも覆土中の出土で、出土した土器類も遺存状態が悪く投棄されたと考えられたり（南二重堀遺跡・番後台遺跡）、攪乱を各所に受けたり（阿玉台北遺跡）しており一級の資料ではない。製作遺跡が確認されているので可能性は否定できないが、これらの例をもって初現とすることは危険かと思われる。床面出土の良好な資料が確認されるのを俟ちたい。この他にも野田市二ツ塚古墳群18号址、沼南町片山古墳群内D地点遺跡003号址、佐倉市岩富漆谷津遺跡133号住居址、江原台遺跡113号址、市原市草刈六之台遺跡839号址等の例があったが、土器の量が少なく時期が不明瞭であったり、確認面や覆土から出土したものである。

31. 文献268

32. 文献363

33. 滑石製品の古墳への副葬、特に石枕や立花の使用についてはその分布がかなり限定されることから地縁的・文化的につながった集団の存在や政治的背景、製作集団との関係などからの論考がある。 [文献430・431]

34. 文献151

35. 『事業報告I』（財）香取郡市文化財センター 1990

36. 石枕の製作については佐原市山辺手ひろがり3号墳出土の石枕の下から滑石の破片が出土し、これが石枕と接合したことから「製作時に生じた破片が完成品に伴っているのは、その石枕が使用地から遠く離れた場所で製作されたのではなく、使用地の近隣で製作されたことを示唆している点である。製作地と使用地の近距離性は、石枕製作の時間的緊急性を補完し、死者の出現をもって初め

て発注がなされて石製品の製作が開始された」という興味ある見解がある [文献431]。

37. 文献352
38. 石田広美 「前原 I 遺跡」 [文献280]
39. 文献429
40. 文献251
41. 文献285
42. 阪田正一 「古墳時代中期の様相」 [文献285]
43. 石塚遺跡でも炉やピットの位置と関係なく、南壁側に作業場所が推定できる場合が多い。
44. 文献427
45. 文献94
46. 文献147
47. 種田齊吾 「小結」 [文献90]
48. 原田享二氏のご教示によると棒状品を分割して白玉を製作する例が佐原市玉作上の台遺跡や多古町多古台遺跡等で確認されているということである。6世紀前半の遺跡ということであるが、全国的にも確認されていない新しい技法であり注目される。
49. 相山林継 「石製模造品の未成品とその製作工程について」 [文献56]

Ⅳ ま と め

縄文時代の玉については、「Ⅲ-1. 旧石器～縄文時代の玉」において出土の概要、攻玉の技法についてふれさらに生産に関わる分類を行った。それにより攻玉による生産と、簡単な補修や再利用での消極的な生産の2分類に分けられることを示し、その後攻玉遺跡についての検討により、立地条件から見た原材料産地隣接型、原材料搬入型とに分類され、玉の流通面からは自給自足型、供給型、自給供給併存型に分類されることを提示した。これらの分類の中で県内の玉類生産を当てはめると当初の成品の搬入から次第に消極的な生産が行われ、後期に至って県南部地区産出の可能性のある滑石を利用した原材料産地隣接の攻玉が行われる様になってきたと概観できよう。またそれと別に、中期では銚子付近に産するコハクを利用した、原材料産地隣接の攻玉も一部で行われていたことがしられた。以前から言われていたことであるが、確実な攻玉工場の検出が未だにないことが今回も確認された。今後の調査・研究により工場の検出される可能性があることは十分に予想されることであるが、現段階では縄文時代の玉生産が非生業的な性格をもつとみられるため、恒常的な作業空間としての工場という遺構を必要としないのではないかという見解を提示した。今後、攻玉工場検出に期待がもたれる一方、工場遺構としては存在しないということもあり得ると考えてもよいだろう。銚子付近に産するコハクの攻玉遺跡が一か所だけでなくさらに確認される期待がもてることも申し添えて縄文時代の攻玉については論を閉じる。

弥生時代の玉は、出土例も少なく、今までに玉作遺跡・遺構の検出はなく集落内・墳墓等からの玉の出土が知られるのみであった。出土する玉類も管玉・勾玉を主とし、原材料も緑色凝灰岩・コハク・ヒスイ製が主体を占める。現段階では、古墳時代に見られる玉作につながるような兆候はみられず、成品の搬入による玉の入手が考えられる。ただ一点、コハクの勾玉の出土例は全国的にも非常に珍しく、それに関連して銚子周辺産のコハクを利用した在地の玉作工場の存在を想定したいが、現段階では玉作の検出の可能性も低くただ期待するだけに終わりそうである。

弥生時代の特徴的な玉である鉄石英製の管玉についても、何らかの分析・検討を要すると思われる。鉄石英の原産地が限定されることに加え、玉作遺跡も県外ながらある程度限定されるとみられるので原産地・製作遺跡との関連の把握により、流通・交易の一端が解明され、弥生文化の伝播・拡散についての糸口となる可能性をもっているといえよう。

古墳時代の玉作については、今回の外小代遺跡の資料検討により、原材料の石材から母岩の製作、大型剥片を剝離作出する荒割（工程）作業、荒割された剥片をさらに荒割する第2次・第3次の荒割作業、荒割剥片から形割品を分割作出する形割（工程）作業の段階を詳細に検討

IV まとめ

することにより母岩からの剥離、剥片からの剥離・分割による形割の工程が今までの「大和田・八代技法」とやや異なることが理解できた。すなわち「大和田・八代技法」でいわれていた、母岩から作出した大型（縦長）剥片から横長剥片を連続的に剥離し、その後両端を切断し形割品を作出するという工程だけではなく、「本郷技法」の分割の特徴や「烏山技法」との類似性の観察されることが指摘できる点である。

今回の分析・検討作業においてとらえられた技法は、南関東地域の玉作に広く認められる技法であり、同地域内の玉作技法の特徴であるといつてよいのではないか。また今までいわれてきた、各技法は関東地域に共通する技術基盤の中のバリエーションと見ることができるだろう。

今後は、あまり研究のメスが入れられていない、近隣の玉作遺跡である大竹遺跡の玉作工房についても、技法について今回のような検討を行い、その製作時期についても明らかにして、玉作遺跡間の関連・変遷についての解明が必要と思われる。下総町所在の大和田玉作遺跡群についても同様な検討を行い、工程上の共通点・相違点・製作時期について今ひとつ検討を行い、玉作遺跡間の関連の解明をはかることが必要と思われる。さらに県外に所在する、玉作遺跡にも同様な分析・検討作業の必要性を感じる。それらの分析・検討作業により古くから言われてきた下総国の玉作を通してみた遺跡間の関連が有機的に把握できるものとみられるからである。そして、これらの関東の玉作技法と、それ以外の地域の玉作技法との比較・検討により、関東地域の玉作遺跡が置かれていた全国的な位置づけの解明が行えるであろう。

古墳時代の滑石製品の製作は、成田市石塚遺跡、八千代市北海道遺跡の2遺跡の資料の分析を中心として行い、石塚遺跡の白玉・有孔円板・剣形品・勾玉形の石製品、北海道遺跡の白玉・剣形品・勾玉形の石製品の製作工程の復元に努めた。

その中で、白玉・勾玉形の製作工程についてまとめたものがえられた。白玉の製作にあたって、母岩からの荒割工程の復元は剥離痕等の観察が石質のために非常に困難であり、技法の復元はできなかった。形割品から後の工程の復元についての成果では得るものがあつた。白玉は、石塚遺跡では板状研磨品を分割することで形割品を作出している。形割未成品から成品までの工程で、上下両面が研磨されており、板状研磨品の出土がこの製作法を物語るといえよう。板状研磨品を白玉の直径にあう大きさの多角形に分割し、これに側面調整を施し、穿孔と側面研磨を行っている。穿孔工程の未成品は、ほとんど方形を呈するのが特徴である。一方、北海道遺跡の例では、研磨しない板状品の分割によって形割品を作出している。研磨しないで板状品を分割すると、研磨の手間が省けるので効率的な製作工程といえようが、そのためには、板状品の段階で上下面が平坦なものが得られることが必要で、石材への注意が必要であろう。以上の2通りの工程が白玉製作の大きな特徴的方法であるが、それ以外にも幾通りかの製作工程が復元されている。これらの製作工程は、独立してみられるものではなく幾通りかの方法が混在して白玉を製作していて、製作工程別による資料の比率等の検討が、製作法の復元に際し、分

類の重要な要素となるようである。

勾玉形の模造品の製作に関しては、半月形の研磨品に抉りを入れて整形したもの、形割の段階で勾玉の形態に整形し、研磨して仕上げていくものがみられた。抉りを入れる際には、半月形の未成品の腹部に切削工具により、C字形に整形するものと、山形に2か所の抉りを入れE字形にするものとの2通りの方法が観察されている。

これらの石製模造品の製作は、玉作からの伝統的な工程や技法を引継ぎながら、その製作する成品が変化してきたのは勿論、生産という行為の置かれている社会的状況についても大きな変容がみられると考えられる。遺跡数・工房数の急激な増加、地区の広がり、専門的な生産から専門的と兼業的な生産への分化等が、その結果として反映されていると見られるが、変容の根底にあるものを、その現象から読みとるのは重要であるが非常に困難なことである。

V章で玉類の原材料となる岩石・鉱物等の性質・特徴等についての論考をいただいたが、それによっても岩石類の同定作業は困難が多く、専門家による石材同定の必要性を強く感じた。石材の種類によって産地が異なり、そのため生産遺構である工房の認識についても影響をあたえることが考えられる。今回の検討・分析作業では成し得なかったが、玉類の生産遺構である工房出土の資料と、最も重要と見られる消費地である古墳からの出土資料とを結び付けるような方法に関して、何らかの科学的な方法によって同一性が確認出来ることが望ましい。原産地と生産地、さらに消費地との流通という観点からの解明は、石材の原産地同定が非常に困難であることから、現段階では非常に困難な課題であるといえる。

ここに結びとして顧みると、今回の紀要の編集にあたっては、基礎資料の集成と、製作技法を主とした工程の復元ということを主題にして作業を進めたのであるが、製作技法の復元については、出土資料を中心とした資料の分析にあたって石器の製作技術についての見識が求められ、また岩石・鉱物の知識が求められる結果となった。今後同様な研究の際には各分野の専門家の協力を求めていく必要性をここに強く訴えたい。

今回の作業の結果導き出されたものは、限られた遺跡の一部分の情報にすぎなかったかもしれない。これを玉作に関する基礎的資料の一部として活用して頂ければ幸いである。

V 特 論

千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察

高橋直樹（千葉県立中央博物館）

A. はじめに

本項では、この報告書で対象とされている、縄文時代～古墳時代の遺跡から出土する玉類及び石製模造品に関して、主にその原石の原産地候補について述べることにする。ここで、原産地とは、その岩石を供給した根源の地域のことをいうことにし、当時の人がその岩石を実際に手に入れた場所の意味では使わないことにする。流通等の人為的な行為は考えず、純粋に地質学的、岩石学的な観点から検討を行う。

B. 玉類の岩石種について

今回の検討の対象とする玉類の岩石種としては、すでに報告されているものの中から、量的に多産するもの、特徴的に見られるものを主に取り上げる。それは、およそ次のようなものである。

- ① 緑色（細粒）凝灰岩〔碧玉〕 green (fine) tuff
- ② 蛇紋岩 serpentinite
- ③ 滑石（滑石片岩） talc (talc schist)
- ④ 緑色（塩基性）片岩 green (basic) schist
- ⑤ 琥珀 amber
- ⑥ ひすい（ひすい輝石岩）〔硬玉〕 jade (jadite)

なお、千葉県出土の玉類のうちで、実際に筆者が実物を確認したものは限られており、同じ名称の岩石でも、性質が多少異なるものが存在することが予想される。それらは、原産地が異なることも十分考えられる。そのため、岩石種の記載に当たっては、ある特定の玉類についてではなく、その岩石種の一般的な説明を行うことにし、その岩石種のもつバリエーション（その岩石の名称が示す性質の範囲）についてもできるだけ触れるようにした。

以下、それぞれの岩石種について、岩石学的な説明を行う。

① 緑色（細粒）凝灰岩

基本的には、火山活動に伴い火口から噴出した火山灰が堆積し、固結してできた岩石である。もともとは、細粒の火山ガラスを主体とし、長石、輝石、石英等の微小な結晶及び結晶片を含む岩石である。岩石が緑色を呈するのは、これらの構成粒子が、緑泥石などの緑色を呈する鉱

物に変質しているからである。このような変質は、特に海底の火山活動に伴って存在した熱水の作用によるものと考えられている。すなわち、これらは海底火山活動の生成物である。この岩石が一般に硬質で、まれには珪質の（チャートほどの硬さをもつ）岩石も見られるが、これは、この熱水がかなり珪酸分に富んでおり、岩石が珪質化しているためである（粒子間を微細な石英が充填する）。この熱水による変質作用はかなり不均質に起こると見られ、岩石の硬さ（珪化作用の程度）には接近した岩体の間でも、非常にばらつきがある。緑色の程度に関しては、一般に原岩が玄武岩～安山岩質のものは比較的濃い緑色で、安山岩～流紋岩質のものは薄い緑色である（石英等の無色鉱物の割合が増えてくるため）。熱水変質の程度にもよるが、どちらかといえば、原岩の化学組成の影響の方が大きいようである。なお、比較的新鮮な部分は濃い緑色でも、風化した部分は緑色が薄れることが多いので注意を要する。

また、細粒凝灰岩とはいえ、実際には、凝灰岩を構成する火山ガラスや鉱物粒子の粒度はさまざまであり、かなり細粒のものから粗粒凝灰岩に近いものまで存在する（便宜上は1/16mm程度を境界とすることがある）。また、火山ガラスと鉱物結晶、岩石片の割合にもいろいろな場合がある。いずれにしろ、岩石が緑色を呈することには変わりはないが、粗粒な粒子が増えれば、肉眼でもその存在がわかるようになる。

② 蛇紋岩

最も珪酸分（ SiO_2 含有量）の低い超塩基性火成岩である。もとは、かんらん岩というかんらん石、輝石を主体とした岩石であるが、水を含んで変質し、それらの多くが蛇紋石に変わっている。かんらん岩の場合は、かんらん石や輝石が肉眼で確認できるほど結晶が大きい（径1mm～数mm）、蛇紋岩に変質すると、結晶はほとんど目立たなくなる（顕微鏡下では、かんらん石結晶の割れ目に沿って蛇紋石化が進み、それぞれの結晶がいくつかの細かい破片に分離した状態となっている。全体的に見ると、繊維状の蛇紋石が基質のようになり、その中にかんらん石の破片が浮いているような組織である）。全体に塊状で、目立った方向性はないが、風化した岩石では、網目状の細かい脈（割れ目）が浮き出て見えることがある。

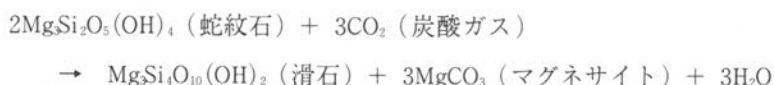
日本で産出する蛇紋岩の多くは、斜方輝石かんらん岩（ハルツパージャイト）とダンかんらん岩（ダナイト）を原岩としたものである。前者は、主にかんらん石と斜方輝石からなるかんらん岩で、後者はほとんどかんらん石だけからなるかんらん岩である。蛇紋岩でも比較的新鮮な部分は、前者が濃緑色であるのに対して、後者は緑～黄緑色である。風化すると、緑色が薄れてきて、場合によっては、黄褐色～赤褐色に変わる場合もある。岩石の硬さは、新鮮な部分は非常に硬いが、風化した部分では若干硬度が落ちる。また、後述のように、滑石化が進むと、非常に軟らかくなる。

蛇紋岩の原岩であるかんらん岩は、本来は地殻より下のマントル上部をつくっている岩石であり、それらが、固体の状態で、断層等を伝って地上に押し上げられてくる。その際には、岩

石に巨大な力が加えられるため、岩体は大小のブロックに破碎されていることが多い。また、それらの破片どうしがこすれあい摩耗して、それぞれのブロックは光沢のある鏡肌で取り巻かれているのが一般的である。

③ 滑石（滑石片岩）

蛇紋岩の一部が変質して生じた岩石と考えられている。蛇紋岩を構成する蛇紋石が、変質の際に供給された炭酸ガスと結びついて、滑石が生成すると推測されている（平野・藤貫, 1985 など）。



岩石中の構成鉱物は、滑石を主体とし、そのほかに、炭酸塩鉱物（たとえばマグネサイト、ドロマイト）や緑泥石等が含まれるほか、八面体の自形の磁鉄鉱の結晶が生成している場合がある（豊・坂巻, 1989 など）。

この岩石の最も大きな特徴は、滑石はモース硬度が1で、最も柔らかい鉱物のひとつであり、岩石自体が非常に柔らかいものとなっていることである（爪でも傷がつく）。岩体全体では、方向性のある片理を顕著に示す場合が多く、縞状構造はあまり発達せず、薄い繊維状となっている。また、透明感のある真珠光沢～油脂光沢がある。岩石の色は、比較的濃い緑色から、白色に近いものまで様々である。緑泥石の含有量が多いほど、緑色が濃くなると考えられる。また、炭酸塩鉱物の割合が大きい部分は、塊状であることが多く、岩石の色も灰色を呈する。

なお現在では、従来「滑石」と呼ばれていた、この $\text{Mg}_3\text{Si}_4\text{O}_{10}(\text{OH})_2$ の組成をもつ鉱物の日本語名称としては、「滑石」ではなく、その英語名である「タルク」を使用することが多いようである。というのは、漢方薬の中に「滑石」と呼ばれる石の薬があり、それは Halloysite $[\text{Al}_2\text{Si}_2\text{O}_5(\text{OH})_4]$ という全く別の鉱物であることから、混乱を招く恐れがあると判断されたためである（益富, 1987）。

④ 緑色（塩基性）片岩

もとの岩石が強い圧力を受けて変化した広域変成岩の一種である。一般に、原岩の種類の違いによって、さまざまな種類の変成岩が生成する。緑色片岩の場合は、塩基性火成岩（玄武岩、玄武岩質凝灰岩など）が原岩である。もともとは、斜長石、輝石、かんらん石、火山ガラスなどから成る岩石であるが、圧力のために再結晶作用を受け、緑泥石、緑れん石、石英などが生じている。緑色を呈するのは、緑泥石が大量に生成しているためである。また、強い圧縮を受けていることから、全体的に鉱物が平行配列し、岩石が層状に薄くはがれる性質を持つことが多い（片理）。また、同一種の鉱物が集合する傾向があるため、緑色の鉱物からなる層と、白色（透明）の鉱物からなる層が縞模様を示すこともある（縞状構造）。

一般に、変成岩の場合は、原岩が同じでも、受ける圧力と熱の程度によって、生成される鉱

V 特論

物種に違いが生ずる。緑色片岩の場合は、変成度としては比較的低い方の部類に入るが、岩石名としては非常におおざっぱなものであり、その中には構成鉱物が異なるものも多い。狭義の緑色片岩は、緑れん石アクチノ閃石片岩と呼ばれ、緑泥石、緑れん石、アクチノ閃石、曹長石の組み合わせで特徴づけられる岩石である（橋本, 1987）。そのほか、パンペリー石やローソン石を含むやや低変成度の岩石、藍閃石を含むやや高変成度の岩石も、広義の緑色片岩に含まれている。

なお、砂岩や泥岩など、一般の^{さいせつ}砕屑岩が広域変成作用を受けた場合には、黒色片岩（緑泥石白雲母片岩、ざくろ石緑泥石白雲母片岩など）が生成する。

⑤ 琥珀

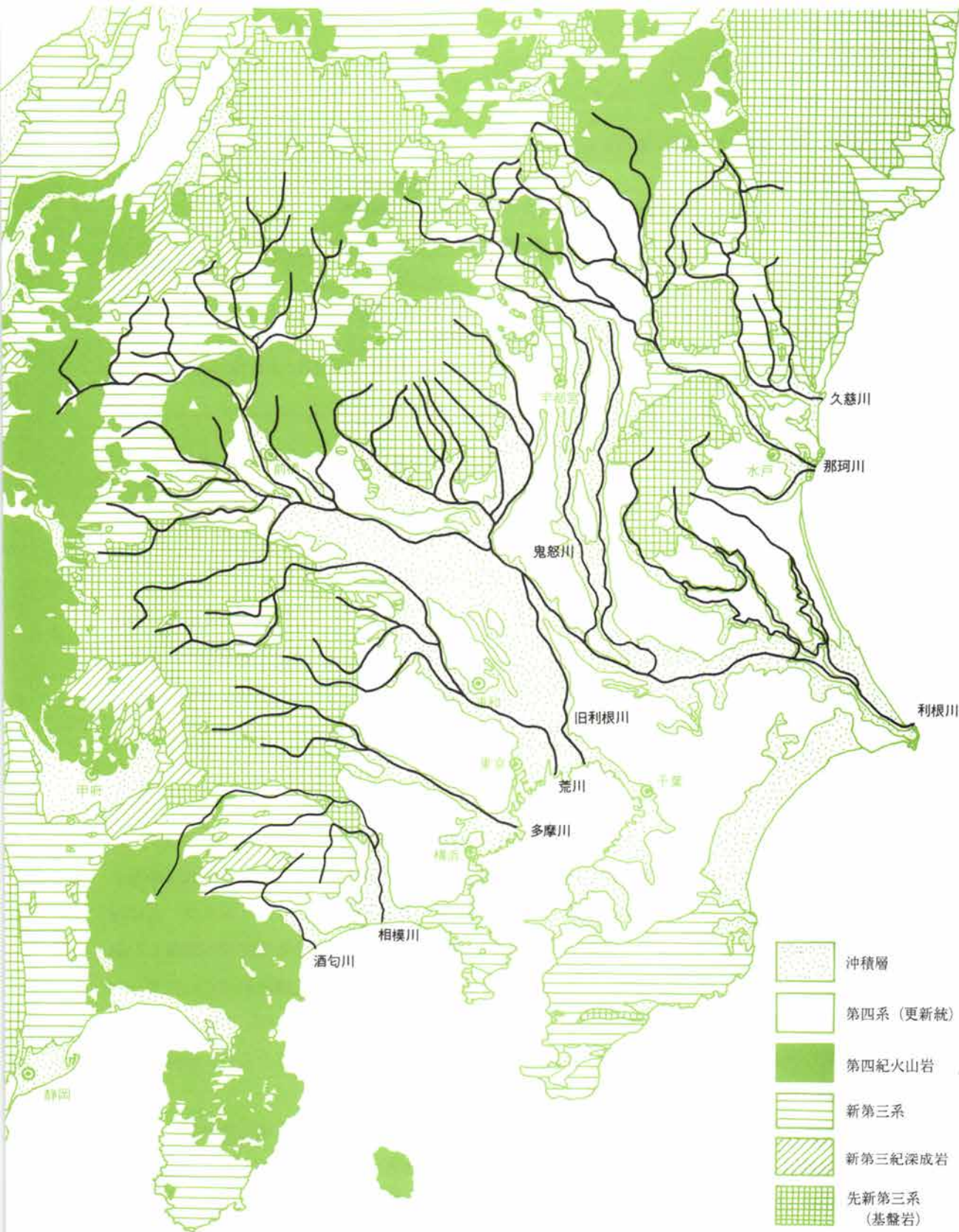
樹木の樹脂（いわゆる“やに”）の化石であり、有機物であって岩石や鉱物ではない。組成としては、数種の樹脂、コハク酸、揮発性油などの混合物である。黄色～褐色で透明ないし半透明である。場合によって昆虫や植物片が含まれる。樹種としては、マツ科（マツ、モミ、トウヒなど）が多いようであるが、ナンヨウスギ科など他の樹種も見られる。化石であるので、大きな岩体としては産出せず、地層中に塊状に含まれて産出する。大きいもので数10cm程度であり、普通はにぎりこぶし大以下のものが多い。琥珀を産出する地層の時代は、樹脂を生成するような硬い球類をつける裸子植物が出現した中生代中頃以降で、植物化石であることから、陸成（淡水成）ないし浅海成の地層から主に産出する。

⑥ ひすい（ひすい輝石岩）

ひすい輝石は、アルカリ輝石類（ナトリウム、カリウム等のアルカリ金属元素を主成分とした輝石。火成岩に普通に含まれる輝石は、マグネシウム、鉄、カルシウムを主成分としている）のひとつである。低温で非常に高圧の変成作用を受けた岩石中に出現する（藍閃石片岩相）。特に石英を伴う場合は、かなり高圧の変成作用を受けている。このような藍閃石片岩相の変成を受けた変成帯の岩石中には、造岩鉱物のひとつとして多少のひすい輝石が広く産するが、ひすい輝石を多量に含むひすい輝石岩が、蛇紋岩中の大小の岩塊として産出する場合がある（その蛇紋岩自体も、変成帯中に存在するものであることが多い）。このようなひすい輝石岩が、一般に「ひすい」とよばれている。色は、白色、緑色、または白色の地に緑色が入ったものなどである。ひすい輝石自体は無色透明であり、他の金属成分（鉄、クロムなど）を含むと着色する。別種の鉱物（透緑閃石など）が共存して、緑色を呈することもある。通常は、緻密な繊維状結晶の集合体であり、硬度がそれほど高くないわりには（6.5～7、石英と同程度）、非常に割れにくい性質をもっている。

C. 玉類の各岩石種の出産地について

以上述べてきた玉類をつくる各岩石の、主に関東地方における分布状況について検討する。



第41図 関東地方の地質図

第16表 関東地方の各地質区に産出する主な岩石

地質区分	産出する主な岩石
沖積層	低地（現河床、河成平野、海岸平野等）の堆積物 さまざまな種類（後背地に規制された）の礫を含む
第四系 （更新統）	段丘堆積物等 さまざまな種類（後背地に規制された）の礫を含む
第四紀火山岩	玄武岩、安山岩、石英安山岩、流紋岩、軽石
新第三系	緑色凝灰岩、軽石凝灰岩、砂岩、泥岩、頁岩、珪質頁岩、玄武岩、安山岩、 石英安山岩、流紋岩
新第三紀深成岩	花崗岩類、石英斑岩
先新第三系 （基盤岩）	硬砂岩、頁岩、チャート、石灰岩、緑色岩（玄武岩）、結晶片岩類、蛇紋岩、 花崗岩類、石英斑岩、流紋岩

なお、筆者が現地を確認できたケースは限られていることから、主として既存の文献と一般的な地質学的背景から得られる情報をもとに記述し、それに若干の筆者の調査結果をつけ加えていくことにする。なお、今回の報告においては、実際に遺跡から出土した玉類の科学的分析は行っておらず、それをもとに原産地候補地の岩石と比較検討する段階までには至っていない。その点に関しては今後の課題である。

① 緑色（細粒）凝灰岩

岩石の説明の項で述べたように、緑色凝灰岩は海底火山活動が活発であった地域に産出する。このような火山活動は、日本列島の地史の中でも限られた時期に起こっており、それは新第三紀中新世である。この時代の火山活動を「グリーントフ火山活動」（“グリーントフ”とは緑色凝灰岩のこと）、このような火山活動が起こり、緑色凝灰岩を主とする噴出物が堆積した地域を「グリーントフ地域」と呼ぶ（藤田, 1970など）。すなわち、緑色凝灰岩はこのグリーントフ地域に産出する。なお、グリーントフ地域には、緑色凝灰岩のほかに、玄武岩、安山岩（黒色、灰緑色、灰青色など、第四紀火山とは岩石の色や緻密さなどが異なる）、流紋岩などの火山岩類、珪質頁岩などが特徴的に産出する。

関東地方には、新第三紀中新世の地層が広く分布するが、それらは火山噴出物が厚く堆積している地域、つまりグリーントフ地域と、火山活動はほとんど起こらず、主として一般の碎屑性堆積物（砂や泥）からなる非グリーントフ地域に分かれる。

グリーントフ地域は主に北関東地域と丹沢山地である。主な場所としては、茨城県北部大子一山地域（久慈川・那珂川水系）、栃木県東部の烏山一茂木地域、栃木県西部の塩原地域（那珂川水系）、宇都宮一日光地域（鬼怒川水系）、群馬県北部の赤谷川・四万川流域、太田

市付近の八王子丘陵（利根川水系）、並びに、神奈川県西部の丹沢山地、大磯地域（相模川・酒匂川水系）である。丹沢山地を除く北関東地域は、層序や火山活動の時期、性質などがよく似ており、同じような地質環境の下で同時期に形成されたと考えられる。丹沢山地は、伊豆半島と共に、伊豆—マリアナ島弧系起源の地質体と推定されており、日本列島の他のグリーンタフ地域とは性質を異にしている。

また、関東山地北部の碓氷—甘楽地域、山地東縁の藤岡—児玉地域、比企丘陵、岩殿丘陵、五日市盆地及び山地中部の秩父盆地は、緑色凝灰岩を挟んではいるが一般の碎屑岩が主体であり、準グリーンタフ地域とされている。堆積物や火山活動の時代も新第三紀中新世中期～鮮新世のものが多く、グリーンタフ地域が中新世前期～中期の火山活動が卓越しているのに比べると、活動時期が若干遅れている。

三浦—房総半島は非グリーンタフ地域であり、新第三紀中新世の堆積物中には緑色凝灰岩はほとんど含まれない。ただし、房総半島南部の嶺岡山地を構成する古第三紀の嶺岡層群中にわずかに緑色凝灰岩が産出する。たとえば、鴨川市嶺岡浅間白滝神社付近、富山町平久里中などである。これらは、時代が古く、いわゆるグリーンタフ火山活動とは異なるが、基本的には海底の火山活動に伴って形成されたものと考えられる。

なお、図に示したのは新第三紀（主に中新世）の堆積物全体の分布であり、緑色凝灰岩のみの分布を示したものではない。すなわち、新第三紀の堆積物としては、緑色（細粒）凝灰岩を始め、（緑色）軽石凝灰岩、火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩などの各種の火山噴出物のほか、一般の礫岩、砂岩、泥岩（頁岩）などの碎屑岩が含まれ、それらが地層として複雑に繰り返し重なっているわけである。緑色（細粒）凝灰岩だけを取り出して地図上に示すことは不可能である。このことは、緑色（細粒）凝灰岩からなる玉類の産地同定の困難さをも示している。つまり、あるひとつの地域の中でも、緑色（細粒）凝灰岩の単層（一枚の地層）は多数存在することが予想され、それらの一枚一枚をチェックすることは難しいからである。しかも、緑色凝灰岩は堆積岩であるため、化学組成からのアプローチも非常に難しい。もともと変質岩であるうえに、風化や、異質物の混入などにより、火山噴出物本来の組成が損なわれている可能性が高く、また、一つの単層内での組成の均一性にも不安が残るからである。この困難さは、ある地域内だけではなく、それ以前に地域間の差異を見いだそうとする際にも当然言えることである。産地同定の拠り所に非常に乏しい岩石である。

② 蛇紋岩・③ 滑石

各岩石の説明の項で述べたように、日本では滑石はほとんど蛇紋岩に伴って産出することから、両者を一緒にして考察することにする。なお、滑石が産出する場所には必ず蛇紋岩が近くに存在するが、逆に蛇紋岩があるからといって、必ず滑石が伴っているとは限らない。つまり、滑石産地は、蛇紋岩産地の中に完全に含まれるかたちとなる。そこで、本項では、主として蛇

紋岩の産地を中心に述べ、それに付随して滑石の産出程度についてつけ加えていくこととする。

関東地方における蛇紋岩の分布は、大きくみて4つの地域に絞ることができる。第1は、関東山地北部地域、第2は群馬県北部地域、第3は茨城県北部日立地域、第4は房総—三浦半島地域である。

第1の関東山地北部地域は、埼玉県越生町から長瀨町周辺を通り、群馬県鬼石町、藤岡市周辺にかけての範囲で、地質学的に「三波川帯」と呼ばれている地域である。この地帯は、日本列島の土台をなす地質体の一つで、中生代に形成されたものである。この地質体の特徴は、広域変成作用を被っていることで、岩石としては、結晶片岩類（黒色片岩、緑色片岩など）がほとんどを占めている。蛇紋岩は、これらの結晶片岩類の中に不規則に点々と含まれており、一つの岩体の大きさはせいぜい2 km程度で、側方にあまり連続しない。三波川帯の南側に隣接して分布する「秩父帯」と呼ばれる地帯は、広域変成作用をほとんど受けていない地質体で、こちらには蛇紋岩はほとんど含まれない。三波川帯を構成する地層が地下深くに持ち込まれ、高い圧力の下で広域変成作用を受けた際に、もともと地下深くに存在するかんらん岩（蛇紋岩）が地層中に挟み込まれたものと考えられる。これまでの研究で、ある程度大きい蛇紋岩岩体の分布は示されているが、地図上に表現できないような小さな岩体を含めて、この三波川帯の中では、普遍的にどこでも蛇紋岩が含まれると考えてよいと言える。そのようなわけで、蛇紋岩原石産地候補として、図では、主として三波川帯の分布域を示し、わかる範囲で蛇紋岩の分布を示した。なお、三波川帯の南東部には玄武岩質の変質火山岩、火山砕屑岩を主体とした「御荷鉾緑色岩類」が分布しており、結晶片岩を主とする地域とは性質を異にしているが、この地域内にも蛇紋岩類が同様に点在する。そのため、この地域も前述の結晶片岩分布域（「三波川帯プロパー」）に加えて、広義の三波川帯として図示してある。

河川系としては、埼玉県越生町及び長瀨町周辺は荒川水系、群馬県鬼石町周辺は利根川支流の神流川水系、群馬県藤岡市周辺は同様に利根川支流の鮎川水系である。これらの河川の河床礫中にも各種の結晶片岩に混じって、蛇紋岩の礫が認められる。

滑石に関しては、どの蛇紋岩体でもある程度の滑石含有が認められるようである。最も有名なものは群馬県藤岡市鮎川上流の上日野地区で、かつてはここで滑石が鉱石として大規模に採掘されていた経緯がある。現在ではそのすべてが廃業し、採掘跡はゴルフ場として造成されるなどして、ほとんど見ることができない。現在、埼玉県長瀨町周辺で、蛇紋岩（蛇灰岩）および滑石の採掘が若干なされている。蛇紋岩体のどの部分が滑石化しているかについてはあまり情報がないが、滑石の成因から考えると、おそらく岩体の周辺部、すなわち周囲の岩石との接触部に多いと予想される。河床礫としては滑石はそれほど多く見られない。蛇紋岩本体に比して量的に少ないことと、岩質が非常に柔らかく摩耗が激しいことが要因と考えられる。

なお、埼玉県秩父市西方の小鹿野町からさらに西方の長野県佐久町にかけて「山中地溝帯」

と呼ばれる中生代白亜紀の浅海成の地層からなる地質体が細長く分布するが、この地質体の西部に、断層に沿って蛇紋岩がわずかに分布している。その一部が、利根川支流神流川最上流の十石峠付近に露出している。この地質体中の蛇紋岩は、三波川帯中の蛇紋岩とは性質（鉱物組成、化学組成など）が異なることが報告されている（平野・飯泉, 1973）。滑石も伴うようである。

第2の群馬県北部地域は、主に沼田市北方の利根川支流片品川上流地域及び水上町北部の谷川岳周辺地域である。具体的には、片品川最上流の至仏山、その少し下流の笠科川沿いの地域、さらに下流の白沢村岩室付近、沼田市利根川支流薄根川上流地域、並びに谷川岳頂上周辺である。この地域は、地質学では「上越帯」と呼ばれ、やはり日本列島の土台を形成する地質体のひとつである。この地質体の構成は、蛇紋岩類、塩基性火成岩類（オフィオライト—かんらん岩（蛇紋岩）、斑れい岩、玄武岩などが複合した岩体で、海洋地殻の断片と言われている）、中生代の非海成—浅海成堆積岩類からなり、それらが複雑に分布する。蛇紋岩類には、わずかに結晶片岩類を伴う。蛇紋岩が主体で結晶片岩類は量的に少ないことから、三波川帯と同様に結晶片岩中に蛇紋岩が割り込んだとする考えと、結晶片岩類が逆に蛇紋岩中に取り込まれているとする考えがあるが、いずれにしろ形成メカニズムにはそれほど相異はないと思われる。至仏山では蛇紋岩が延長10km、幅5kmに渡って露出しており、結晶片岩類はその周囲にわずかに存在するだけである。塩基性火成岩類の場合は、数種の岩石が複雑に分布し、それぞれの岩石がどのように分布するかは現在のところ定かでない。ただ、この岩体の中では、普遍的に蛇紋岩が存在する可能性がある。河川系は前述のように、いずれも利根川の支流である。

滑石は、蛇紋岩に伴って産出することが報告されているが、量的にはわずかであり、鉱石として採掘された例はない。また、蛇紋岩体のどの部分から滑石が産出するかの情報は得られていない。河床礫としても非常に少ない状況である。

第3の茨城県北部日立地域の場合、蛇紋岩は日立市と常陸太田市の間に広がる山地の比較的限られた場所に産出する。地質学上は阿武隈山地の南端に当たり、東北地方の要素である。主な構成員は日立変成岩類である。蛇紋岩類は山地西縁の西堂平^{にしどうひら}変成岩類と山地の大部分を占める日立変成岩類の間に両者を隔てるように細長く分布している。この西堂平変成岩類と日立変成岩類の関係がはっきりしておらず、蛇紋岩がどのようにして現在の位置にもたらされたかについては諸説がある（たとえば、嶋岡・渡辺, 1976, 津江ほか, 1981）。河川系は、久慈川支流の里川水系である。

滑石は比較的多量に存在し、ここでもかつて鉱石として採掘された経歴があり、現在、採掘場跡も残っていて、滑石を採集することができる。鉱床周辺の詳細な学術調査もなされており、滑石の産出状況が明確になっている（平野・藤貫, 1985）。

第4の房総—三浦半島地域の場合、房総半島では、鴨川市の嶺岡山地に広く分布し、その西

V 特 論

方の富山町から鋸南町にかけても散点的に分布する。三浦半島では横須賀市から逗子市にかけて、やはり小規模に点在している。地質学上は「葉山—嶺岡構造帯」（房総半島内では単に「嶺岡帯」と呼ぶことがある）と呼ばれ、日本列島の土台をつくる地帯のひとつである「四万十帯」に属すると言われている。形成時期は古第三紀であり、これまでの3つの地域に比べて、時代が新しい。構成は、蛇紋岩を主体とし各種の塩基性火成岩を含み、やはりオフィオライトと考えられている。嶺岡山地では断層に沿った細長い分布を示し、他の小規模な岩体も、断層に沿って、より新しい時代の地層の中に貫入していると考えられる。産状としては、大きな岩体ではなく、細かく砕かれた礫状を呈しており、それぞれの礫の外周は鏡肌で取り巻かれている。

滑石の産出報告はほとんど見られない。時代が新しいこともあり、他の3地域とは、被った地質現象の性質が異なるためとも考えられる。

なお、これまでの調査で、遺跡から産出する玉類のなかで、蛇紋岩に関しては、房総半島の嶺岡山地周辺を原産地とする報告がなされている（寺村・谷川、1986）。今回、報告書を作成するにあたり確認した玉類の中で、比較的特徴のある滑石が存在する。それは、透明感がある淡い緑色の岩石中に黒色の斑点が見られ、さらに自形の磁鉄鉱の結晶が含まれるものである（例えば、市原市武士遺跡（縄文時代晩期）、千葉市榎作遺跡（古墳時代）など）。このような、透明感のある緑色を呈する滑石は、前述の蛇紋岩の種類で言うと、ダンかんらん岩（ほとんどかんらん石からなるかんらん岩）が起源であろうと推定される。ダンかんらん岩を起源とする蛇紋岩は、先に述べた4地域のいずれにおいても産出する。量的には群馬県北部地域が最も多い。

嶺岡山地周辺では、斜方輝石かんらん岩起源の蛇紋岩が大部分であるが、一部にダンかんらん岩を起源とするものが見られる。後者は、前者に含まれるようにして産出する。現在知られているのは、鴨川市二子、富山町平久里中、鋸南町下佐久間である。これらの岩石中には磁鉄鉱の自形結晶が顕著に見られる。また、この岩石は、寺村・谷川の報告のように、加茂川河床、曾呂川河床、平久里川河床でも確認された。嶺岡山地周辺では、前述の3地域以外でも、潜在的にダンかんらん岩起源の蛇紋岩を含んでいると推測される。ただし、これらの蛇紋岩はあまり滑石化しておらず、かなり硬い岩石であり、透明感にもやや欠ける。

房総半島以外では、日立地域の滑石は自形の磁鉄鉱結晶を多く含んでおり、比較的透明感のある岩石を産出する。ただし、片状が顕著で、塊状のものに乏しい（ただし、河床礫は確認していない）。関東山地北部地域及び群馬県北部地域は、透明感のある蛇紋岩はよく産出するが、磁鉄鉱結晶をあまり含まない。いずれも、条件に少しずつ欠けている。

ところで、群馬県の古墳時代の遺跡から出土する滑石製玉類の原産地は、先の第1の地域である関東山地北部の利根川支流鮎川、鎗川流域であることが示されているほか（女屋、1988）、

埼玉県や千葉県北部の玉作遺跡での原石入手に、利根川や荒川を利用した船運を重視する考えもある(熊野, 1988)。これもやはり、関東山地北部の三波川帯を原産地と考える立場である。

以上のことから、千葉県内の遺跡から産出する蛇紋岩及び滑石製玉類の原産地は、嶺岡山地周辺の可能性もあるが、そうではないことも十分に考えられる。特に、滑石製玉類に関しては、嶺岡山地ではない可能性が高いと思われる。蛇紋岩製玉類については、千葉県内でも、北部と南部で、異なる原産地を持つことも考えられる。

④ 緑色片岩

岩石の説明の項で述べたように、このような片岩類は、広域変成作用を被った地域に産出する。広域変成作用を受けているのは、ほとんどは、日本列島の土台をつくる新第三紀以前の地質体に限られる(一部例外あり)。関東地方では、関東山地北部の三波川帯(前述)、群馬県北部の上越帯(前述)、茨城県北部日立地域の日立変成岩(前述)、神奈川県西部丹沢山地の変成岩類等である。また、房総半島南部の嶺岡山地でも、わずかに変成岩類が見られる。

蛇紋岩分布域とよく似ているが、これは、蛇紋岩の項で述べたように、もともと広域変成作用は、地層が地下深くまで持ち込まれることが条件であり、その際に地下深くに存在する蛇紋岩(かんらん岩)を取り込む可能性が高いからである。

三波川帯は、最も代表的な変成帯であり、広域変成岩が広く分布する。黒色片岩(砂質・泥質片岩)、緑色片岩を主体とし、構成鉱物によりいくつかに変成分帯がなされている(たとえば Seki, 1958、Toriumi, 1975 など)。

上越帯は、変成岩の分布はそれほど広くない。主な産地は、群馬県川場村薄根川流域、至仏山周辺、谷川岳頂上周辺などである。黒色片岩、緑色片岩などが見られる(Hayama et al., 1969 など)。この場合、変成岩は蛇紋岩中に取り込まれるようにして分布する。中生代白亜紀に花崗岩類の貫入を受けて、接触変成作用を被っている部分もある。

日立変成岩は、日立市西部の丘陵地域に比較的広く分布する。泥質片岩、緑色片岩(塩基性片岩)を主体とし、特に緑色片岩が卓越している。ここでも、構成鉱物によっていくつかに分帯されている(Kuroda, 1959 など)。また、やはり花崗岩類の貫入により、接触変成作用を被っている部分が存在する。

丹沢山地では、変成岩は丹沢山地の中心より南側に広く分布している。水系では酒匂川流域である。また、山地中心より北側、相模川支流の道志川上流地域にわずかに分布する。緑色片岩が多いが、この地域は、グリーンタフ地域であり、変成岩の原岩は熱水変質作用を受けて形成された緑色凝灰岩であることが多い。変成岩の鉱物組成にもその特徴が現れており、その熱水変質作用を含めた、変質—変成作用の分帯がなされている(たとえば、丹沢団研グループ, 1977)。なお、この地域も、石英閃緑岩類の貫入を受けて、接触変成作用を被っている部分がある。

嶺岡山地で変成岩が確認されているのは、鴨川市の鴨川漁港付近の屏風島及び金島、鴨川市久保山北部、鴨川市嶺岡浅間、富山町平久里中沢向及び上ノ台などであり、大きさは数10cm～数10m程度である（兼平ほか, 1968、荒井, 1987MSなど）。いずれも蛇紋岩中に取り込まれていると考えられる。岩質は塩基性片岩（緑色片岩、角閃石片岩）、珪質片岩（ざくろ石石英片岩）、砂質片岩（黒雲母片岩）が確認されており、構成鉱物も詳細に検討されている（大胡・廣井, 1991など）。なお、変成岩の産状を考えると、上記の場所以外にも、蛇紋岩分布域内には潜在的に含まれている可能性がある。

ところで、岩石の説明の項で述べたように、変成岩の同定の場合は、その構成鉱物、つまり変成の程度（受けた温度、圧力の違い）が大きな指標となる。玉類をつくる岩石の構成鉱物の詳細が確認できれば、各地の変成岩の構成鉱物と比較することにより、原産地の候補はかなり絞られると思われる。ただし、同じ程度の変成作用を被っている地域も複数存在するため、どれにあたるかの確定は難しい。また、同一変成帯内では、同じような鉱物組成を示す範囲は比較的広いいため、細かい産地同定は困難である。

⑤ 琥珀

前述のように、琥珀は主に中生代以降の非変成の浅海成～淡水成の地層から産出する。関東地方において琥珀の産地として知られているのは、ほぼ千葉県銚子地域のみである。銚子地域では、東側の海岸沿いに、中生代白亜紀前期の浅海成の地層が分布しており、地質学上は「銚子層群」と呼ばれている。これらの地層は、全体的に植物化石を多量に含んでおり、琥珀も泥質の地層を中心に、比較的普通に見られる。特に犬吠埼南方の西明浦及び君ヶ浜北部の海鹿島周辺で割合に多く産出する。爪の先程度の大きさのものが多いが、まれににぎりこぶし大前後のものが見られる。

銚子地域以外では、同様な中生代白亜紀前期の浅海成の地層は、埼玉県秩父市の西方に分布する「山中地溝帯」が知られている。また、茨城県那珂湊市、大洗町付近の海岸に白亜紀後期の浅海成の地層が、群馬県北部の利根川支流片品川流域に、中生代ジュラ紀及び白亜紀の浅海成の地層が分布しているが、いずれも植物化石は割合に多く含んでいるものの、琥珀はあまり産出しないようである。

関東地方から少し離れると、福島県いわき市周辺の白亜紀後期の浅海成の地層から、琥珀が多産している。この地層は、正確には福島県いわき市から北方の双葉郡檜葉町付近まで南北に細長く分布しており、地質学上は「双葉層群」（特に、その内の「玉山層」）と呼ばれている。恐竜のフタバズキリュウが産出した地層である。この地域の琥珀の中からは、数多くの昆虫化石が見いだされている（いわゆる”虫入り琥珀”）。

その他の琥珀産地となると、北方では岩手県北部の久慈市周辺までとんでしまう。この地域は、日本最大の琥珀産地である。産出する地層は、白亜紀前期の宮古層群、白亜紀後期の久慈

層群、種市層、沢廻層、横道層である（藤山, 1985）。やはり、昆虫化石を多数含んでいる。なお、この地域の琥珀は、古墳時代に奈良まで運ばれたとも言われている（藤山, 1991）。

⑥ ひすい（ひすい輝石岩）

ひすいの最も有名な産地は、新潟県糸魚川市の姫川上流小滝川流域、青海町青海川上流地域である。この地域は、地質学上は「飛騨外縁帯」に含まれる地域である。主に非変成～変成古生層とそれらの中に複雑に入り込む蛇紋岩から構成されている。”ひすい”を含むひすい輝石一石英岩は、結晶片岩に伴う蛇紋岩中のブロックとして産出するため、ひとつの岩体はそれほど大きくない。しかし、この蛇紋岩分布地域では、潜在的にどこにでも含まれている可能性がある。

この糸魚川地域ほど質、量ともに秀でていないが、ひすい輝石を含む岩石は、他の地域でも産出する。関東地方では、関東山地北部の三波川帯である。埼玉県寄居町栃谷などに産出が知られている（Hirajima, 1983）。ここでも、やはり蛇紋岩中のブロックとしてひすい輝石一石英岩が産出しており、三波川帯中の他の蛇紋岩分布地域でも産出することが予想される。

D. おわりに

以上、玉類をつくる各岩石種の現産地候補についてそれぞれ別に述べてきたが、いくつかの岩石種が密接に関係して産出することに気付かれたと思う。具体的には、蛇紋岩、滑石、結晶片岩類（ひすい輝石岩も？）である。これ以外にも、地質学上密接に関係して産出する岩石の組合せが存在する。ある遺跡から産出する玉類の原産地を考える場合、この組合せという視点は重要だと思われる。ただし、これは、玉類の原石が限られた地域から入手されている場合の話で、入手先が多岐に渡る場合には単純にはいかない。この点は人間活動の問題になるので、ここではこれ以上は議論しないことにする。

また、調査に当たって感じたことは、露頭で観察される岩石と、河床礫として見られる岩石との違いの問題である。もとの岩体から削剝された岩塊が河川を運搬される際には、柔らかい部分は削り取られ、硬い部分が残る。露頭ではあまり見かけないような硬い岩石が、河床礫としては数多く見られたり、柔らかい岩石は露頭では見るものの、河床礫にはほとんど見られなかったりする。この原産地における各岩石の存在比率と、河床礫でのそれは、かなり変わるものと予想される。これは量的な問題でもあり、また、質的な問題でもある。同一岩石種でも微妙に質が異なり、より硬い部分が礫として残ることになるからである。一般に地質調査では、河床礫についてはほとんど調査を行わないので、別に調査を行い、これらのデータや資料を収集する必要があると思われる（たとえば、千葉県文化財センター, 1987）。なお、これを問題にしたのは、当時の人が、実際には原石を第1次的にどこで手に入れていたか、つまり、露頭なのか河床礫なのか、という疑問があり、後者の可能性が高いと考えたからである。これに関し

でも、露頭の露出状況もあるが、多分に人間的な要素を含むので、ここでは問題を提示するに止めることにする。

また、入手の2次的な問題、つまり流通のことを考えれば、関東地方以外の地域も考慮する必要が生じる。

いずれにしろ、今後、玉類の原産地同定をさらに深く進めるならば、まず、実際の玉類の鉱物組成、化学組成等を分析し、その結果をもとに候補地をできるだけ絞っていく必要があるであろう。ただし、前述のように、分析データが決め手になるケースは非常に限られることが予想され、詳細な原産地同定は難しいと思われる。同質の玉類を産出する遺跡の分布（千葉県外も含めて）やそれらの産出状況、流通の問題なども考慮し、総合的に判断する必要があるであろう。

引用・参考文献

- 荒井章司. 1987MS. 嶺岡帯の地質. 千葉県立中央博物館（仮称）設置に係わる自然誌関係展示設計の特殊事項に関する資料調査報告書：16pp.
- 豊 遙秋・坂巻幸雄. 1989. 茨城・福島県下の鉱物産地. 日本地質学会第96年学術大会見学旅行案内書：201-224.
- 千葉県文化財センター. 1987. 自然科学の手法による遺跡、遺物の研究 5—先土器時代の石器石材の研究一. 千葉県文化財センター研究紀要 11：208pp.
- 千葉県文化財センター. 1990. 房総考古学ライブラリー5 古墳時代（1）. 千葉県文化財センター：370pp.
- 茅原一也・小松正幸. 1982. 飛騨外縁帯（特に青海—蓮華帯）及び上越帯に関する諸問題. 地質学論集 21：101-116.
- 藤田至則. 1970. 北西太平洋の島孤周辺における造構運動のタイプとそれらの相関性. 島孤と海洋. 東海大学出版会：1-30.
- 藤山家徳. 1985. 琥珀が語る夢—8000万年のメッセージ. ふるさと文化講演会演旨. 久慈青年会議所：8pp.
- 藤山家徳. 1991. 琥珀. 古生物学事典. 朝倉書店：123-124.
- 橋本光男. 1987. 日本の変成岩. 岩波書店：159pp.
- Hayama, Y., Y. Kizaki, K. Aoki, S. Kobayashi, K. Toya, N. Yamashita. 1969. The Joetsu metamorphic belt and its bearing on the geologic structure of the Japanese Islands. Mem. Geol. Soc. Japan 4：61-82.
- Hirajima, T. 1983. Jadite+quartz rock from the Kanto Mountains. J. Japan. Assoc. Min. Petr. Econ. Geol. 78：77-83.
- 平野英雄・飯泉 滋. 1973. 関東山地西部、秩父帯の超苦鉄質岩. 岩鉱 68：132-137.
- 平野英雄・藤貫 正. 1985. 日立変成帯中のタルク鉱床. 地質調査所月報 36(3)：137-153.
- 堀 秀道. 1990. 楽しい鉱物学. 草思社：301pp.
- いわき市石炭・化石館. 1985. いわきの化石と炭鉱の歴史. いわき市石炭・化石館：33pp.
- 岩手県立博物館. 1986. 北上山地の恐竜・アンモナイト. 岩手県立博物館昭和61年度第2回企画展図

録：48pp.

- 兼平慶一郎・大木靖衛・真田三郎・谷古宇光治・石川文彦. 1968. 房総半島南部鴨川町付近で見出された変成岩岩塊. 地質雑 74:529-534.
- 木下亀城・小川留太郎. 1967. 標準原色図鑑全集 6 岩石鉱物. 保育社:180pp.
- 熊野正也. 1988. 和泉期の社会と石製模造品について. 考古学叢考 中巻. 吉川弘文館:589-593.
- Kuroda, Y. 1959. Petrological study of the metamorphic rocks of the Hitachi district, Northeastern Japan. Sci. Rep. Tokyo Kyoiku Daigaku, sec, C 7:1-70.
- 女屋和志雄. 1988. 群馬県における古墳時代の玉作. 群馬の考古学:291-300.
- 益富壽之助. 1987. 原色岩石図鑑. 保育社:383pp.
- 都城秋穂. 1965. 変成岩と変成帯. 岩波書店:458pp.
- Miyashiro, A. 1966. Some Aspects of Peridotite and Serpentinite in Orogenic Belts. Jap. Jour. Geol. Geogr. 38(1):45-61.
- 宮沢俊称. 1973. 滑石鉱床. 日本地方鉱床誌 関東地方. 朝倉書店:285-286.
- 日本の地質『関東地方』編集委員会. 1986. 日本の地質 3 関東地方. 共立出版:336pp.
- 日本の地質『東北地方』編集委員会. 1989. 日本の地質 2 東北地方. 共立出版:338pp.
- 大胡佳恵・廣井美邦. 1991. 房総半島, 鴨川産の嶺岡変成岩に見られる多様な鉱物組合わせの起源—特に, 高い酸素フュガシティの効果について. 岩鉱 86(5):226-240.
- 太田良平. 1953. 5 萬分の 1 地質圖幅説明書「沼田」. 地質調査所:37pp.
- Seki, Y. 1958. Glaucophanitic regional metamorphism in the Kanto Mountains, central Japan. Jap. Jour. Geol. Geogr. 29:233-258.
- Seki, Y., F. Shido. 1959. Finding of Jadeite from the Sanbagawa and Kamuikotan Metamorphic Belts, Japan. Proceedings of the Japan Academy 35(3):137-138.
- Seki, Y. 1960. Distribution and Mineral Assemblages of Jadeite-Bearing Metamorphic Rocks in Sanbagawa Metamorphic Terrains of Central Japan. Sci. Rep. Saitama Univ., ser. B. 3:315-320.
- 嶋岡 博・渡辺 順. 1976. 先安倍族造山期西堂平変成岩類の研究—その 1 岩質とその分布状態—. 地質雑 82(8):531-542.
- 島津光夫. 1991. グリーントフの岩石学. 共立出版:172pp.
- 丹沢団体研究グループ. 1977. 丹沢山地のグリーントフに関する研究(その 4) 丹沢山地におけるグリーントフ造山運動の一般性と特殊性. 地団研専報 20:177-191.
- 寺村光晴. 1974. 下総国の玉作遺跡. 雄山閣:178pp.
- 寺村光晴・谷川章雄. 1986. 玉作. 千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書. 千葉県文化財保護協会:69-80.
- Toriumi, M. 1975. Petrological study of Sanbagawa metamorphic rocks - the Kanto mountains, central Japan. Univ. Tokyo Press:99pp.
- 津江明宏・原 郁夫・梅村隼夫. 1981. 西堂平—日立変成岩類の地質学的関係(予察). 中生代造構作用の研究 3:255-259.
- 山田直利・斎藤英二・村田泰章. 1990. コンピュータ編集による日本地質図. 地質調査所.

滑石製模造品と各地の蛇紋岩・滑石の例

1. 紡錘車（滑石製）…千葉市榎作遺跡 117A-12
2. 同 上
磁鉄鉱結晶を含む
3. 蛇紋岩…富山町平久里中平久里川河床
あまり滑石化していない
4. 蛇紋岩…鴨川市太尾加茂川河床
あまり滑石化していない
5. 紡錘車片（滑石製）…千葉市榎作遺跡 103-9
6. 同 上
磁鉄鉱結晶を含む
7. 蛇紋岩…群馬県利根郡白沢村岩室
組成が均一でない、ほとんど滑石化していない
8. 滑 石…群馬県藤岡市上日野田本
各種の色（鉱物組成）のものがある



(×0.8)

1



(×1.4)

2



(×0.7)

3



(×0.7)

4



(×1.6)

5



(5の一部を拡大)

6



(×0.6)

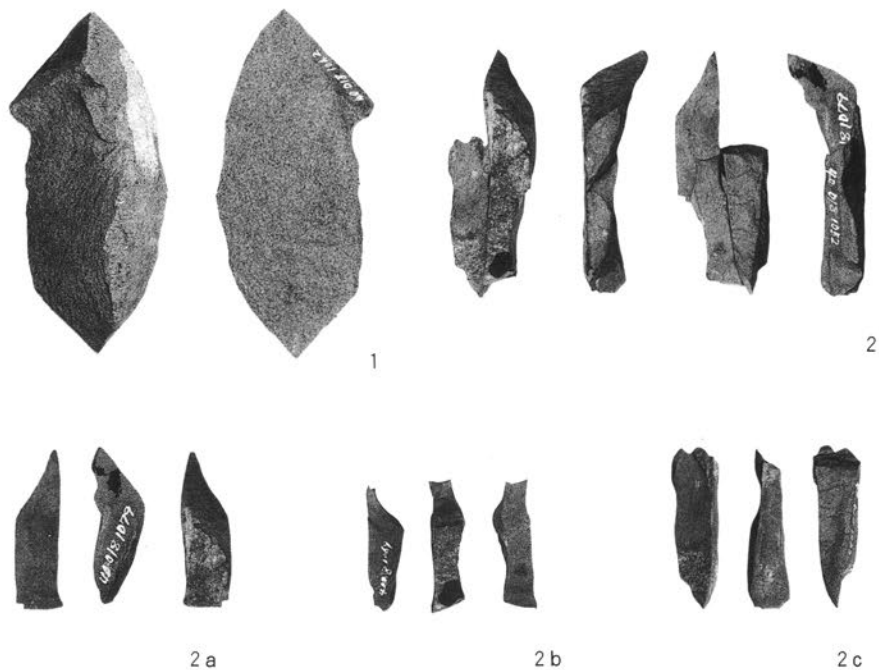
7



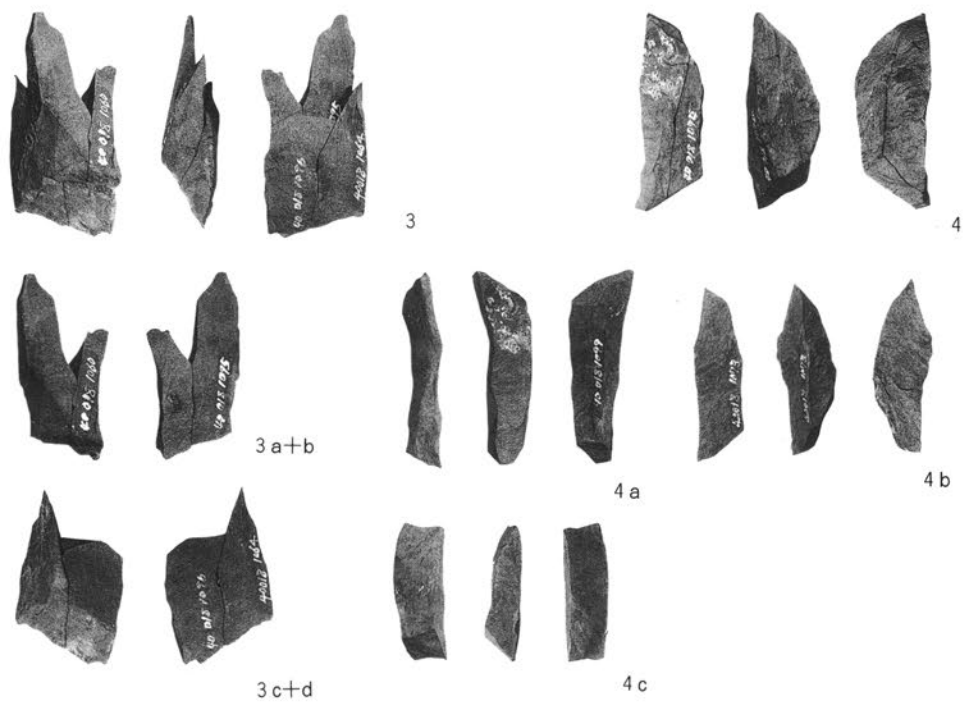
(×0.3)

8

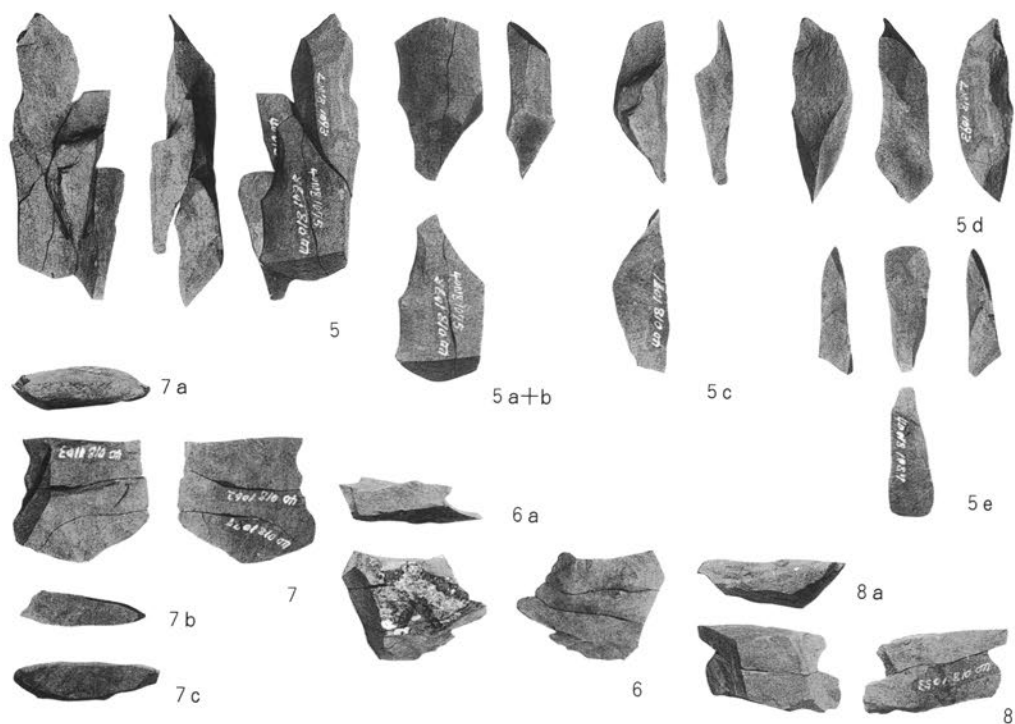
版 圖



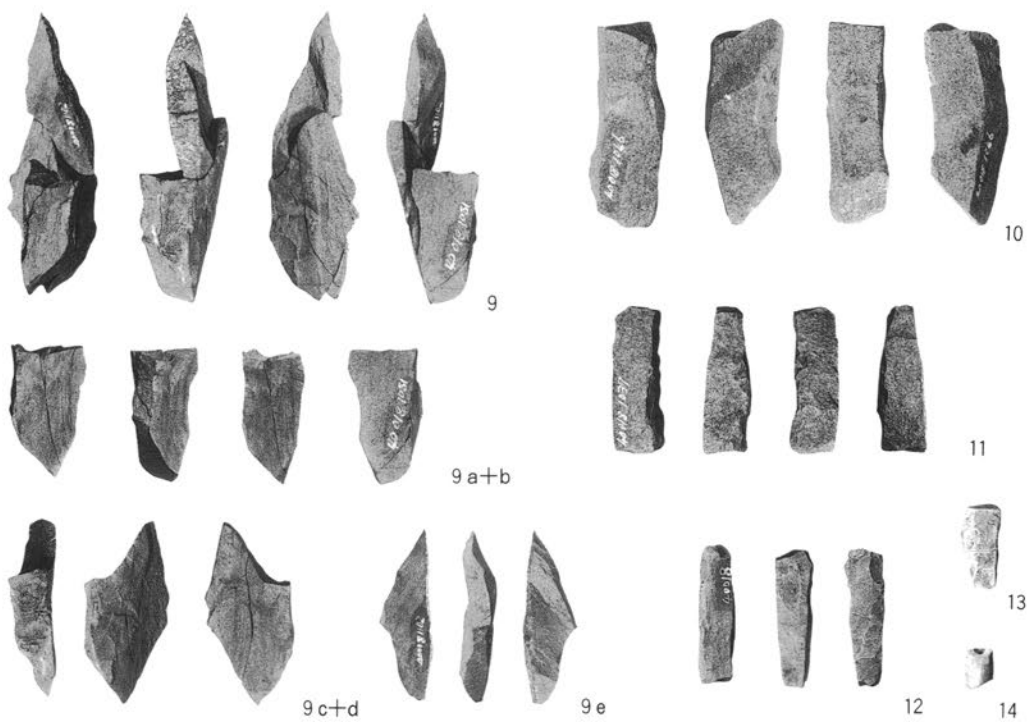
1. 外小代遺跡018号址出土遺物 (1)



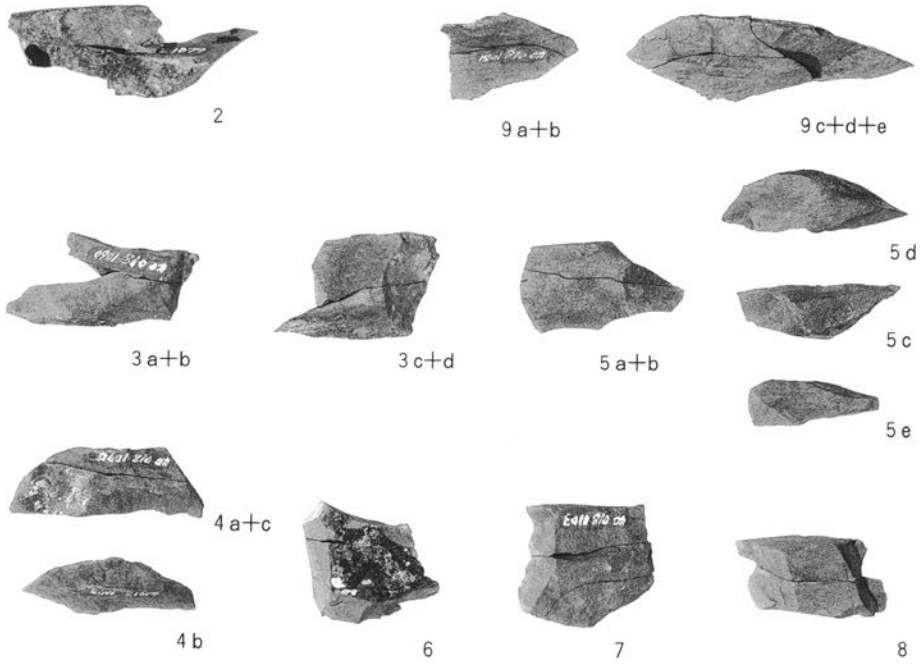
2. 外小代遺跡018号址出土遺物 (2)



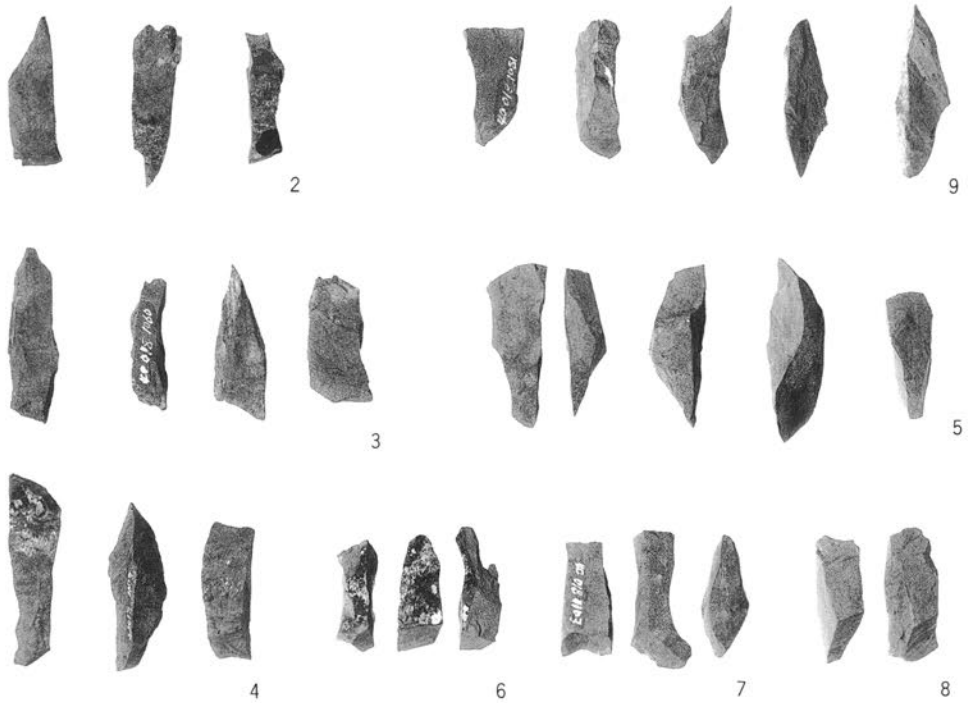
1. 外小代遺跡018号址出土遺物 (3)



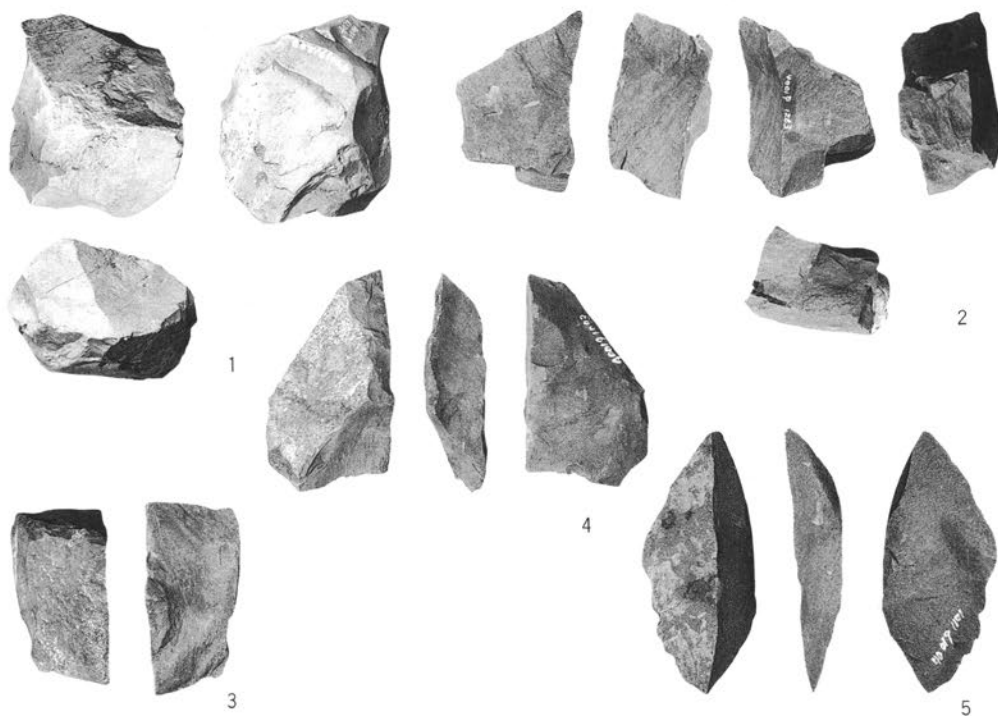
2. 外小代遺跡018号址出土遺物 (4)



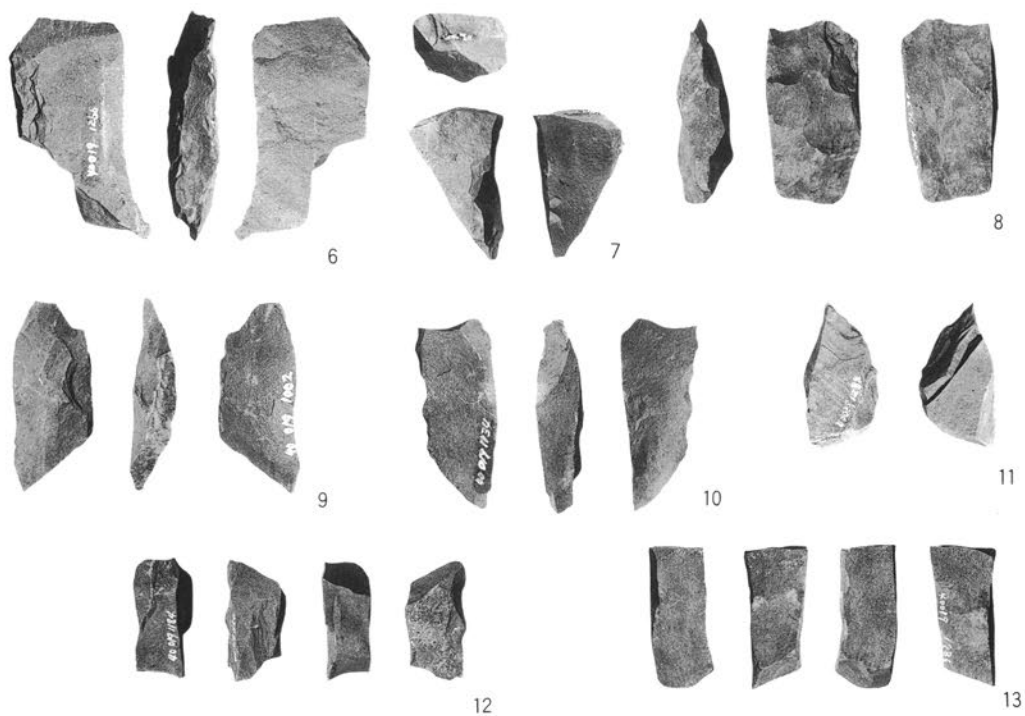
1. 外小代遺跡018号址出土荒制品 (形制品接合資料)



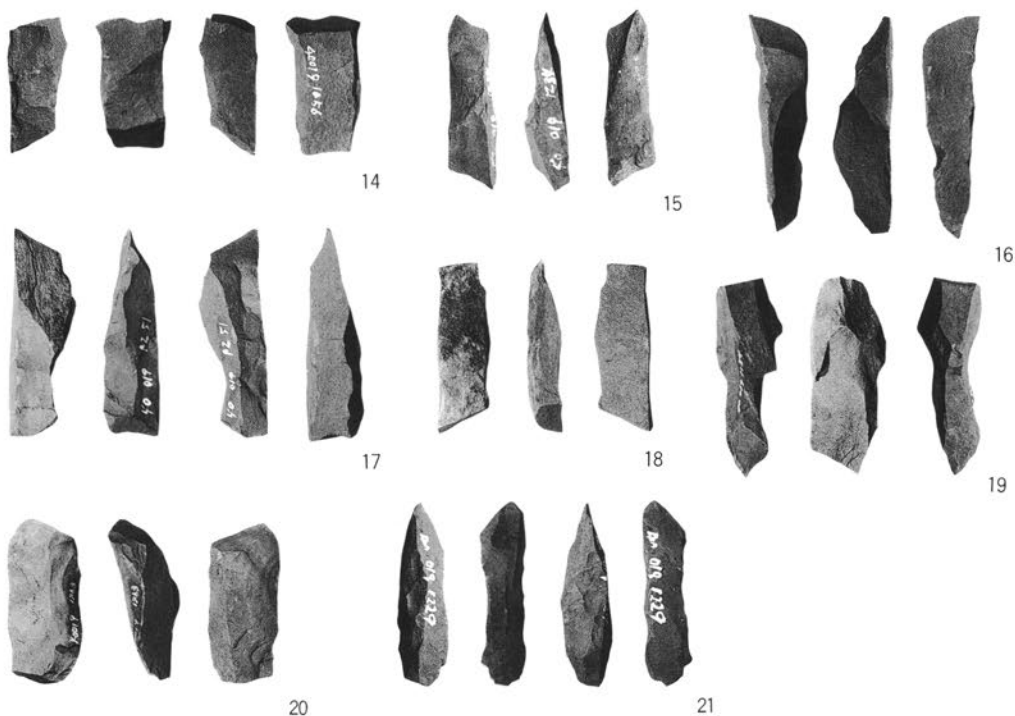
2. 外小代遺跡018号址出土形制品 (荒制品分割資料)



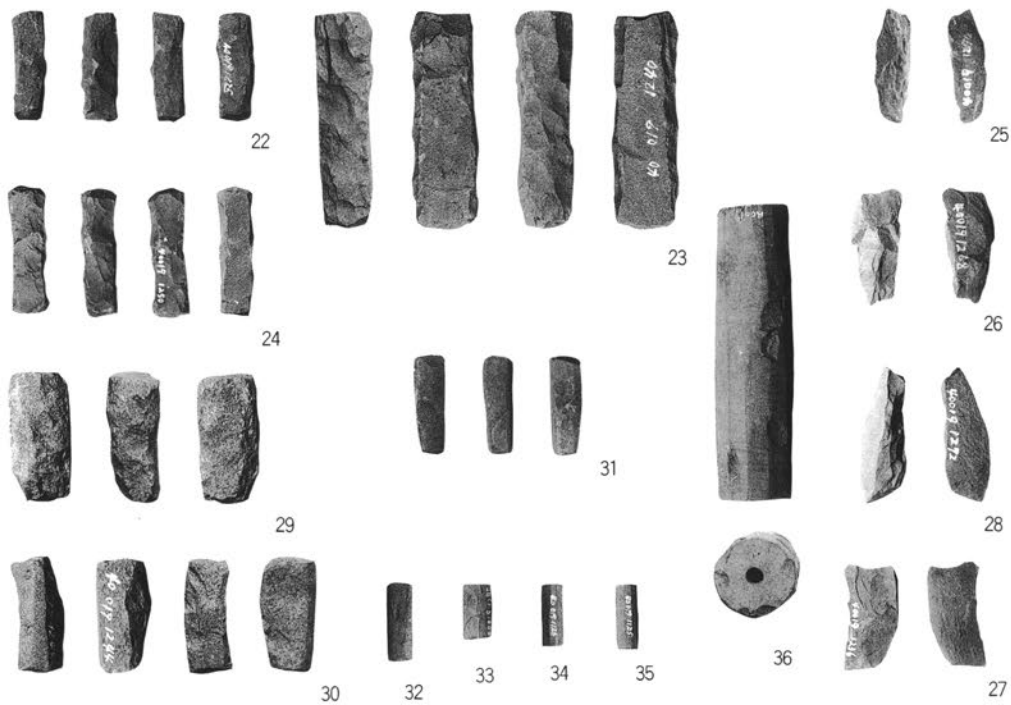
1. 外小代遺跡019B号址出土遺物 (1)



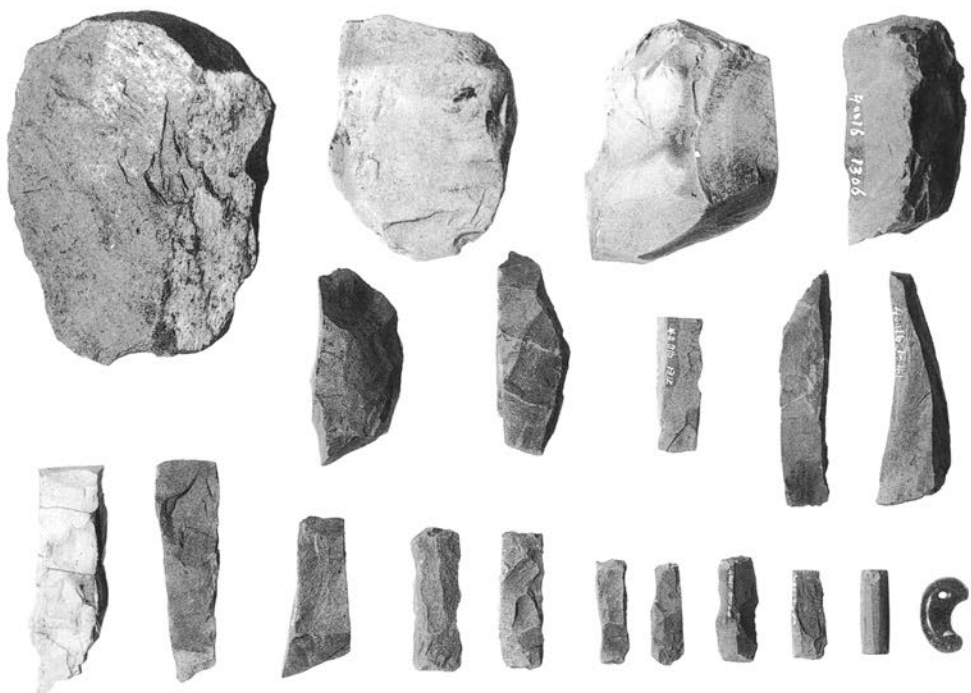
2. 外小代遺跡019B号址出土遺物 (2)



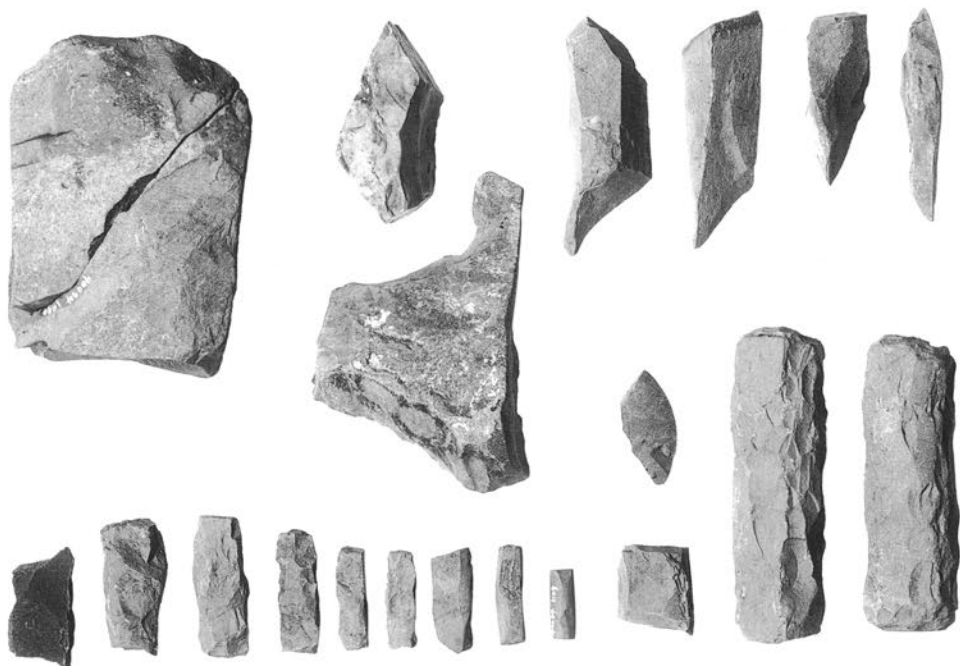
1. 外小代遺跡019B号址出土遺物 (3)



2. 外小代遺跡019B号址出土遺物 (4)



1. 外小代遺跡016A号址出土遺物



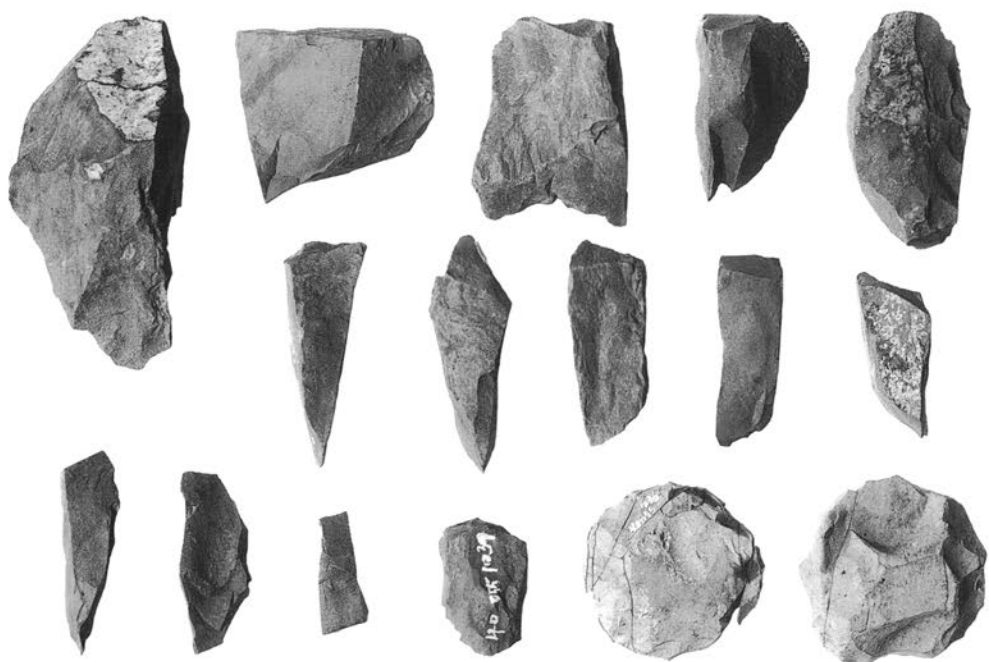
2. 外小代遺跡034B号址出土遺物



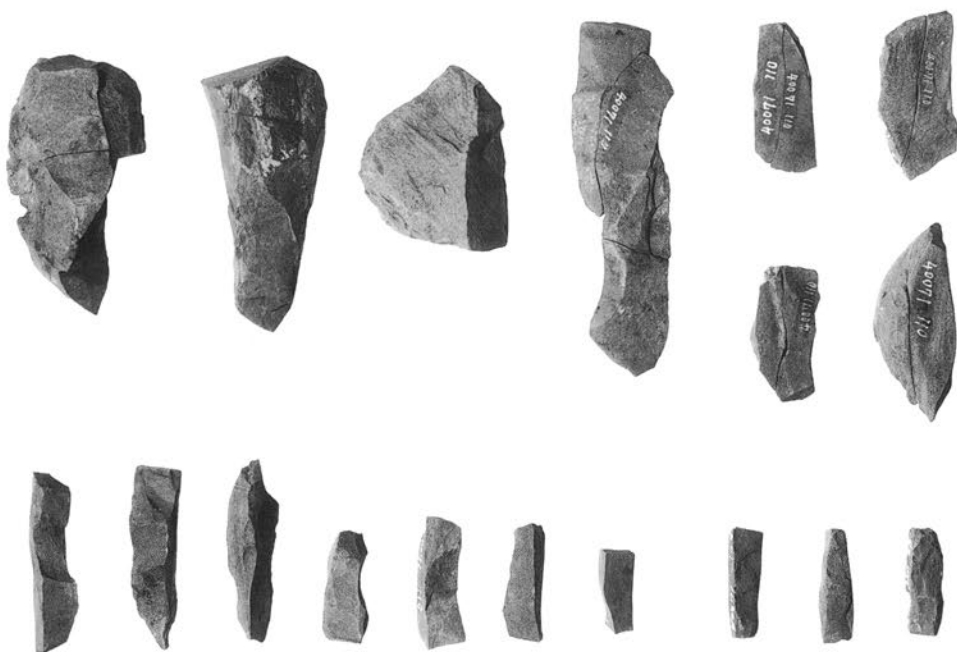
1. 外小代遺跡040号址出土遺物



2. 外小代遺跡041A号址出土遺物



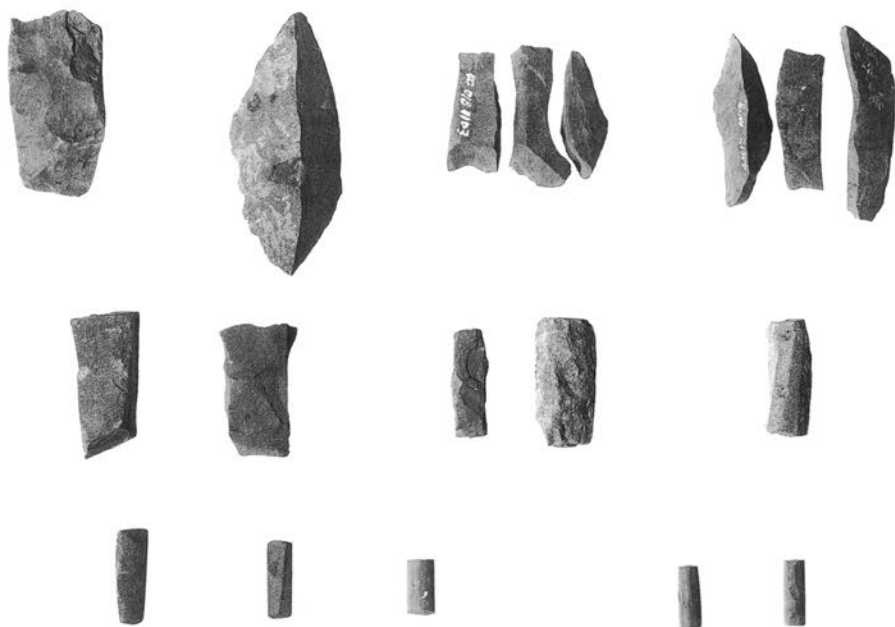
1. 外小代遺跡055号址出土遺物



2. 外小代遺跡071号址出土遺物



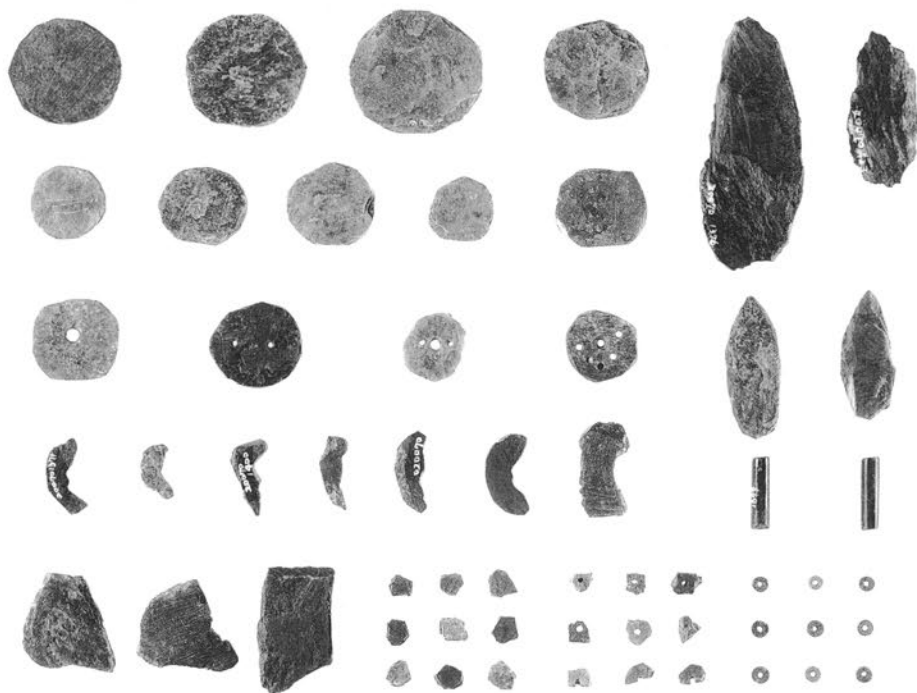
1. 外小代遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程（1：母岩）



2. 外小代遺跡の緑色凝灰岩製管玉製作工程（2：荒割から穿孔）



1. 外小代遺跡出土工具類



2. 石塚遺跡出土石製模造品類

千葉県文化財センター研究紀要13

平成4年3月21日 発行

発 行 者 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡無番地
電話 0434(22)8811

印 刷 所 有限会社 ミリオン印刷
千葉県南町3丁目4番2号
